

仙台市文化財調査報告書第192集

# 南小泉遺跡

第22次・23次発掘調査報告書

1994年10月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第192集

# 南小泉遺跡

第22次・23次発掘調査報告書

1994年10月

仙台市教育委員会

## 序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に多大のご協力を賜り、誠に感謝にたえません。

現在、仙台市内には約 700 箇所の遺跡が知られており、若林区に所在する南小泉遺跡もその一つです。この遺跡は仙台バイパスを挟んで東西に広がっており、昔から仙台を代表する遺跡で、弥生時代以降の集落跡として著名です。特に古墳時代の 5 世紀の土師器は南小泉式と言われ、当遺跡出土のものが基準となっています。

今回この遺跡内で都市計画道路と共同住宅を建設することになり、それに先行して第 22 次、23 次発掘調査を実施しましたが、遺跡西側の状況を知る手掛かりが得られたものと考えております。

このような発掘調査によって得られた多くの成果は、地域の歴史を知るうえで貴重な資料でありますので、今後の仙台市における街づくりや学校教育などの中に、十分に活かしていきたいと考えております。

この報告書が広く皆様にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にご指導、ご協力くださいました皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成 6 年 10 月

仙台市教育委員会

教育長 坪山繁

## 例　　言

1. 本書は、仙台市都市計画街路南木町 古城線建設に伴う南小泉遺跡第22次調査及び共同住宅建築工事に伴う南小泉遺跡第23次調査の本報告書である。
2. 本書の編集は、結城慎一、川名秀一、菅原裕樹、神成浩志と協議をしながら、斎野裕彦が行った。
3. 本書の作成作業は、次のとおり分担した。

### 本文執筆

第1章～第IV章・第VI章	斎野裕彦
第V章	結城慎一
遺構写真撮影	川名秀一、斎野
遺構平面整理、トレース	結城、斎野、川名、大山のり子、泉美恵子、渡辺好恵
遺物整理、水洗、ネーミング	阿部香美、佐竹志女子、佐藤弘子、山口佳子
遺物復元	我妻美代子、山田やす子、伊藤房江
遺物実測、トレース	斎野、菅原裕樹、神成浩志、菅谷裕子、原田由美子、津島久子、青山麻子、大山由起子
遺物写真撮影	菅原
図版組み	斎野、菅原、泉、伊藤、青山、背谷、大山

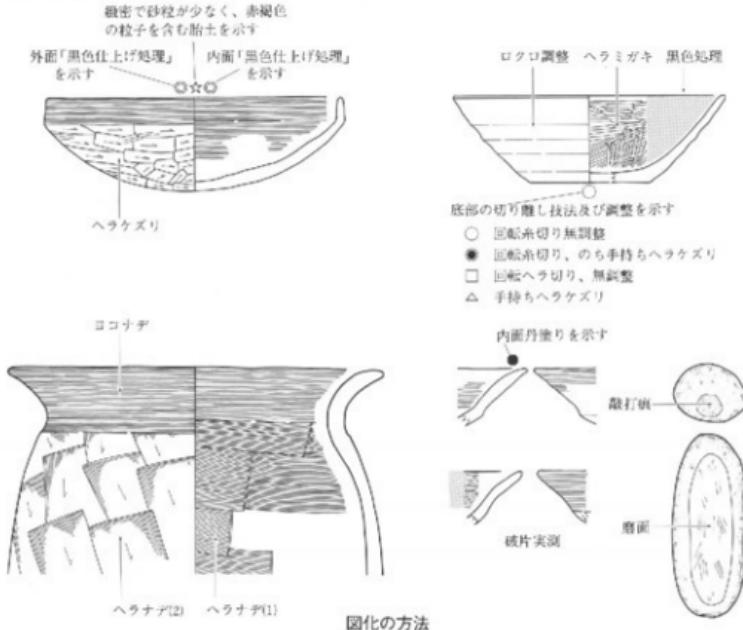
4. 石器の材質の鑑定は、東北大學　猿沢聰志氏にお願いした。
5. 陶器・磁器の鑑定は、当隣の佐藤洋が行った。

## 凡　　例

1. 図中及び本文中使用の方位の「北（N）」は真北である。
2. 調査区は、平面直角座標系Xに位置づけた。
3. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

- S A：区画施設 S B：建物跡 S I：堅穴住居跡・堅穴遺構 S D：溝跡 S K：土坑  
S X：性格不明遺構 S P：ピット、小柱穴
4. 堅穴住居跡内のスクリーントーン部分は、焼面の範囲を示す。
  5. 本書に示した土色については、「新版標準土色帳」（小山・佐藤：1970）を使用した。
  6. 本書で使用した遺物略号は次のとおりで、それぞれ種類別に番号を付した。  
B：弥生土器 C：土師器（ロクロ不使用） D：土師器（ロクロ使用） E：須恵器 F：丸瓦・軒丸瓦 G：平瓦・軒平瓦 H：その他の瓦 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品 N：金属製品 P：土製品 U：土師質土器  
なお、筒形土器、手握土器については、分類としては土製品としたが、遺物略号は「C」を用いた。また、平安時代のロクロ不使用の型については遺物略号を「D」とした。
  7. 土器・石器の図化の方法については、下図に示した。  
①ロクロ不使用の土師器の胎土には、緻密で砂粒が少なく、赤褐色の粒子を含む特徴的なものがみられ、これを実測図の中心線の上に「☆」で示した。

- ②土器器の内面および外面が黒色を呈するものについては、黒色処理（器壁内部まで黒色化している）と、黒色仕上げ処理（器壁表面が黒色化している）に分けた。黒色処理はスクリーントーンで示し、黒色仕上げ処理は実測図の内面、外面の上にそれぞれ「◎」で示した。なお、「黒色仕上げ処理」としたものの類例は仙台平野でも認められているが、栃木県稻荷塚遺跡では分析をしたところ、漆を塗布していることが指摘されており、この遺跡の報告（栃木県文化振興事業団：1987『稻荷塚・大野原』）では「漆仕上げ処理」としている。実見させていただき、実物を比較してみたところ、酷似していることを確認したが、当遺跡では分析を行っていないため、便宜的に黒色処理と区別するためこの名称を用いた。
- ③須恵器坏、ロクロ使用の土器器坏の底部切り離し技法及び調整については、実測図の中心線の下にそれぞれ記号で示した。
- ④ロクロ不使用の土器器坏の外側調整には、砂粒が動くくらいのやや強いヘラナデ(1)と区別するためヘラナデ(2)とし、方向を矢印で示した。ヘラケズリとの区別のつきにくい場合もある。
- ⑤口径の復元が難しい破片実測については、図に示したように、左側に断面と内面、右側に外面を図化した。
8. 土器器坏、須恵器坏の口径に対する底径の比率（底径／口径）、口径に対する唇高の比率（唇高／口径）については、それぞれ「底径口径比」、「唇高口径比」として記述した。
9. 本文中で「小玉石」とした遺物は、仙台市郡山遺跡で「小玉石」と呼称されている遺物と類似するものである。
10. 本文中で「埋土」とした用語は、「埋まっている土」という意味で用いた。



## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
1. 立地	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の方法と調査経過	4
1. 調査区の設定	4
2. 調査経過	4
第Ⅳ章 第22次調査	6
1. 基本層序	6
2. 調査概要	6
3. 検出された遺構と遺物	9
4. 出土遺物の検討と遺構群の変遷	97
第Ⅴ章 第23次調査	125
第VI章 まとめ	129

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡	2	第12図 SI 4・5・8出土遺物実測図	16
第2図 調査区位置図	5	第13図 SI 5平面図・セクション図	17
第3図 第22次調査区設定図	5	第14図 SI 6平面図・セクション図	18
第4図 基本層序(B-14グリット南壁)	6	第15図 SI 7平面図・セクション図	19
第5図 調査区全体図	7	第16図 SI 8平面図・セクション図	20
第6図 SI 1平面図・セクション図	11	第17図 SI 9平面図・セクション図	21
第7図 SI 1・3出土遺物実測図	11	第18図 SI10平面図・セクション図	22
第8図 SI 2平面図・セクション図	12	第19図 SI11平面図・セクション図	23
第9図 SI 3平面図・セクション図	13	第20図 SI 9・10・11出土遺物実測図	24
第10図 SI 3・4出土遺物実測図	14	第21図 SI12平面図・セクション図	26
第11図 SI 4平面図・セクション図	15	第22図 SI13平面図・セクション図	27

第 23 図 SI14 平面図・セクション図	28	第 54 図 SD 3 2 層出土遺物平面分布図	67
第 24 図 SI14 セクション図	29	第 55 図 SD 3 3 層出土遺物平面分布図	68
第 25 図 SI15 平面図・セクション図	30	第 56 図 SD 3 4 層出土遺物平面分布図	69
第 26 図 SI12・13・14・15 出土遺物実測図	31	第 57 図 SD 3 出土土師器の器形分類	72
第 27 図 SI15 出土遺物実測図	32	第 58 図 SD 3 1 層出土遺物実測図	79
第 28 図 SI15・16 出土遺物実測図	33	第 59 図 SD 3 1 層・2 層出土遺物実測図	80
第 29 図 SI16 平面図・セクション図	35	第 60 図 SD 3 2 層出土遺物実測図(1)	81
第 30 図 SI16・17 出土遺物実測図	37	第 61 図 SD 3 2 層出土遺物実測図(2)	82
第 31 図 SI17 平面図・セクション図	38	第 62 図 SD 3 2 層出土遺物実測図(3)	83
第 32 図 SI17・18 出土遺物実測図	39	第 63 図 SD 3 2 層出土遺物実測図(4)	84
第 33 図 SI18 平面図・セクション図	41	第 64 図 SD 3 2 層出土遺物実測図(5)	85
第 34 図 SI18・19 出土遺物実測図	42	第 65 国 SD 3 2 層・3 層出土遺物実測図	86
第 35 国 SI19 平面図・セクション図	43	第 66 国 SD 3 3 層・4 層、SD 4 出土遺物実測図	
第 36 国 SI20 平面図・セクション図	44		87
第 37 国 SI20 出土遺物実測図(1)	46	第 67 国 土坑平面図・セクション図(1)	91
第 38 国 SI20 出土遺物実測図(2)	47	第 68 国 土坑平面図・セクション図(2)	93
第 39 国 SI21 平面図・セクション図	49	第 69 国 土坑他出土遺物実測図	95
第 40 国 SI22 平面図・セクション図	50	第 70 国 基本層他出土遺物実測図	96
第 41 国 SI23 平面図・セクション図	51	第 71 国 坎 I 類・II 類の口径分布	106
第 42 国 SI24 平面図・セクション図	52	第 72 国 坎 I 類・II 類の口縁高と器高の関係	106
第 43 国 SI25 平面図・セクション図	53	第 73 国 遺跡周辺出土の A 種土器群	111
第 44 国 SI22・24・25 出土遺物実測図	54	第 74 国 III 期の坎の器形分類	115
第 45 国 SI25・26 出土遺物実測図	55	第 75 国 III A 期・III B 期の坎	116
第 46 国 SI26 平面図・セクション図	56	第 76 国 坎の器形と底部の切り離し技法との関係	
第 47 国 SB 1 平面図・セクション図	58		117
第 48 国 区画施設溝跡平面図	59	第 77 国 III A 期・III B 期の坎の法量分布	118
第 49 国 区画施設溝跡平面図・溝跡セクション図	61	第 78 国 南小泉遺跡における奈良・平安時代の坎	
第 50 国 SD 3 平面図	63		120
第 51 国 SD 3 セクション図	64	第 79 国 第 23 次調査平面図・セクション図	126
第 52 国 SD 3 出土遺物平面・垂直分布図	65	第 80 国 第 23 次調査出土遺物実測図	128
第 53 国 SD 3 1 層出土遺物平面分布図	66	第 81 国 第 22 次調査遺跡群の変遷	130

## 挿 表 目 次

第 1 表 SD 3 出土遺物数量表	71	第 4 表 SD 3 墓上 2 層出土 A 種・B 種と器種との関係	99
第 2 表 SD 3 出土の坎の分類と数量	74	第 5 表 SD 3 墓上 2 層出土土師器の組成	103
第 3 表 SD 3 出土の甕の分類と数量	74		

第6表 坪I類・II類の数量と比率	103	第23表 グリット遺物出土数量表	141
第7表 SI25出土土師器の器種と数	106	第24表 第23次調査遺物出土数量表	142
第8表 坪I類・II類の体部調整の分類	107	第25表 仰生土器觀察表	143
第9表 SI25・SD3の坪I類・II類の体部調整	107	第26表 非ロクロ土師器觀察表(1)(2)(3)(4)	143
第10表 II期古・新の遺構	109	第27表 ロクロ土師器觀察表(1)(2)	147
第11表 南小泉遺跡における須恵器环の変化	110	第28表 球形器觀察表(1)(2)	148
第12表 坪の口径と器高	121	第29表 丸瓦・軒丸瓦觀察表	149
第13表 IIIA期・IIIB期の遺構	122	第30表 平瓦・軒瓦觀察表	149
第14表 SK12・19・21出土遺物	123	第31表 その他の瓦觀察表	150
第15表 壁穴住居跡・壁穴遺構	134	第32表 陶器觀察表	150
第16表 握立柱建物跡	134	第33表 銀器觀察表	150
第17表 区画施設	134	第34表 金属製品他觀察表	150
第18表 溝跡	135	第35表 石器・石製品觀察表(1)(2)	150
第19表 土坑・性格不明遺構	135	第36表 上製品觀察表(1)(2)	151
第20表 壁穴住居跡・壁穴遺構出土遺物数量表(1)(2)	136	第37表 土師質土器觀察表	152
第21表 遺構出土遺物数量表	138	第38表 第23次調査非ロクロ土師器觀察表	152
第22表 ピット出土遺物数量・土層注記表(1)(2)	139	第39表 第23次調査土製品觀察表	152

## 写 真 目 次

写真1 調査区遠景(西から)	153	写真14 A-1G SI-10全景(南から)	157
写真2 調査区全景	153	写真15 A・B-1・2G SI-11全景 (南から)	158
写真3 B-14G 南壁深掘りセクション (北から)	154	写真16 A・B-2・3G SI-12全景 (南から)	158
写真4 調査風景 A・B-11G以西(南から)	154	写真17 A・B-16G SI-14全景(北から)	158
写真5 調査風景 A・B-11G以東(東から)	154	写真18 A・B-14G SI-15全景(北から)	159
写真6 A-8・9G SI-1完掘全景(北から)	155	写真19 A・B-14G SI-15ペルトセクション (南から)	159
写真7 A-7G SI-2全景(南から)	155	写真20 B-14・15G SI-17全景(北から)	159
写真8 A-5・6G SI-3全景(西から)	155	写真21 A・B-17G SI-18全景(南から)	159
写真9 A-4・5G SI-4全景(南から)	156	写真22 B-17G SI-19全景(東から)	160
写真10 A-5G SI-5全景(南から)	156	写真23 A・B-18・19G SI-20両側かまど (西から)	160
写真11 A・B-5G SI-6全景(南から)	155	写真24 A・B-18・19G SI-20全景 (西から)	160
写真12 A・B-4・5G SI-8全景 (南から)	157		
写真13 B-3・4G SI-9全景(南から)	157		

写真 25 A 19・20G SI-22 全景(西から) ..... 161	写真 52 A 7 G SK-5 全景(南から) ..... 169
写真 26 B-3G SI-23 全景(南から) ..... 161	写真 53 A-20G SK-10 全景(南から) ..... 169
写真 27 A・B-12G SI-24 全景(北から) ..... 161	写真 54 A-19G SK-11 全景(北から) ..... 169
写真 28 A-16G SI-25 全景(西から) ..... 162	写真 55 A-19G SK-12 全景(北から) ..... 169
写真 29 A-16G SI-25 遺物出土状況 (南から) ..... 162	写真 56 B-19G SK-13 全景(南から) ..... 169
写真 30 A-14G SI-26 全景(南から) ..... 162	写真 57 A-17G SK-15 全景(南から) ..... 170
写真 31 A・B-12・13G SA 1・SA 2 全景 ..... 164	写真 58 A-17G SK-16 全景(西から) ..... 170
写真 32 B-14・15G SB 1・SI17 全景 ..... 163	写真 59 A-18G SK-18 全景(南から) ..... 170
写真 33 A-17G SA-1 全景(西から) ..... 164	写真 60 A-18G SK-19 全景(南から) ..... 170
写真 34 A・B-13G SA2 全景(北から) ..... 164	写真 61 A-18G SK-20 全景(南から) ..... 170
写真 35 A・B-13G SA 2 セクション (北から) ..... 164	写真 62 B-18G SK-17 全景(北から) ..... 170
写真 36 A・B-7 G SA-1 東側ベルトセクション (西から) ..... 165	写真 63 A・B-21G SX-1 セクション (西から) ..... 170
写真 37 B-10G SA-1・P-2・3 プラン(南から) ..... 165	写真 64 第22次調査記念写真 ..... 171
写真 38 A-11G SD-2 全景(北西から) ..... 165	写真 65 第23次調査 SI 1 全景 ..... 171
写真 39 A・B-7 G SD-3 全景(南から) ..... 166	写真 66 第23次調査 SI 1 カマド全景 ..... 171
写真 40 A・B-7 G SD-3 SP 全景 (東から) ..... 166	写真 67 出土遺物① ..... 172
写真 41 A・B-7 G SD-3 作業風景 (北東から) ..... 166	写真 68 出土遺物② ..... 173
写真 42 A・B-7 G SD-3 全景(北から) ..... 167	写真 69 出土遺物③ ..... 174
写真 43 A・B-7 G SD-3 南壁セクション (北から) ..... 167	写真 70 出土遺物④ ..... 175
写真 44 A・B-7 G SD-3 中央ベルトセクション (南から) ..... 167	写真 71 出土遺物⑤ ..... 176
写真 45 A・B-7 G SD-3 北壁セクション (南から) ..... 167	写真 72 出土遺物⑥ ..... 177
写真 46 A・B-9・10G SD-4 全景 (北から) ..... 168	写真 73 出土遺物⑦ ..... 178
写真 47 A・B-17 G SD-10 全景(南から) ..... 168	写真 74 出土遺物⑧ ..... 179
写真 48 B-10G SD-4 セクション(南から) ..... 168	写真 75 出土遺物⑨ ..... 180
写真 49 B-10G SK-1 全景(南から) ..... 169	写真 76 出土遺物⑩ ..... 181
写真 50 B-10G SK-2 全景(南から) ..... 169	写真 77 山上遺物① ..... 182
写真 51 B-5 G SK-4 全景(南から) ..... 169	写真 78 出土遺物⑪ ..... 183
	写真 79 出土遺物⑫ ..... 184
	写真 80 出土遺物⑬ ..... 185
	写真 81 山上遺物⑭ ..... 186

## 第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

### 1. 調査に至る経過

第22次調査は、平成4年7月27日に仙台市都市計画街路南材木町古城線建設に伴う発掘届が提出されたことに起因しており、建設担当部局の仙台市建設局と当教育委員会との協議により平成4年度に事前調査を行うこととなった。

第23次調査は、平成4年8月25日に阿部武氏により、共同住宅建築に伴う発掘届が提出されたことに起因しており、平成4年度に事前調査を行うこととなった。

### 2. 調査要項

#### (1) 遺跡名

南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号：01021・仙台市文化財登録番号C-102）

#### (2) 調査名と調査区所在地

南小泉遺跡第22次調査 仙台市若林区南小泉4丁目17・18（申請者 仙台市長石井亨）

南小泉遺跡第23次調査 仙台市若林区南小泉3丁目15-103（申請者 阿部武）

#### (3) 調査期間

第22次調査 発掘調査 平成4年9月1日から平成4年12月28日

室内整理 平成5年10月1日から平成6年3月25日

第23次調査 発掘調査 平成4年11月24日から平成4年12月4日

室内整理 平成6年1月10日から平成6年1月31日

#### (4) 調査面積

第22次調査 調査面積：1382m<sup>2</sup> 対象面積：2340m<sup>2</sup>

第23次調査 調査面積： 35m<sup>2</sup> 対象面積： 68m<sup>2</sup>

#### (5) 調査主体

仙台市教育委員会

#### (6) 調査担当

仙台市教育委員会社会教育部文化財課

第22次調査 斎野裕彦 川名秀一

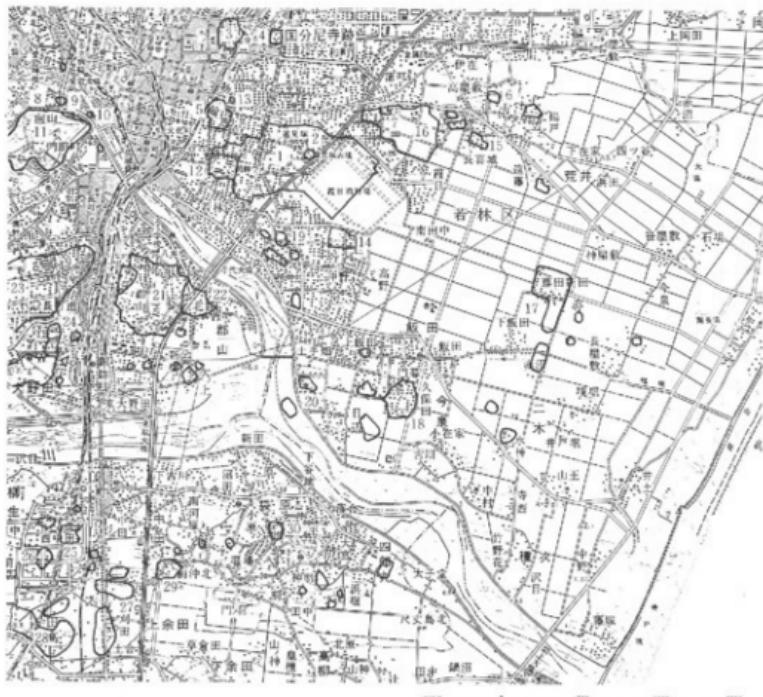
第23次調査 結城慎一

#### (7) 発掘調査参加者

二浦市子 佐藤愛子 佐藤よし子 芳賀節子 岡崎一郎 高橋喜八 高橋節子 相沢あい子

三浦陽子 横山美代子 柏倉憲一 御供宏子 七宮 清 峯岸安好 吉田アキヨ 蓬田明子

伊藤はるよ 烏烟きみえ 岩下光五郎 大泉泰子 鈴木美代子 遠藤ます子 福田美智子



1. 南小泉遺跡 2. 遠見塚古墳 3. 陸奥国分寺跡 4. 陸奥国分尼寺跡 5. 妻稚園遺跡 6. 押口遺跡  
 7. 中在家南遺跡 8. 爰宕山横穴群 9. 大年寺横穴群 10. 定禪寺横穴群 11. 茂ヶ崎城跡 12. 若林城跡  
 13. 法師塚古墳 14. 沖野城跡 15. 長喜城跡 16. 仙台東郊条里跡 17. 藤田新田遺跡 18. 今泉城跡  
 19. 神權遺跡 20. 日近館跡 21. 郡山遺跡 22. 北目城跡 23. 富沢遺跡 24. 元袋遺跡  
 25. 安久東遺跡 26. 采造跡 27. 中田南遺跡 28. 清水道跡 29. 後河原遺跡 30. 中田畠中遺跡

第1図 周辺の遺跡

水戸 智 笹谷 明 岩井利桂 佐藤由喜子 佐藤三枝子 根岸ゆみ 斎藤美香 小松長司  
 佐藤三枝子 佐藤恵子 対馬悦子 加藤東穂 吉田公治 深瀬清和 佐藤 正 阿部敬子  
 阿部みはる 宮城富子 小松千代子 青山博樹

#### (8) 整理作業参加者

大山のり子 泉美恵子 渡辺好恵 阿部美香 佐竹志女子 佐藤弘子 山口佳子 伊藤房江  
 我妻美代子 山田やす子 菅谷裕子 原田由美子 津島久子 青山諒子 大山由起子

(9) 整理作業に際して次の方々から貴重なご教示をいただいた。記して感謝したい。(敬称略)  
 向坂鋼二 蟹沢聰志 川江英孝 後藤健一 松井一明 木戸春夫 仲山英樹 内山敏行 片根  
 義章 藤沢 敦

## 第II章 遺跡の立地と環境

### 1. 立 地

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに船形山、面白山を擁し南北に連なる奥羽山脈と、これより派生する陸前丘陵、さらに東方へ広がる宮城野海岸平野よりなる。この平野は、地理的条件や成因、地質などから地形区分がなされており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点付近では河間低地を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる。

南小泉遺跡は、これらの低地のなかで霞ノ目低地に所在し、主に自然堤防に立地している。標高は7~14m、遺跡範囲は東西2km、南北1kmに及び、面積は約135haである。今回の調査地点は、遺跡西部の広瀬川に南面する微高地縁辺部にあたり、地形面の標高は12.0~12.5mで、西方に高く、東方にやや低くなっている。

### 2. 歴史的環境

南小泉遺跡は、昭和10年代の霞ノ目飛行場の拡張工事に際して発見され、伊東信雄氏らの調査により、弥生時代の合口土器棺墓や多量の土器、石庖丁や大型蛤刃石斧などの大陸系磨製石器、古墳時代の遺物が検出されている。その後、昭和52年以降、主に当市教育委員会の調査により、遺跡の年代幅は縄文時代後期から近世に及ぶことが知られてきている。この遺跡における弥生時代以降の遺構、遺物の継続性は、遺跡範囲の広さとも関わり、時期的な地点の違いも認められるが、遺跡の立地する自然堤防と周囲の後背湿地の広がりが、生業基盤としては農耕にとって適地であったことが大きな要因と考えられる。また、広瀬・名取両河川の合流点付近に位置することも水上交通の利便性だけではなく、周辺地域を含め、政治的な動きとも関連性をもっていたものと推定される。

こうした歴史的環境をふまえたなかで行われた第22次調査では、古墳時代後期～近世の数多くの遺構、遺物が、第23次調査では古墳時代後期の堅穴住居跡などが検出されている。各時期の周辺の遺跡をみてみると、古墳時代後期では、法領塚古墳、藤田新田遺跡などがあり、広瀬川を挟んで南方には官衙跡として知られる郡山遺跡、西方の青葉山丘陵には大年守山横穴群などの横穴群が点在しており、今回の調査成果との関連性も考えられる。奈良・平安時代では、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、神棚遺跡、今泉遺跡がある。遺跡の東北方には仙台東郊条里跡が広がっているが、表層条里であり、時期は明確でない。平安時代の水田跡は藤田新田遺跡や郡山遺跡で検出されており、郡山遺跡の西方に位置する富沢遺跡では奈良時代に遡る条里型土地割の存在が調査によって確認されている。中世～近世では、隣接する若林城跡をはじめとして、今泉城跡、沖野城跡、長喜城館跡、養惣閣遺跡、広瀬川の対岸に北日城跡、青葉山丘陵東端に茂ヶ崎城跡が分布している。また、水田跡も高田B遺跡などで検出されている。

## 第三章 調査の方法と調査経過

### 1. 調査区の設定

#### (1) 第22次調査

対象地区は、第2図に示すように、若林城跡の北東に隣接しており、遺跡のなかでは西部に位置する。都市計画街路の建設予定地である東西156m、南北15m、面積2340m<sup>2</sup>が対象であり、東西に細長く、東端は宮城野荻通りに接する。

調査区は、周囲に宅地や畠があることを考慮し、第3図のように設定した。調査面積は1382m<sup>2</sup>である。調査区北西コーナーを原点とし、ここから調査区の方向に合わせて基準線を設け、これをもとに調査区内に6m×6mのグリッドを設定し、遺構実測を行った。グリッド名称は原点から南へA・B、東へ1～21とした。基準線の方向は真北に対してN-12°-Eである。

#### (2) 第23次調査

対象地区は、第2図に示すように、若林城跡の北側に隣接しており、遺跡のなかでも西端部に位置する。共同住宅建設予定地である面積68m<sup>2</sup>が対象である。

調査区は、建物の位置に合わせて設定した。調査面積は35m<sup>2</sup>である。

### 2. 調査経過

#### (1) 第22次調査

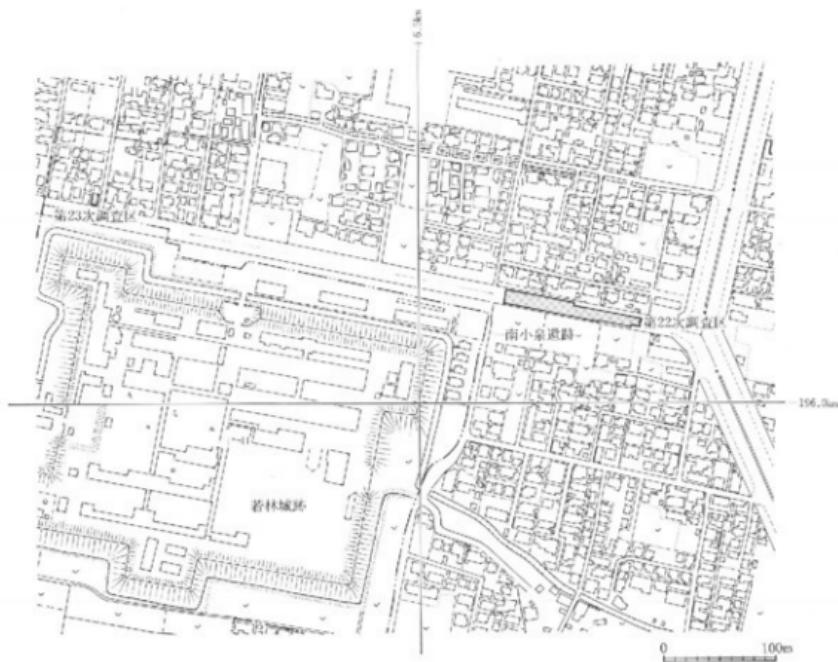
発掘調査は平成4年9月1日に開始された。対象地区内で排土処理を行うため、調査区をA・B-11グリッド中央を境に東西二つに分け、東側を排土置き場として西側の調査を先行した。遺構は基本層II層上面で検出された。西側では天地返しによる攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではない。また、以前の農道直下だけが天地返しを受けておらず、調査区を東西にベルト状に検出レベルの高いところがみられた。凹凸のある検出面の精査に時間をとられ、西側の調査は11月末までかかり、排土置き場を反転して東側の調査へと移行した。平成4年12月28日に調査を終了した。

なお、この調査では、若林城跡と近い位置にあることから、当初予想された中世～近世の遺構が検出されているが、この他に、「貞山公治家記録」のなかで伊達政宗がこの城について、「…向ノ堀一重ハ残置キ、外ハ皆故ノ田畠トスヘキ…」(卷之39上)

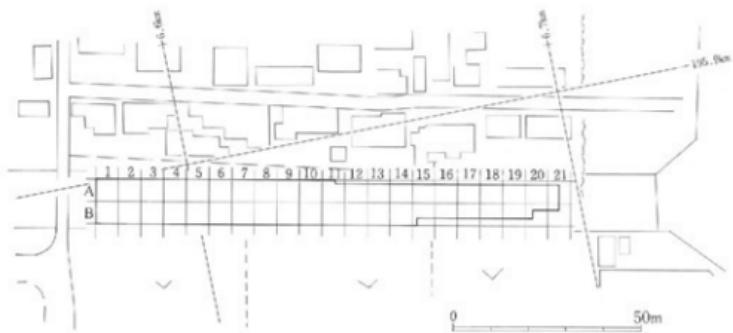
と言い残した記録から、現在みらる堀跡を内堀として、外堀の確認も調査のひとつの目的となっていた。結果として堀跡は検出されなかったが、今後の課題とされる。

#### (2) 第23次調査

発掘調査は平成4年11月24日に開始され、平成4年12月4日に終了した。



第2図 調査区位置図



第3図 第22次調査区設定図

## 第IV章 第22次調査

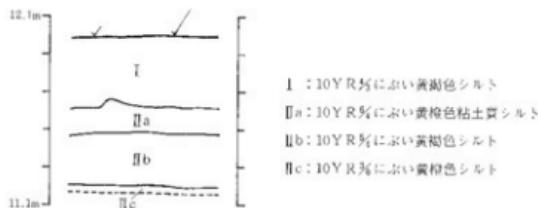
### 1. 基本層序

基本層はⅠ層、Ⅱ層を確認した(第4図)。Ⅰ層は畑の耕作土、Ⅱ層は河川によって供給された堆積層である。Ⅱ層上面が遺構検出面であり、A・B-13・14グリットを境に、東ではⅡa層上面、西ではⅡa層の分布が部分的なため、主にⅡb層上面で検出している。Ⅱa、Ⅱb層の層相変化については、調査区東部へむけて粘性が強くなっていることが知られる。これは、調査区周辺の地形面が西方へわずかに高くなっていることとも関連して、主な供給源が西方にあった可能性を推測させる。また、より下層については、各遺構の壁面の観察などから、にぶい黄褐色～にぶい黄橙色の粘土質シルトと砂質シルトあるいはシルトが互層になって連続しており、遺構検出面下1.5mでも砂層は認められなかった。

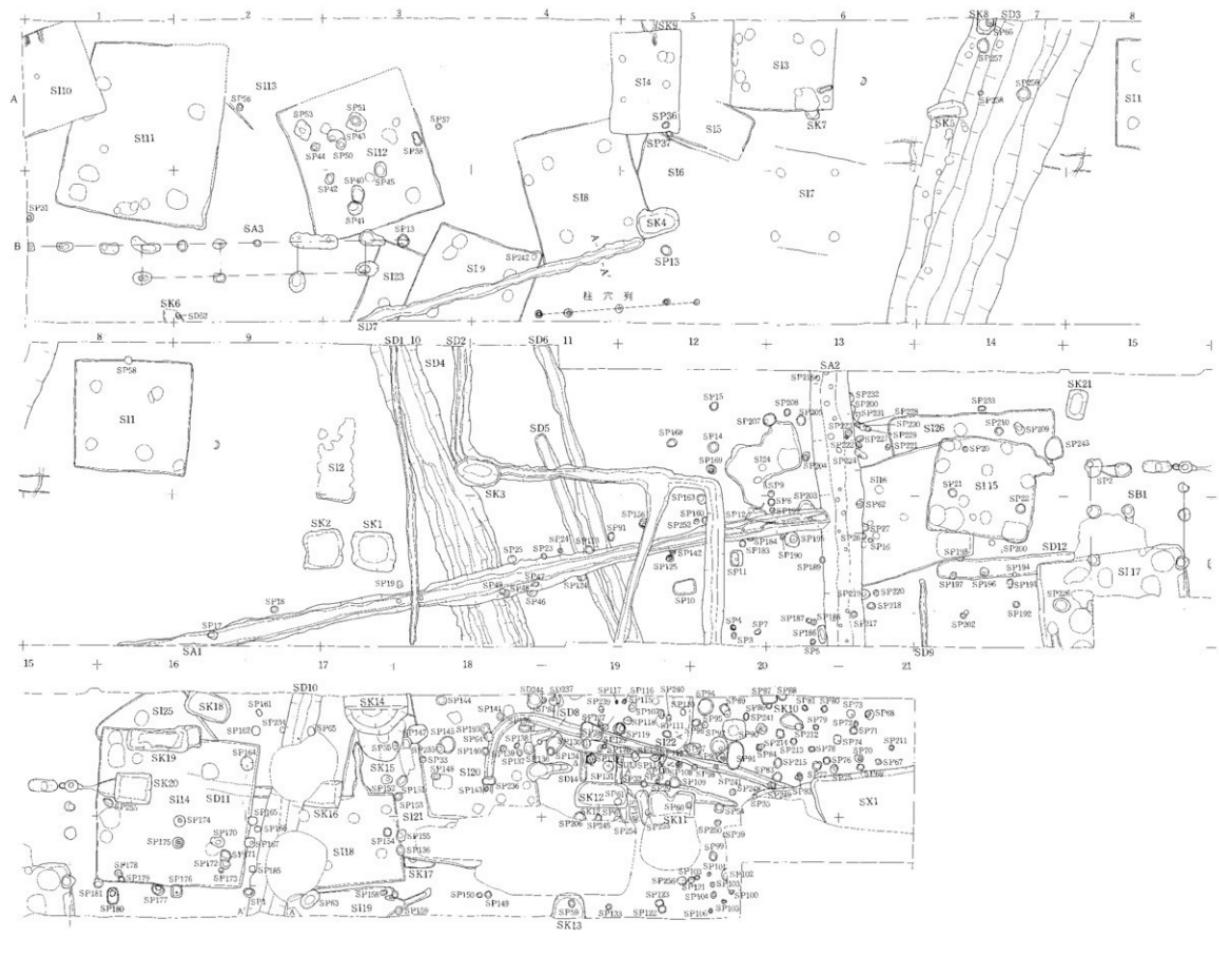
### 2. 調査概要

遺構は、古墳時代後期から近世にかけて堅穴住居跡及び堅穴遺構26軒、掘立柱建物跡1棟、区画施設3基、溝跡14条、土坑21基、性格不明遺構1基、柱穴列1条、ピット259個が検出された(第5図)。

遺物の総量は収納用平箱で約100箱で、総点数は約30000点であり、各遺構及び基本層からの出土数量は第20～23表に示した。調査区は畑地であったこともあり、天地返しを受けていることから基本層Ⅰ層出土遺物は20000点を越えており、その多くは土師器の破片である。また、遺構には伴わないが、弥生時代の遺物も少量認められる。なお、礫としたなかには、磨石の可能性のあるものが含まれている。



第4図 基本層序(B-14グリット南壁)



### 第5図 調査区全体図

### 3. 検出された遺構と遺物

#### (1) 墓穴住居跡・堅穴遺構

S I 1 (堅穴住居跡) : A - 8・9 グリットに位置する。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は正方形である。ピットは 6 個認められ、P 1～4 が主柱穴、P 5 は貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁南側に設けられており、焼土面と煙出しの一部が確認された。床面は 4 層上面である。掘り方底面は、中央部が溝状にやや深くなっている。

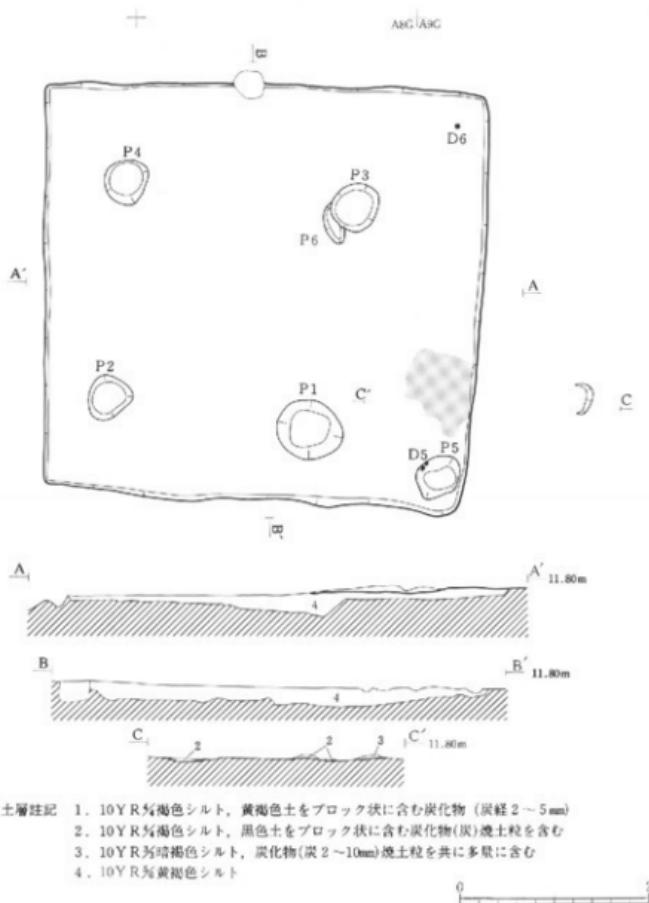
遺物は総数 363 点出土しており、土師器破片が多数を占める。掘り方埋土からの出土遺物も多い。第 7 図には 11 点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。これらは、床面及び P 5 出土遺物と、掘り方出土遺物に分けられる。床面及び P 5 からは、土師器の壺(D-3・5)、高台付壺(D-6・7)、甕(D-8・9)が出土している。壺 D-3・5 には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、内面は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比(D-3:0.38、D-5:0.37)、器高口径比(D-3:0.32、D-5:0.34)も近似する数値を示している。底部の切り離し技法も、ともに回転糸切り無調整である。また、D-3・5 には大きさの違いが認められることから、壺に大小 2 種類のあることも知られる。大小 2 種類は甕 D-8・9 にもみられる。高台付壺 D-6・7 は、ともに高台部分が外傾しているが、その高さに違いもある。掘り方からは、土師器の壺(D-1・2・4)、須恵器の壺(E-1・2)が出土している。土師器壺には、器形的に体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾する D-1・4 と、体部から口縁部へ直線的に外傾する D-2 がある。底径口径比は、D-1(0.45)と D-4(0.35)に違いがみられ、D-1 は D-2(0.45)と同じ数値を示す。器高口径比(D-1:0.31、D-2:0.29、D-4:0.29)は近似している。また、内面は、体部と底部の境に屈曲のある D-1 と、屈曲のない D-2・4 に分けられる。須恵器壺 E-1・2 には、器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、内形線は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比は、E-1:0.42、E-2:0.36、器高口径比は、E-1:0.32、E-2:0.29 である。また、内面の体下部～底面にはロクロ痕とは異なる調整痕跡が認められる。この他、掘り方からは丸瓦(F-1:写真 67)も出土している。

床面及び P 5 と掘り方から出土した土師器壺を比較してみると、底径口径比は掘り方出土の壺に大きいものが多く、器高口径比は床面及び P 5 出土の壺のほうがやや大きい傾向がうかがえる。これは住居構築時以前と廃絶時の時期的な違いを示している可能性はあるが、底部の切り離し技法や器形的な類似性があり、それほどの大きな時期差は認められない。

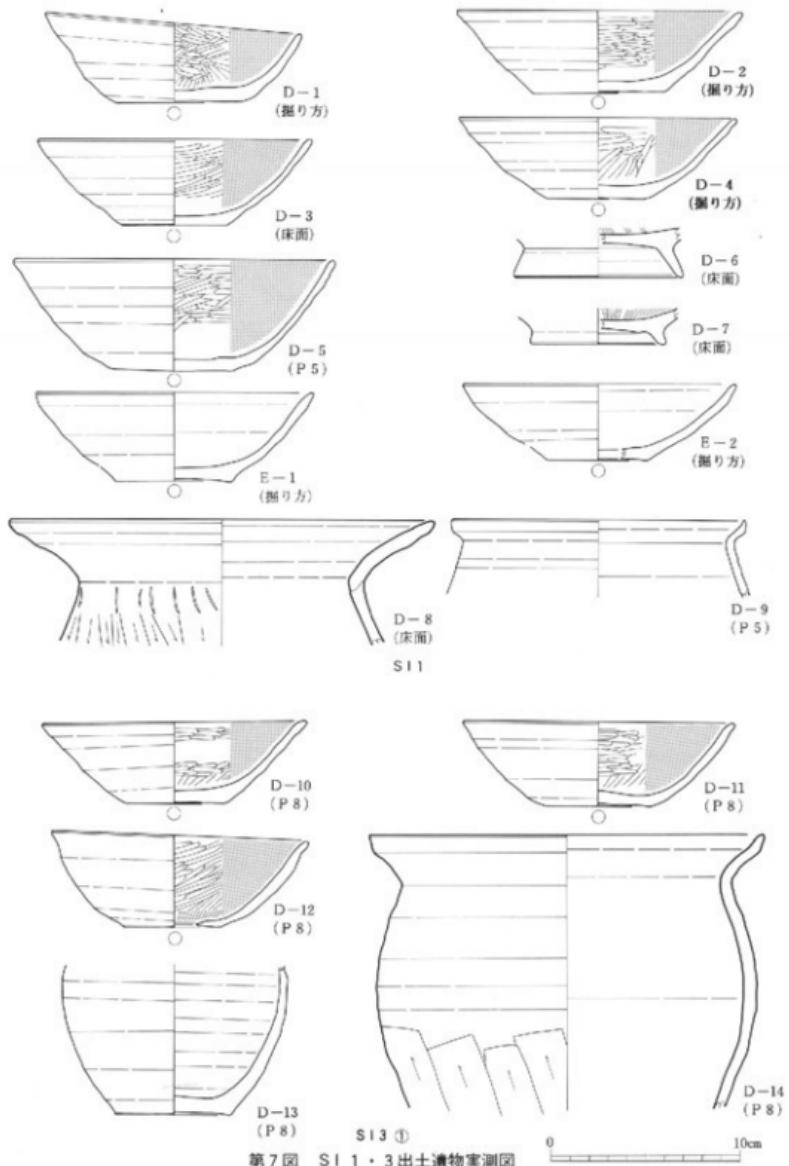
S I 2 (堅穴遺構) : A・B-9・10 グリットに位置する。天地返しにより遺構の大半は残存していない。農道直下の検出レベルの高いところで上端を確認しており、他の部分は貼床の残つ

ていた範囲を示した。平面形は隅丸長方形と推定される。2層は固くしまった砂質シルトで貼床と考えられる。床面は2層上面である。

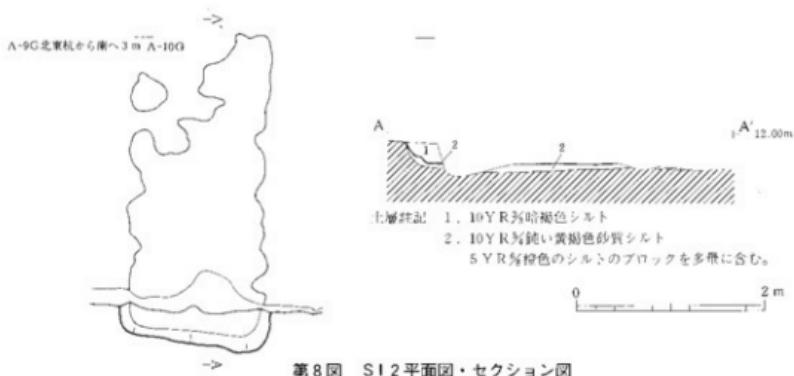
出土遺物の総数は10点であり、埋土1層中から土師器破片9点、2層中から焼成瓦の破片(G-1:写真67)が1点出土している。G-1は貼床から出土している点で、この遺構の構築時期を示す可能性が考えられる。



第6図 SI 1 平面図・セクション図



第7図 SII 1・3出土遺物実測図

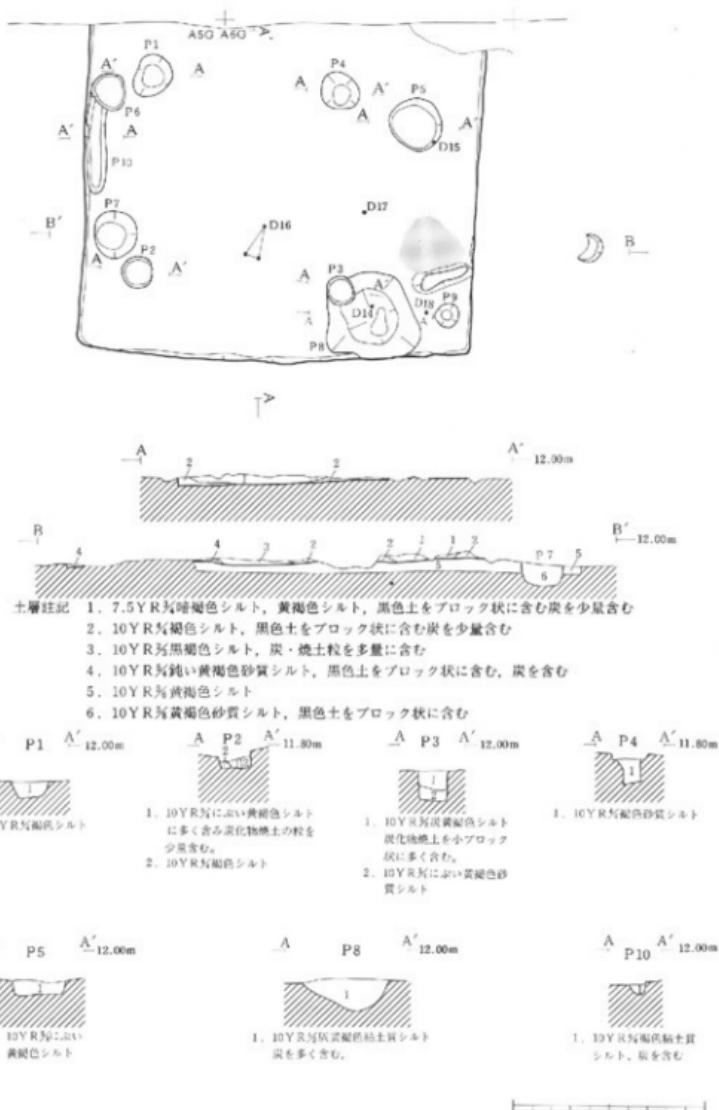


第8図 S12平面図・セクション図

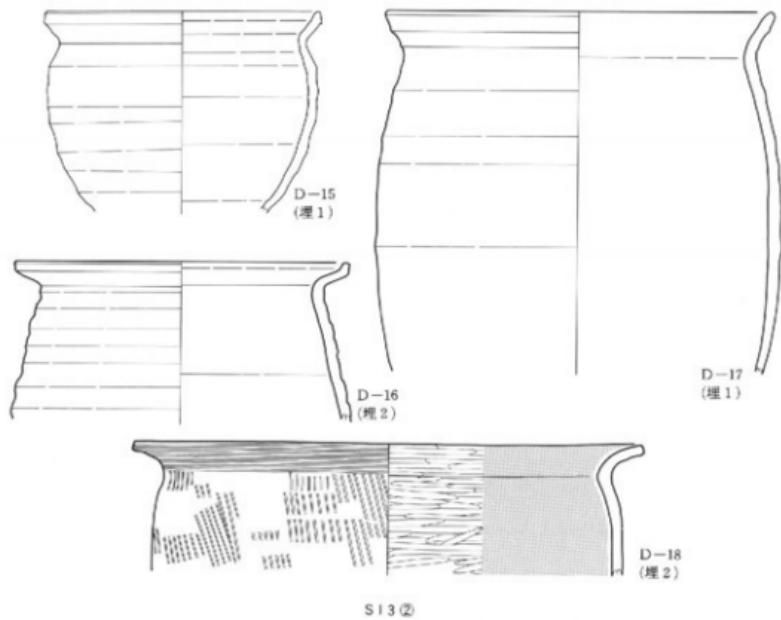
S13(堅穴住居跡)：A-5・6グリットに位置する。SK7と重複関係があり、S13のほうが新しい。天地返しにより、遺構の残存状況は良好ではない。北辺を確認していない。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは10個認められる。P2には柱痕跡があり、その位置からP1とともに主柱穴と考えられるが、他のどのピットと組むのか明確でない。P3、P4と組むのであろうか。P8はP3に先行して存在した貯蔵穴と推定される。西壁際の中央部には溝状のピット(P10)とその両側に2個のピット(P6、P7)があり、入口に関わる遺構の可能性がある。カマドは東壁南側に設けられており、焼面と南側の袖、煙出しの一部が確認された。床面は5層上面である。

遺物は総数320点出土しており、土師器破片が多数を占める。第7図と第8図には、土師器9点を図化した。これらは、D-18を除きすべて製作にロクロを使用している。P8からは、土師器の壺(D-10・11・12)、甕(D-13・14)が出土している。壺D-10・11・12には、器形的に、体部から口縁部にかけて、直線的に外傾するD-10、やや丸みをもって外傾するD-11、丸みをもって外傾するD-12と、それぞれ異なるが、口縁端部がやや外へ開く共通性がある。底径口径比は3点ともほぼ同じ数値(D-10:0.37、D-11:0.38、D-12:0.37)を示し、器高口径比はD-12が0.36、D-10・11はともに0.31で、D-10・11は、ほぼ同じ大きさでもある。内面では、体部と底部の境に屈曲のあるD-11・12と、屈曲のないD-10に分けられる。底部の切り離し技法は、いずれも回転糸切り無調整である。D-12には焼成前の孔が底部に認められる。埋土2層から出土した甕D-18には、内面にヘラミガキのち黒色処理が施されている。

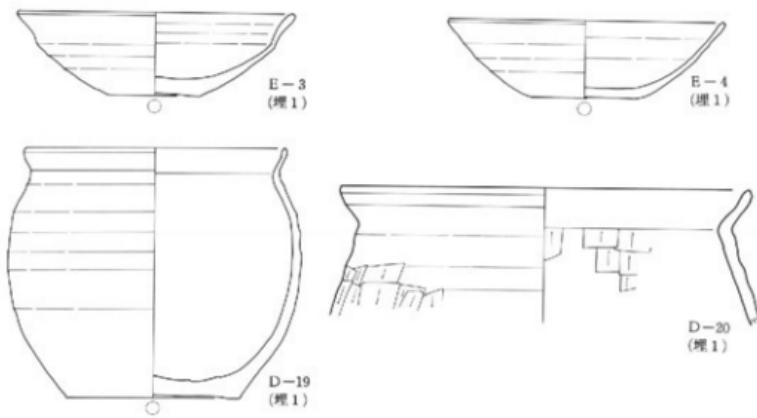
床面からの出土遺物には図化できるものではなく、住居廃絶の時期は明確でないが、P8はP3よりも古いくことから、出土遺物は住居機能時に伴うものと考えられる。P3を主柱穴とすれ



第9図 SI 3平面図・セクション図



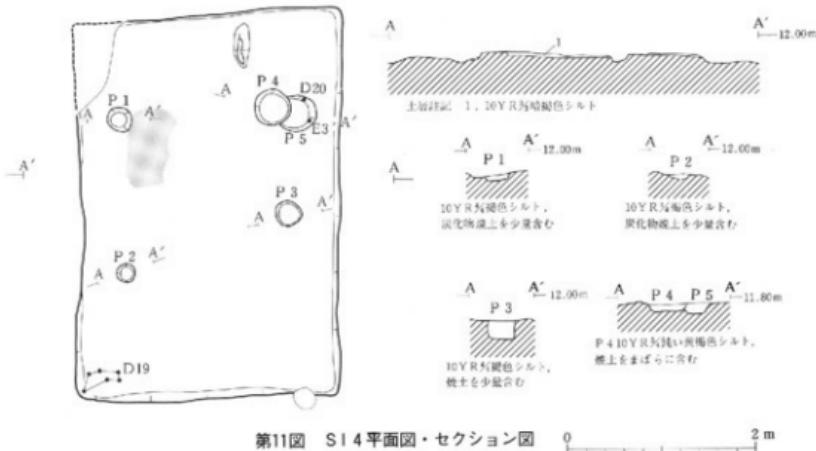
S 13 ②



S 14 ①



第10図 S 1 3・4 出土遺物実測図



第11図 S I 4 平面図・セクション図

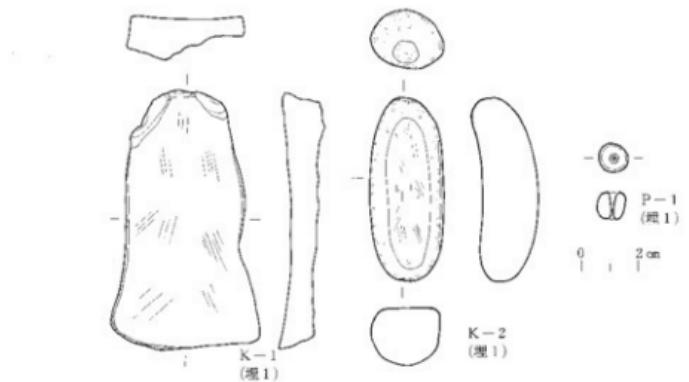
0 2 m

ば、柱の建て替えを行ったためにP 8が埋められた可能性もある。また、住居プラン内からではないが、東壁から数cm離れた地点より第70図に示した三日月高台の灰釉陶器窓I-8が出土している。天地返しにより原位置を保っていないと思われるが、基本層II層にくい込むようにして出土しており、この住居に伴うものと考えられる。

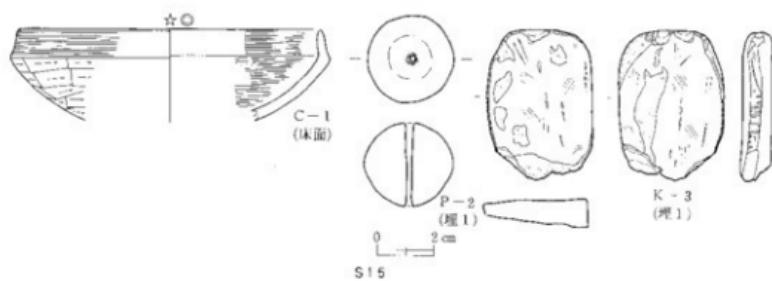
S I 4(窓穴住居跡)：A-4・5グリットに位置する。S I 5、S I 6と重複関係があり、S I 4のほうがいずれよりも新しい。平面形は長方形である。ピットは5個認められるが、主柱穴は明確でない。カマドは北壁中央に設けられており、東側の袖が確認された。床面北東部には焼土面がみられる。

遺物は総数143点出土しており、土師器破片が多数を占める。床面から出土した3点の土師器の破片には固化できるものはないが、製作にロクロが使用されている。第10図、第11図には埋土から出土した7点の遺物を示した。須恵器窓には、器形的に体部がやや丸みをもって外傾し、口縁部が外へ開くE-3と、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾するE-4がある。底径口径比は、E-3(0.33)とE-4(0.41)と違いはあるが、器高口径比(E-3:0.30、E-4:0.28)は近似している。内面は、ともに体部と底部の境に屈曲をもたない。また、内面の体下部～底面にはロクロ痕とは異なる調整痕が認められる共通性もあり、E-4にはその工具痕も観察される。土師器窓D-19・20には大小がみられる。また、把手付の体部破片(D-21:写真68)も出土している。

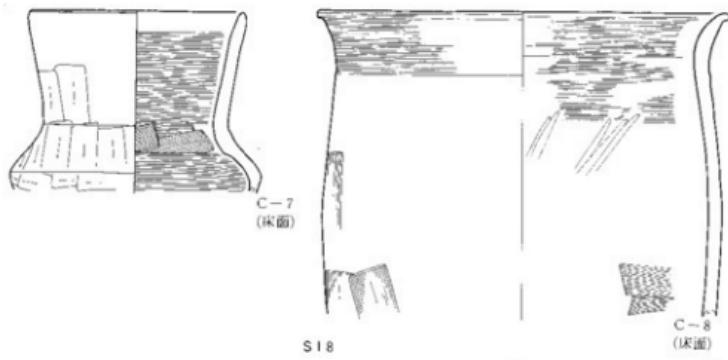
遺物の多くは埋土1層からの出土であるが、図示した窓D-19のように住居南西隅から破片



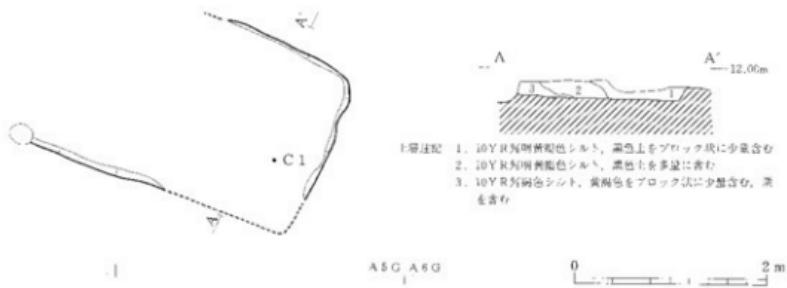
S14②



S15



第12図 S14・5・8出土遺物実測図



第13図 S I 5 平面図・セクション図

がまとまって出土したものがあることや、第18図に示すように埋土1層の厚さは5cm以下と薄いことから、これらの多くは住居廃絶時に伴う可能性が高い。

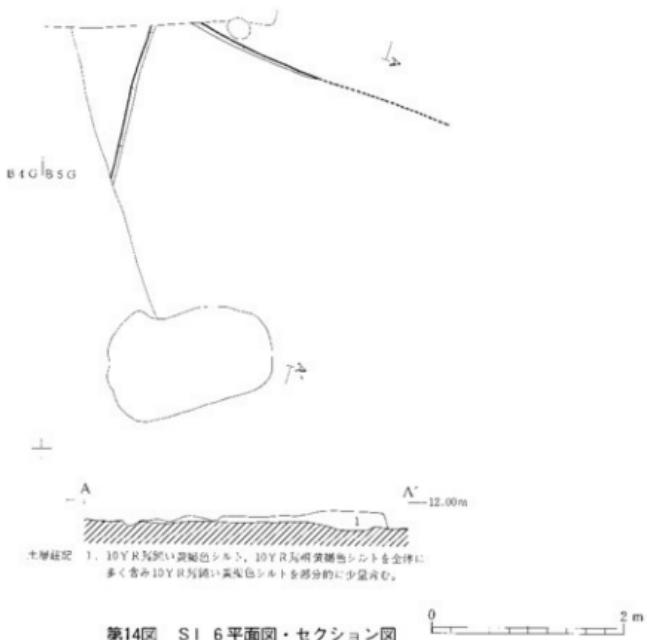
S I 5(竪穴遺構)：A-B-5グリットに位置する。S I 4と重複関係があり、S I 5のほうが古い。平面形は長方形を呈すると推定される。

遺物は総数29点出土している。多数を占める土師器破片には製作にロクロを使用したものは認められない。3点を第12図に示した。床面からは土師器壺(C-1)が出土しており、住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土1層からは土玉(P-2)、砥石(K-3)とともに、写真68に示すように土師器壺破片3点(C-2・3・4)などが出土している。土師器壺C-1～4には、胎土の類似性と、黒色仕上げ処理が施されている共通性が認められ、C-2～4もこの住居に伴う可能性がある。これらは、口縁部が内傾し、口縁部と体部の境に段のあるC-1・4と、稜のあるC-2・3に分けられる。口縁の立ち上がりには、内傾するもの(C-1)と直立するもの(C-2～4)がある。

S I 6(竪穴遺構)：A-B-5グリットに位置する。天地返しにより、遺構の残存状況は良好ではない。S I 4と重複関係がある。S I 6のほうが古い。平面形は方形を基調とすると推定される。

遺物は総数31点出土しており、すべて土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。床面からの出土遺物はない。埋土1層から出土した土師器壺の破片2点(C-5・6)を写真68に示した。2点には、胎土の類似性と、黒色仕上げ処理が施されている共通性が認められる。ともに口縁部と体部の境に段があり、口縁の立ち上がりは、C-5が内傾、C-6が直立している。

S I 7(竪穴住居跡)：A-B-6グリットに位置する。天地返しにより、床面の残存状況は良好ではない。平面形は方形と推定される。ピットは4個認められ、それぞれ主柱穴と考えられる。



第14図 SI 6 平面図・セクション図

遺物は総数 16 点出土しており、多数を占める土師器破片には、製作にロクロを使用したものと認められない。床面からの出土遺物はない。

SI 8 (竪穴住居跡) : A・B-4・5 グリットに位置する。SI 4、SD 7、SK 4 と重複関係があり、SI 8 がそのいずれよりも古い。天地返しにより、造構の残存状況は良好ではない。平面形はやや南北に長い方形を基調としている。ピットは 5 個認められ、P 1~4 が主柱穴と考えられる。南辺は SD 7 によって切られているが、中央にはわずかに焼土面が認められ、カマドは南側に設けられていた可能性がある。

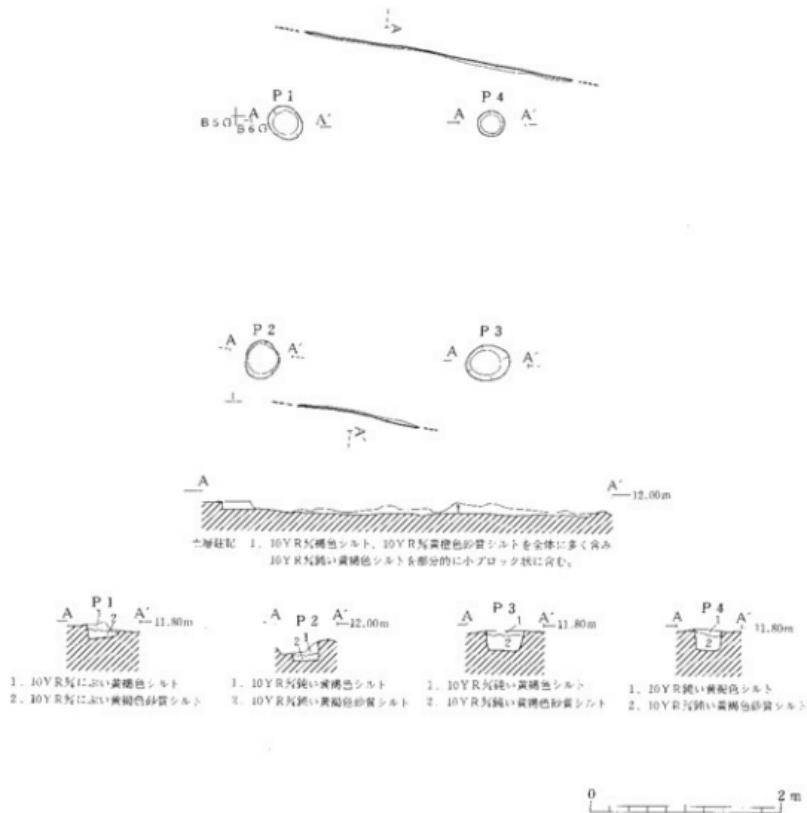
遺物は総数 148 点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものと認められない。第 12 図には、床面から出土した土師器 2 点を図化した。C-7 は小型の壺である。広口で、口縁部がやや長い。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、ヨコナデによって調整されている。C-7 は 2 点が接合している。C-8 は壺である。口縁部と体部の境は明瞭ではない。体部外面には部分的に縱方向のヘラナデが認められる。C-9 (写真 68) は床面出土の土師器壺の破片である。口縁部が直立し、口縁部と体部の境に段がみられる。

SI 9 (竪穴住居跡) : B-3・4 グリットに位置する。天地返しにより、床面は残存しておら

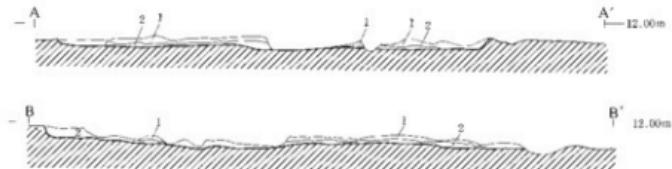
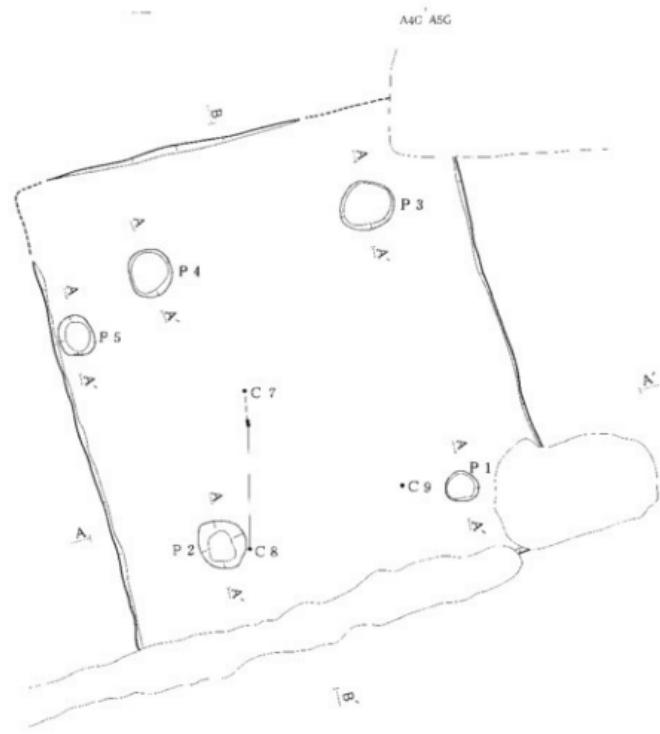
ず、掘り方と貼床埋土を検出した。S I 23、S D 7 と重複関係があり、S I 9 が S I 23 より新しく、S D 7 より古い。平面形は方形を基調とすると推定される。ピットは6個認められ、P 2・3・5 が主柱穴と考えられる。

遺物は総数232点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものと認められない。第20図には、貼床（埋土1層）から出土した土師器坏片1点（C-10）を図化した。C-11（写真68）の土師器坏片とともに、胎土は緻密で細かく、口縁部が内傾し、口縁部と体部の境に稜がみられる。C-10は内外面に黒色仕上げ処理が施されている。

S I 10(堅穴住居跡)：A-A'グリットに位置する。S I 11と重複関係があり、S I 10のほう



第15図 S I 7 平面図・セクション図



土壤組成 1. 10YR 4/4 棕褐色シルト10YR 5/4 黄褐色シルトを全体に多く含む。  
2. 明黄褐色砂質シルト10YR 4/4 棕褐色シルトを少しあむ。

A P 1	A' 12.00m	A P 2	A' 12.00m	A P 3	A' 12.00m	A P 4	A' 12.00m	A P 5	A' 12.00m
1. 10YR 4/4 棕褐色 シルト砂質		1. 10YR 4/4 棕褐色 砂質シルト黄褐色土を ブロック状に含む。		1. 10YR 4/4 棕褐色砂質 シルト黄褐色土をブロ ック状に含む。		1. 10YR 4/4 棕褐色砂質 シルト出灰土をビロ ック状に含む。		1. 10YR 4/4 棕褐色 シルト	

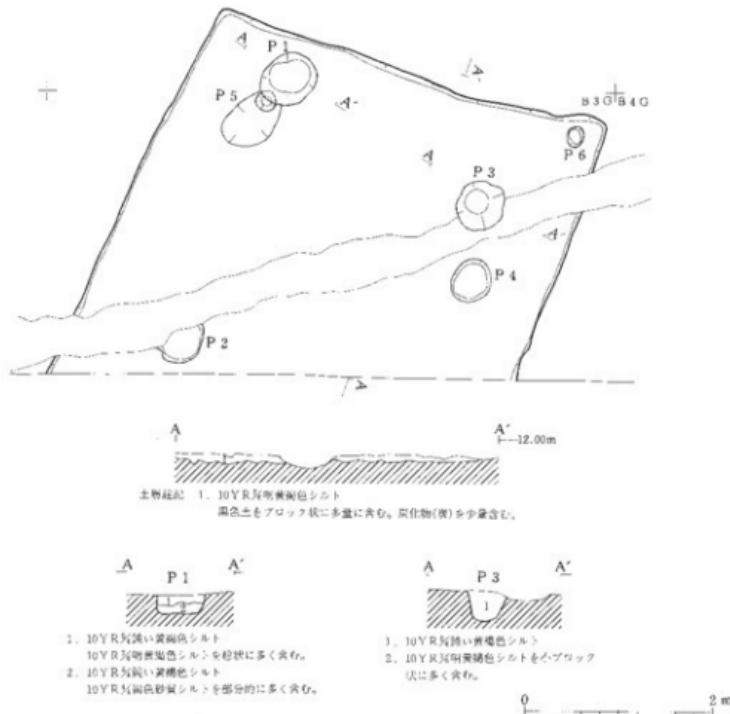
第16図 S I 8平面図・セクション図



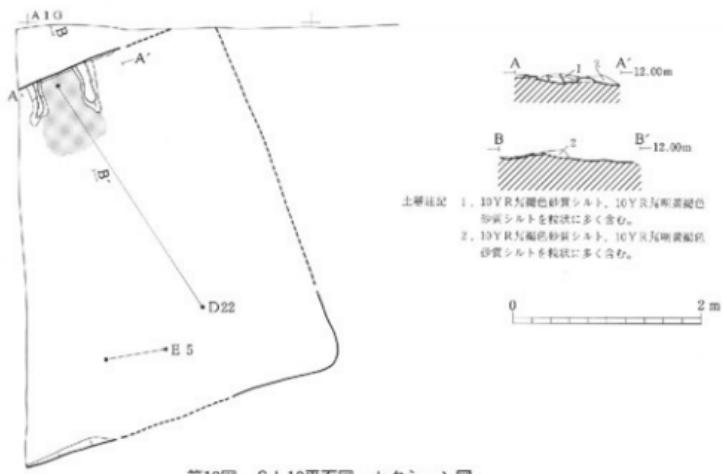
がS I 11よりも新しい。平面形は方形を基調とすると推定される。カマドは北壁中央に設けられている。

遺物は総数137点出土しており、土師器破片が多数を占める。第20図には土師器窓1点(D-22)を図化した。小型の窓である。製作にロクロを使用している。カマド焼面と床面との接合関係が認められる。床面出土のものは小破片である。E-5(写真68)は須恵器窓が焼成時に溶着したものである。外面にはともに平行叩き目がみられる。

S I 11(窓穴住居跡) : A・B-1・2グリットに位置する。S I 10と重複関係があり、S I 11のほうが古い。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は南北にやや長い方形である。ピットは11個認められ、P 1~4が主柱穴、P 9が貯蔵穴と考えられる。カマドは焼土面の位置から、南壁中央部のやや西側に設けられていたと推定される。床面は2層上面である。



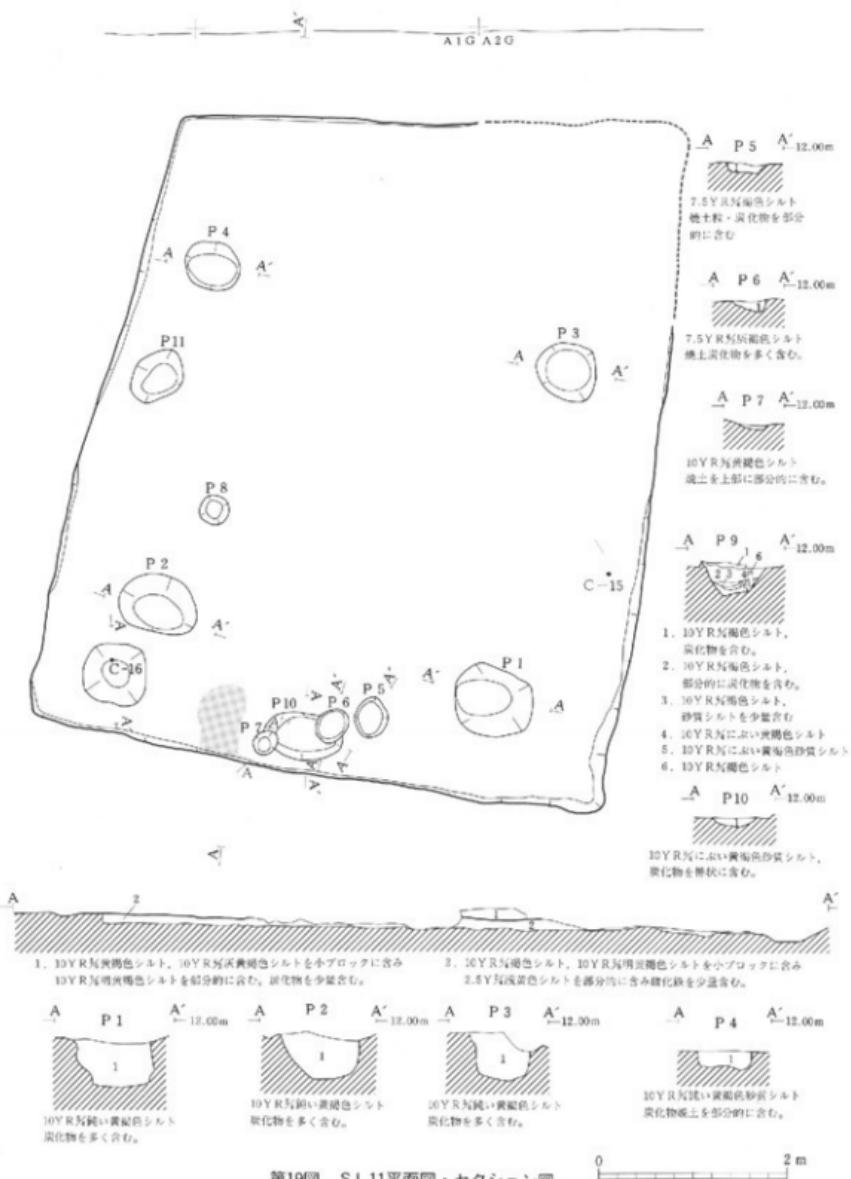
第17図 S I 9 平面図・セクション図

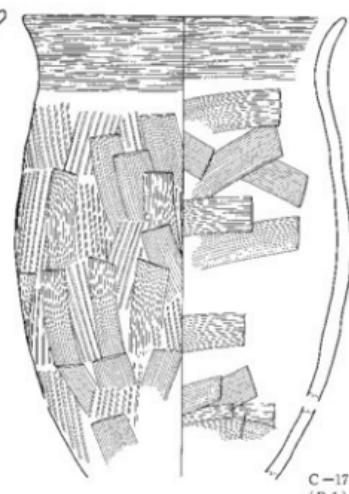
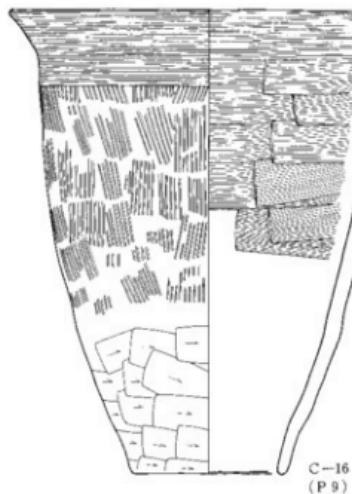
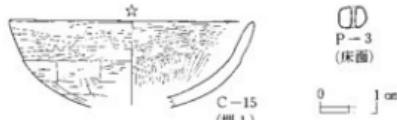
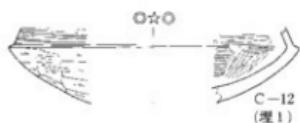
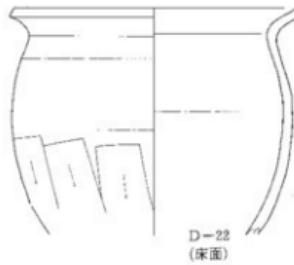
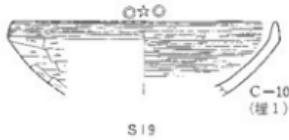


第18図 S I 10平面図・セクション図

遺物は総数470点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものと認められない。第20図には7点を図化した。床面から出土した土玉(P-3)は直径4.5mmと小さい。P 1からは土師器甕(C-17)、P 9からは土師器櫃(C-16)が出土している。C-17は、口縁部が外反し、体部中央が膨らむ壺形の甕である。口縁部から体部にかけて段は形成されていない。外面は刷毛目ののちヘラナデによる調整が行われている。最大径は体部中位にある。C-16は口縁部、体部が外傾する無底式の櫃である。口縁部から体部にかけて段は形成されていない。埋土1層からは4点の土師器杯(C-12~15)が出土しており、胎土の共通性が認められる。しかし、これらは、それぞれ器形的に異なり、口縁部が内傾し、体部との境に段のあるC-12、稜のあるC-13、口縁部が直立し、体部との境に稜のあるC-14、口縁部が外傾し、体部との境に段のあるC-15に分けられる。調整では、C-12~14(内外面口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリあるいはそのちヘラミガキ、体部内面ヨコナデあるいはそのちヘラミガキ)と、C-15(内外面口縁部ヘラミガキ、体部外面ヘラケズリのちヘラミガキ、体部内面ヘラミガキ)には違いが見られる。また、C-12・13は外面上に黒色仕上げ処理が施されている。C-15の内面には黒色処理は施されていない。

床面からの出土土器には図化できるものはないが、P 1出土の土師器甕C-17とP 9出土の土師器櫃C-16は、住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、埋土1層出土の土師器杯4点については、いずれも破片資料であるが、埋土が薄いことなどから、この住居に伴う可能性が考えられる。





第20図 S 1・9・10・11出土遺物実測図 0 10cm

S I 12 (竪穴住居跡) : A・B - 2・3 グリットに位置する。S A 3 と重複関係があり、S I 12 のほうが古い。天地返しにより、床面は部分的にしか残っていない。平面形は南北にやや長い方形を基調としている。ピットは7個認められる。

遺物は総数365点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。第26図には4点を図化した。床面からは須恵器盤(E-6)と、図化していないが、土師器壺(C-20:写真69)が出土している。どちらも破片である。E-6は推定口径19.1cm。C-20は体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる大型の壺の破片である。埋土1層からは、土師器壺C-18、土師器壺C-19、鉄鏃N-1が出土している。C-18は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がわずかに外へ開いている。外面体下部に段が形成されているが、内面には認められない。C-19は、口縁部が外反し、体部が膨らむ器形の甕である。口縁部と体部の境には軽い段が形成されている。

床面出土の須恵器盤E-6は住居廃絶時に伴うと考えられる。また、図示した2点の土師器については、埋土が薄いことなどから、この住居に伴う可能性がある。

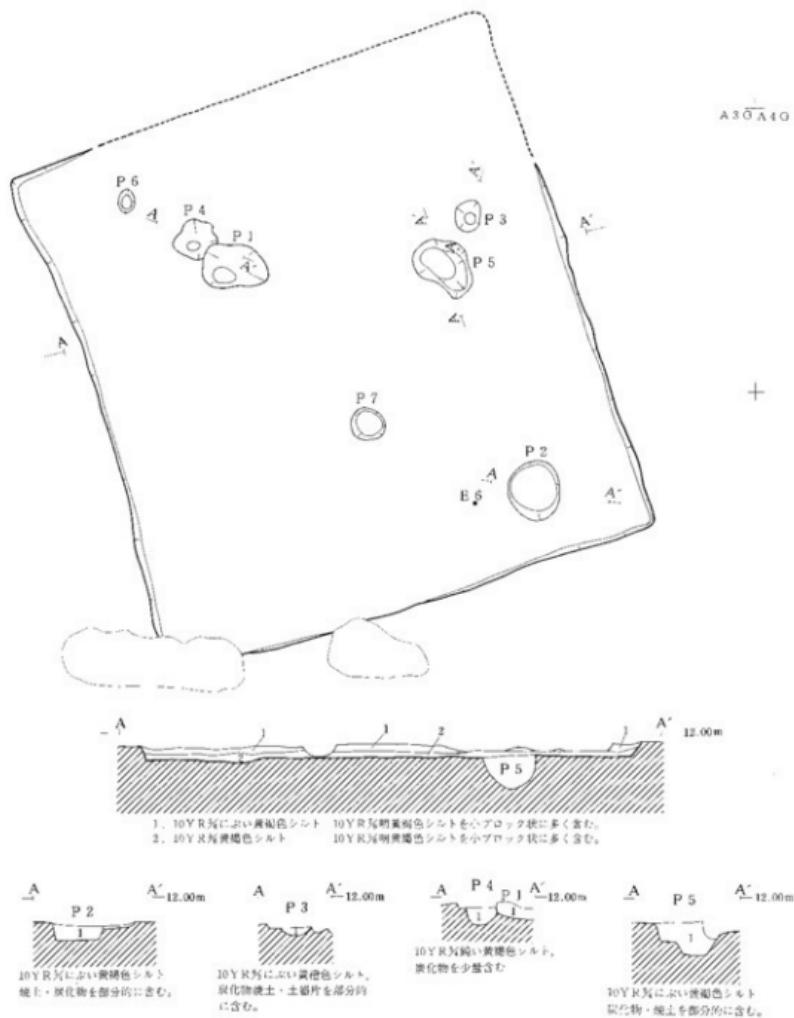
S I 13(竪穴構造) : A-2 グリットに位置する。S I 11、S I 12 と重複関係があり、S I 13 のほうが両者より古い。天地返しにより、遺構のほとんどは残存していない。床面は2層上面である。

遺物は総数59点出土している。すべて土師器破片であり、製作にロクロを使用したものは認められない。埋土1層出土遺物には図化できるものではなく、埋土2層(掘り方)出土の土師器壺C-21を図示した。C-21は、体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がりっている。内面の口縁直下に稜線が形成されている。調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部から底部の内外面はヘラケズリのちヘラミガキである。

S I 14 (竪穴住居跡) : A・B-16 グリットに位置する。S I 25、S B 1、SD 11、SK 19、SK 20 と重複関係があり、S I 14は、S I 25、S B 1、SD 11より新しく、SK 19、SK 20より古い。平面形は正方形である。ピットは7個認められ、P 4が貯蔵穴と考えられる。カマドは、西壁中央部のやや北側に設けられている。

遺物は総数618点出土しており、土師器破片が多数を占める。床面から出土した76点の土師器には図化できるものはないが、その製作にはロクロが使用されている。なかには、内面に黒色処理の施された壺破片も数点ある。第26図には埋土1層から出土した須恵器壺E-8と砥石K-4を図示した。また、白玉(K-33:第70図)も出土している。

S I 15 (竪穴住居跡) : A・B-14 グリットに位置する。S I 16、S I 26 と重複関係があり、S I 15のほうが両者より古い。平面形は正方形である。ピットは12個認められる。主柱穴は明確でないが、P 5とP 8は貯蔵穴と推定される。カマドは東壁北側に設けられており、焼土



第21図 S12平面図・セクション





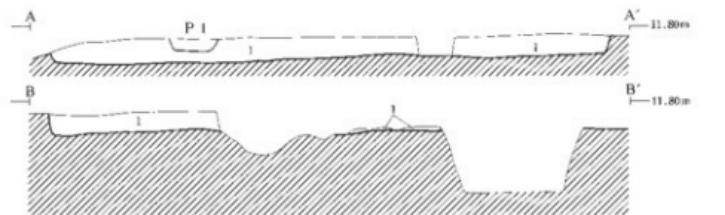
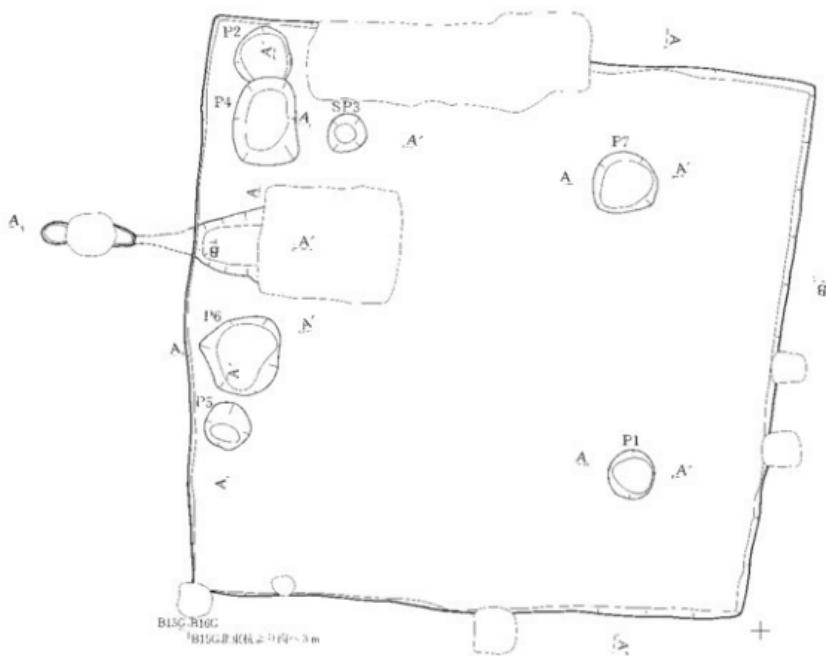
第22図 SI 13平面図・セクション図

面と北側の袖のところに疊2個、短い煙道が確認された。埋土は2層に分かれている。埋土1層下部には、灰白色火山灰が層厚1~2cmで2層上面を覆うように堆積している。

遺物は総数1396点出土しており、土師器破片が多数を占める。埋土出土遺物は、灰白色火山灰の上下で大きく二つに分けられる。第26図・27図・28図には、主に埋土2層と、床面及びピット出土遺物16点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

床面からは土師器壺D-23、P 11からは耳皿D-34が出土している。D-23の器形は、体部から口縁部にかけてやや円みをもって外傾しており、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口徑比: 0.45、器高口徑比: 0.37。体部下端と底部は手持ちヘラケズリ調整が行われている。D-34は焼成されている耳皿で、内外面とも黒色を呈する。ロクロ形成のちヘラミガキなどの調整は行われておらず、土師器とは異なる。

埋土2層からは土師器の壺(D-24~26、28)、甕(D-29~31)、瓶(D-32)、壺(D-33)、須恵器壺(E-8~10)が出土している。壺D-24~26、28には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、D-25には口縁端部がやや外へ開く違いはあるが、内形線はいずれも体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口徑比(D-24: 0.41、D-25: 0.39、D-26: 0.35、D-28: 0.40)と器高口徑比(D-24: 0.33、D-25: 0.36、D-26: 0.35、D-28: 0.31)では、D-26の口径底径比がやや小さいが、他はそれぞれ近い数値となっている。底部は、すべて回転糸切り無調整である。また、D-24~26とD-28には大きさの違いが認められることから、壺に大小2種類のあることも知られる。E-8~10は、器形的にそれぞれ異なる。口縁部から体部にかけては、E-8はやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開き、E-9は丸みをもってそのまま外傾し、E-10は外傾している。内面は体



1. 10Y R灰に赤い黄褐色シート、10Y R深明黄褐色シート、2.5Y R浅黄褐色シートを全体にザワツ状に含む。

10Y R灰に赤い黄褐色シートを部分的にブロック状に含み斑を少量含む。



1. 10Y R浅黄褐色シート

炭化物を少量含む。

2. 10Y R深明黄褐色シート

縫隙・炭化物を多く含む。

1. 10Y R灰に赤い黄褐色シート

10Y R深明黄褐色シート

2.5Y R浅黄褐色シートを

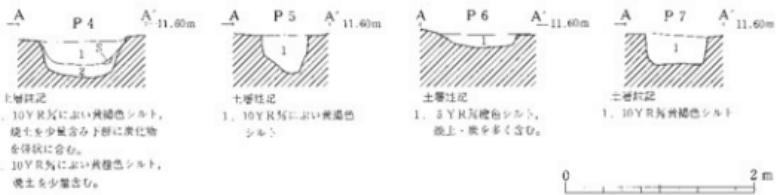
小ブロック状に含む。

3. 10Y R浅明黄褐色粘土質

シート

0 2 m

第23図 S I 14平面図・セクション図



第24図 S1 14セクション図

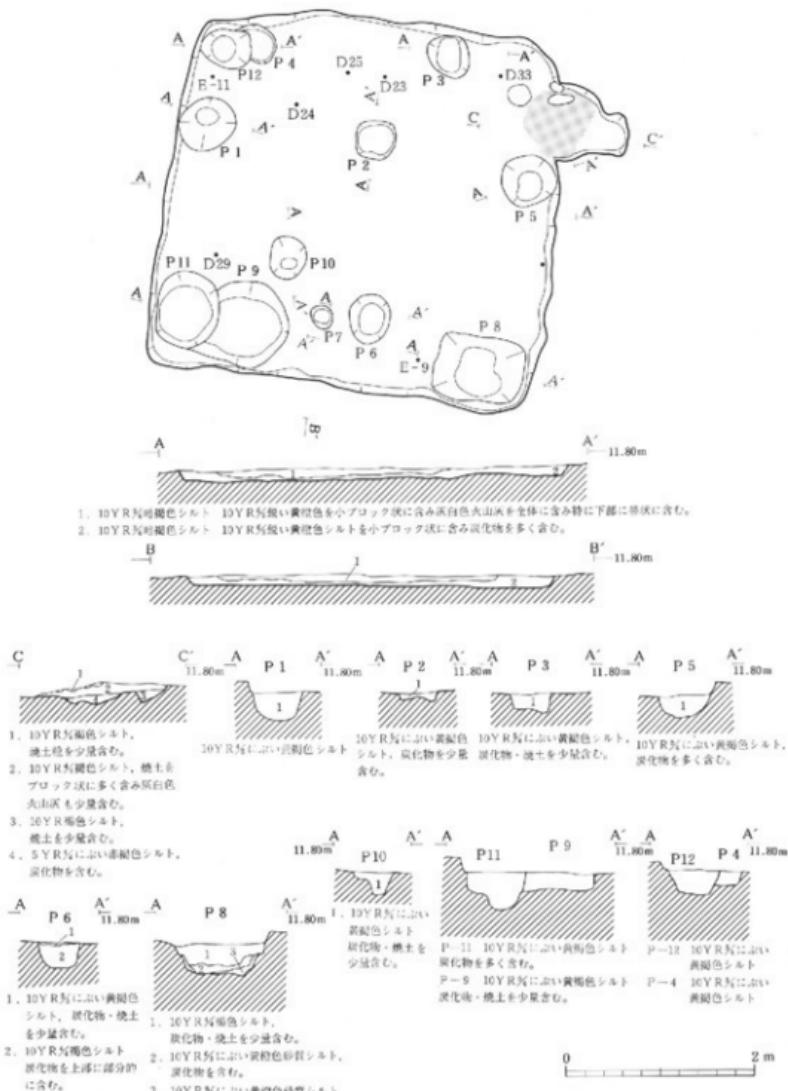
部と底部の境に屈曲をもつE-8・9、屈曲をもたないE-10に分けられる。底径口徑比(E-8:0.39、E-9:0.46、E-10:0.44)と器高口徑比(E-8:0.29、E-9:0.33、E-10:0.34)では、E-9と10の数値は近似するが、器形とともに大きさの違いが認められる。底部は、すべて回転糸切り無調整である。また、E-8・9の内面体部下半から底部にかけて、E-10の内面体部下半には、ロクロ痕とは異なる調整痕が認められ、E-8・9では工具の痕跡も観察される。D-29~31には、土師器壺の大小がみられ、小型の壺D-30の内面にはヘラミガキのうち黒色処理が施されている。D-32は底部を欠損しているが、把手付の壺と推定される。口徑22cmを測る。器形は、体下部は外傾、体上部は直線的に立ち上がり、口縁は外へ開いている。2個の把手は小さく、先端は上方を向いており形骸化している。D-33は壺と考えられる。

埋土1層からは、土師器壺D-27と砥石K-5のほか、平瓦破片1点(G-2:写真70)や赤焼土器の破片2点などが出土している。G-2は狭端部付近の平瓦破片である。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の繩叩き目とその叩き目の潰れ、凹面では細かい布目とそれを消す全面的なナダがみられる。凹面側縁にはヘラケズリにより面取りは行われていない。再利用されており、凸面の中央部に磨面が認められる。

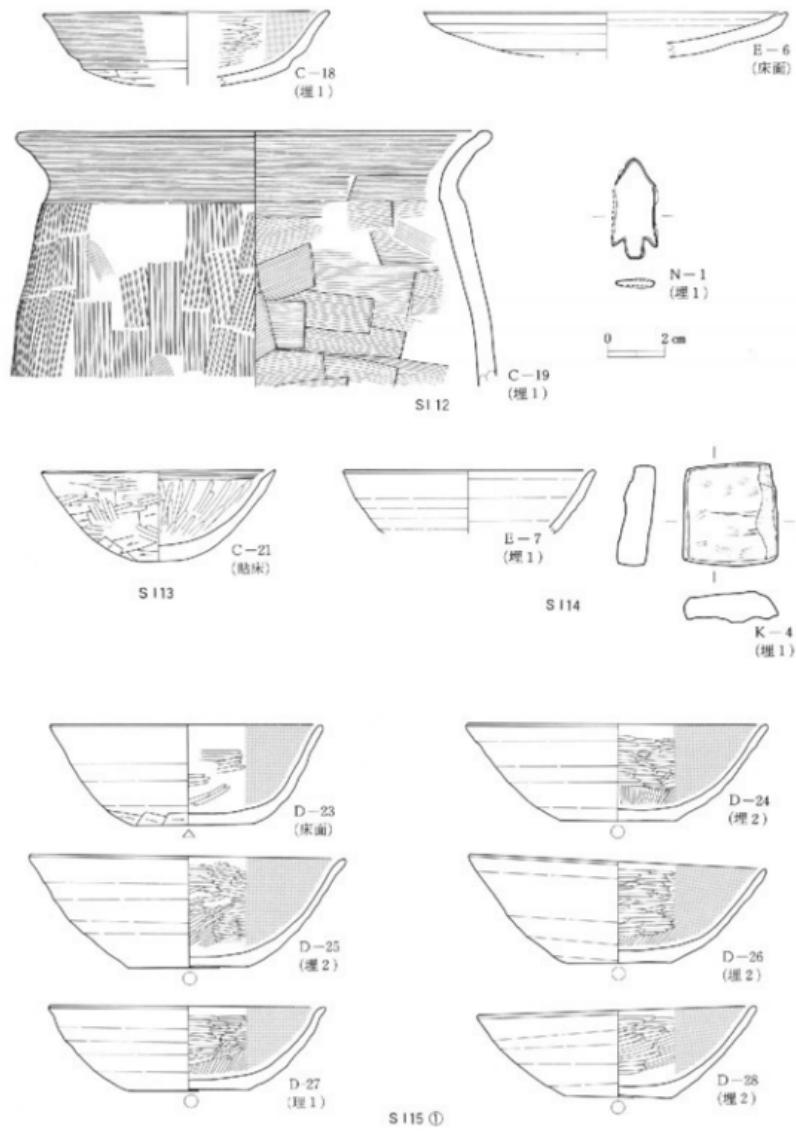
これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器壺D-23は住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、図示した2層出土の土器は床面直上からの出土であり、層厚が薄いことや、残存率の高いものが多く、この住居に伴う可能性が高い。

S1 16(窓穴住跡): A-B-13・14グリッドに位置する。S1 15、S1 26、SA 2と重複関係があり、S1 16は、S1 26より新しく、S1 15、SA 2より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは6個認められる。主柱穴は明確でないが、P1は貯蔵穴と推定される。

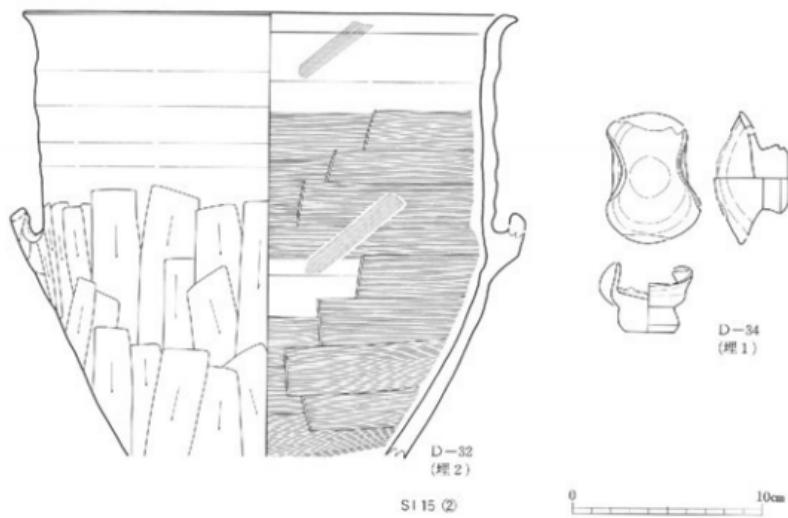
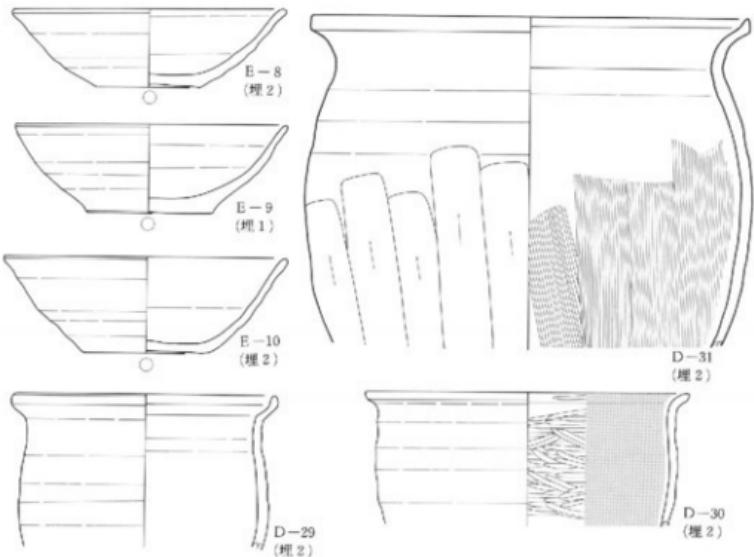
遺物は総数947点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物のほとんどは埋土1~3層から出土している。第28図・30図には12点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。



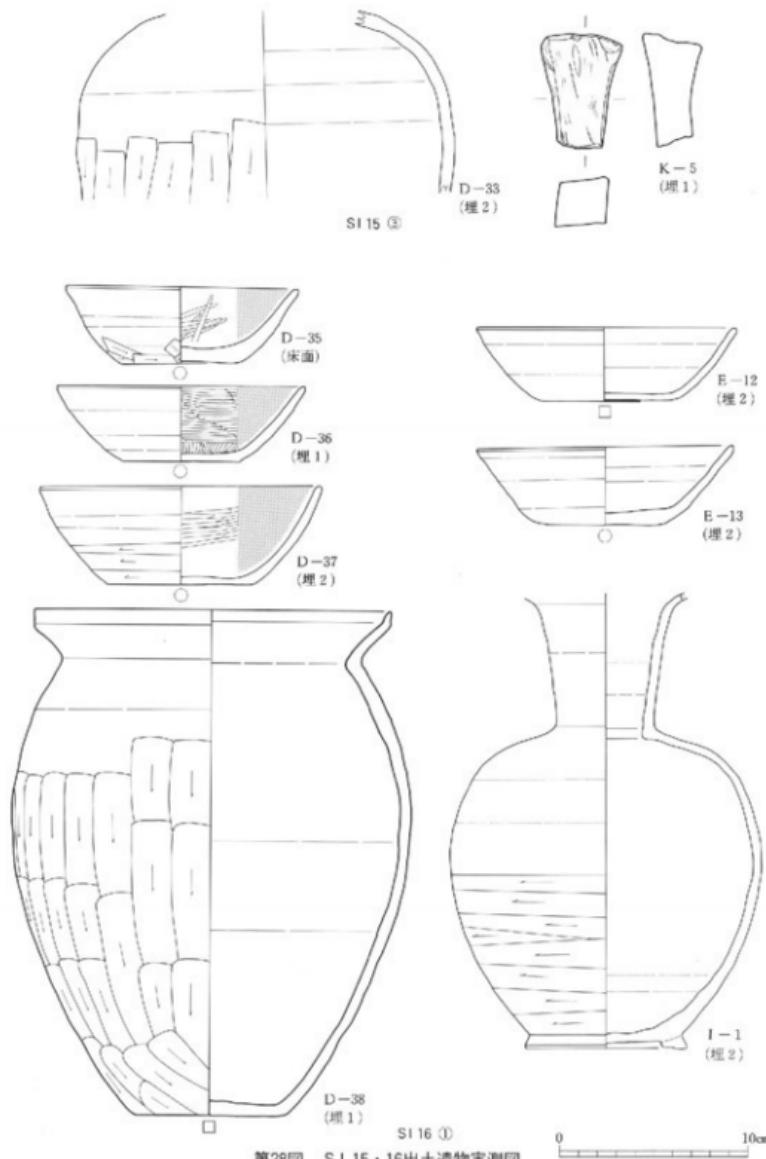
第25図 SI 15平面図・セクション図



第26図 SII 12・13・14・15出土遺物実測図



第27図 S I 15出土遺物実測図



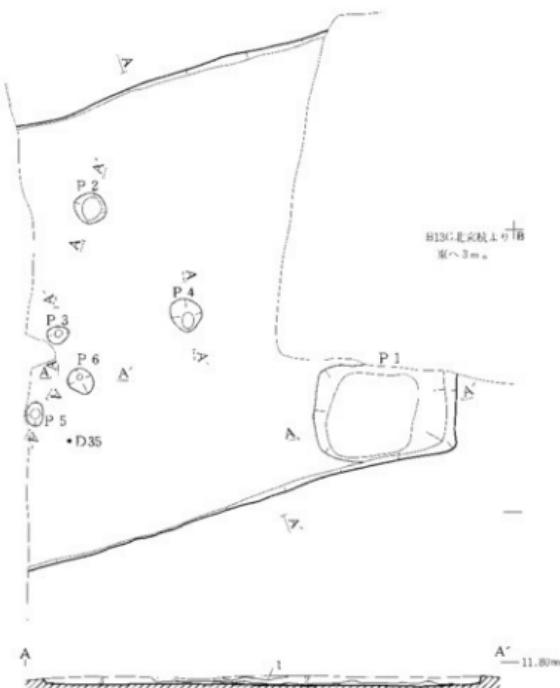
第28図 SII 15・16出土遺物実測図

床面からは土師器坏D-35、P 1からは須恵器壺E-14が出土している。D-35の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開いており、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比：0.50、器高口径比：0.33。底部には回転糸切り痕がそのまま残されており、調整は体部下端にのみ手持ちヘラケズリが行われている。E-14は、口縁は外反するが、端部を欠損しており、体部は算盤玉状を呈する丸底の広口壺である。外面は、体上部に回転ヘラケズリ、体下部に叩き目、底部は手持ちヘラケズリによって調整されている。

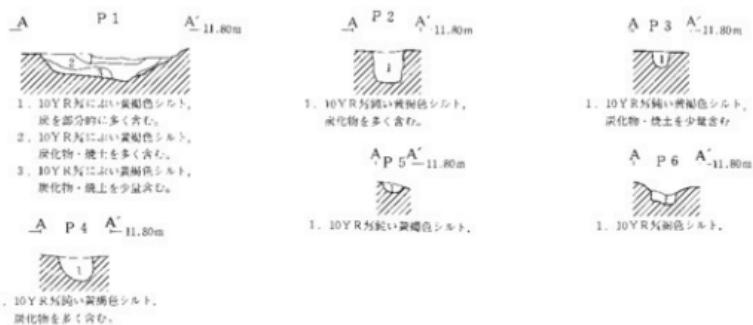
埋土中からは、土師器の坏（D-36・37）、壺（D-38）、須恵器坏（E-12・13）、灰釉陶器長頸瓶（I-1）、砥石（K-6・7）、石製模造品（K-8）、土玉（P-4）、軒丸瓦（F-2；写真71）が出土している。D-36とD-37には器形的な類似性が認められ、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比はD-36：0.47、D-37：0.52、器高口径比はD-36：0.30、D-37：0.34とやや異なる。D-37の方が器高が高く、口径も大きい。D-36は底部：回転糸切り無調整、D-37は体下部から底部を回転ヘラケズリによって調整されている。D-37の底部内面には井桁状にヘラミガキが施されている。E-12・13は、器形的にD-36と類似する。E-13は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する点で異なるが、E-12とともに底径口径比（E-12：0.48、E-13：0.47）、器高口径比（E-12：0.28、E-13：0.30）は近似する数値を示している。E-12はD-36よりわずかに大きいが、ほぼ同じ器形、法量の坏といえる。底部は、E-12が回転ヘラ切り無調整、E-13が回転糸切り無調整である。I-1は高台の付く長頸瓶である。器厚は頸部から体上部にかけて5~6mmと薄い。体部は球形に近く、最大径は上半部にあり、頸部は下端が細く、直線的にやや外傾して立ち上がり、口縁部が外へ開いている。口縁端部は欠損している。接合痕は体部と高台部、頸部と体部の境に認められる。外面体中～下部は回転ヘラケズリによって調整されている。釉は頸部から体上半部にみられる。F-2は陸奥国分寺跡（伊東他：1961）で、重弁蓮花文鏡瓦VI類として分類されている軒丸瓦の瓦当部である。再利用されており、瓦当面の裏側に磨面が認められる。

これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器坏D-35は住居廃絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、図示した2層出土の土器は床面直上からの出土であり、層厚が薄いことや、残存率の高いものが多く、この住居に伴う可能性が高い。

S I 17（竪穴住居跡）：B-14・15グリットに位置する。住居中央部に擾乱が入っており、遺構の残存状況は良好ではない。S B 1、S D 12と重複関係があり、S I 17は、S D 12より新しく、S B 1より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは9個認められる。主柱穴はP 1、P 2、P 6は貯蔵穴と推定される。カマドは北壁中央部に設けられているが、燃焼部は



1. 10Y Rを含む黄褐色シルト。10Y Rが例異色シルトを小ブロック状に含み焼土塊・炭を多く含む。
2. 10Y Rを含む黄褐色シルト。明眞褐色シルトを多く含み焼土塊を部分的に多く含む。
3. 10Y Rを含む黄褐色シルト。10Y Rが例異色シルトを小ブロック状に含み炭化物焼土を少數含む。



第29図 SI 16平面図・セクション図



残っておらず、煙道の一部と煙出しのピットが確認された。東西の壁際には周溝が検出されている。床面は4層上面である。埋土は3層に分かれるが、人為的な堆積状況を示している。

遺物は総数1776点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土1・2層から出土している。第30図・32図には10点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

床面からは土師器壺D-39が出土している。D-39の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部が外へ開いており、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口徑比：0.48、器高口徑比：0.31。体部下端と底部には手持ちヘラケズリによる調整が行われている。

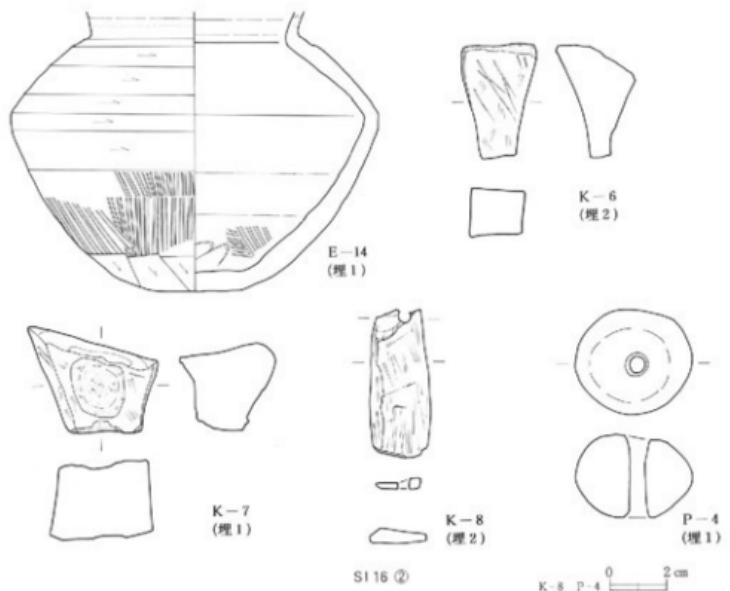
埋土中からは、土師器の壺(D-40・41)、甕(D-42・43)、須恵器壺(E-15)、土玉(P-5)、鉄製品(N-2~4)が出土している。D-40はD-39と器形的に類似し、底径口徑比：0.47、器高口徑比：0.31もほぼ同じ数値を示し、体部下端と底部の調整も共通する。しかし、D-40の器厚は薄く、口縁端部がより外方へ開いている点では異なっている。内面底部のヘラミガキは井桁状に行われている。D-41は、D-39・40と比べて大きく、底径口徑比：0.41、器高口徑比：0.37も異なっている。器形としては、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。体部下端と底部には手持ちヘラケズリによる調整が行われている。E-15の器形はD-39・40と類似するが、口縁端部がそのまま外傾している点で異なる。底径口徑比は0.48、器高口徑比は0.28であり、D-39・40と比べるとやや浅い。底部は、回転糸切り無調整である。D-42・43の甕には大小の違いがみられる。N-2~4の鉄製品については、N-2が鉄斧、N-4が刀子で、N-3は馬具の轡を構成する喰と推定される。

これらの出土遺物のなかで、床面から出土している上師器壺D-39は住居焼絶時に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、前述のように埋土1~3層には人為的な堆積状況が認められることから、住居焼絶後、それほどの時間差をもたないことが推定される。

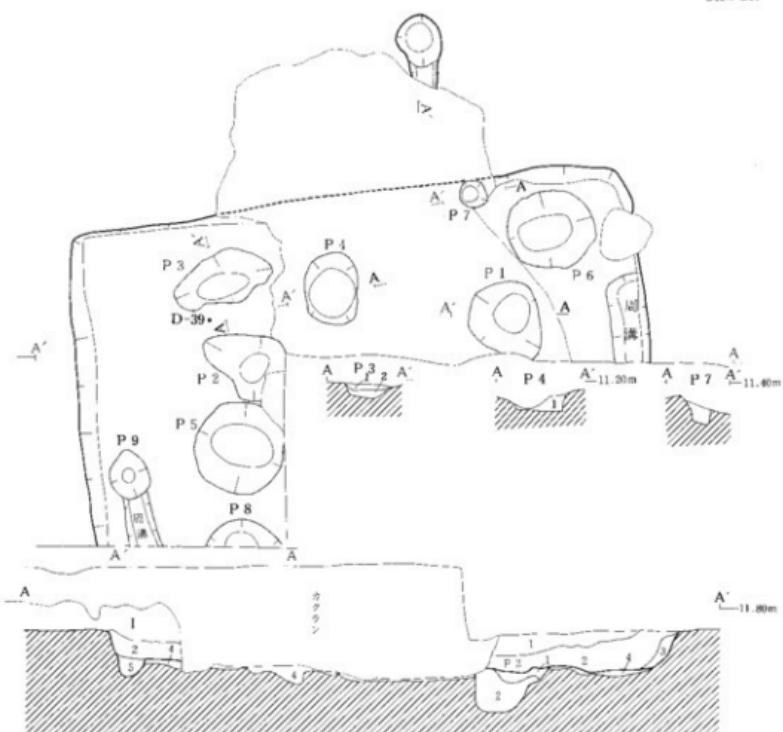
S I 18(竪穴住居跡)：A・B-17・18グリットに位置する。S I 21、S D 10、S K 16と重複関係があり、S I 18は、S I 21より新しく、S D 10、S K 16より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは5個認められる。カマドは北壁中央部東寄りに設けられている。床面は4層上面である。

遺物は総数697点出土しており、土師器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土1・2層から出土している。第32図・34図には6点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

カマドからは土師器甕(D-45・46)、須恵器壺(E-16・17)が出土している。E-16と17



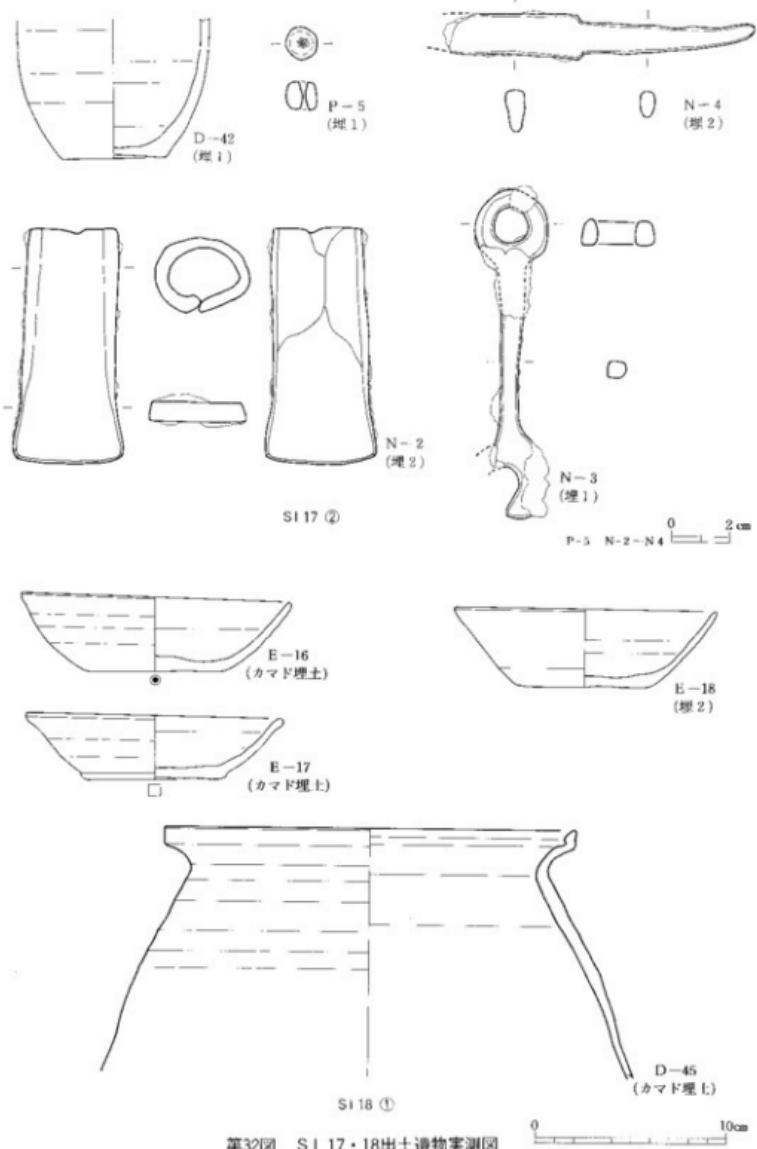
第30図 SI 16・17出土遺物実測図



- 1層 10YR4/2褐色シルト、10YR4/8赤い黄褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物、鐵土・土器片を多く含む。鉄製品を含む。  
 2層 10YR4/2赤い黄褐色シルト、10YR4/6褐褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物、鐵土・土器片を多く含む。  
 3層 10YR4/6褐褐色粘土質シルト、10YR4/8赤い黄褐色シルトを小ブロック状に含む。  
 4層 10YR4/2褐色粘土質シルト、黃褐色土を側かなブロック状に含む。  
 5層 10YR4/2褐色シルト、黃褐色土を側かなブロック状に含む。
- P-2:1層 10YR4/6褐色粘土質シルト、10YR4/6褐褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物、鐵土を少量含む。  
 2層 10YR4/2赤い黄褐色粘土質シルト、10YR4/6褐褐色シルトを小ブロック状に含み炭化物、鐵土を少量含む。



第31図 SI-17平面図・セクション図



第32図 SII 17・18出土遺物実測図

には、器形的にE-17の口縁端部が外へ開いていることや底径口徑比(E-16:0.49、E-17:0.54)にやや違ひはみられるが、大きさや器高底径比(E-16:0.28、E-17:0.26)は近似し、ともに内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底部は、E-16が手持ちヘラケズリによる調整、E-17は回転ヘラ切り無調整である。土師器壺には、口縁部と体部の様がほぼ同じD-46と、口徑に対して体部の径が大きいD-45という2つの器形のあることが知られる。

埋土中からは、土師器壺(D-44)と須恵器壺(E-18)が出土している。D-44の外側体部上半には平行印き目がみられ、内面には回転刷毛目が施されている。E-18は再過熱を受けしており、底部は火はねにより器面が剥落している。大きさや器形はE-16とほぼ同じで、底径口徑比:0.49、器高口徑比:0.30も近似している。

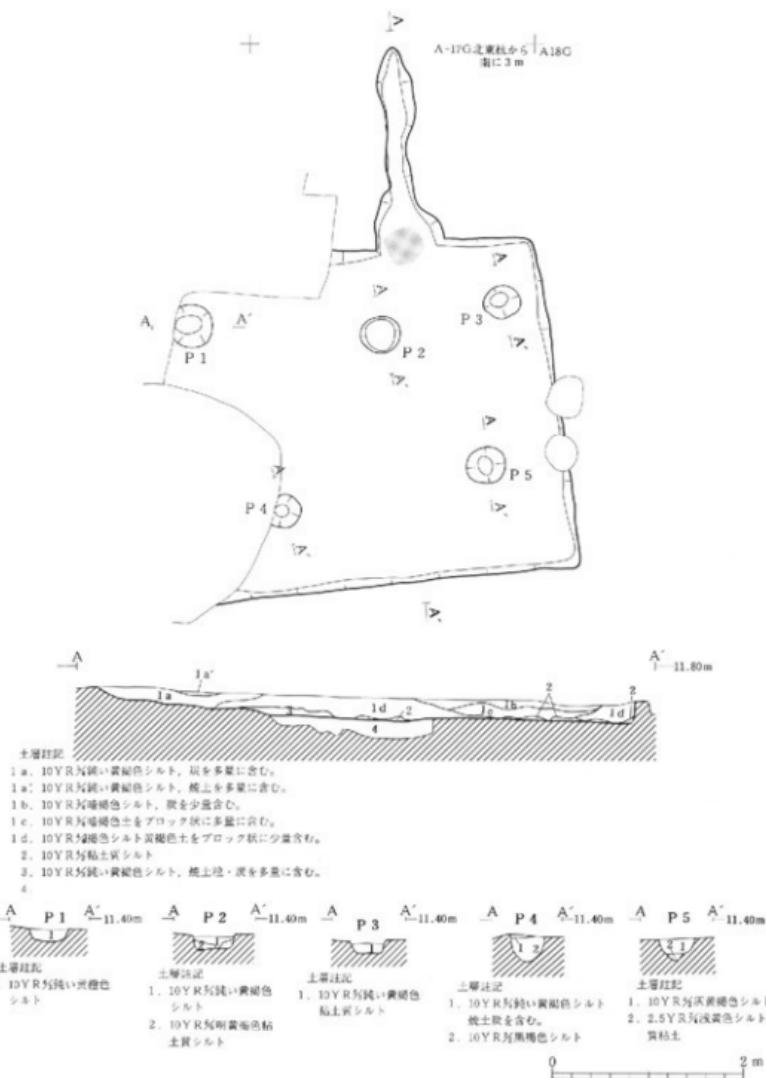
これらの出土遺物のなかで、カマド埋土から出土している4点の土器は住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、E-18(埋土2層出土)は、第33図でも知られるように床面直上から出土しており、この住居に伴う可能性が高い。

S I 19(竪穴住居跡): B-17・18グリットに位置する。調査区南壁際に擾乱が入っている。S D 10と重複関係があり、S I 19は、S D 10より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは1個認められる。カマドは東壁北端部に設けられている。

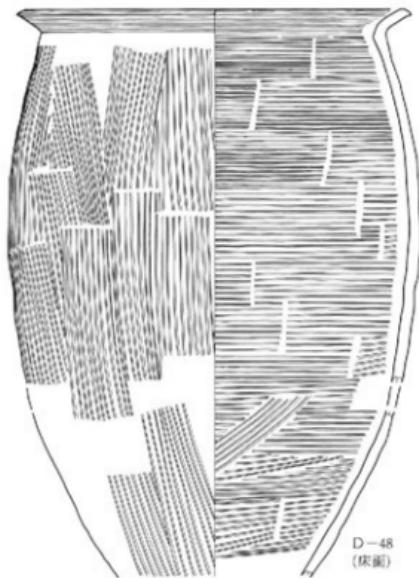
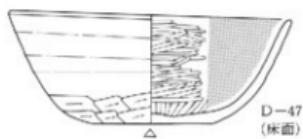
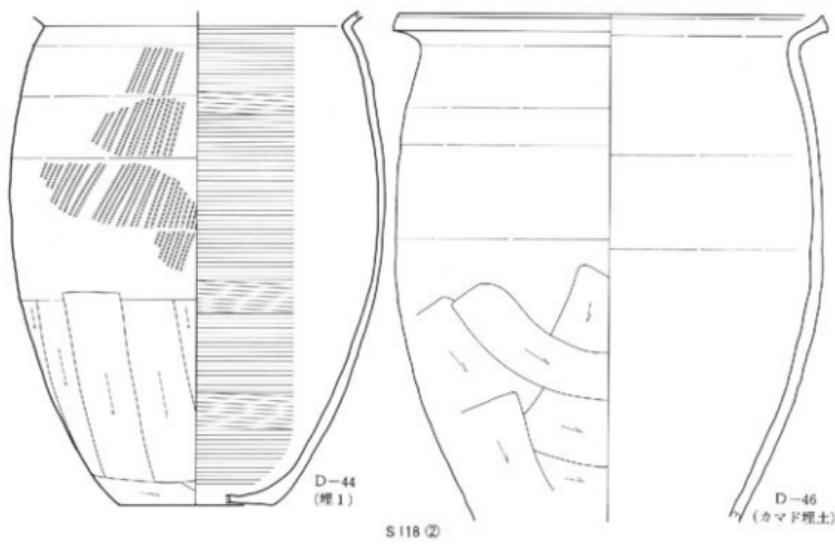
遺物は総数116点出土しており、土崩器破片が多数を占める。遺物の多くは埋土1層から出土している。第34図には床面から出土した2点を示した。

土師器壺D-47は、製作にロクロが使用されており、器形は体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口徑比:0.45、器高口徑比:0.41とやや深い。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリによる調整が行われている。土師器壺D-48は、製作にロクロが使用されていない。口縁部内外面はヨコナデ、体部外側は刷毛目、内面はヘラナデが施されている。最大径は体部上半にある。

S I 20(竪穴住居跡): A-18・19グリットに位置する。住居南邊から東辺南端部にかけて擾乱が入っている。S I 21、S D 8と重複関係があり、S I 19は、S I 21より新しく、S D 8より古い。平面形は南北にやや長い方形を基調としている。床面は新・古2面が検出されている。第36図のセクションにおいて、3層上面を床面とする住居跡をS I 20 a、2層上面を床面とする住居跡をS I 20 bとした。ピットは8個認められ、P 1~4はS I 20 bに伴う。P 5~8はどちらの住居に伴うか明確でない。カマドはS I 20 a・20 bに伴い、東壁南寄りに設けられている。S I 20 bのカマド燃焼部の左右の壁には、それぞれ平瓦が用いられている。また、東壁北寄りにも煙道と思われる遺構があり、その底面のレベルからはS I 20 bに伴うと考えられるが、それを煙道としてカマドが作られた痕跡は認められず、その埋土には炭や焼土は含まれず、主に基本層II層がブロック状に入っており、煙道を作る際に崩落した可能性がある。

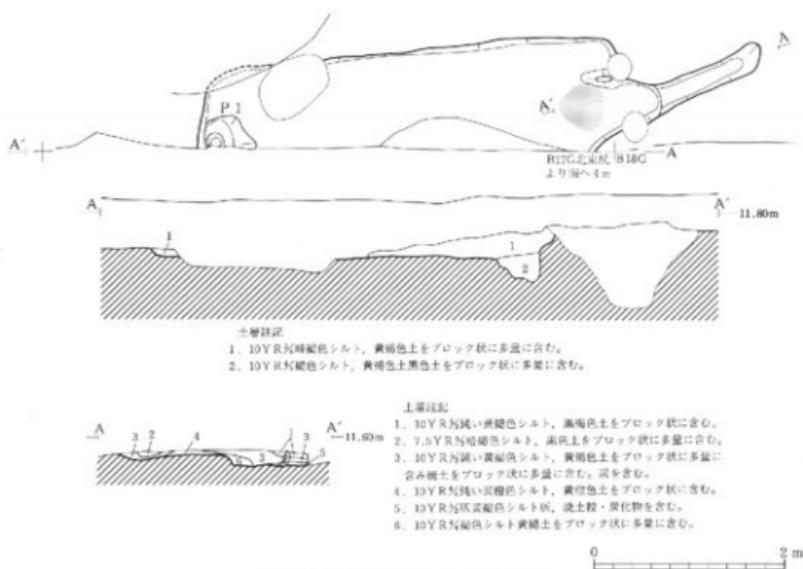


第33図 SI 18平面図・セクション図



第34図 S I 18・19出土遺物実測図



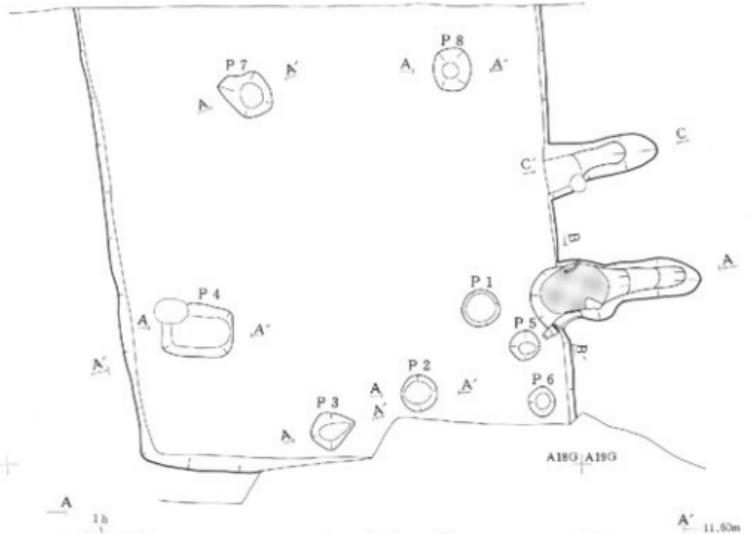


第35図 S I 19平面図・セクション図

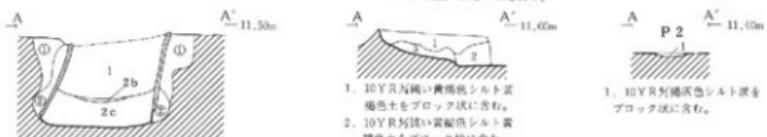
遺物は総数1994点出土しており、土師器破片が多数を占める。それらはS I 20 a・20 bそれぞれに伴う遺物と、S I 20 b埋土出土遺物に分けられる。第37図・第38図には14点を図示した。土師器はすべて製作にロクロを使用している。

S I 20 aでは、カマド燃焼部に近い床面から須恵器環E-20、カマド埋土から須恵器環E-23、埋土2層から土師器壺D-51が出土している。E-20・23は、ともに器形的に、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、内形線は体部と底部の境に屈曲をもっているが、大きさや、底径口径比（E-20:0.48、E-23:0.39）と器高口径比（E-20:0.25、E-23:0.44）は異なっている。須恵器環の大小と理解される。底部は、E-20は手持ちヘラケズリ、E-23は回転糸切り無調整である。

S I 20 bでは、カマド燃焼部底面から須恵器環E-19・21、丸瓦F-3、床面から土師器壺D-52、P 3から土師器環D-50が出土している。D-50の器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がやや外へ開き、内面は体部と底部の境に屈曲をもっている。底径口径比:0.47、器高口径比:0.38。底部は、手持ちヘラケズリが行われている。E-19・21は口径、器高ともほぼ同じで、器高口径比（E-19:0.27、E-21:0.29）も近似する。器形は、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾し、口縁端部がやや外へ開くE-19と、



- 1a. 10YR 5N 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に少量含む。  
 1b. 10YR 5N 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に含む。  
 1c. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に多く含み  
兩端部分では黄褐色土のブロックは特に多い。  
 1d. 10YR 5N 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に多量に含む。  
 1e. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土を多量を含み常に含む。  
 1f. 2.5YR 5G 黄褐色シルト、黒色の砾を多量に含む。ほとんど砂砾。  
 1g. 10YR 4/2 黄褐色灰壤。
- 1h. 10YR 4/2 黄褐色シルト、灰・礫土を含む。  
 1i. 黑色の灰壤。  
 2a. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土を塊じま状に含む。  
 2b. 7.5YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に多量に含む。  
砂粒土を含む。  
 2c. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土をブロック状に多量に含む。  
灰・礫土を多量に含む。  
 2d. 黑色の灰壤、灰を含む。



- ①. 7.5YR 4/2 黄褐色シルト炭漿土粒を含む。  
 ②. 7.5YR 4/2 黄褐色粘土質シルト炭漿土粒を多量に含む。

1. 10YR 4/2 黄褐色シルト 黃褐色土をブロック状に含む。  
 2. 10YR 4/2 黄褐色シルト 黃褐色土をブロック状に含む。  
 3. 10YR 4/2 黄褐色シルト。

1. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土 1. 10YR 4/2 黄褐色シルト、黄褐色土 1. 10YR 4/2 黄褐色シルト、炭を含む 1. 10YR 4/2 黄褐色シルト、炭を含む。  
 を多量にブロック状に含む。  
 2. 黑色灰壤。

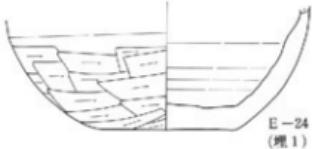
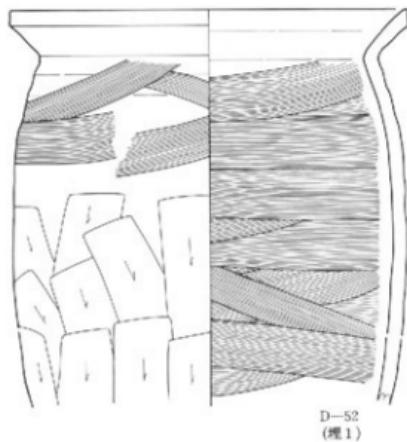
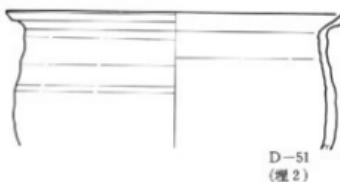
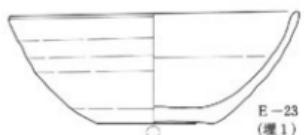
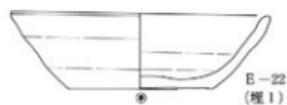
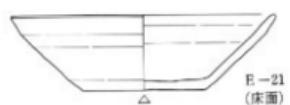
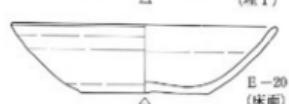
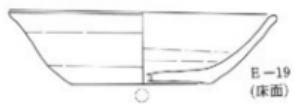
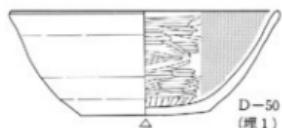
第36図 SI 20平面図・セクション図

直線的に外傾するE-21の違いはみられるが、内面はともに体部と底部の境に扁曲をもっている。底径口径比はE-19:0.52、E-21:0.46。底部は、E-19が回転糸切り無調整、E-21が回転ヘラ切り無調整である。E-19は再火熱を受けており、褐色を呈している。

また、カマド燃焼部の南壁には平瓦G-3、北壁には平瓦G-4が用いられている。ともに凸面を燃焼部側に向け、狭端を上にして据えてある。G-3は完形品、G-4はやや欠損しているが、取上げ時にはすでにいくつから割れていた。2枚の瓦の平面形は、細長い台形状を呈している。色調は、G-3はうすい黄褐色、G-4は灰色～黒色である。G-3の凸面の狭端から約2/3は熱を受けたため、剥落しているところや黒斑がみられる。凹凸両面に残された製作上の痕跡はほぼ共通している。凸面には、縦方向の縄叩き目が全面にみられるが、叩き目のつぶれが観察されるところがある。その場所は、左右両側縁付近に部分的と、広端側縁付近から瓦中央へ向けての部分がある。つぶれているところに明確な木目圧痕はみられない。凹面には、細かい布目が全面にみられるが、布目を消す指ナデ状の痕跡が観察されるところがある。その場所は、狭端付近と、広端側縁付近から瓦中央へ向けての部分である。側縁の調整は、広端左右の角を取りような面取りと、凹凸両面からの側縁の面取りがヘラケズリによって行われている。凹面側では、G-3は左右上下の4辺、G-4は左右の2辺が面取りされており、ヘラケズリの方向はG-3は時計回り、G-4の2辺の方向はG-3と同じである。凸面側と凹面側では、凹面側の面取りのほうが弱い（註1）。

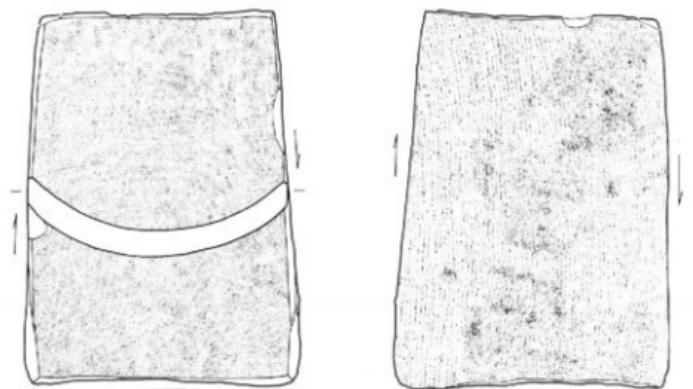
S I 20 b 埋土からは、土師器壺D-49、須恵器壺E-22、須恵器の底部E-24（壺？）砾石K-9が出土している。D-49の器形はE-19と類似しており、底径口径比:0.50、器高口径比:0.30も近似しているが、口径がやや小さい。底部の切り離しは回転糸切りによって行われており、そののち体部下端から底部が手持ちヘラケズリによって調整されている。再火熱を受けており、色調は赤褐色を呈する。E-22の器形はE-20と類似しており、口径もほぼ同じである。底径口径比:0.55、器高口径比:0.29。底部は回転糸切りののち手持ちヘラケズリが行われている。この他、埋土中からは弥生土器4点（B-1・3～5：写真80）、石器5点（K-26～30：写真80）も出土している。

これらの出土遺物と住居との関係については、S I 20 a 廃絶時には床面及びカマド埋土から出土した須恵器壺E-20・23が伴い、S I 20 b 廃絶時にはカマド燃焼部底面及び床面から出土した須恵器壺E-19・21、土師器壺D-52、丸瓦F-3、P 3出土の土師器壺D-50が伴うものと考えられる。また、S I 20 b のカマドに用いられた平瓦G-3・4はこの住居の構築時に伴い、S I 20 a 廃絶時に伴うE-20・23、その可能性のある埋土2層から出土した土師器壺D-51とそれほどの時間差はないと推定される。S I 20 b 埋土から出土したD-49、E-22については、D-50、E-19・21と器形的な類似性などが認められることから、この住居に伴う可

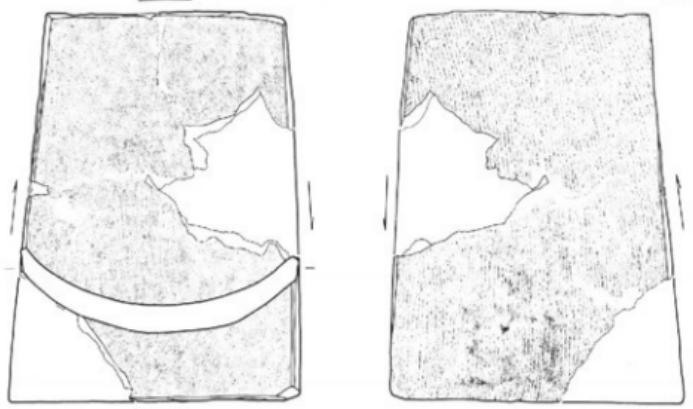


0 10cm

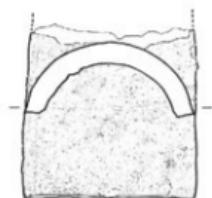
第37図 SI 20出土遺物実測図(1)



G-3  
(カマド南壁)



G-4  
(カマド北壁)



F-3  
(カマド)



0 20cm

第38図 S I 20出土遺物実測図（2）※矢印は側面のケズリの方向を示す。

能性がある。

S I 21(堅穴住居跡) : A・B-17・18 グリットに位置する。S I 18、S I 20、S K 14、S K 15、S K 16、S K 17 と重複関係があり、S I 21は、S K 17より新しく、他のすべての造構より古い。残存状況は良好ではないが、平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは2個認められる。

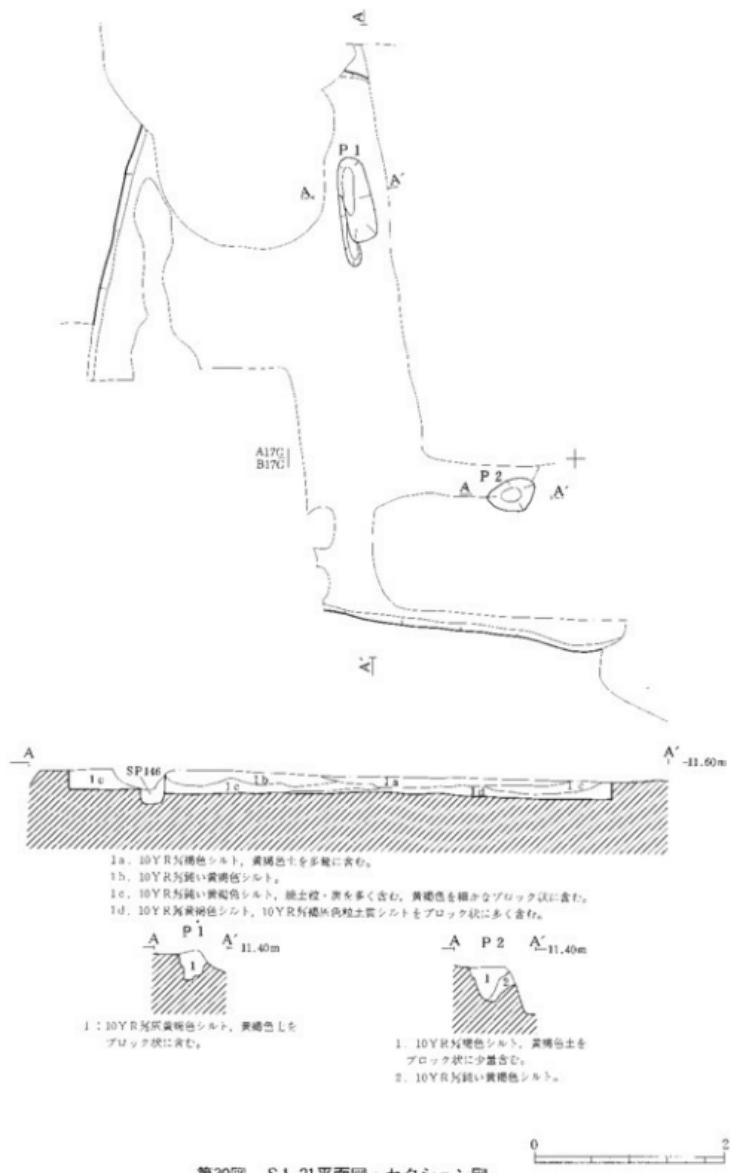
遺物は総数562点出土しており、すべて土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。図化できるものはなく、写真73に埋土1層から出土した土師器C-22を示した。体部破片であり、器形を推定すると、丸みをもって外傾しており、外面には段があり、内面にはそれに対応する段や屈曲はみられない。外面の段より下は手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキが施されている。再火熱を受けているためか、内面は褐色を呈している。

S I 22(堅穴住居跡) : A-19 グリットに位置する。S D 8、S D 13、S D 14 と重複関係があり、S I 22は、S D 13、S D 14より新しく、S D 8より古い。また、重複するピットも多いが、S I 22のほうがそれより古い。平面形は方形を基調としていると推定されるが、南辺は直線的でなく、わずかに弧状を呈する。ピットは8個認められ、P 2とP 4が主柱穴と考えられる。住居北西端には壁際からの張出しがみられ、袖とも考えられること、その近くのP 5には焼土、炭が含まれていることから、カマドは西壁に設けられている可能性もある。床面は9層上面である。

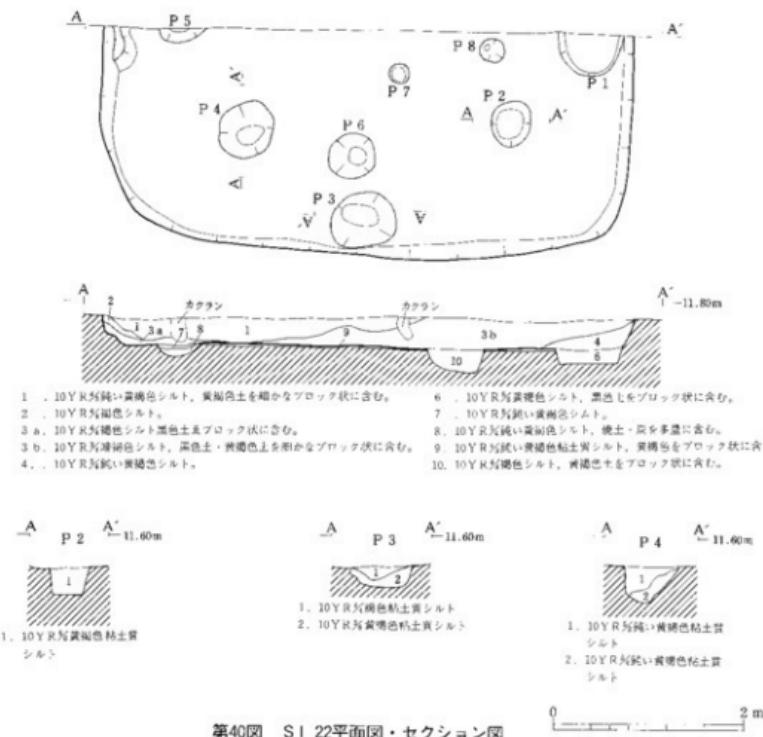
遺物は総数360点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものは認められない。遺物の多くは埋土1~3層から出土している。第・図には5点を図示した。

床面からは土師器壺C-24が出土している。南東コーナー付近からの出土である。器形は、底部は丸底で、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。内外面とも底部と体部の境は明瞭でない。外面体下部は手持ちヘラケズリのうち部分的なヘラミガキ、外面上半部と内面はヘラミガキが施されている。

埋土中からは、土師器の壺C-23、高壺C-25、C-26、臼玉K-10が出土している。このうち、C-23・25・26は床面直上から出土している。その位置は、C-26がC-24の近くから、C-23、25は南西コーナー付近である。C-23は浅い壺で、外面体下部に稜線を形成しており、口縁部は直線的に外傾している。調整はC-24とほぼ同じである。C-25は高壺の脚部である。縦長の透かし孔が3個認められ、その位置から四方透かしであったと考えられる。外面及び透かし孔は手持ちヘラケズリによって調整されている。C-26は残存状態が悪く、調整は不明である。この他、埋土中からは弥生七器2点(B-2・6:写真80)、石器2点(K-25・31:写真80)が出土している。K-25は大型板状安山岩製石器(斎野:1992)であり、第67図に図示した。



第39図 SI 21平面図・セクション図



第40図 SI 22平面図・セクション図

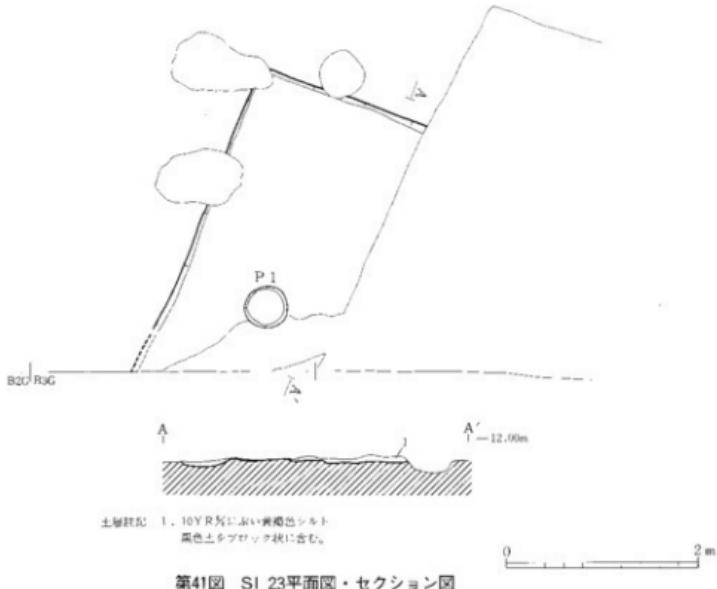
これらの出土遺物のなかで、床面から出土している土師器壺C-24は住居廃絶後に伴うものと考えられる。埋土中出土遺物については、床面直上から出土した土師器C-23・25・26は、破片ということもあるが、この住居に伴う可能性がある。

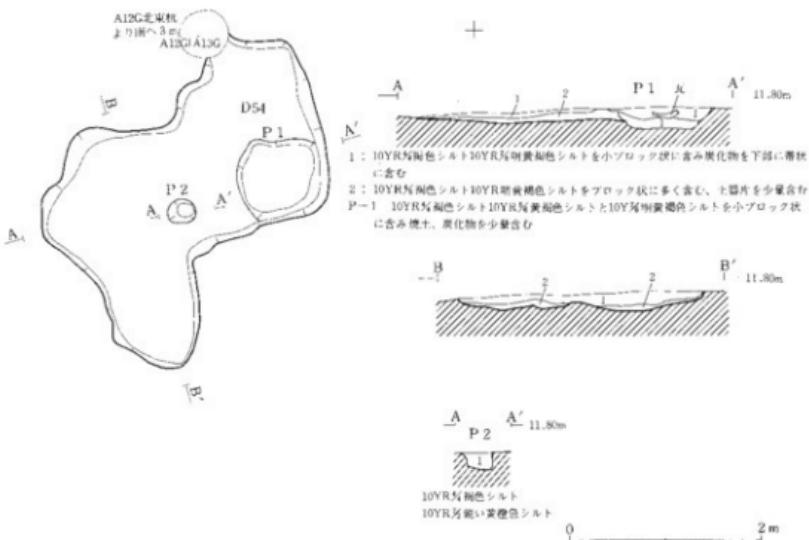
S I 23(堅穴住居跡)：B-3グリットに位置する。天地返しにより床面は残っておらず、掘り方と貼床埋土を検出した。S I 9、S A 3と重複関係があり、S I 23は両者より古い。平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは1個認められた。

遺物は総数38点出土しており、ほとんどは土師器破片である。図化できるものはないが、製作にロクロを使用したものは認められない。

S I 24 (竪穴住居跡) : A・B-12・13 グリットに位置する。天地返しにより床面は残っておらず、掘り方の南東部を検出した。南辺と東辺は直線的であり、住居のプランと符号すると考えられ、平面形は方形を基調としていると推定される。ピットは2個認められ、P 1は貯蔵穴と考えられる。南辺にはカマドの掘り方が検出されている。

遺物は総数228点出土しており、土師器破片が多数を占める。第44図には埋土1層から出土した土師器の壺D-53と甕D-54を図示した。2点とも製作にロクロを使用している。D-53の器形は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾しており、内面は体部と底部の境に屈曲をもたない。底径口径比: 0.44、器高口径比: 0.32。底部は、回転糸切り無調整である。土師器壺底部破片は埋土中から5点出土しており、いずれも底部は回転糸切り無調整である。この他、小玉石(写真73)、軒平瓦(G-5:写真73)、平瓦(G-6:写真73)、赤焼土器破片5点も出土している。G-5は軒平瓦の平瓦部であり、凸面には赤彩が認められる。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の繩叩き目と部分的な叩き目のつぶれ、凹面では細かい布目とそれを消す指ナデ、さらにそれらの上に木目压痕がみられる。凹面側側縁にはヘラケズリによる面取りは行われていない。G-6は狭端付近の平瓦破片である。製作上の痕跡は、凸面では全面に縦方向の繩叩き目とその叩き目のつぶれ、凹面では細かい布目とそれを消す全面的なヘラナデが





第42図 SI 24平面図・セクション図

みられる。凹凸両側縁にはヘラケズリによる面取りが行われている。

S I 25 (堅穴住居跡) : A-16 グリットに位置する。S I 14, S K 18, S K 19 と重複関係があり、S I 25 はいずれの遺構より古い。平面形は正方形である。ピットは1個認められる。

遺物は総数239点出土しており、土師器破片が多数を占める。製作にロクロを使用したものと認められない。床面北東コーナー付近からは土師器C-27~38がまとまって出土しており、第45図にはそれらとともに埋土中より出土した鉄製品N-5・6も図示した。

土師器の器種には、壺(C-27~33)、壺(C-34)、甌(C-36・38)、壺(C-37・35:写真74)、鉢(C-39)があり、完形品も多い。

壺はいずれも丸底で、器形的に4つに分けられる。口縁部と体部の境の外面に段があり、口縁が直立するC-27・29、口縁が内傾するC-28・30、口縁部と体部の境の外面に稜があり、口縁が直立するC-31、口縁が内傾するC-32・33である。C-31の口縁にはわずかに内傾しているところもみられる。C-32の稜線はやや弱い。これら7点の内面は口縁部と体部の境に外面の段・稜に対応して屈曲をもっている。段のある4点は、口径は13.8~16.1cm、器高は4.4~5.5cm(C-28・30は推定値)である。口縁部の高さは1.6~1.7cmで、器高に占める比率は0.31~0.39である。調整は、いずれも口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリである。C-28は内面黒色処理、C-30には内外面に黒色仕上げ処理が行われている。稜

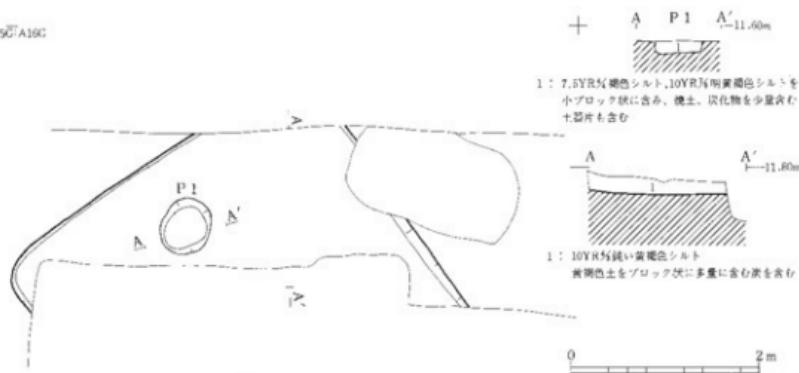
のある3点は、口径は15.0~15.8cm、器高は4.2~5.0cmである。口縁部の高さは1.0~1.4cmで、器高に占める比率は0.24~0.33である。調整は、いずれも口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリであるが、体部には部分的にヘラミガキの施されているものがみられる。C-31・32には内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、C-28・29を除き、他の5点は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。C-29は褐色を呈し、砂粒を含んでいる。器厚も他と比べて厚い。

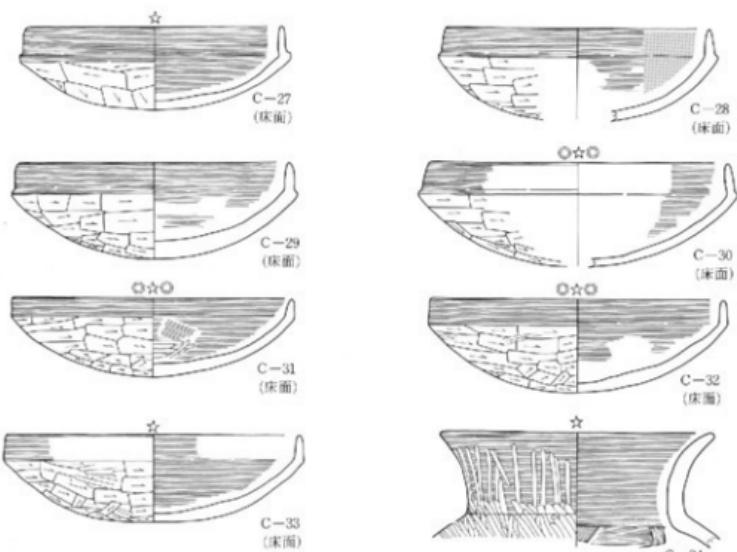
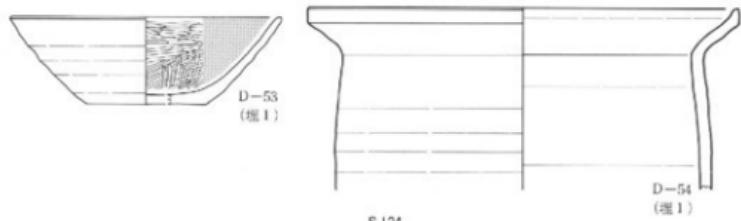
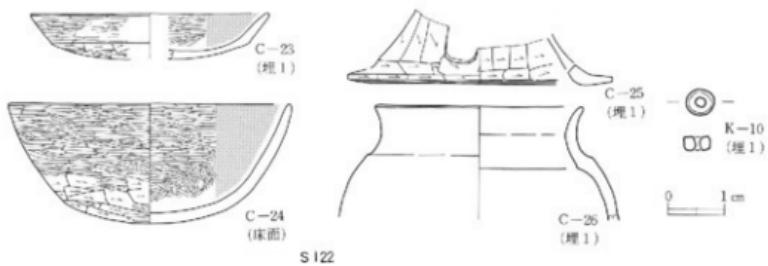
壺C-34は、口縁を下にして出土している。体部縁辺を打ち欠いており、器台として使われていた可能性がある。器形は、頭部は直立気味に短く立ち上がり、口縁は外反する。体部は球形状を呈すると推定される。調整は、口縁部内外面をヨコナデ、のち外面に間隔をあけた縱方向のヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデである。胎土は坏の多くと同じである。

壺は大小2種類が出土している。C-35は口縁部から体上端部の破片である。口縁は外反している。口縁部と体部の境に段はみられない。体部外面はヘラケズリのち部分的なヘラミガキが行われている。C-37は口縁が外反し、体部がやや膨らむ。最大径は口縁にある。胎土は砂粒を多く含んでおり、比較的の脆く、器面の剥落もみられ、調整は明瞭には認められない。体部上半には刷毛目の痕跡が確認されるが、これが最終調整か否かは明確でない。

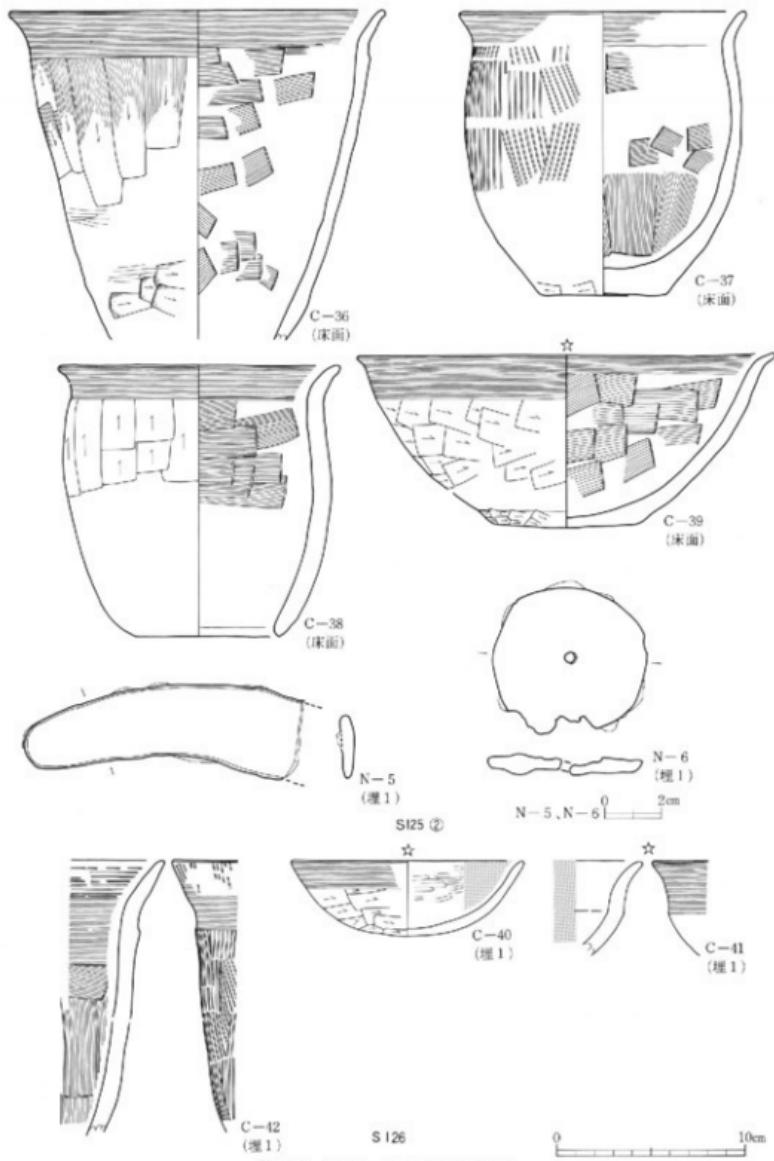
甌も大小2種類が出土している。C-36は底部を欠損しているが、口縁が外反し、体部がやや丸みをもって外傾している。口縁部と体部の境に軽い段はみられる。体部外面はヘラナデのち部分的なヘラミガキが行われている。C-38は口縁が外反し、体部がやや膨らむ。最大径は口縁にある。胎土はC-37とほぼ同じで、調整は明瞭には認められない。体部上半にはヘラナデの痕跡が確認される。

A150' A160'





第44図 SI 22・24・25出土遺物実測図



第45図 SI 25・26出土遺物実測図

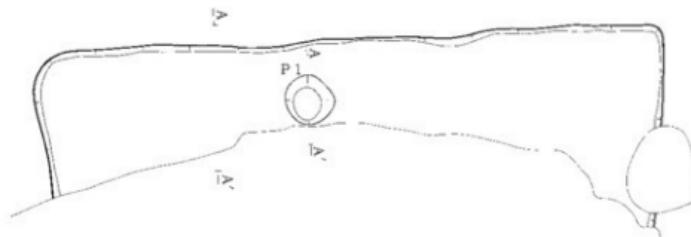
鉢C-39は、平底で、器形は体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾しており、口縁端部が外へ開いている。体部外面はヘラケズリによって調整されている。

埋土中から出土した鉄製品2点については、N-5は鎌で、N-6は鋤とされる。また、出土した土師器破片のなかで、壊破片は19点認められ、それらは前述の壊4種のいずれかであり、胎土も緻密で細かく明橙色を呈し、黒色仕上げ処理の行われているものもある。また、壊の破片では、口縁部と体部の境に段をもつものはなく、体部の調整はヘラケズリあるいはヘラケズリのち部分的なヘラミガキが行われている。

これらの出土遺物のなかで、図示した床面出土の土師器は一括性が高く、住居廃絶時に伴うものと考えられる。また、それらと埋土中出土土師器には、器形、調整などにおいて共通していることが認められ、鉄製品2点についてもこの住居に伴う可能性が高い。

S I 26(竪穴住居跡)：A-13・14グリットに位置する。S I 15、S I 16と重複関係があり、S I 26は両者より古い。平面形は方形を基調としている。ピットは1個認められる。

遺物は総数60点出土しており、そのほとんどは土師器破片である。製作にロクロを使用したものは認められない。第45図には埋土中から出土した3点を図示した。土師器壊C-40は丸底で、器形は体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾している。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。土師器壊C-41の器形は、体部と口縁部の境の外面に稜があり、口縁は外反している。



A13G/A14G



第46図 SI 26平面図・セクション図

内面は外面の段・稜に対応して屈曲をもっている。土師器壺C-42の器形は、口縁部、体部とともに外傾しており、その境は強いヨコナデによって屈曲している。このヨコナデに先行して口縁部、体部とも刷毛目調整が行われている。

### (2) 挖立柱建物跡

S B 1 : A・B-15 グリットに位置する。S I 14、S I 17と重複関係があり、S B 1は両者より新しい。桁行3間以上、梁行3間、建物の方向はN-15°-Eである。P 4・7・9には柱痕跡が認められる。

遺物は総数124点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。図示できるものはないが、写真74にはP 8から出土した須恵器壺底部破片を示した。底部は回転ヘラ切り無調整である。

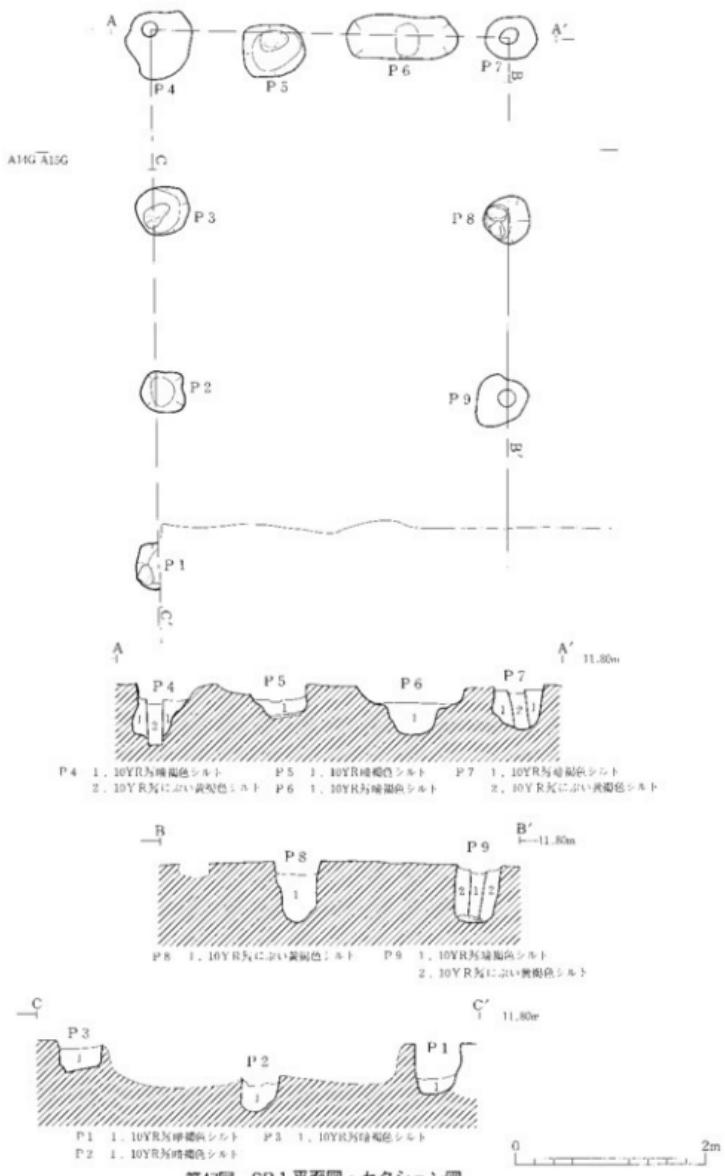
### (3) 区画施設

S A 1 : 調査区中央部B-8~13グリットに位置する。S D 1・2・4・5・6と重複関係があり、S A 1は、S D 4・5・6より新しく、S D 1・2より古い。また、S A 2と接続している。真東西方向に直線的に延びている。埋土は3層に分かれており、2層中で径15cmほどの柱痕跡を4基検出した。底面近くの壁はほぼ直線的に外傾しているが、上部では開きが大きい。1層は柱の抜取りに伴う埋土と理解される。S A 1の両側には間隔をあけていくつかのビットがみられる。なかには柱の抜き取りによって切られているものもあり、S A 1との関連性が推定される。

遺物は総数928点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。土師器には内面黒色処理の施された壺破片も多いが、図示できるものはない。その他、3層中より赤焼土器壺体部破片1点、須恵器壺底部破片1点(回転糸切り無調整)、1層中よりF-4丸瓦(写真74)とN-7楕円形溝(写真74)が出土している。

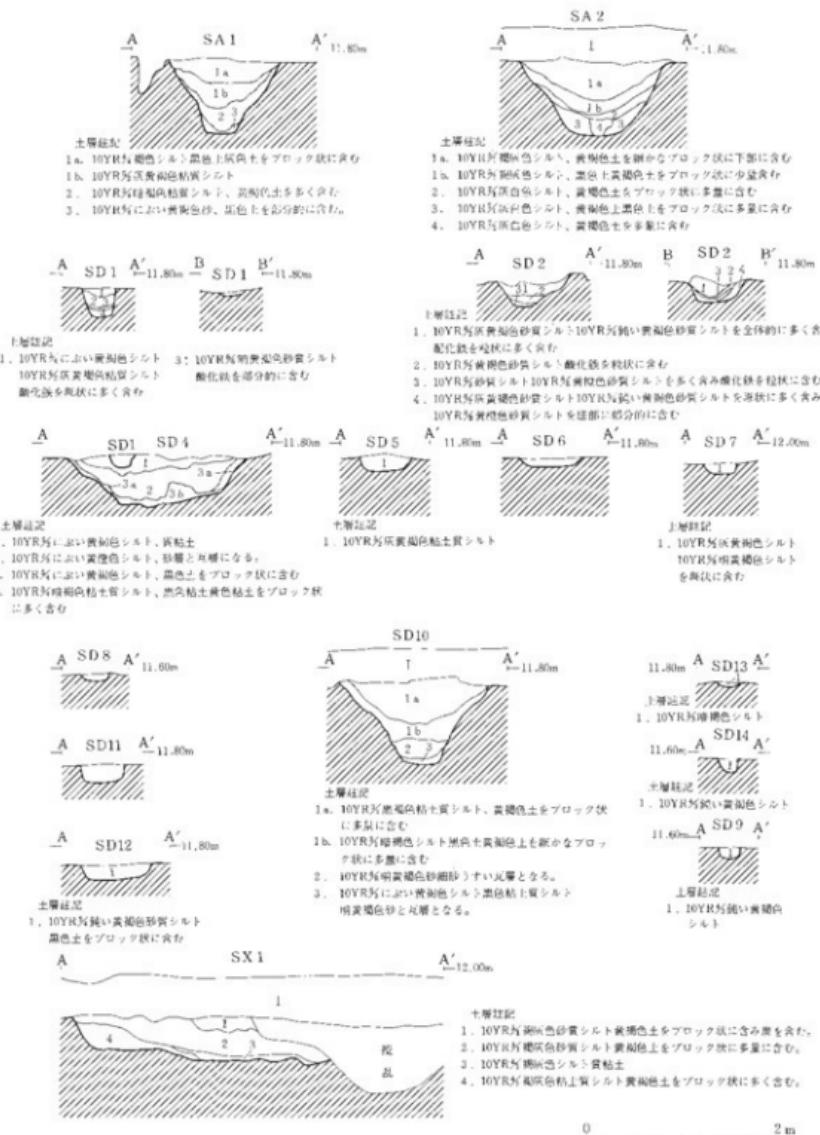
S A 2 : 調査区中央部A・B-13グリットに位置する。S I 16と重複関係があり、S A 2は、S I 16より新しい。また、S A 1と接続している。N-8°-Eの方向に直線的に延びている。埋土は3層に分かれており、3層上面で径10~25cmほどの柱痕跡を14基検出した。柱痕跡は掘り方底面中央にジグザグに配置されている傾向がみられる。1・2層は柱の抜取りに伴う埋土と理解される。また、S A 2の主に東側には間隔をあけていくつかのビットがみられる。なかには柱の抜き取りによって切られているものもあり、S A 1との関連性が推定される。

遺物は総数678点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。土師器には内面黒色処理の施された壺破片も多いが、図示できるものはない。写真74・75には2層から出土したD-55土師器壺底部破片(回転糸切り無調整)、E-26~28須恵器壺破片(E-27:底部手持ちヘラケズリ、E-28:底部回転糸切り無調整)、F-4丸瓦、G-7平瓦



第47図 SB 1 平面図・セクション図

第48図 区画施設・溝跡平面図



第49図 区画施設・溝跡セクション図

を示した。その他、1層中より赤焼土器坏体部破片が数点出土している。また、第67図に示すようにP-13土玉も出土している。

S A 3 : 調査区西部B-1~3グリットに位置する。S I 12、S I 23と重複関係があり、S A 3は、両者より新しい。N-79°-Wの方向に直線的に延びている。P 1~P 11が列をなす1本柱列であり、P 4・6・8・10にそれぞれ対応する南側にP 12・13・14・15が配置されている。

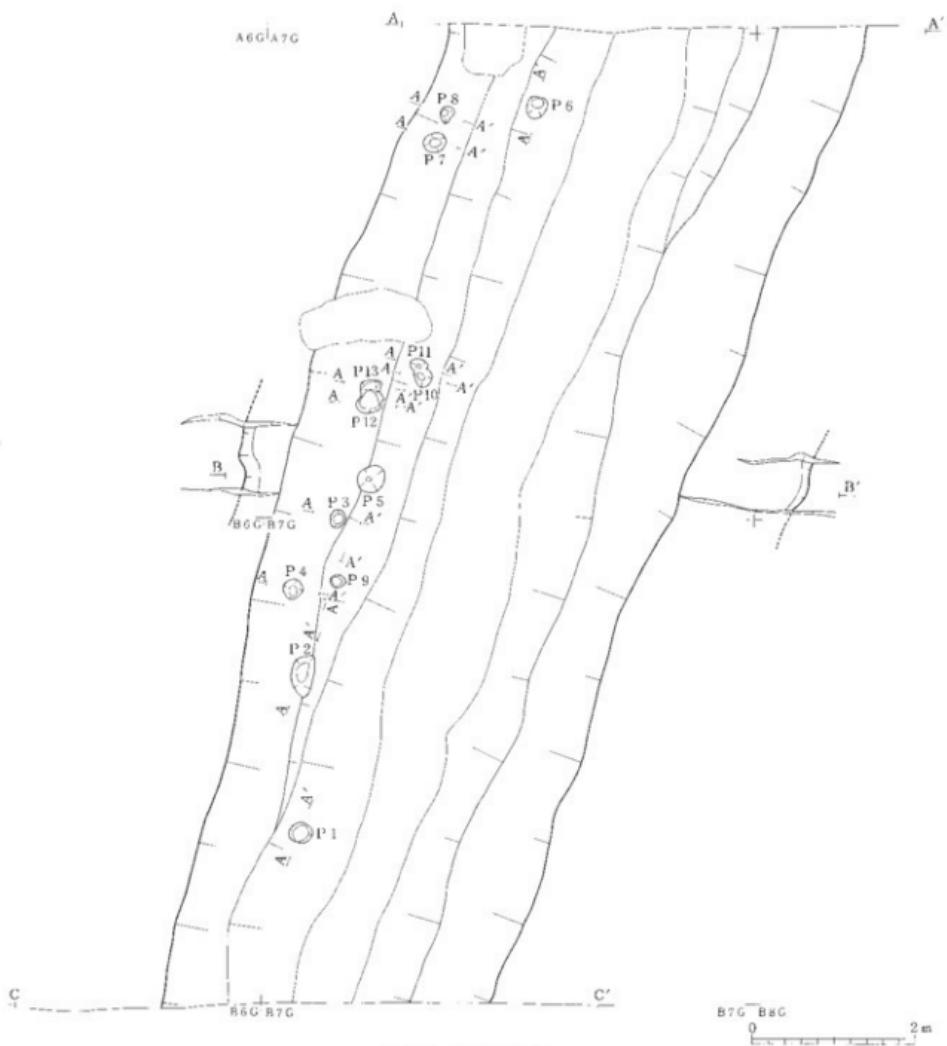
遺物は総数54点出土している。すべて土師器破片である。図示できるものはない。柱穴列：B-4・5グリットに位置する。P 1~P 5が列をなしている。両端の柱間が短いことから、建物跡の桁にあたる可能性もある。

#### (4) 溝跡

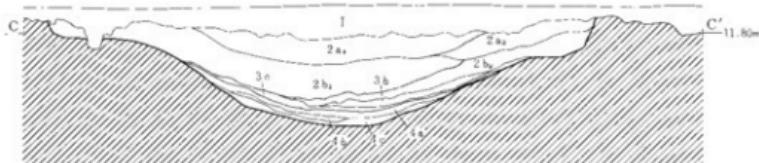
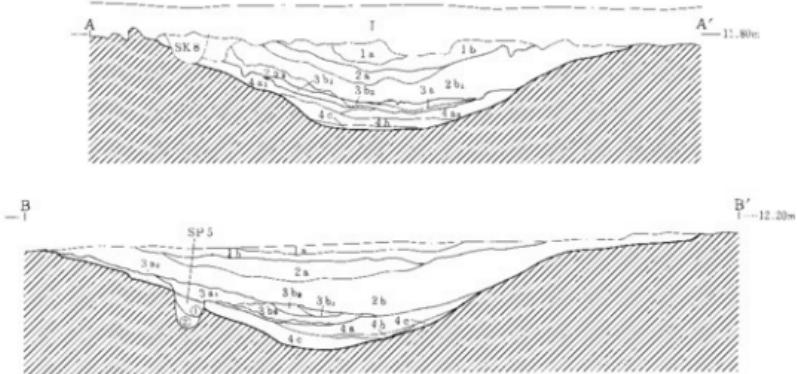
S D 1 : A・B-10グリットに位置する。S A 1、S D 4と重複関係があり、S D 1は、両者より新しい。遺物は、総数13点出土している。

S D 2 : A・B-10~12グリットに位置する。S A 1、S D 5、S D 6、S K 3と重複関係があり、S D 2は、S A 1、S D 5、S D 6より新しい。S K 3との関係は不明である。遺物は、総数209点出土している。H-1・2(写真79)は焼し焼成された道具瓦である。H-2は熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。

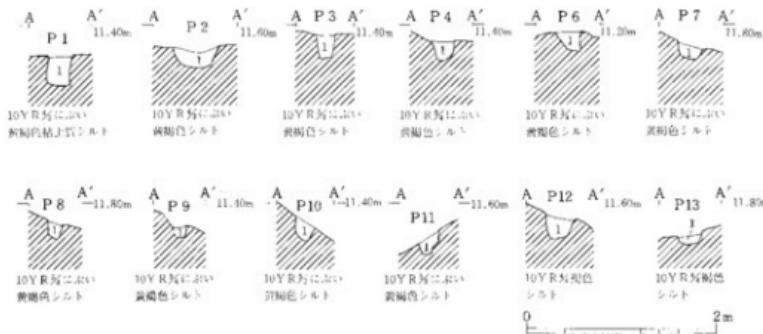
S D 3 : A・B-7グリットに位置する。S K 5、S K 8と重複関係があり、S D 3は、両者より古い。N-30°-Eの方向に直線的に延びている。検出長は14.2mである。幅は、検出レベルの高い中央部で測ると6.9mである。断面形については、第51図のB-B'及びC-C'の断面図でみると、幅70~100cmの底面から緩やかに立ち上がり、平坦面を東西両側に形成したのち、やや急角度に立ち上がっている。平坦面の幅や東西で異なり、西側が30~50cmなのに対して東側は70~130cmと広い。西側の平坦面と底面の間にピット13個が埋在して4層上面で検出されている。直線的に等間隔に並ぶ傾向はみられない。大きさにもそれぞれ違いがあり、径15~50cm、深さは15~40cmである。柱痕跡はいずれのピットでも認められなかったが、何らかの施設に関わる可能性が考えられる。埋土は4層に大別される。1層は主にシルトの黒色土で、炭化物が多量に含まれている。主に溝の北半部に分布する。2層上面の埋んだところでは下部に粘土層が薄く何枚か認められるところがある。2層堆積直後の自然堆積と考えられ、これは1層と2層の土質の違いからも1層堆積時との間にやや時間差のあることを示しているが、黒色シルトには人為的な堆積状況が認められる。2層は基本層II層に類似する黄褐色のシルトで、小さな炭を含んでいる。全域に分布し、層厚は厚く、細別層に層相の違いはあるまいことなどから、人為的に埋められたものと考えられる。3層はシルト~シルト質粘土で、上部には黒色土をブロック状に含んでいる。溝の中央から西側に分布する。4層は基本層



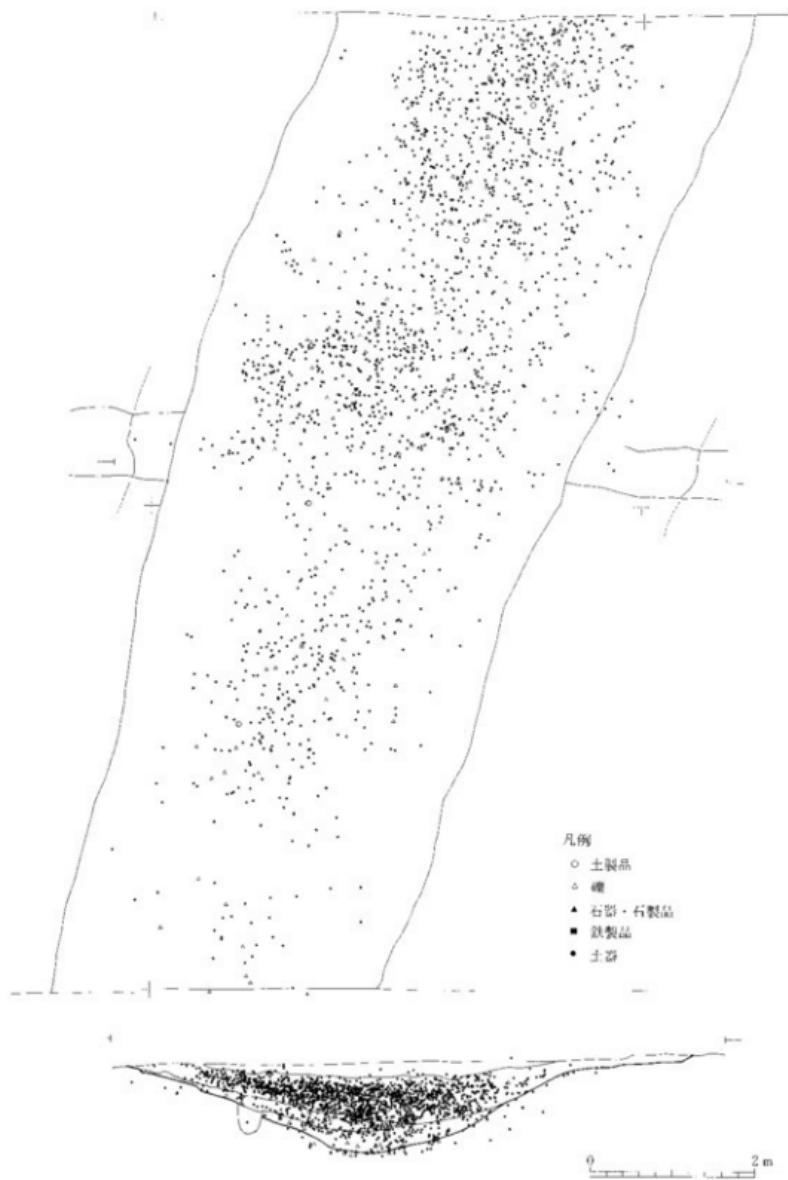
第50図 SD 3 平面図



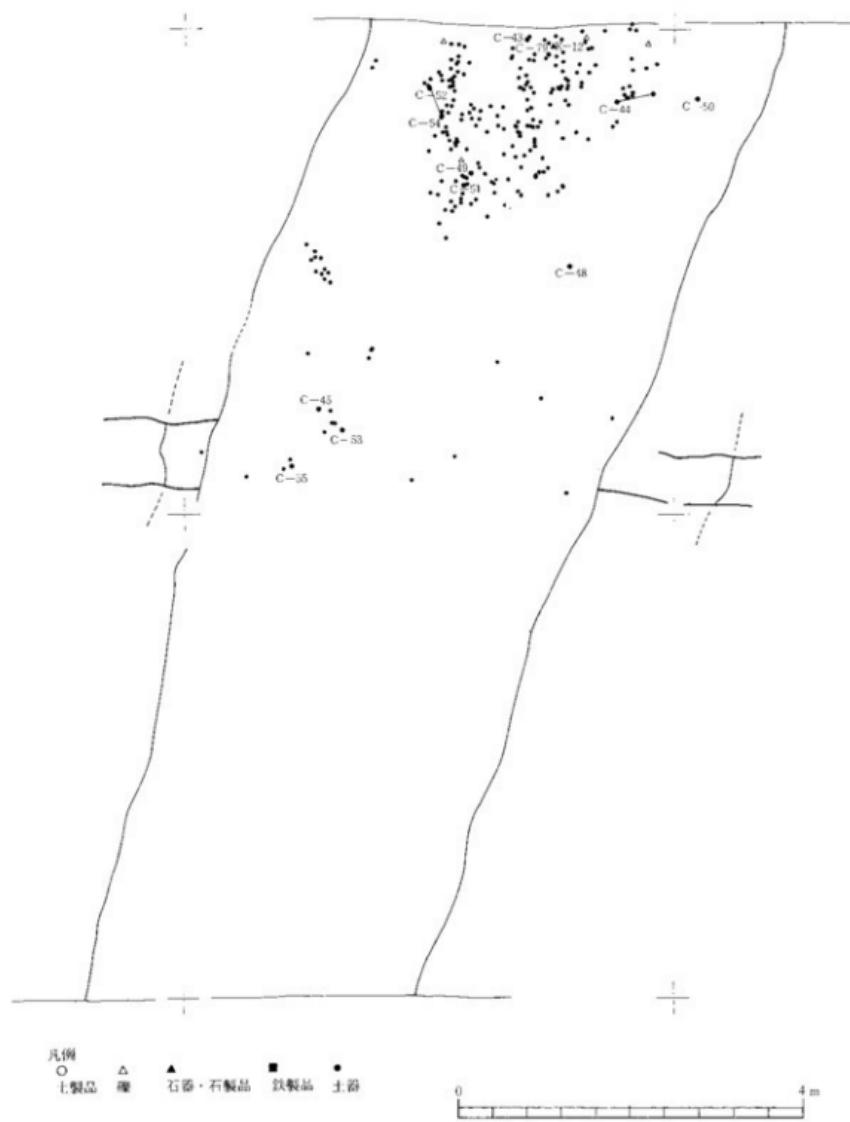
1a層	10YR 5/6 黄褐色シルト層を含む	3a層	20YR 5/6 黄褐色シルト質粘土
1b層	10YR 5/6 黄褐色シルト、炭を多量に含む	3b <sub>1</sub> 層	10YYR 5/6 黄褐色シルト質粘土、炭を多量に含む
2a層	10YR 5/6 黄褐色シルト	3b <sub>2</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト質粘土、砂粒の混入が見られる
2a <sub>1</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト	3b <sub>3</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト質粘土
2a <sub>2</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト	3c層	10YR 5/6 黄褐色粘土
2b層	10YR 5/6 黄褐色シルト	4a層	10YR 5/6 黄褐色シルト
2b <sub>1</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト、炭を含む	4a <sub>1</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色沙質シルト、炭を少量含む
2b <sub>2</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト、炭を少量含む	4a <sub>2</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色沙質シルト、炭を少量含む
3a層	10YR 5/6 黄褐色シルト層を多量にブロック状に含む	4b層	10YR 5/6 成塊色粘土質シルト、炭を少量含む
3a <sub>1</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト、黑色土を多量にブロック状に含む	4c層	10YR 5/6 黄褐色シルト、炭を少額含む
3a <sub>2</sub> 層	10YR 5/6 黄褐色シルト、黑色土を少量ブロック状に含む		



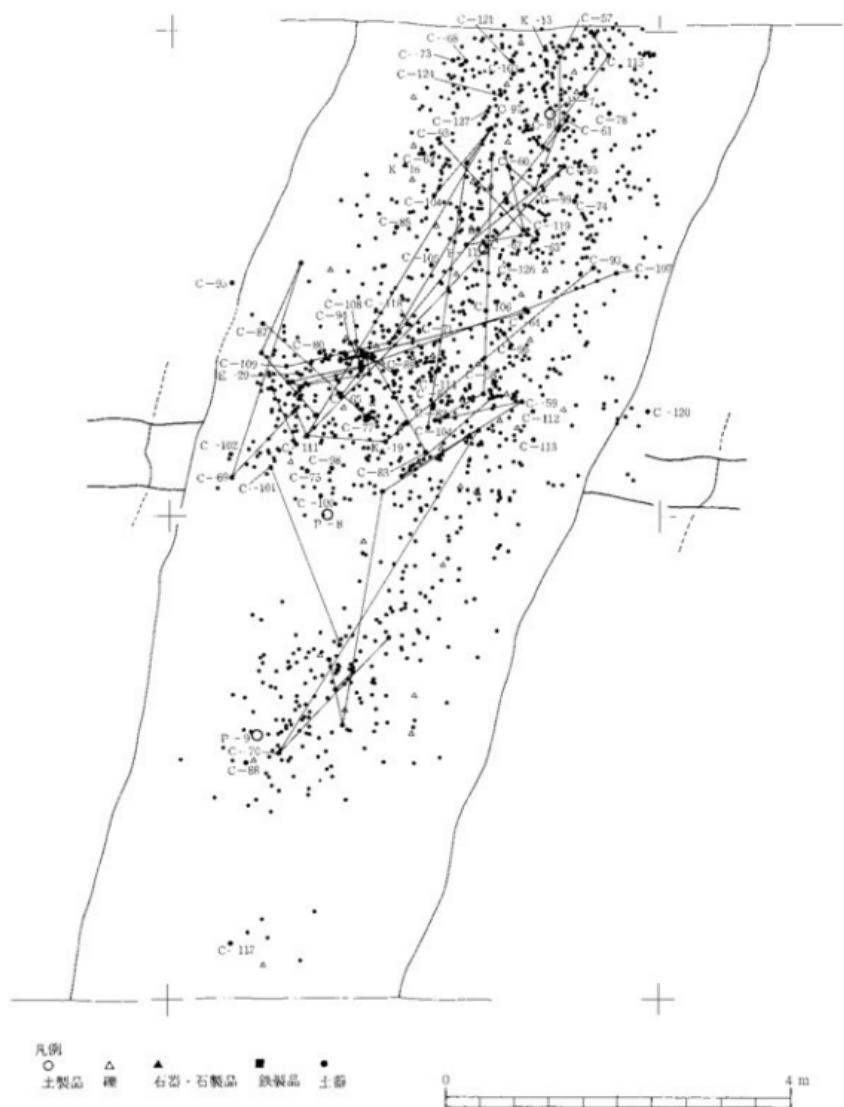
第51図 SD 3 セクション図



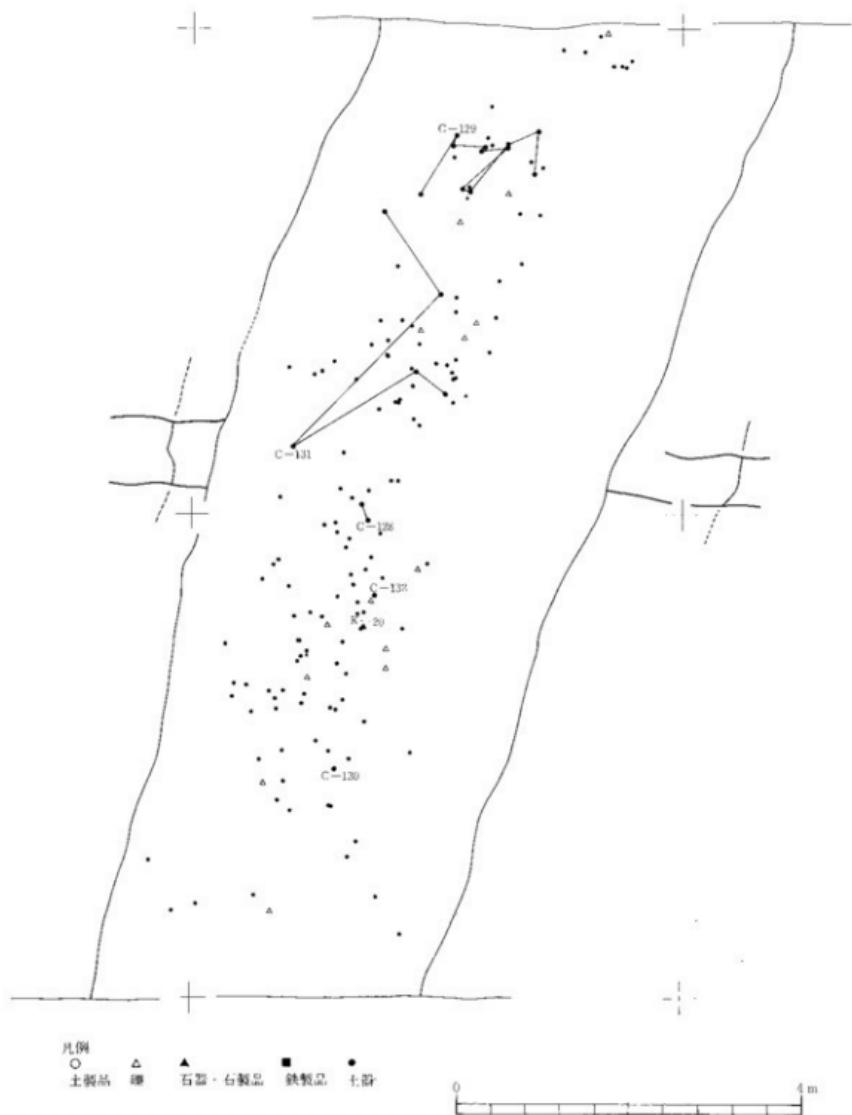
第52図 SD 3 出土遺物平面・垂直分布図



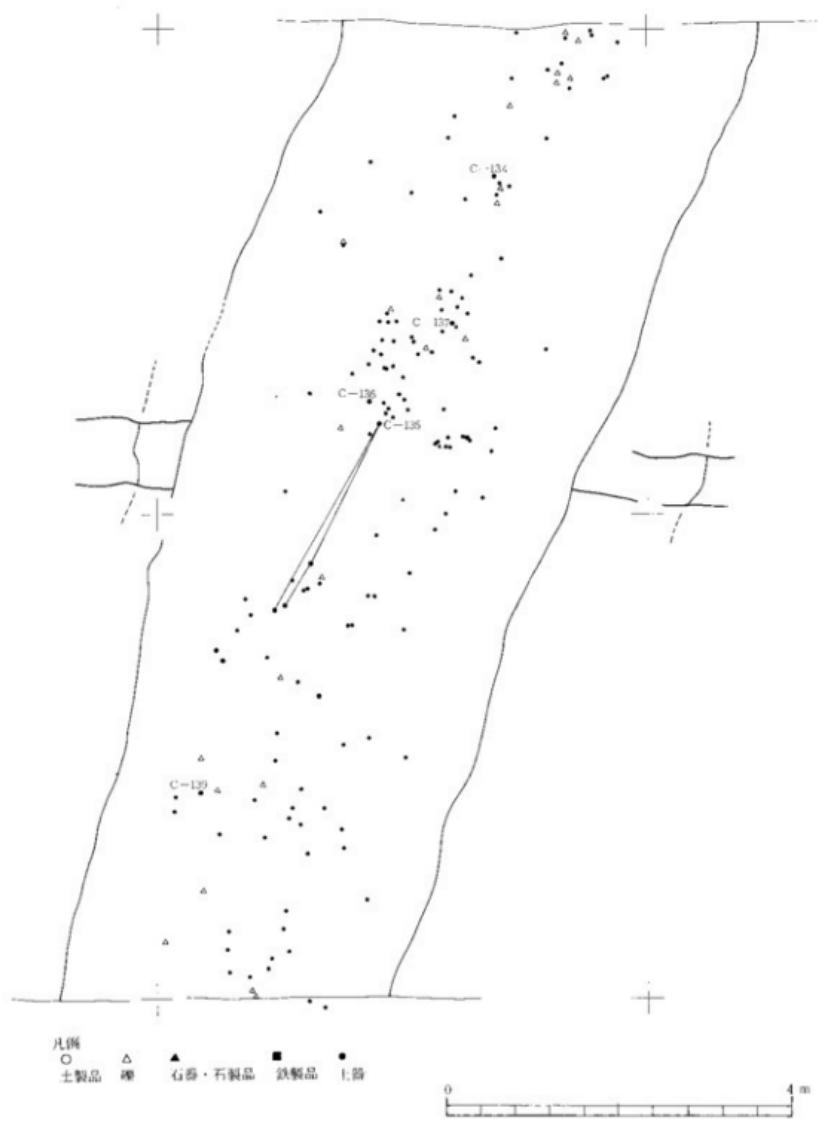
第53図 SD 3 1層出土遺物平面分布図



第54図 SD 3 2層出土遺物平面分布図



第55図 SD 3 3層出土遺物平面分布図



第56図 SD 3 4層出土遺物平面分布図

II層に類似するが、細別層の層相は砂質シルト～シルト質粘土とそれぞれ異なる。3層と同様、溝の中央から西側に分布する。

遺物は、総数5242点出土している。そのうち、小さな土器破片などを除いた1719点の遺物について、地点とレベルを記録して取り上げた（接合したものを1点として算出、接合関係はラインで表示）。ここでは、主にこれらを対象として出土状況をみていきたい。第52図には1719点の平面垂直分布を、第53～56図には1～4各層ごとの平面分布を示した。第52図の平面分布図では、全域に遺物の分布が広がっているが、各層ごとにみると、出土点数や分布がそれぞれ異なっている。また、層位を越えた接合関係はほとんど認められない。1層：227点は溝の北半部に分布しており、北端部では密集した出土状況を示している。2層：1204点は南端部を除き、全域に分布している。溝の中央よりやや西寄りに集中しているところがみられる。接合関係をもつ土器も多く、接合距離が4mを越えるものもある。3層：141点は全域にまばらに分布するが、やや西寄っている。4層：147点は全域にまばらに分布する。これらの出土状況の違いは、埋土の堆積状況とも関連していると考えられる。とくに、2層では、完形に近い土器がつぶれて出土しているものもあり、復元された土器の比率も他層に比べて高いことから、遺物の多くは溝が2層で埋まる時に伴うと考えられる。また、2・3層の遺物が全体としては溝の中央よりやや西寄りに分布の中心をもっていること、密集して出土しているところがいずれも西寄りの位置にあることは、ピットが西壁にあることとも合わせ、居住域が主に溝の西側にあったことを推測させる。

1719点の遺物の内容については、第1表に種類別、層位別に数量を示した。遺物の種類と数量は、弥生上器2点、土師器1569点、須恵器5点、金属製品2点、石器・石製品24点、土製品他23点、骨片1点、漆93点である。大半を占める土師器には、製作にロクロを使用したものは認められない。

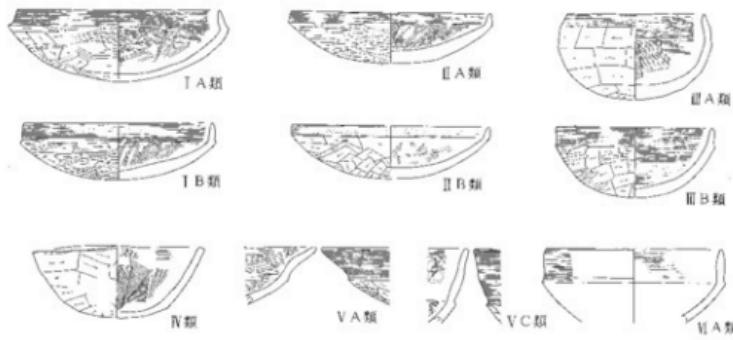
土師器の器種には、壺、亞、甕、瓶、鉢、片口土器、高壺、蓋が認められる。これらについて、以下のように分類を行った。

壺は365点出土しており、49点を図示した。第57図のように器形からいくつかに分類される。また、調整・胎土などによっても類別される。各類の層位ごとの数量は第2表に示した。

**壺I類：**口縁部と体部の境に段のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は1/4～2/5。74点認められ、16点を図示した。調整は、口縁部内外面と体部内面がヨコナデ、体部外側がヘラケズリで、そのうち、多くは体部内外面か片面にヘラミガキが行われている。ヘラミガキの程度には個体差がある。内面に認められるヘラミガキには、単線の放射状、花弁状の複線による放射状、非放射状の3種がある。このうち、C-58は内面にヘラミガキのうち黒色処理が施されており、他と異なる。また、内外面あるいは片面

第1表 SD3 出土造物数量表

	1層	2層	3層	4層	計	
陶生土器	0	2	0	0	2	
土器	坏	62	283	15	365	1569
	壺	3	10	11	1	
	甕	98	485	72	86	
	瓶	0	6	0	1	
	钵	1	13	0	9	
	片口土器	0	1	0	0	
	高环	4	17	1	8	
	灰	2	1	0	0	
	口唇部破片	1	14	2	1	
	体部破片	42	223	17	20	
石器・石製品	底部破片	4	48	4	7	24
	須恵器	0	5	0	0	
	金属製品	0	1	1	0	
	磨石	3	5	3	3	
	砾石	0	2	0	0	
	凹石	0	1	0	0	
	砥石	0	1	0	0	
	剥片石器	0	1	0	1	
	石製品	1	2	1	0	
	土製品	1	12	2	0	
土製品他	筒形土器	0	0	2	0	23
	手捏土器	1	5	0	6	
	骨片	0	0	0	1	
磚	4	66	10	13	93	
計	227	1264	141	147	1719	



第57図 SD 3 出土土師器壊の器形分類

0 10cm

に黒色仕上げ処理の行われているものが7点みられる。胎土は、緻密で細かく明褐色を呈する。砂粒をほとんど含まない。

A：口縁が内傾するもの—50点あり、そのうちC-43・44・62・64～66・68・69・128の9点を図示した。内面は外面の段に対応して屈曲をもっている。口径は13.5～15.4cm、器高は3.5～5.4cmである。口縁部の高さは1.1～1.5cmで、器高に占める比率は0.22～0.40である。

B：口縁が直立するもの—24点あり、そのうちC-57～61・63・67の7点を図示した。内面は外面の段に対応して屈曲をもっている。口径は12.6～14.8cm、器高は4.1～5.2cmである。口縁部の高さは1.4～1.7cmで、器高に占める比率は0.28～0.34である。

环II類：口縁部と体部の境に稜のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は1/4～2/5。80点認められ、12点を図示した。調査は环I類とほぼ同じであるが、内面にヘラミガキのち黒色処理が施されているものはない。内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理の行われているものが9点みられる。胎土は、环I類と同じである。

A：口縁が内傾するもの—26点あり、C-45・72・73・75・76・77・79の7点を図示した。内面は外面の稜に対応して屈曲をもつが、屈曲の弱いものもある。口径は13.8～19.6cm、器高は3.6～4.5cmである。最も口径の大きいC-79の器高は不明であるが、残存高は5.8cmである。口縁部の高さは0.8～1.05cmで、器高に占める比率は0.20～0.22である。

B：口縁が直立するもの—54点あり、C-70・71・74・78・127の5点を図示した。内面は外面の稜に対応して屈曲をもつが、屈曲の弱いものもある。口径は13.0～17.6cm、器高は3.7～5.0cmである。口縁部の高さは0.8～1.2cmで、器高に占める比率は

0.20～0.27である。

坏III類：口縁部と体部の境に稜があり、体部～底部が半球状をなすもの。口径に対する器高の比率は1/2前後。3点認められる。

A：口縁が内傾するもの—C-81と82の2点である。大きさはほぼ同じで、C-81は口径9.8cm、器高6.1cmである。最大径の位置は、C-81が体部にあるのに、C-82は体部と口縁部の境にある。また、調整ではヘラミガキの施されないC-81と、施されるC-82の違いがある。これは、胎土の違いと関係している可能性があり、粗粒で砂粒を多く含むC-81と、緻密で細かく砂粒をほとんど含まないC-82では、製作工程も異なるものとなつたのであろう。

B：口縁が直立するもの—C-47の1点である。口径11.2cm、器高5.0cmである。体部外面にはヘラケズリのうち部分的なヘラミガキが施されている。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

坏IV類：丸底で、体部から口縁部にかけて丸みをもってそのまま立ち上がるもの。外面の調整は、ヘラケズリによって行われており、口縁端部も面取りがなされている。5点認められ、C-92・93の2点を図示した。C-92は、口径12.1cm、器高5.1cmである。C-93は、内面に黒色処理が行われている。

坏V類：口縁部と体部の境に段あるいは稜をもち、口縁が外傾するもの。23点認められ、11点図示した。器形復元のできるものはないが、底部は丸底と考えられる。

A：口縁が外反するもの—C-49・86・87・89・90・134の6点である。調整は、外面は不明のC-134を除きすべてヨコナデで、内面ヨコナデのち黒色仕上げ処理の行われているC-49、内面ヘラミガキのち黒色処理のおこなわれているC-86・87・90・134内面ヨコナデのち赤彩されているC-89に分けられる。胎土は、砂粒を含むC-134を除き、すべて緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていない。

B：口縁が直線的なもの—C-85・88・91の3点である。調整は、外面はすべてヨコナデで、内面ヘラミガキのち黒色処理のおこなわれているC-88、内面ヨコナデのち内外面に赤彩されているC-91に分けられる。C-85は内面調整が不明である。胎土は、砂粒を含むC-85・88と、緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていないC-91に分けられる。

C：口縁が内湾するもの—C-135・140の2点である。調整は、外面はどちらもヨコナデで、内面ヘラミガキのち内外面に黒色仕上げ処理の行われているC-140、内面ヘラミガキのち黒色処理の行われているC-135に分けられる。胎土は、どちらも緻密で細かく砂粒はほとんど含まれていない。

坏VI類：その他、器形のわかる坏。5点認められ、それぞれ異なる。

A：口縁部と体部の境に段があり、丸底と考えられ、口径に対する器高の比率は約1/2と推定される。口縁は直立する。C-83の1点である。推定口径は12.6cm。高坏坏部の可能性がある。胎土は緻密で細かい。

B：口縁部と体部の境にゆるやかな稜のあるもの。丸底と考えられ、口径に対する器高の比率は約2/5と推定される。口縁は内傾するが、端部は外へ開く。C-46の1点である。推定口径は13.2cm。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。

C：口縁部と体部の境にゆるやかな稜のあるもの。丸底で、口径に対する器高の比率は約1/3。口縁は直立する。C-80の1点である。口径14.8cm、器高4.9cm、口縁部の高さは1.7cmである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かく明橙色を呈する。

D：口縁部と体部の境に稜があり、口縁が短く外傾するもの。C-84の1点である。推定口径16.0cm、口縁部の高さは1.1cmである。内面はヘラミガキのち黒色仕上げ処理が行われている。胎土は緻密で細かい。砂粒を含む。

E：大型坏。口縁が強く外反し、口縁部と体部の境にわずかな稜をもつもの。C-48の1点である。丸底と考えられる。推定口径21.8cm。

坏VII類：坏I類・II類の体部～底部破片。胎土、色調、調整の特徴によって識別した。111点認められ、黒色仕上げ処理の行われているものも多い。

坏VIII類：その他の坏小破片。64点認められる。このなかには、赤褐色を呈し、砂粒を多く含むやや厚手の坏破片が7点識別されている。

第2表 SD 3出土の坏の分類と数量

	1層	2層	3層	4層	計
I A類	11	36	3	0	50
I B類	6	17	1	0	24
II A類	4	21	0	1	26
II B類	14	36	4	0	54
III A類	0	2	0	0	2
III B類	1	0	0	9	1
IV類	0	5	0	0	5
V類	2	18	0	3	23
VI類	2	3	0	0	5
VII類	10	99	2	0	111
VIII類	10	46	5	1	64
計	62	283	15	5	365

壺は25点認められ、7点を図示した。器形と大きさ、口縁の形態などからいくつに分類される。

壺I類：体部が球形を呈し、大型のもの。

A：口縁部が外反し、端部が丸みをもつもの。C-105の1点である。1個体が潰れた状態で出土している。外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部はヘラナデのうち下部にヘラミガキが行われている。口径19.7cm、器高33.6cm、体部径31.5cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。

B：口縁部が外反し、端部外面に平坦面をもつもの。C-129の1点である。外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部は刷毛目の中ヘラミガキが行われている。口径23.6cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。

壺II類：体部が球形を呈し、小型のもの。

A：口縁部が外反し、端部が丸みをもつもの。C-102の1点である。口縁部から体部上端が残存している。口縁部の調整は、内外面ヨコナデである。口径は13.6cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。また、口縁部資料であるC-101については、器形も類似し、口径も推定13.6cmで、この類に属する可能性もある。調整はC-102とは異なり内外面にヘラミガキが行われている。胎土は緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

B：体部資料である。C-104の1点である。調整は、外面ヘラケズリの主に上半部にヘラミガキ、内面ヘラナデで、外面には黒色仕上げ処理が行われている。体部高14.6cm、体部径16.7cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

壺III類：体部が縦に長い楕円形を呈し、小型のもの。

A：口縁部が直線的に外傾し、端部外面に段をもち直立するもの。C-103の1点である。口縁部から体部上端が残存している。内外面ともヘラミガキによる調整が行われている。内外面とも黒色仕上げ処理が行われている。口径は12.8cmである。胎土は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。

B：口縁部が外反気味に立ち上がるるもの。C-55の1点である。口縁下部から体部上半が残存している。外面の調整は、口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリである。体部径16.0cmである。胎土は緻密で細かく明橙色を呈し、砂粒をほとんど含んでいない。

壺は741点認められる。全体の器形が復元されたものが少ないので、破片資料を含めて22点を図示し、第3表には体部外面の調整を8つに分け、層位ごとの数量を示した。なお、741点のなかには、甌の破片も含まれている可能性もある。

壺I類：口縁が外反あるいは直線的に外傾し、体部が膨らむもの。口径20cm前後と10~15

cm ほどの大小 2 種類がある。口径と体部径の関係、体部の膨らみなどによって 5 つに分けられる。また、これらの胎土には砂粒を多く含んでいるが、小型の壺には緻密で細かく、砂粒をほとんど含まないものもある。

- A : 体部が張り、口径に比べ体部径の方が大きいもの。C-53・110・111・113・137 の 5 点である。口縁部は短く外反している。体部との境には段は形成されず、C-110において軽い稜が認められる。体部外面の調整は、C-53・110・111 がヘラケズリ、C-137 がヘラナデ、C-113 がヘラナデのちヘラミガキである。
- B : 体部が膨らみ、口縁と体部径がほぼ同じもの。C-107・122・119 の 3 点である。口縁部は外反し、体部との境に軽い稜が認められる。体部外面の調整は、C-122 がヘラケズリのちヘラミガキ、C-107 がヘラナデのちヘラミガキである。C-107 の口径は 20.0 cm、C-122 の口径は 12.5 cm と、大小の違いがみられる。
- C : 体部の膨らみは弱く、口縁もあまり外反せず、口径と体部径がほぼ同じもの。C-118 の 1 点である。体部外面の調整はヘラナデである。
- D : 体部はやや膨らむが、口径に比べ体部径の方が小さいもの。C-54・106・112・114・115 の 5 点である。口縁部は、短く外反する C-112、外反する C-114、やや外反気味に外傾する C-106・115、直線的に外傾する C-54 に分かれる。体部と口縁部の境には C-54 には段があるが、他は軽い稜をもつ。C-54 と C-106 は体部下端に段がみられる。底部は、C-54 はヘラケズリによって上げ底気味になっているが、C-106 には木葉痕が残されており、平坦である。体部外面の調整は、C-54 が刷毛目、他はヘラナデである。大きさは、C-54 が口径 21.6 cm、器高 22.9 cm、C-106 が口径 17.2 cm、器高 18.1 cm である。
- E : 体部はあまり膨らまず、口径に比べ体部径の方が小さく、体部最大径が体部上端付近にあるもの。C-109・116・117・130 の 4 点である。口縁部は外反しており、体部との境は、C-117 には軽い稜がみられるが、他は屈曲している。体部外面の調整は C-109 と 116 がヘラナデ、C-117 がヘラナデのちヘラミガキである。C-109 では、体部上端において、ヨコナデとヘラナデの境界が軽い稜になっている。
- F : 体部から底部にかけての資料である。C-108 の 1 点である。体部は膨らみをもつ。外面の調整は、刷毛目のちヘラナデである。底部には木葉痕が残されている。
- 壺II類：口縁が短くやや外反し、体部が外傾するもの。C-52 の 1 点である。最大径は口縁部にある。口縁部と体部の境には軽い稜がみられる。底部はヘラケズリが行われており、平坦である。体部外面の調整は、ヘラケズリのちヘラナデ、さらにヘラミガキが施されている。口径 19.8 cm、器高 17.6 cm である。胎土には砂粒を多く含んでいる。

甕III類：口縁が内傾し、体部が膨らむもの。C-120の1点である。口縁部内面がやや膨らんでいる。最大径は体部上半にある。口縁部と体部の境には軽い稜があり、底部はヘラケズリが行われており、平坦である。体部外面の調整はヘラケズリである。

口径16.7cm、器高16.1cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。

甕IV類：口縁がわずかに外反し、口縁部と体部の境が明瞭でないもの。C-124の1点である。口縁直下の内面がやや膨らむ。内面には粘土紙の積み上げ痕を残している。推定口径12.8cm。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。明褐色を見する。

甕は7点認められた。すべて底部資料であり、器形のわかるものはない。C-138の1点を図示した。無底式の底部破片である。胎土には砂粒を多く含んでいる。

鉢は14点認められ、2点を図示した。それぞれ器形は異なる。

鉢I類：体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部と体部の境に稜があり、口縁は外反するもの。C-50の1点である。底部は丸底と考えられる。体部外面の調整は、ヘラケズリのち部分的なヘラミガキである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、緻密で細かく明褐色を呈する。

鉢II類：体部のわずかに丸みをもって立ち上がり、口縁はそのまま直立するもの。C-121の1点である。底部は平底で、体部外面の調整はヘラケズリである。口径13.7cm、器高9.6cmである。胎土は、緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。明褐色を呈する。内面は黒色仕上げ処理が行われている。

片口上器は1点認められる。C-123である。口縁部から体部にかけての破片であり、器形は不明である。体部外面の調整はヘラケズリである。内外面に黒色仕上げ処理が行われている。推定口径13.8cmである。胎土は、緻密で細かく明褐色を呈する。

高环は30点認められるが、器形全体がわかるものはない。このうち、IV類を含む18点は南

第3表 SD 3出土の甕の分類と数量

	ヘラナゲ	ヘラ → ナゲ ミガキ	ヘラケズリ	ヘラ ケズリ ミガキ	ヘラ ケズリ ミガキ	ヘラ ケズリ ミガキ	ヘラ ケズリ ミガキ	刷毛目	刷毛目 → ナゲ	ヘラ ナゲ	ヘラミガキ	計
1層	55 (54)	1 (1)	32 (31)	0	4 (4)	4 (4)	6 (6)	0	98			
2層	300 (62)	25 (5)	91 (18)	5 (1)	15 (3)	12 (2)	45 (9)	5 (1)	485			
3層	33 (46)	8 (11)	5 (7)	1 (1)	9 :	8 :(11)	17 (24)	0	72			
4層	53 (62)	17 (20)	8 (9)	1 (1)	0	0 (9)	8 (9)	0	86			
計	429 (57)	51 (7)	122 (18)	6 (1)	19 (3)	23 (3)	76 (10)	5 (1)	741			

\* ( ) 内はパーセントを示す。

小泉式土器の高坏と考えられる。8点を図示した。

高坏I類：坏部資料：C-136の1点である。口縁部と体部の境に段がある。口縁部はやや外傾しており、その下部はわずかに膨らみをもつ。内面はヘラミガキのち黒色処理である。口径9.4cmである。胎土には砂粒を含んでいる。

高坏II類：坏部下部から脚部上部の資料：C-95・96・97の3点である。坏部には段がみられず、丸みをもって立ち上がる。脚部は坏部直下から外へ広がっている。調整は、外面がヘラケズリのち部分的なヘラミガキ、内面はヘラミガキである。内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理が行われている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

高坏III類：脚部資料：C-98の1点である。脚部は外傾しており、端部はやや外へ開いている。器厚は7~8mmで、胎土は緻密で細かい。色調は明褐色~明橙色を呈する。

高坏IV類：脚部資料：C-99・100・139の3点である。脚部は外傾するものと直立するものがあり、どちらも端部は外へ開いている。脚上部が中実になっているものもある。外面にはヘラミガキが全面に行われている。器厚は10mm以上と厚く、胎土には砂粒を含む。色調は橙色~赤褐色を呈する。

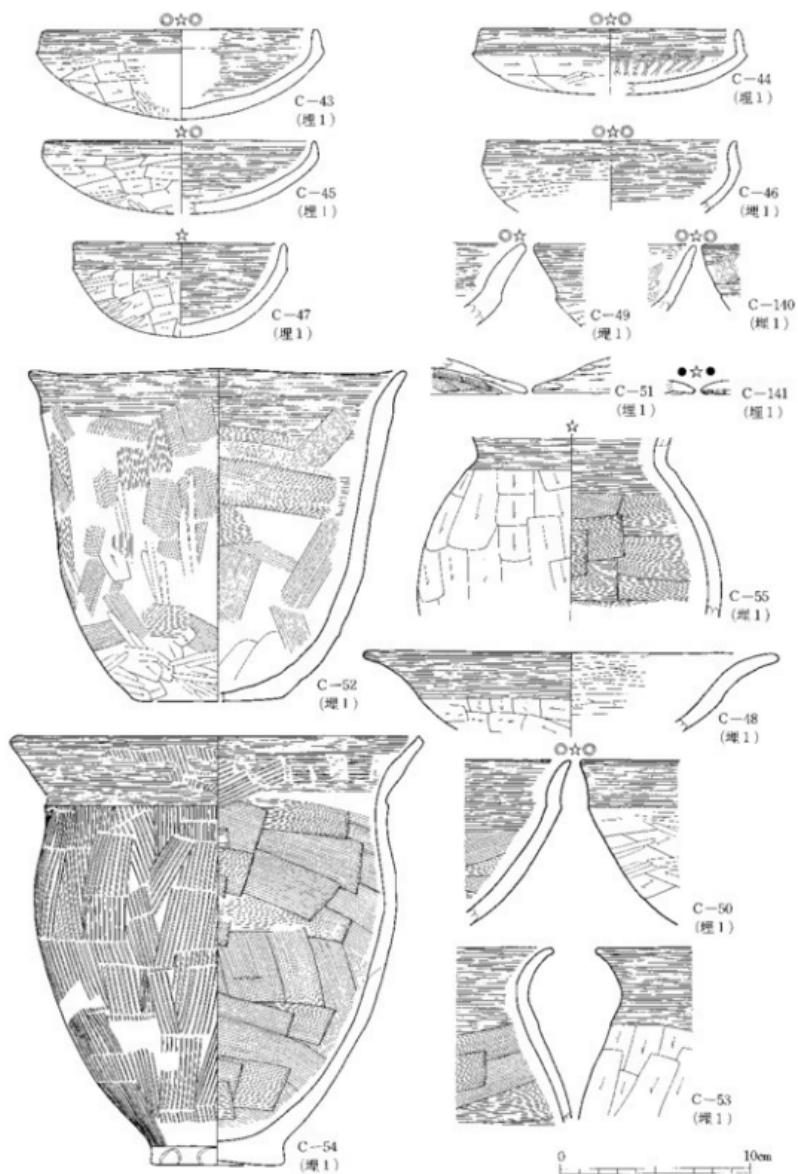
蓋は3点認められる。C-51・94・141である。いずれも小破片である。C-51・94は胎土に砂粒を含んでおり、C-51の内面は黒色を呈する。C-141は、端部に刻目があり、内外面に丹塗りが施されている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

この他、土筋器には器形不明の口縁部破片18点、体部破片302点、底部破片63点が認められた。

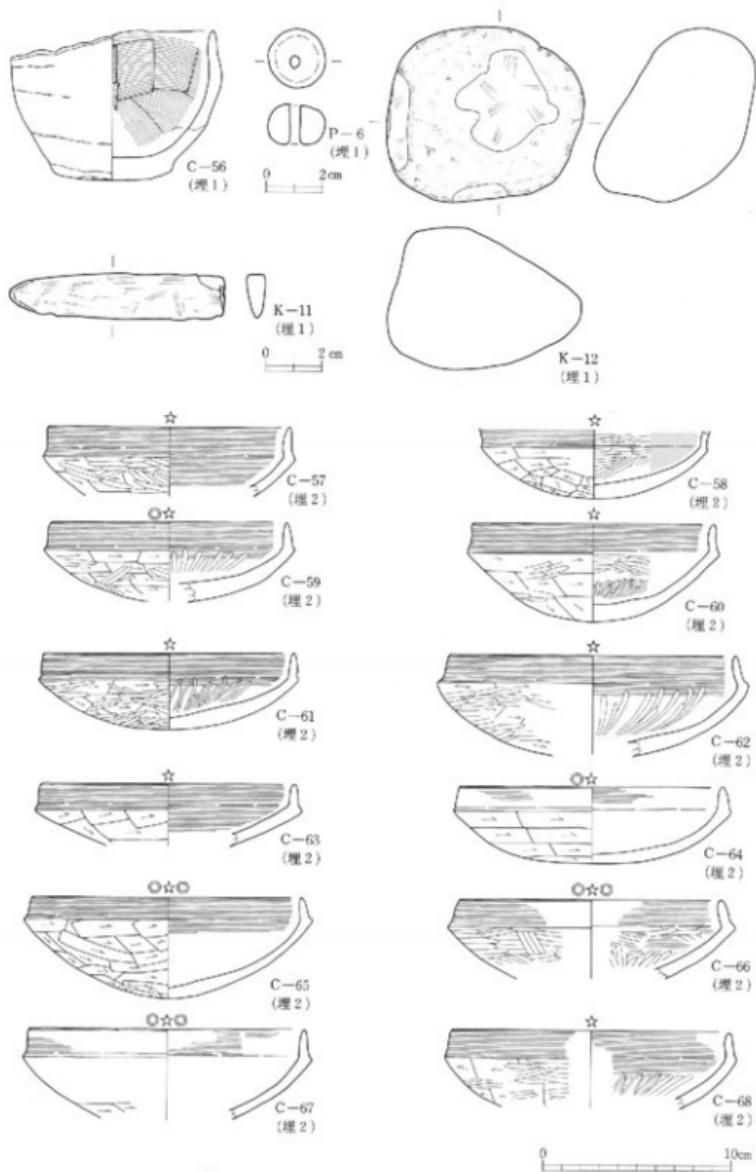
須恵器は6点認められるが、器形復元ができるのはE-29の1点だけである。E-29は短頸壺の口縁部から体部上端にかけての破片資料である。口縁部は直線的にやや外傾している。体部は肩が張り、沈線が1条めぐっている。沈線直下には櫛状の工具によって連続した斜めの刺突文が施されている。口径は推定10.3cm、器厚5~6mm。脚のつく可能性がある。胎土は緻密で、色調は暗青灰色を呈し、小さな黒色の粒子がみられる。焼成は極めて堅密である。

金器製品は2点認められるが、どちらも鉄製品の小破片である。

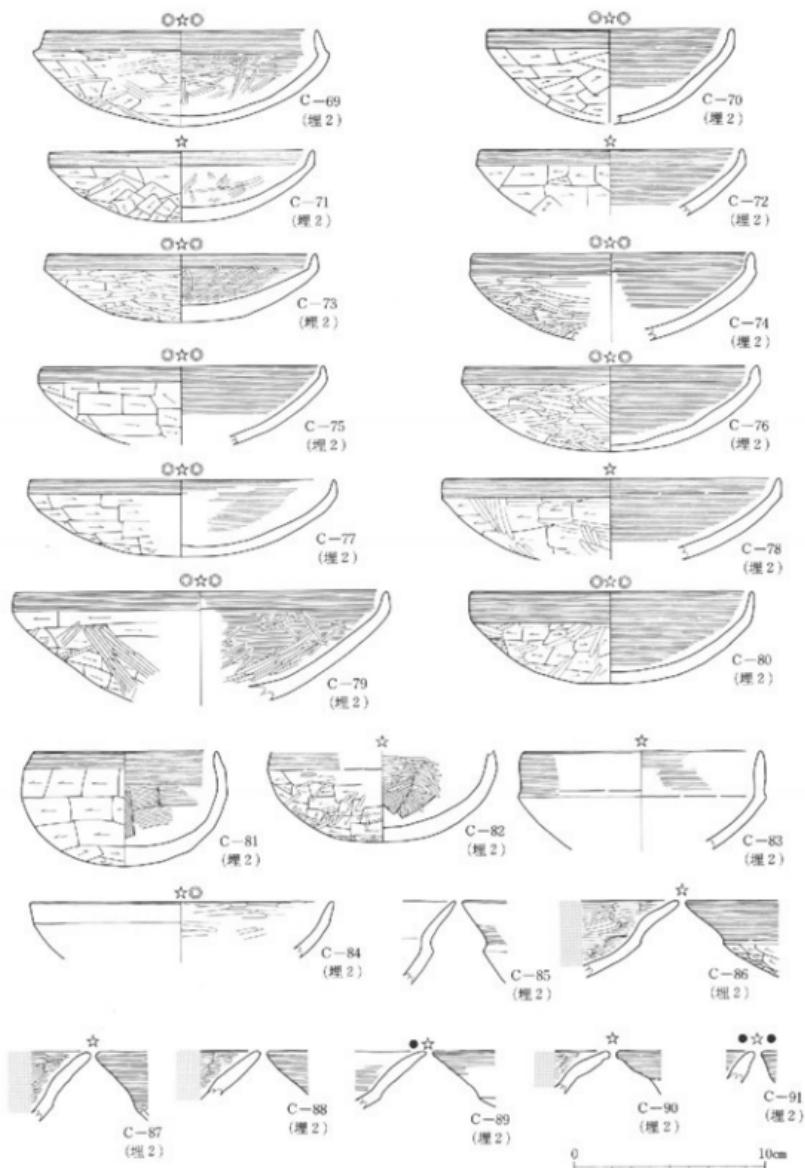
石器・石製品は24点認められ、そのうちK-11~18・20を図示し、K-19・21・34は写真で示した。磨石（K-12・16・20・34）と敲石（K-13）には安山岩が多く用いられている。K-34のように重さ13kgの礫も使われており、磨面の広がりが明瞭に認められる。礫とした93点のなかには、磨面の判断に迷うものが含まれている。砥石（K-14）と凹石（K-15）は1点ずつの出土で、石材には石英安山岩質凝灰岩が用いられている。石質は軟質である。剝片石器は2点出土しており、いずれも石材は黒曜石で、K-17は石核、他は剝片である。K-17にはビエス・エスキューの可能性もある。石製品は4点出土しており、石材には頁岩（粘板岩）



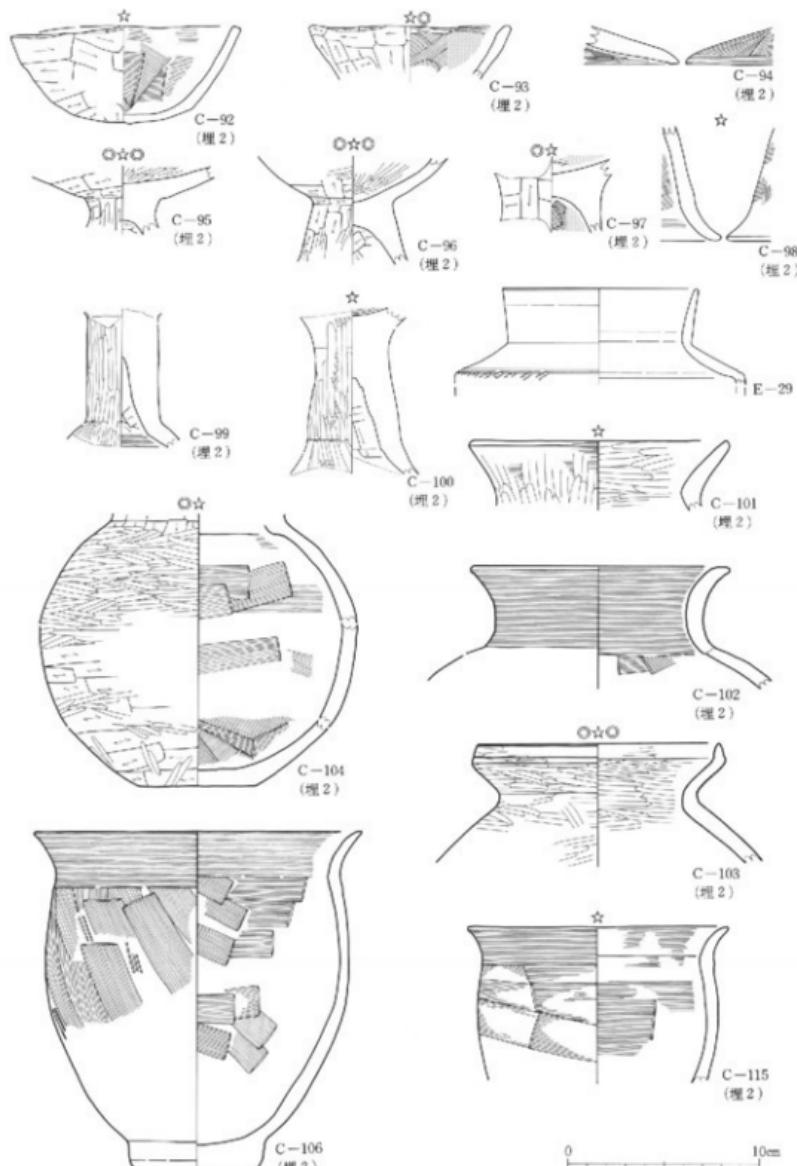
第58図 SD 3 1層出土遺物実測図



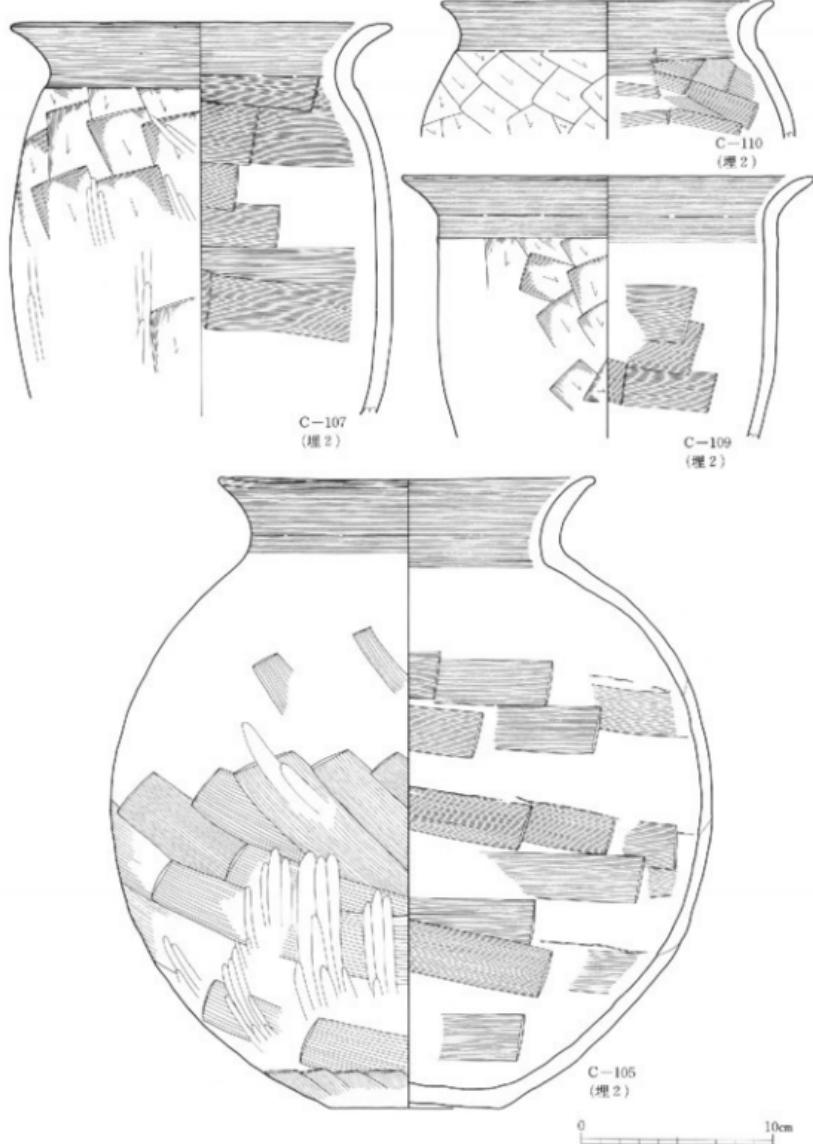
第59図 SD 3 1層・2層出土遺物実測図



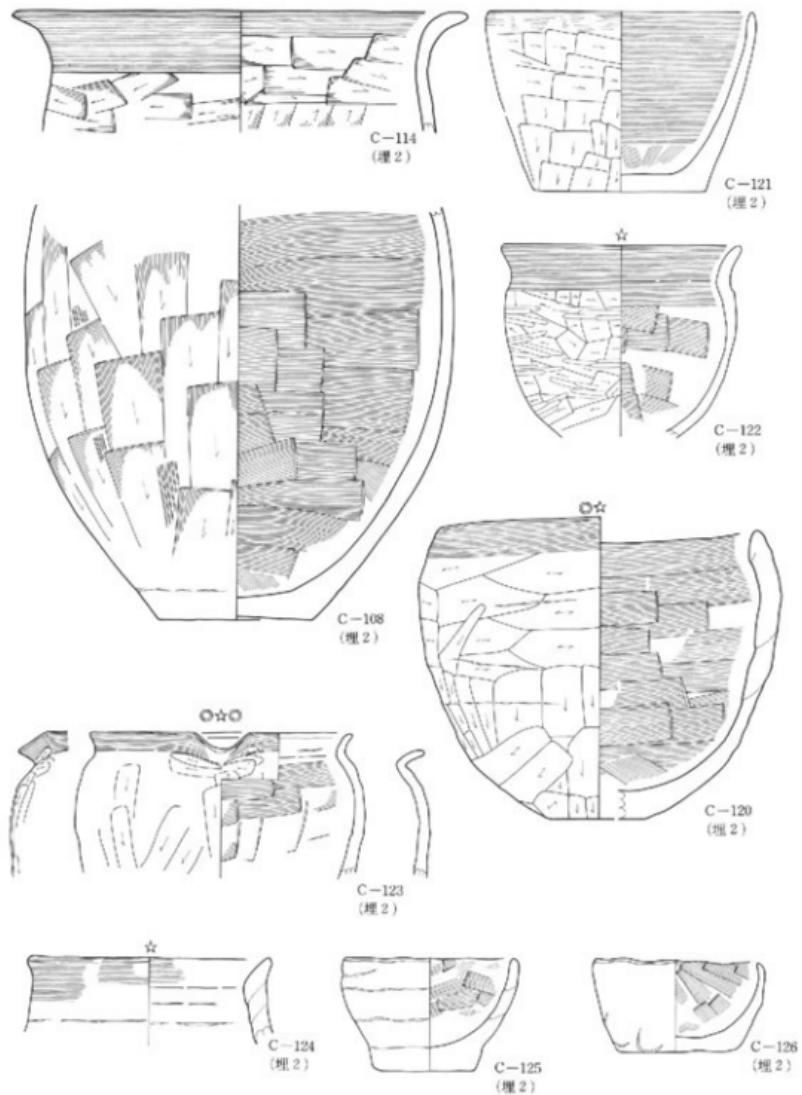
第60図 SD 3 2層出土遺物実測図(1)



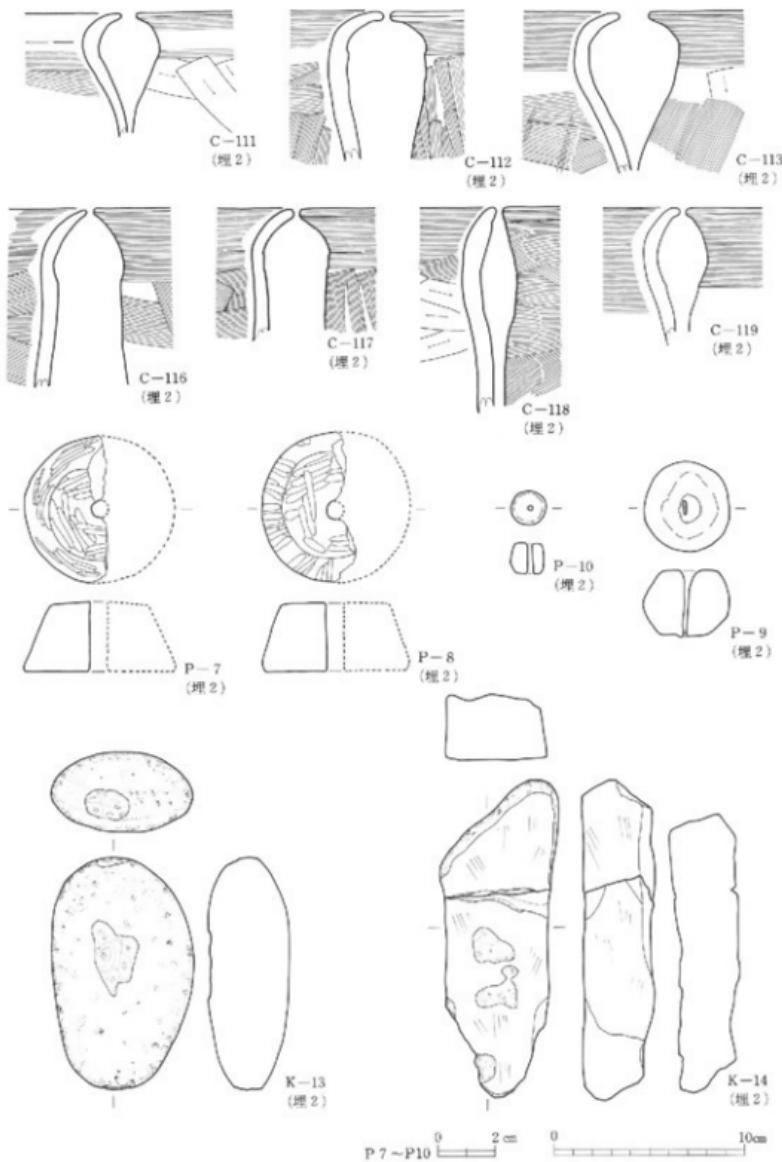
第61図 SD 3 2層出土遺物実測図(2)



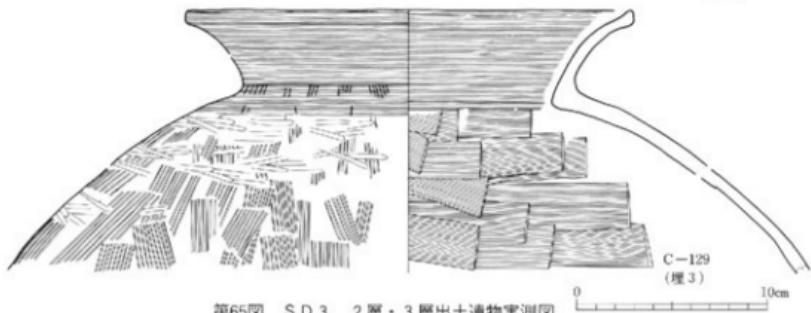
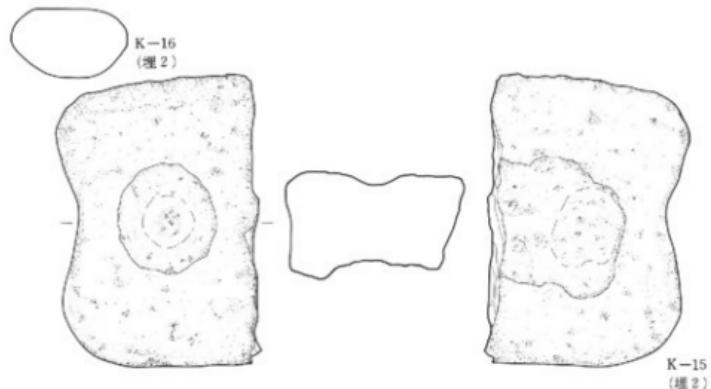
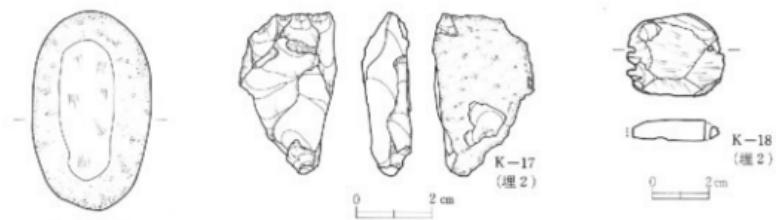
第62図 SD 3 2層出土遺物実測図(3)



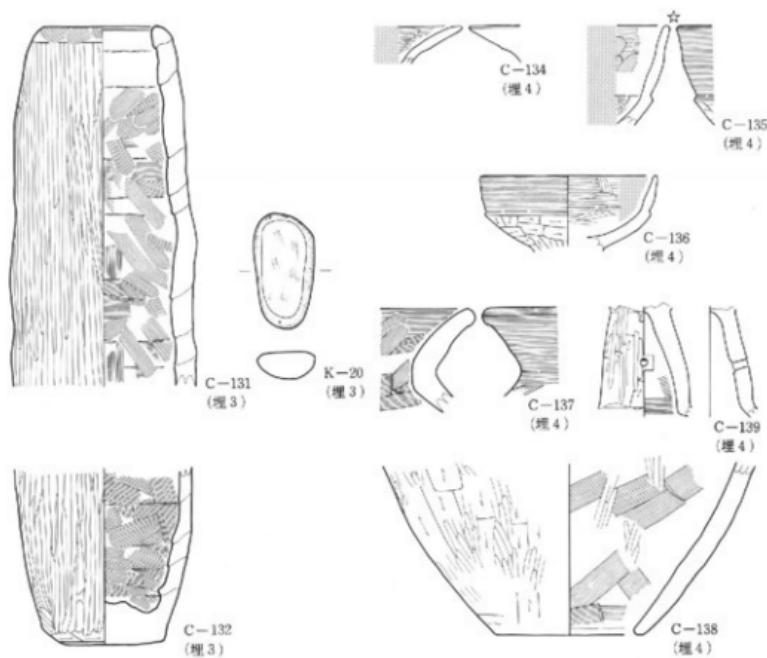
第63図 SD 3 2層出土遺物実測図 (4)



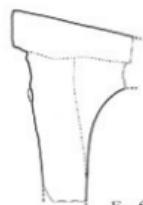
第64図 SD 3 2層出土遺物実測図(5)



第65図 SD 3 2層・3層出土遺物実測図



SD 3



F-6 (埋1)

SD 4



第66図 SD 3 3層・4層、SD 4出土遺物実測図

が用いられている。K-18は有孔円板、K-11は刀形をした石製品である。K-19と21は石製模造品の素材とも考えられるが、磨面がみられ、未製品であることや他の可能性もある。

筒形土器、手捏土器を含めて土製品は23点認められ、そのうちC-56・125・126・131・132 P-6~10を図示し、P-11は写真で示した。C-131・132は筒形土器である。同一個体の可能性もある。どちらも外面はヘラミガキ、内面はナデが行われている。内面には粘土紐の積み上げ痕跡を残している。C-132の外面には火はねによる器面の剥落がみられる。C-131の残存高は19.1cmである。胎土には砂粒を多く含んでいる。手捏土器は6点出土しており、C-56・125・126を図示した。胎土には砂粒を多く含んでいる。体部下端に段をもつC-56・125と段をもたないC-126がある。P-7、8は土製鋤車であり、2点はほぼ同じ大きさと形態を示している。調整はヘラミガキが施されており、P-7には黒色仕上げ処理も行われている。P-6、9、10は土玉である。胎土は、緻密で細かく、砂粒をほとんど含んでいない。P-11は支脚と考えられる。円柱状を呈する。胎土は、緻密で細かいが、砂粒を含んでいる。外面はほとんど剥落している。

SD4:A・B-9~10グリットに位置する。SA1、SD1、SK3と重複関係があり、SD4は、いずれの遺構より古い。埋土は大別3層に分かれしており、2層はシルトと砂が互層になる自然堆積層である。そのいずれかのシルトの上面では人の足跡が検出されている。1層は、基本層II層と類似する黄褐色土をブロック状に含んでおり、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は、総数717点出土している。製作にロクロを使用している土師器破片が多数を占める。写真78・79に5点を示した。すべて埋土1層からの出土である。C-142は製作にロクロを使用していない土師器破片で、体部外面に段があり、内面には対応する屈曲はみられない。この遺構の機能していた時期には伴わないものと考えられる。D-56は土師器底破片(回転糸切り無調整)、E-30は須恵器底破片(手持ちヘラケズリ)、F-6は陸奥国分寺跡(伊東他:1961)で細弁蓮花文鏡瓦第一類と分類されている軒丸瓦の瓦当部である。G-8は平瓦の破片である。凸面は縱方向の縫合き目と叩き目のつぶれ、凹面は細かい布目とそれを消すナデがみられる。この他、1層中からは赤焼土器破片が数点出土している。赤焼土器破片は埋土2・3層からは出土していない。

この溝の発絶要因については、埋土2層の堆積により、溝としての機能が損なわれた可能性が考えられる。その点では、埋土1層出土遺物のなかには溝発絶時に伴う遺物が含まれていると理解される。

SD5:A・B-11グリットに位置する。SA1、SD2、SD6と重複関係があり、SD5は、いずれの遺構より古い。遺物は、総数48点出土している。

SD6:A・B-11グリットに位置する。SA1、SD2、SD5と重複関係があり、SD6

は、SD 5より新しく、SA 1、SD 2より古い。遺物は、総数42点出土している。写真79には2点を示した。E-31は須恵器壺底部破片(回転糸切り無調整)で、内面は体部と底部の境に肩曲をもっている。G-9は平瓦の破片である。凸面は縦方向の繩叩き目と叩き目のつぶれ、凹面は細かい布目とそれを消すナデがみられる。

SD 7 : B-3～5グリットに位置する。SI 9、SA 1と重複関係があり、SD 7は、両者より新しい。遺物は、総数93点出土している。写真79にはE-32須恵器壺破片を示した。内面は体部と底部の境に肩曲をもっている。

SD 8 : A-18～20グリットに位置する。A-18グリット付近で方向を変えている。SI 20、SI 22、SX 1と重複関係があり、SD 8は、SI 20、SI 22より新しく、SX 1より古い。遺物は、総数103点出土している。写真79にはI-2陶器壺破片を示した。常滑産であり、時期は中世と考えられる。

SD 9 : B-14グリットに位置する。遺物は、総数20点出土している。

SD 10 : A・B-17グリットに位置する。SI 18、SI 19と重複関係があり、SD 10は、両者より新しい。遺物は、総数133点出土している。写真79には埋土1層から出土したI-3陶器破片を示した。渥美産であり、年代は12～13世紀と考えられる。

SD 11 : A-16グリットに位置する。SI 14、SD 10と重複関係があり、SD 11は、SD 10より新しい。SI 14との関係は不明である。遺物は、総数30点出土している。

SD 12 : B-14グリットに位置する。SI 17と重複関係があり、SD 12は、SI 17より新しい。遺物は、総数4点出土している。

SD 13 : A-19グリットに位置する。検出長は短い。SI 22、SK 12と重複関係があり、SD 13は、両者より古い。遺物は、総数5点出土している。

SD 14 : A-19グリットに位置する。検出長は短い。SI 22と重複関係があり、SD 14は、SI 22より古い。遺物は、総数4点出土している。

##### (5) 土坑他

SK 1 : B-10グリットに位置する。平面形は方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数12点出土している。写真79にはH-3を示した。焼成された熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。

SK 2 : B-10グリットに位置する。平面形は方形を呈する。総数3点出土している。

SK 3 : A-11グリットに位置する。SD 2、SD 4と重複関係があり、SK 3は、SD 4より新しい。SD 2との関係は不明である。平面形は梢円形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数83点出土している。H-4(写真79)は焼成された熨斗瓦であり、焼成前に刻みを入れ、焼成後に割っている。K-22(第69図、写真79)は石製紡錘車である。ていねい

なミガキが施され、線刻がみられる。

S K 4 : B - 5 グリットに位置する。S D 6 と重複関係があり、S K 4 は、S D 6 より新しい。平面形は楕円形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数 18 点出土している。

S K 5 : A - 7 グリットに位置する。S D 3 と重複関係があり、S K 5 は、S D 3 より新しい。平面形は細長い楕円形を呈する。遺物は、総数 351 点出土している。写真 79 には D - 57 を示した。製作にロクロを使用した土師器壊の破片である。内面はヘラミガキのち黒色処理が行われている。

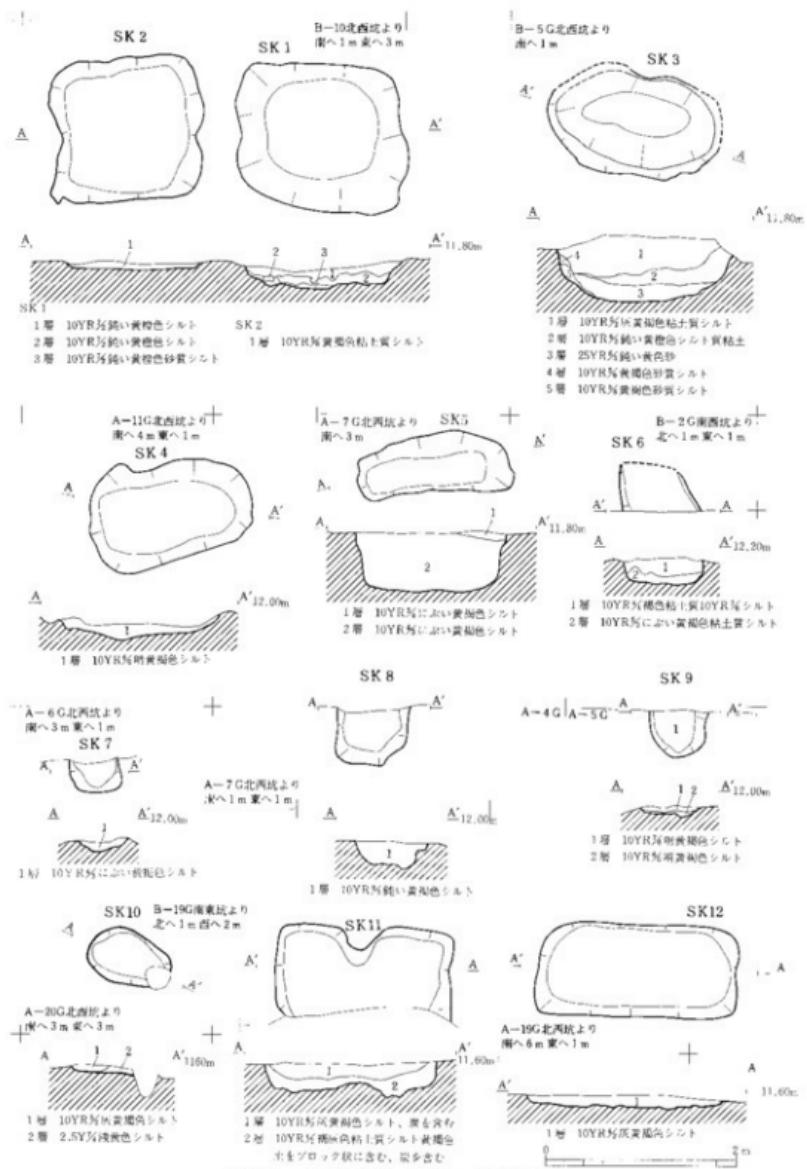
S K 6 : B - 1 ~ 2 グリットに位置する。全容は不明である。遺物は、総数 10 点出土している。第 69 図には D - 58 を示した。製作にロクロを使用した土師器壊である。

S K 7 : A - 6 グリットに位置する。S I 4 と重複関係があり、S K 7 は、S I 4 より古い。全容は不明である。遺物は、総数 32 点出土している。土師器は 31 点で、製作にロクロを使用したものは認められない。第 69 図には土師器鉢 C - 143 と壺 C - 144 の 2 点を図示した。C - 143 は、平底で、体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾している。口縁部と体部の境にわずかな段がみられる。口縁直下の内面がやや膨らみをもっている。調整は口縁部外面と内面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリである。胎土は、やや砂粒を含むが緻密で細かく明橙色を呈する。C - 144 は、口縁部が外反し、体部はやや膨らみをもっている。体部外面はヘラナデによって調整されている。また、小玉石が 1 点出土している。

S K 8 : A - 7 グリットに位置する。S D 3 と重複関係があり、S K 8 は、S D 3 より新しい。全容は不明である。遺物は、総数 28 点出土している。

S K 9 : A - 5 グリットに位置する。S I 3 と重複関係があり、S K 9 は、S I 3 より古い。全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると推定される。遺物は、総数 12 点出土している。すべて土師器で、製作にロクロを使用したものは認められない。第 69 図には土師器壊 C - 145 を図示した。丸底で、口縁部と体部の境に弱い稜があり、口縁は直立している。内面は口縁直下にわずかに屈曲をもっている。胎土は、緻密で細かく明橙色を呈する。

S K 10 : A - 20 グリットに位置する。S P 212 と重複関係があり、S K 10 は、S P 212 より古い。平面形は楕円形を呈する。遺物は、総数 37 点出土している。土師器は 35 点で、製作にロクロを使用したものは認められない。第 69 図には土師器高壺 C - 146・147 と石器 K - 23・24 を図示した。C - 146 と 147 は中空の脚部資料で、下方へ開いている。壺部との接合は、壺部に凸部を作り、脚部に埋め込むように行われている。C - 147 は壺部がそのまま抜けたものである。胎土は、やや砂粒を含み赤褐色を呈する。K - 23 は剥片、K - 24 は二次加工のある剥片である。K - 24 は素材の末端背面に連続した二次加工が行われている。2 点とも自然面打面で、先行する剥離面の加壓方向は腹面の加壓方向と同じであり、背面には自然面がみられる。石材



第67図 土壌平面図・セクション図(1)

はともに黒暈石で、挟雜物がやや含まれている。

S K 11 : A-19 グリットに位置する。平面形は長辺にくびれをもつ長方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数 13 点出土している。

S K 12 : A-19 グリットに位置する。S D 13 と重複関係があり、S K 12 は、S D 13 より新しい。平面形は長方形を呈する。底面には凹凸がみられる。遺物は、総数 44 点出土している。第 69 図には U-1 土師質土器を図示した。底部は回転糸切りのちナデが行われている。外面には黒斑が部分的にみられる。写真 79 には 4 点を示した。I-4 は丹波産のすり鉢、J-2 は白磁破片である。年代は、I-4 が 17 世紀前半、J-2 が 17 世紀と考えられる。F-7 と G-10 は焼成された瓦で、F-7 は丸瓦、G-10 は平瓦の破片である。

S K 13 : A-19 グリットに位置する。全容は不明であるが、平面形は橢円形を呈すると推定される。遺物は、総数 3 点出土している。

S K 14 : A-17 グリットに位置する。S K 15 と重複関係があり、S K 14 は、S K 15 より新しい。全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると推定される。遺物は、総数 25 点出土している。

S K 15 : A-17 グリットに位置する。S K 14 と重複関係があり、S K 15 は、S K 14 より古い。全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると推定される。遺物は、総数 14 点出土している。

S K 16 : A-17 グリットに位置する。S I 18, S I 19 と重複関係があり、S K 16 は、両者より新しい。平面形は長方形を呈する。横面は直線的にやや外傾している。遺物は、総数 29 点出土している。写真 80 には I-5 陶器破片を示した。時期は近世と考えられる。

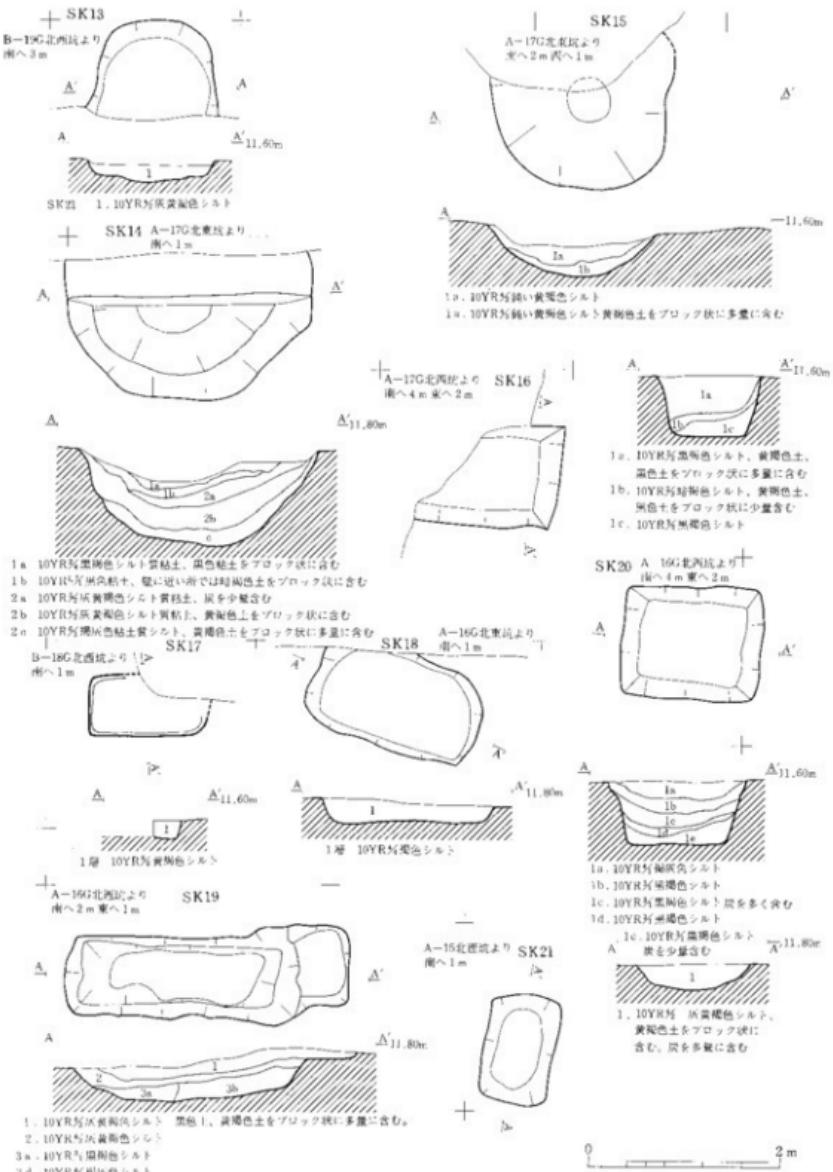
S K 17 : B-18 グリットに位置する。S I 20 と重複関係があり、S K 17 は、S I 20 より古い。平面形は長方形を呈する。遺物は出土していない。

S K 18 : A-16 グリットに位置する。S I 25 と重複関係があり、S K 18 は、S I 25 より新しい。平面形は橢円形を呈する。遺物は、総数 44 点出土している。

S K 19 : A-16 グリットに位置する。S I 14, S I 25 と重複関係があり、S K 19 は、両者より新しい。平面形は長方形を呈する。東側は壁中位に段がみられる。遺物は、総数 64 点出土している。写真 80 には 2 点を示した。J-3 は肥前産の磁器碗の破片で、年代は 17 世紀と考えられる。G-11 は焼成された平瓦の破片である。

S K 20 : A-16 グリットに位置する。S I 14 と重複関係があり、S K 20 は、S I 14 より新しい。平面形は長方形を呈する。壁面は直線的にやや外傾している。遺物は、総数 52 点出土している。写真 80 には I-6 : 美濃産の陶器皿の破片を示した。

S K 21 : A-15 グリットに位置する。平面形は長方形を呈する。東側は壁中位に段がみられる。



第68図 土坑平面図・セクション図(2)

遺物は、総数 13 点出土している。写真 80 には 2 点を示した。U-2 はかわらけの底部破片で、回転糸切りのうちナデが行われている。I-7 は瀬戸美濃産の陶器皿の破片である。年代は 17 世紀前半以前と考えられる。

S X 1 : A・B-21 グリットに位置する。S D 8 と重複関係があり、S X 1 は、S D 8 より新しい。全容は不明である。遺物は、総数 50 点出土している。

S P 134 : A-19 グリットに位置する。S I 20、S I 22 と重複関係があり、S P 134 は、両者より新しい。平面形は梢円形を呈する。遺物は、総数 16 点出土している。写真 80 には G-11 : 燻し焼成された平瓦を示した。

#### (6) 遺構外出土遺物

基本層 I 層からは、総数 20953 点の遺物が出土している。第 72 図、73 図、写真 80・81 にはそのうちのいくつかを図示した。

土師器 D-59 は蓋と考えられる。製作にロクロを使用している。つまみ部が細長く作られ、孔があけられている。孔は体部にもある。欠損しており、径は不明である。調整は、外面はヘラケズリ、内面はロクロ調整痕を残している。

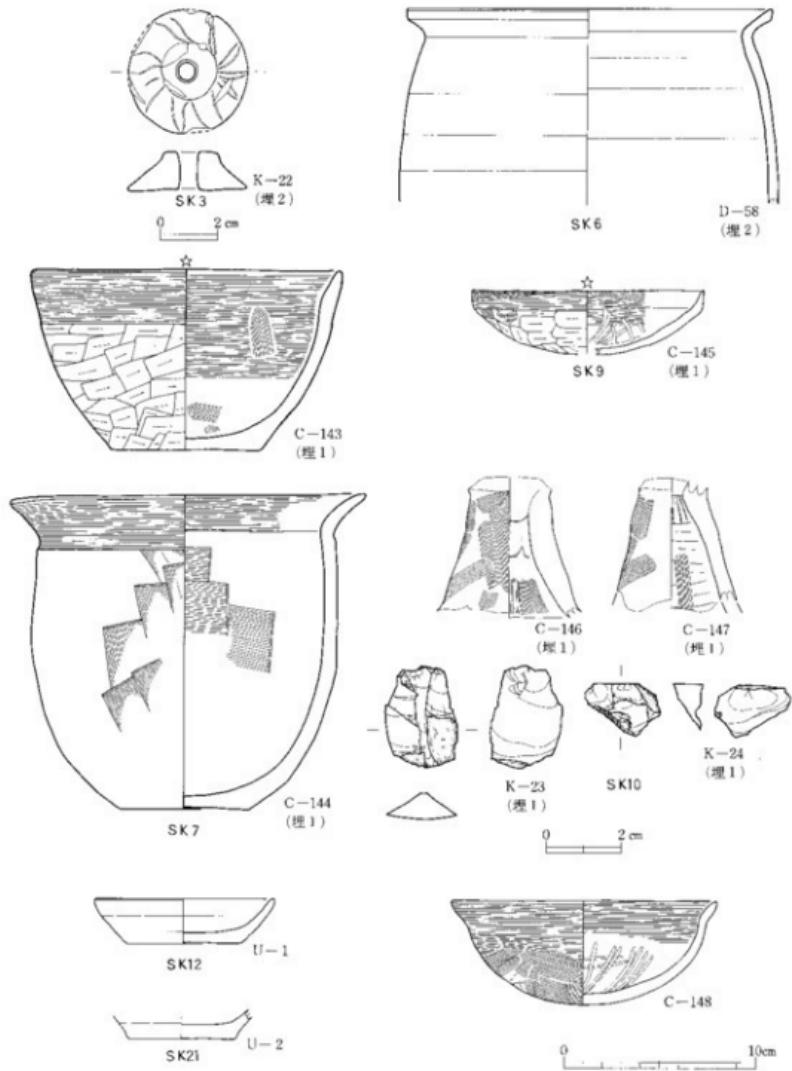
土師器 C-148~150 は製作にロクロを使用していない。C-148・149 は壊、150 は複合口縁の壺である。C-148 の胎土は、砂粒を含み、赤褐色を呈している。

須恵器では、E-33・34 のように返りのある蓋の破片、E-35 の高台付壺の底部破片、E-36 の長頸壺の頸部が出土している。

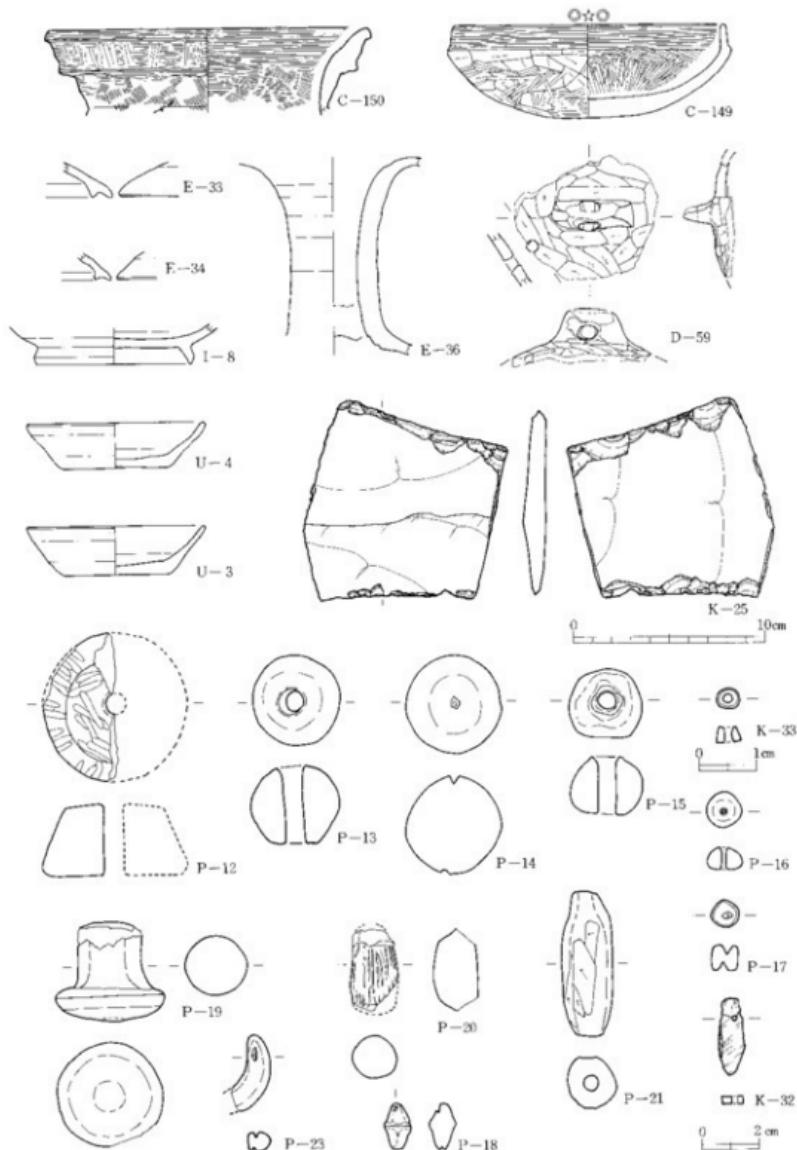
土師質土器 U-3・4 は、ほぼ同じ大きさと器形である。A-16 グリット S I 14 のプラン内から、口縁を合わせるようにして出土している。近接する S K 19、S K 20 に伴う可能性もある。底部はともに回転糸切りのうちナデが行われている。

土製品は 10 点 (P-12、14~21) 図示した。これらは A・B-7 グリット以西から出土している。A・B-7 グリットから出土した P-12・14・18 は S D 3 に伴う可能性がある。P-12 は土製紡錘車、P-14~17 は土玉、P-19 はスタンプ形の土製品、P-23 は土製勾玉、P-18・20 は不明である。P-14・17・18・23 は孔が貫通していない。P-21 は土鉢である。

石製品には、K-32 剣形石製模造品がある。



第69図 土坑他出土遺物実測図



第70図 基本層他出土遺物実測図

#### 4. 出土遺物の検討と遺構群の変遷

第22次調査における遺跡の年代幅は、出土した遺物から弥生時代～近世に及ぶことが知られる。弥生時代の遺構は検出されていないが、遺跡の時期的な変遷は、土器を基準として以下のように大きく4期に分けられる。

I期：弥生土器が製作されていた時期

II期：土師器の製作にロクロが使われていない時期（古墳時代～奈良時代）

III期：土師器の製作にロクロが使われている時期（平安時代）

IV期：中・近世の陶器・磁器が用いられていた時期

##### (1) I期（弥生時代）

この時期の遺構は検出されていないが、弥生土器、石器が出土している。主に調査区東部のIII期の竪穴住居跡の埋土中から出土している。

弥生土器は、ほとんど破片であるが、中期中葉の樹形圓式土器と後期の天王山式土器が認められる。ほとんどは地文だけの体部破片であるが、内面をナデ調整しているものが比較的多く、これらは天王山式土器と理解される。B-1（写真80）は天王山式の蓋のつまみ部である。

石器では、仙台平野の弥生時代に特徴的な大型板状安山岩製石器（斎野：1992）が1点（K-25）出土している。この石器は、日本列島において地域性をもって組成される大型直縁刃石器として理解され、形式分類ではI B e0類（斎野：1993）に属する。南小泉遺跡では、大型直縁刃石器は第12次調査で1点出土（斎野：1988、I B d0類）している。この他、写真80には剝片石器6点（K-26～31）を示したが、これらは弥生土器、大型板状安山岩製石器（K-25）とともにS I 20・S I 22の埋土から出土しており、弥生時代に所属するものと推定される。石材には遺跡周辺で採取の容易な流紋岩などが用いられている。また、基本層Ⅰ層などからは黒曜石の剝片が出土しているが、II期に属する可能性もある。

##### (2) II期（古墳時代～奈良時代）

この時期の遺構としては、竪穴住居跡・竪穴遺構13軒、溝跡4条、土坑2基などが検出されている。II期は、東北南部の土師器編年（氏家：1957他）を指標とすると、A～Cの3小期に細分される。

##### ① II A期

遺構は、竪穴遺構1軒（S I 13）、土坑1基（SK 10）が検出されている。S I 13の掘り方から出土している土師器環C-21は、半球状の器形と砂粒を多く含み赤褐色を呈する特徴から古墳時代中期の南小泉式に属すると考えられる。S I 13はII B期のS I 11より古いことから、この遺構の時期については、南小泉式期を上限とし、II B期が下限とされる。SK 10からは土師器高环の脚部2点C-146・147と黒曜石の石器2点K-23・24が出土している。高环につい

ては、器形の全容はわからないが、脚部の形態や胎土・色調からは南小泉式あるいはそれに後続する型式に属するものと考えられる。C-21と同様の胎土、色調を呈している。石器2点のうち1点には二次加工が施されている。

この他、基本層I層からは土師器壺C-150(B-2G)、土師器杯C-148(A-3G)、C-149(A-3G)、K-32剣形石製模造品(A-2G)が出土している。C-150は複合口縁の壺であり、古墳時代前期の塩釜式に属すると考えられる。C-148は南小泉式か引田式に属すると考えられる。他時期の遺構では、SK3から石製紡錘車K-22、SI16からK-8石製模造品、SD3からK-18有孔円板石製模造品が出土している。また、SD3出土の土師器壺VII類のなかに7点、高坏IV類のなかに8点、C-99、C-139のように南小泉式あるいはその前後の時期に属するものが含まれており、C-100についてもその可能性がある。他の器種でも小破片として含まれている可能性はあるが、識別は困難である。石器、石製品でも、K-11の刀形の石製品やK-17の黒曜石の石核はこの時期に伴う可能性がある。黒曜石の石器については、これまでの南小泉遺跡の調査では弥生時代にも認められ、石質も似ており肉眼での区別は難しい。今回の調査でもSD3からは2点の弥生土器の破片が出土しているが、SK10にみるように、高坏と共に伴っている遺構があることからすれば、SD3から他に1点出土している黒曜石の破片を含め、高坏C-99、C-139やK-18石製模造品とともにこの時期に属する可能性のほうが高いと考えられる。これらは、SK10出土遺物とともに祭祀関係遺物としての性格を示している可能性もある。

以上のように、IIA期は古墳時代中期の南小泉式期を中心とする時期と考えられるが、前期の塩釜式期とともにIIB期に先行する後期を含むものとしておきたい。

## ② IIB期

遺構は、竪穴住居跡5軒(SI8・9・11・23・25)、竪穴遺構2軒(SI5・6)、土坑1基(SK7)、溝跡1条(SD3)が検出されている。

これらの遺構群の構成については、遺物の出土量の多いSD3の所属時期を土師器の製作方法をとおして検討し、そのうち、他の遺構を含めた遺跡の構成、その背景について考えてみたい。

### i) SD3出土遺物とその所属時期

前述のように、SD3の埋土は1~4層に分かれ、遺物の接合関係が各層位内でおさまる傾向がみられること、埋土3・4層が溝の機能時、埋土2層が溝の廃絶時、埋土1層が溝の廃絶時以降を示す堆積状況から、各層出土遺物はそれぞれ時間差をもっていることが考えられている。ここでは、土器組成を把握できる埋土2層出土土器を対象として、土器製作のうえでの分類と器種組成との関係、それらの縦年位置について検討したい。

・胎土・焼成の2種

2層出土遺物のなかで、地点とレベルの記録されているのは1204点で、土器は土師器1101点、須恵器5点の1106点を占める。多くは破片資料であるが、このうち、土師器のなかで、調整などが不明な破片資料285点、坏VII類46点のうち41点、II B期に属すると考えられる坏VII類5点、高坏IV類8点を除いた762点について、土器の製作と器種との関係をみていく。

この762点の土師器の製作方法については、胎土・焼成の点から大きくA種・B種の二つに分けられる。

A種：胎土は緻密で細かく砂粒をほとんど含まない。色調は明橙色～明褐色を呈する。焼成は堅緻であるが、やや軟質な感じを与える。

B種：胎土は細かいものから粗いものまであるが、砂粒を含んでいる。小砾の混じるものもある。色調は明褐色を呈するものが多い。焼成は堅緻なものから脆いものまでさまざまである。

この2種と器種及びその各分類との関係を数値で示したのが下表である。

第4表 S D 3 埋土2層出土 A種・B種と器種との関係

坏	A種							B種										
	I A	I B	II A	II B	III A	IV	V	VI	VII	計	壺	I A	II A	II B	III A	他	計	
A	36	17	21	36	1	5	7	3	99	225	A		1	1	1	2	5	
B					1		11			12	B	1	1			3	5	
甕	I	II	III	IV	計	高坏							鉢			片口		蓋
A	74		1	1	76	A	3	1	2	3	9		A			9	1	
B	408	1			409	B					0		B	6	4		1	

この表からは、点数の少ない片口土器、蓋を除くと、A種と坏、高坏、鉢、壺、B種と甕、鉢の関係が強いことが知られる。そして、壺では、A種は大型の壺には用いられておらず、甕においてもA種はC-115のように小型の甕に用いられている。これらのこととは、A種と小型の土器、B種と大型の土器の関係としても理解され、各器種の機能的な面からいえば、食膳具にA種、煮沸具にB種、貯蔵具にA種とB種が用いられている傾向を認めることができる。

また、調整のうえで特徴的な黒色仕上げ処理との関係をみてみると、食膳具としての坏(V類を除く)、高坏II類、鉢の3種と、貯蔵具としての小型の壺に行われているものが多く、A種と密接な関係にあり、B種には認められない。つまり、A種による土器の製作は、対象となる器種とともに、粘土作りから調整・焼成までの一連の工程がB種とは異なる方法で行われていると考えられる。

・A種土器群とB種土器群

A種による土師器の製作方法は、II A期には認められず、地域的な土器製作技術のなかにその出自を求めるることは難しい。類例は、南小泉遺跡の第11次調査や郡山遺跡において数は少な

いが壺I～III類が出土しており、それらは「関東系土器」あるいは「外来系土器」と呼称され、関東地方の土師器との類似性が指摘されている(結城他：1984、木村他：1991)。こうした土器については、筆者も栃木県稻荷塚遺跡などから出土した土師器と同じような土器製作技術をみており、関東を中心としたなかのいずれかの地域あるいはいくつかの地域に出自をもつとは考えている(註2)。しかし、土器組成におけるあり方は、出土数が少ないとあり、これまであまり明確ではなかった。今回の調査では、数量の点や、器種も壺だけではなく、組成全体と不可分の関係にあることから、基本的にこの遺跡で製作されていると考えられ、それらを含めた土器組成を知るうえでは良好な資料といえる。そこで、これらの土器に対しては、他地域に出自をもつ製作技術に系譜が求められる土器として、「A種土器群」とする。

では、B種によって製作された土器群の実態はどうであるのか、A種土器群の壺などとともに他地域で組成されている大型の壺、甕、瓶が、器形や製作方法において認識されるのか否か、検討してみよう。それには、A種土器群と器種分類において共通する小型でB種の土器は、少なくともこの地域の土器と考えられることから、A種土器群を含まない資料によって地城的な編年的位置を求め、同じ時期の大型の土器と比較していくこととする。

A種土器群と共に通する小型でB種の土器は、壺V類、壺IIA類、鉢、甕I類に認められる。鉢はすべて小破片であることから、壺V類と壺IIA類、小型の甕I類について他の遺跡に類例を求めるに、遺跡周辺では、南小泉遺跡からは南南西方6kmに位置する仙台市栗遺跡があげられる。栗畝式土器の標識遺跡であり、そのI期土器群(工藤：1982)を構成する10号住居跡(1974～75年調査)出土土器のなかに壺IIA類のB種C-102と共通する特徴を示す土器(甕I類・小型と分類されている:P.189-12)がみられ、II期・III期土器群には認められない。壺V類については、それらは口縁部から体部にかけての破片であるが、10号住居跡に伴う壺と器形、調整に共通性は認められるが、II期・III期の壺と区別するのは難しい。この栗遺跡I期土器群の編年位置は、住社式から栗畝式への移行期の土器(工藤：1982)、あるいは住社式(東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会：1979、辻：1990)と理解されている。住社式土器の標識遺跡である角田市住社遺跡は、南小泉遺跡の南方約30kmの角田盆地にあり、やや地域的に離れるが、その出土土器(志賀：1958)のなかには、甕IB類の小型のB種C-122と共通する器形の特徴を示す土器(鉢形土器と分類されている:第3図13)がみられる。この器形の土器は、栗遺跡において、個体数の少ないI期土器群や、個体数の多いII期・III期土器群にも認められていない。これらのこととは、両遺跡ともA種土器群を含まないことから、SD3埋土2層から出土したB種の土器が、住社式のなかに位置づけられる可能性が高いことを示している。なお、住社式土器については、大別2時期の細分が行われており(加藤：1990)、住社遺跡出土土器はその新しい段階に位置づけられている。また、山元町合戦原遺跡では、第III群土器が古

い段階に相当し、5世紀末葉～6世紀前葉の年代(TK 47～TK 10)が与えられている(岩見：1991)。

次に、大型でB種の土器を、栗遺跡と住社遺跡から出土した土器と比較してみることとする。埋土2層出土の大型でB種の土器には、壺I類、壺II類、甌があるが、破片資料が多く、甌は底部破片だけなので、壺IA類と壺IB類を対象とする。壺IA類の類例は、住社遺跡には認められず、栗遺跡において類似する体部球形の土器はみられるが、口縁部と体部の境に段をもつていてことや口縁端部の形状において異なっている。壺IA類は、前述の壺IIA類及びそれと共に通する特徴をもつ栗遺跡10号住居跡出土土器の大型品と理解され、I期土器群に含まれると考えられる。壺IB類の器形の特徴には、器形復元がなされたものや破片資料においても、口縁部と体部の境に段のあるものは認められないことがあげられる。これは、住社遺跡と栗遺跡I期土器群と共に通する特徴であり、栗遺跡ではII期以降の土器群とを区別する指標ともなっている。A～Fに細分された壺I類のそれぞれの器形も両者に認められている。調整は、体部外面について第3表に示しており、ヘラナデを主体にしており、ヘラケズリを含めると、全体の90%近くを占めている。刷毛目もみられるが、その多くはヘラナデにより再調整が行われており、刷毛目調整だけの甌はほとんど含まれていないといえる。破片資料が多いことから、直接両遺跡と比較はできないが、傾向としては、刷毛目調整がほとんどの栗遺跡II期・III期土器群とは異なり、住社遺跡と栗遺跡I期土器群と類似している。そのうち、ヘラケズリによる調整がみられる栗遺跡I期土器群を構成する10号・14号住居跡については、10号住居跡の甌2点はヘラケズリのちヘラミガキで、14号住居跡の甌4点は、2点がヘラナデ、他の2点が刷毛目調整である。14号住居跡で刷毛目調整甌が基本的な組成に含まれていることは、10号住居跡との間にやや時間差のあることを示していると考えられており(東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会：1979)、甌I類では、ヘラケズリの比率が20%を越えていること、刷毛目調整はわずかにしかみられないこと、壺IA・IIA類と共に通する土器が10号住居跡出土であることから、SD3埋土2層から出土したB種の土器は、栗遺跡I期土器群でも古い10号住居跡に近い時期と考えることができる。なお、A種土器群の山自を関東方面に求めた場合、甌の体部外面がヘラケズリによって調整される特徴は、関東地方のこの時期に一般的に認められ、B種の甌のヘラケズリ調整をその影響と考えることも可能ではあるが、破片資料が多いこともあり、甌Ia～f類との特定の対応関係や他の甌と識別できるような胎土、焼成の特徴は、認められてはいない。

以上のこととは、大型・小型のB種の土器が、A種土器群を含まない仙台平野と角田盆地の遺跡と共に通する特徴をもっていることを示しており、地域の伝統的な製作技術に系譜が求められる土器と理解され、これを「B種土器群」とする。

#### ・B種土器群の編年的位置と年代

このB種土器群の編年的位置については、壺を基準とした場合、「頸部に明確な段を形成するものが普遍的になる」(氏家:1957)ことが栗円式の特徴とされており、SD3埋土2層から出土したB種の土器には、栗遺跡10号住居跡出土土器との共通性もあり、それに先行する時期が与えられる。また、住社遺跡出土土器とは、壺に共通するところも多いが、壺の内面調整に住社遺跡ではヘラミガキのうちに黒色処理がなされていない点で異なり、それに後続する時期が推定され、住社式とすれば最も新しい段階と理解しておきたい。

また、具体的な年代を考える資料としては、須恵器短頸壺E-29がある。この須恵器は口縁部から肩部までの破片であり、短頸壺としては類例に乏しいが、胎土・焼成などの特徴から静岡県湖西産と考えられ、器形としては脚付短頸壺の破片の可能性が高く、湖西編年(後藤:1989)ではII-3a期(TK43併行期)の新相からII-3b期(TK209併行期)の古相にあたる(註3)。脚付短頸壺は、静岡県では数は少ないながら主に古墳からの出土例が知られており、そのなかに類例を求めるとき、浜松市蛭子森古墳出土の2点の完形品がある(向坂他:1964、挿図7-7、8)。実見したところ、E-29に比べてやや小さいが、器形や調整は酷似していることが確かめられた(註4)。この古墳では、2回の追葬が行われたことが指摘されており、共伴する須恵器については明確でないが、2点の脚付短頸壺の脚部は2段二方透かしであり、他に長脚2段二方透かしの高壺脚部破片も1点(向坂他:1964、挿図7-9)出土している。この3点は2段二方透かしの共通性などから同じ時期と推定され、田辺編年(田辺:1966・1981)ではII期後半(TK43~TK209)の時期にあたり、両者の編年位置はほぼ一致する。実年代については、TK43の新相を奈良県牧野古墳(広陵町教育委員会:1987)に求めると6世紀末葉に比定され、E-29は6世紀末葉~7世紀初頭に位置付けられる。

このE-29の年代とB種土器群の関係については、B種土器群とほぼ同時期の栗遺跡I期土器群の年代からみておきたい。栗遺跡では、須恵器との共伴から時期のわかる遺構はないが、I期の上限は出土した須恵器から6世紀前半~7世紀前半の間に求められている(工藤:1982)。また、栗遺跡II期・III期土器群の時期に相当する清水遺跡第IV群・V群土器の時期は、栗圓式の古い段階とされる第IV群土器の年代が7世紀前半と考えられており(丹羽他:1981)、中村編年(中村:1981)でII型式5段階(TK209併行)に比定される須恵器を伴っている。これは、栗遺跡I期土器群の上限が6世紀前半、下限が7世紀初頭以前であると理解され、B種土器群の年代は、E-29との関係から6世紀末葉(TK43新相)頃と考えられる。

#### ・土器組成とその製作

SD3埋土2層から出土した土師器は、A種土器群とB種土器群によって構成されていることが明らかになったが、土器組成との関係を示したのが第5表である。

第5表 S D 3 埋土 2 層出土土器の組成

	壺	壺	甕	高壺	甌	鉢	片口	蓋	計
A種	225	5	76	9	0	9	1	0	325 (42.6 %)
B種	12	5	409	0	6	4	0	1	437 (57.4 %)
計 (%)	237 (31.1)	10 (1.3)	485 (63.7)	9 (1.2)	6 (0.8)	13 (1.7)	1 (0.1)	1 (0.1)	762

組成としては、壺(31.1%)と甕(63.7%)でほとんどを占めており、A種土器群とB種土器群の比率は、壺が主体のA種土器群が42.6%、甕が主体のB種土器群が57.4%である。また、壺の各分類においてその多くを占めるI・II類の数量と比率を示したのが第6表である。

第6表 壺 I類・II類の数量と比率

I A類	I B類	II A類	II B類	計
36 (32.7%)	17 (15.5%)	21 (19.1%)	36 (32.7%)	
53 (48.2%)		57 (51.8%)		110

I類とII類の比率がほぼ1:1であることが知られ、I類に比べてII類の口径の方がやや大きい傾向が認められる(第71図)ことから、両者はセットをなし、I類は壺身、II類は壺蓋として製作されている可能性が考えられる。これは、IA類とIB類が同率で、IB類とIIA類の比率が近似していることとも関連しているよう。こうしたA種土器群と壺I類・II類の強い相関性が他の器種においてB種土器群とのような関係にあるのか、次に、土器製作のうえで各器種と両群の関係を器形と調整から考えてみる。

壺では、B種土器群の器形を示すものとして壺V類があり、VA類C-86・87・90のように内面の調整にヘラミガキのち黒色処理が行われているものと、VA類C-89、VB類C-91のように赤彩されているものがある。A種土器群のIB類C-58においても、内面の調整にヘラミガキのち黒色処理が行われており、壺VII類のなかにも認められる。壺VI類についても、VIA類C-83、VIC類C-80はB種土器群の器形と理解される。また、B種土器群に、A種土器群の器形を示すものとして壺III A類C-81がある。

壺では、A種土器群の壺II A類C-101が、B種土器群の壺II A類C-102とほぼ同じ器形を示している。

甕では、A種土器群の甕I D類C-115は、大きさは異なるが、B種土器群の甕I D類のC-106と器形、調整の共通性がみられる。

この他、甕III類C-120、片口土器C-123については、この時期の類例はみられないが、栗

閉式の樂遺跡II期・III期土器群には認められる。しかし、甕III類の類例は器形的にやや細長く、頸部に屈曲あるいは段をもつことなどにおいて異なっており、片口土器の類例も頸部に段があり体部外面も刷毛目調整と異なっている。これは、壺I A類におけるI期七器群とII期・III期土器群の違いと共通しており、C-120とC-123は甕I A類と同様、B種土器群に含まれている可能性が考えられる。また、高坏II～IV類については器形の全容が不明なため比較することは難しいが、住社遺跡出土の高坏（加藤：1989）と比較すると、やや脚部が長く、坏部と脚部の接続部分の幅も小さい傾向があり、器形的にやや異なる可能性もある。

これらのこととは、高坏に不明な点はあるが、坏、壺、甕には、A種土器群にみられるB種土器群の器形や調整技術、あるいはB種土器群にみられるA種土器群の器形の存在が認められ、両土器群の密接な関連性を示しているといえる。土器組成全体からみても、各土器群ごとでは器種組成が成立しないことは明らかであり、両土器群の製作は一体のものとして行われていたと考えられる。その点では、土器組成に高い比率を占める煮沸具と大型の貯蔵具がB種土器群に含まれ、食膳具・小型の貯蔵具のなかで主体となる壺の製作にA種・B種の製作技術的な交錯性が認められることは、B種の土器製作者がA種の製作にも関わっていることを示していると考えられる。

#### ・埋土1、3、4層出土遺物

S D 3 埋土1、3、4層からは、埋土2層と比べると少ないが、地点とレベルが記録されている遺物が1層：227点、3層：141点、4層：147点出土している。これらの遺物のなかで、土師器の製作方法については、A種土器群とB種土器群がみられ、器種との関係では、A種土器群の主体である坏I類、II類、B種土器群の主体である甕I類が各層で組成されており、埋土2層出土土師器の共通性が認められる。ここでは、他の遺物も含めて埋土2層出土遺物との比較を行っておきたい。

3・4層からは溝の機能時を示す遺物が出土している。その数量は少ないが、埋土2層と共通する土師器坏I・II・V類がみられる。4層出土の坏VA類C-134、VC類C-135の2点の内面調整にはヘラミガキのうち黒色処理が行われていることや、甕の体部外面調整も2層とほぼ同じ傾向を示していることから、2層出土の土師器とそれほど時期差はないと考えられる。2層にみられない器形としては、4層出土の高坏I類C-136がある。須恵器模倣の高坏と考えられる。また、3層出土の壺IB類C-129は、楽遺跡10号住居跡出土土器に類例（工藤：1982・甕I類・小型と分類されている：P.189-11）が求められる。大きさは異なるが、器形とともに調整も共通しており、2層とほぼ同じ時期であることを示している。この他、3層出土の筒形土器C-131、132は、この地域では認められておらず、福島県でも数例出土している（柳沼：1987）が、関東地方に多くみられるもので、他の地域に出自が求められる。カマドから出土す

る傾向がみられ、手捏土器とともに2個出土している例や支柱としての報告（栃木県文化振興事業団：1987）もあり、土製品としての用途が考えられている。C-132の外面には受熱によると考えられる器面の剥落が認められ、こうした使用方法と関係している可能性がある。C-131と132は胎土、焼成、製作方法がほとんど同じで、外面の調整もヘラミガキされており、同一個体の可能性もあるが、器厚からみると別個体と考えられ、2個あったものと推定される。

1層からは溝の廃絶時以降を示す遺物が出土している。土器は2層と共通する器種も多く、坏ではI類、II類、V類が出土しており、甕の体部外面調整もほぼ同じ傾向を示している。2層にみられない器形として、A種土器群には坏ⅢB類C-47、坏VIB類C-46、鉢I類、壺III B類、B種土器群には坏VIE類C-48、甕II類などがある。このうち、A種土器群のC-46は、B種土器群の器形を示していると理解される。この他、蓋としたC-141は端部に刻目が認められ、内外面に赤彩されている点で他の蓋と異なっている。また、甕には、頸部に段をもち体部外面が刷毛目調整されているIDc類C-54が1点だけみられる。全体の器形は、2層出土のC-106とほぼ同じであり、平底の底部はヘラケズリによってやや上げ底風になっている。この土器は、栗畠式に特徴的な器形と調整を示しており、1点だけの出土ではあるが、溝の埋まる下限を示していると理解される。前述のように、1層下部には自然堆積層があり、出土遺物にもやや時間幅のあることを考えると、この層の堆積時期については、2層堆積以降、栗畠式の初期を下限としておきたい。

#### ・ SD 3 の所属時期

埋土1～4層出土遺物の検討からは、溝の廃絶につながる埋土2層の堆積時期は、古墳時代後期の住社式期のなかでも最も新しい段階に位置付けられる。溝の開削時期については、底面出土遺物がないため明確ではないが、その機能時期を示す埋土3・4層の堆積時期は、埋土2層との間にそれほどの時間差は認められていない。SD 3の機能していた年代については、埋土2層出土土器の年代（6世紀末葉頃）から、それとほぼ同じか、あるいはやや逆る頃を考えておきたい。また溝の廃絶以降の埋土1層の堆積にはやや時間幅があり、下限は栗畠式期の初期と理解された。

#### ii) 各遺構の所属時期と変遷

II B期の各遺構からは、SD 3埋土2層と類似する土器が出土しており、A種土器群・B種土器群も認められる。ここでは、それらをとおして所属時期を検討し、遺構群の構成と変遷を考えてみたい。

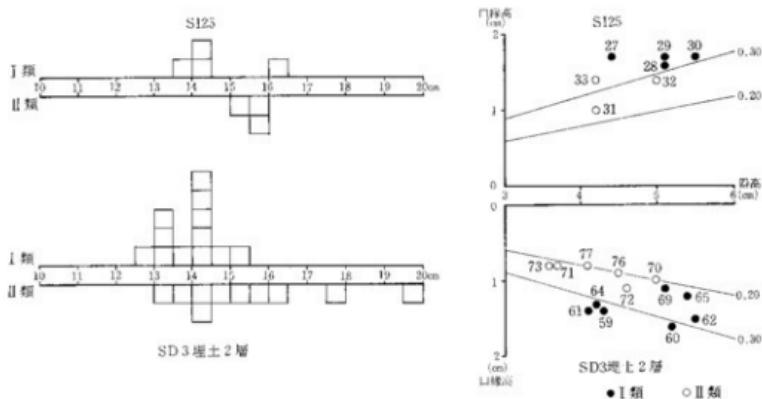
#### ・ S I 25出土遺物の検討

この住居跡からは、床面一括資料として土師器13点（C-27～39）が出土している。SD 3埋土2層の器種分類とA種・B種との関係は第7表のとおりである。

第7表 S I 25 出土土器の器種と数量

	壺I A	壺I B	壺II A	壺II B	壺II A	壺I B	壺I D	甌	鉢
点数	2	2	2	1	1	1	1	2	1
A種	1	1	2	1	1				
B種	1	1				1	1	2	1

壺、壺のほとんどがA種土器群で、壺、甌、鉢がB種土器群であり、壺I A類C-28・I B類C-29と壺II A類C-34に製作方法の交錯がみられる。A種土器群の壺5点のうち3点には黒色仕上げ処理が行われている。甌、甌には大小2種類があり、甌C-37と甌C-38はセットをなすものと考えられる。体部外面の調整はヘラナデを主体にしている。これらのこととは、S I 25出土土器が、器種組成、製作方法においてSD 3埋土2層出土土器との共通性が高いことを示しているが、B種土器群において甌はSD 3では器形のわかるものは出土しておらず、鉢にもC-39のように比較的胎土に砂粒の混入が少なく、口縁端部が外へ開く器形はみられないことや、壺V類がS I 25から出土していないため、時期的な同時性は明確ではない。他の遺跡などとの関係では、甌C-37と甌C-36の類例が住社遺跡出土土器（志間：1957、第3図2、17）や、当遺跡で住社式期とされている第11次調査23号住居跡（結城他：1984）に認められる。SD 3埋土2層出土土器とほぼ同時期と考えられる栗遺跡10号住居跡とは、壺II A類は共通するが、甌（工藤：1982:p.189-190）の形態は異なっており、S I 25と住社遺跡との類似性が高い可能性はあるが、両者の時期的な関係は明確にはならない。そこで、A種土器群の主体である壺I類・II類の器形と調整を図示した土器で比較してみることにする。

第72図 壺I類・II類の口径分布（推定値を含む）  
（数字は遺物番号を示す。器高は一部推定値を含む）

器形では、口径の分布を第71図に、器高と口縁部の高さ（口縁高）の関係を第72図に示した。口径では、両者ともI類のほうがII類よりやや小さい傾向がみられる。分布はS I 25に比べてSD 3のほうがまとまりがなく、SD 3のII類は13~20cmと分布幅が広く、集中する傾向は認められない。また、S I 25のI類・II類の口径よりも小さいものがSD 3には比較的多くみられる違いがある。器高と口縁高の関係においては、口縁高はS I 25ではI類：1.6~1.7cm、II類：1.0~1.4cmで、1.5cmを境にI類とII類が分かれるのに対し、SD 3ではI類：1.1~1.7cm、II類：0.8~1.1cmで、1.1cmを境に分かれる違いがあり、それは器高に対する口縁高の比率にも反映されている。つまり、I類ではS I 25：0.30以上、SD 3：0.22~0.34、II類ではS I 25：0.24~0.33、SD 3：0.20~0.23という数値を示す。器高もSD 3に低いものが多い。

調整では、I類・II類とも口縁部外面はヨコナデであるので、体部外面について第8表のように分類し、それを第9表に示した。

第8表 壱I類・II類の体部調整の分類

内 面	a : ヨコナデ	外 面	1 : ヘラケズリ
	b : ヨコナデのち放射状（単線）ヘラミガキ		2 : ヘラケズリのちヘラミガキ
	c : ヨコナデのち放射状（複線）ヘラミガキ		※ a~c は、内外面あるいは片面に黒色仕上げ処理の行われるものが多い
	d : ヨコナデのち非放射状ヘラミガキ		
	e : ヘラミガキ		
	f : ヨコナデのち黒色処理		
	g : ヘラミガキのち黒色処理		
	h : 不明		

第9表 S I 25・SD 3の壱I類・II類の体部調整

		S I 25							SD 3								
内 面		a	b	c	d	e	f	g	h	a	b	c	d	e	f	g	h
外 面	1	I類	3				1			1					1	2	
		II類				1				4				1			
	2	I類								2	2	2	2				
		II類	2							3	1	2					

第9表からは、S I 25に比べてSD 3のほうがヘラミガキが多く用いられており、調整の多様性があることが知られる。S I 25の資料数が少ないこともあるが、SD 3では内面調整において特徴的な放射状のヘラミガキが施されるb・cは5点みられるのに対し、S I 25にはなく、そのうち黒色処理の施されるgもSD 3に認められる。

こうした違いについては、S I 25とSD 3の構造的性格にもとづく可能性はあるが、前述の

ように土器組成や製作方法に共通性が認められ、坏I類・II類の比率もほぼ1:1であることからすれば、時期差として理解することが妥当であると考えられる。つまり、S I 25の時期からS D 3の時期にかけて、器形的な変化として、口径の小さいものが増えること、器高・口縁高の低下とともに口縁高／器高が小さくなること、調整の変化として、多様化が進むことなどがその特徴としてあげられる。しかし、この変化については、S I 25のI類のように、比較的口縁高の高い器形がS D 3にもみられることから、それが漸移的であることを示している。また、土器製作のうえで、口径の安定性がなくなることは、製作技術とともに、製作者のA種土器群への関与の変化とも理解され、調整におけるヘラミガキの多用やそのうち黒色処理が行われるようになることなどと関連していると考えられる。

これらのことは、それほどの時期差はないにしろ、S I 25のほうがS D 3より古いことを示しており、II B期に2時期の変遷を考えることができる。S I 25出土土器の編年的位置については、B種上器群に比較資料は少ないが、住社遺跡出土土器に類例の求められる土器があることから、そこを上限とし、土器組成や製作方法に共通性が認められるS D 3埋土2層出土土器に先行する時期と理解しておきたい。また、II B期の細別については、S I 25出土土器によって「II B期古」、S D 3埋土2層出土土器によって「II B期新」とする。

#### ・遺構群の変遷

II B期古・新の設定にもとづいて、各遺構の所属時期について検討していく、遺構群の変遷を考えてみたい。

S D 3・S I 25を除くII B期の遺構としては、S I 5、S I 6、S I 8、S I 9、S I 11、S I 23、SK 7がある。S I 5では、A種土器群の土師器坏I類・II類・VI類4点が出土している。すべて破片ではあるが、床面から出土しているIA類C-1は、器形的にS D 3出土のC-62に類似していること、埋土1層出土のC-3はS D 3から1点出土しているC-80に類似し、VIC類に分類されること、II A類C-2の口縁高が0.9cmであることから、時期はII B期新の可能性が高い。S I 6からはA種土器群の土師器坏IA類C-5、IB類C-6が埋土1層から出土している。とともに破片ではあり、口縁高はいずれも1.6cmと比較的高いが、新古のどちらに属するかはわからない。S I 8では、床面からA種土器群土師器坏A1類C-9とB種土器群土師器C-7・8が出土している。C-9は口縁端部を欠損しており、口縁高は不明である。土師器壺C-7の器形は、S D 3の分類にも含まれておらず、この調査では出土していない。そのため、細別時期は不明であるが、他の遺跡にC-7の類例を求めるとき、住社遺跡出土土器(斎藤:1991)のなかに1点(1号住居跡16)認められる。C-7のほうがやや大きいが、内面の底部上端にみられる稜線も共通している。S I 9からはA種土器群の土師器坏IA類C-10、11が貼床から出土している。ともに破片ではあるが、口縁高はC-10が0.8cm、

C-12 が 0.9 cm で、SD 3 の II A 類に共通しており、II B 期新に属する可能性がある。SI 11 からは、A 種土器群土師器坏 C-12~15 と B 種土器群土師器 C-16・17 が出土している。C-12~15 については、すべて破片であり、埋土 1 層出土ではあるが、層厚が薄いことからこの住居に伴う可能性が指摘されている。そのうち、C-14 は口縁高の器高に対する比率が 0.22 と SD 3 の II B 類と共通している。C-15 は、SD 3 の分類にも含まれておらず、内外面ともヘラミガキが施されている。内面ヘラミガキ調整である点では SD 3 の VID 類 C-84 に共通しようか。壺 C-16 は、器形としては SI 25 C-36 と類似するが、わずかに体部に膨らみがあり、調整では体部外面が刷毛目調整されていることで異なっている。これらのことから、SI 11 は II B 期新に属すると考えられる。SI 23 は、出土遺物が少なく、土師器の破片資料だけであり、細別時期は明確でない。胎土、焼成、調整などの観察から、貼床から A 種土器群の坏 VII 類 1 点（内外面黒色仕上げ処理）、B 種土器群の内面ヘラミガキのち黒色処理が行われている坏 1 点などが出土している。SK 7 からは、A 種土器群土師器鉢 C-143、B 種土器群土師器壺 C-144 が出土している。C-143 の胎土にはやや砂粒が含まれている。器形は、SD 3 の分類には認められない。坏の出土がないこともあり、新古どちらに属するかは不明である。

以上のように、II B 期には新古のわからない遺構もあるが、細別時期と各遺構との関係を示したのが第 10 表である。

第 10 表 II B 期古・新の遺構

II B 期古	SI 25	
II B 期新	SD 3 SI 5、SI 9、SI 11	SI 6、SI 8、SI 23、SK 7

遺構の配置は、SI 25 が A-16 グリットに位置しているが、他の遺構は SD 3 のある A・B-7 グリット以西に位置している。特に、II B 期新の時期には、幅が約 7 m の SD 3 をはさんで、東側には遺構がみられず、西側にだけ竪穴住居跡及び竪穴遺構が展開し、それらの方向性が、SD 3 とほぼ同じ傾向を示しており、大溝で区画された居住形態を示している。土製品との関係では II B 期の竪穴住居跡や SD 3 からも出土している土玉や土製紡錘車などの土製品のいくつかは A 種土器群と同様の方法で製作されている。基本層 I 層から出土している土製品にもその特徴がみられ、主な分布が A・B-7 グリット以西であることとも関連している。また、新古の不明な SI 6、SI 8、SI 23、SK 7 も同じような配置をとっており、SI 8 を除く各遺構の方向性も SD 3 とほぼ同じ傾向を示すことは、これらの遺構も SD 3 との関連性のうえに理解されるが、細別時期については、遺構間の新旧関係や密接した配置がみられ、それらすべてを II B 期新とするには難しい面もある。土器の製作方法や器種との関係が共通していることは、坏 I 類に新古両者にみられる形態のことからも、II B 期古から新への連続

した変化ととらえられ、新古の不明な遺構のなかにはII B期古に属する遺構のあることも考えられ、それは、時期の明確でないSD 3の開削時期とも関係している。

いずれにしても、II B期新の時期にはSD 3で区画された居住形態を示しているこれらの遺構群は、土器のあり方からみても、この地域の一般的な集落とは異なることが推定される。関東方面に出自をもつA種土器群の安定した組成や、SD 3埋土3層から出土した筒形土器は、人の移住とともに生活様式も移入されていると理解されるが、B種土器群も安定して組成されており、土器製作のうえで、A種とB種の交錯性もみられることは、この集落の構成員が他地域の人だけではないことを示している。大溝SD 3の性格については、出土遺物からはわからないが、その幅からすると単なる区画溝とは考えにくく、防御的な機能をもつ可能性もあり、地域集団との関係に不安定な要素のあることとも受け取れる。

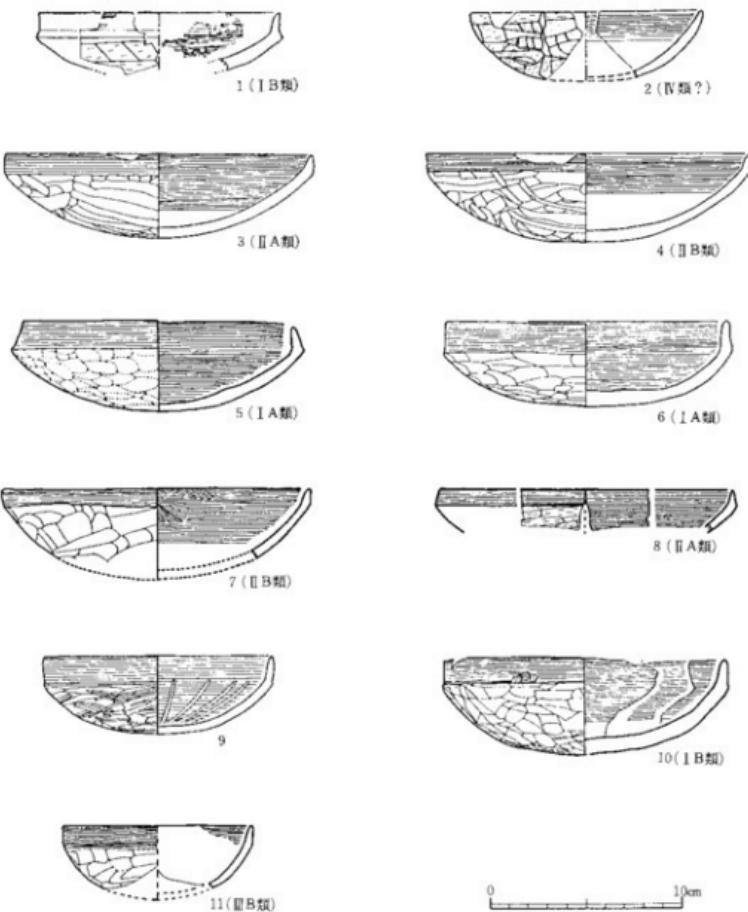
では、こうした居住形態の背景にはどのような要因があるのか、南小泉遺跡周辺においてA種土器群の出土する遺跡をとおして考えておきたい。

### iii) 遺跡周辺出土のA種土器群

南小泉遺跡周辺の名取川下流域では、本稿II B期のA種土器群と類似する土器は、南小泉遺跡第11次調査地点や、第1図の遺跡分布図では藤田新田遺跡、郡山遺跡などで認められている。それらの器種はほとんどが壺であり、主なものを第73図に11点示した。SD 3の分類では、壺I～III類がみられ、他の器形もあるがその数は少なく、壺I・II類が多い傾向がある。ここでは、SD 3や他の遺跡との比較を行いながら、それらの編年的位置を検討してみる。

南小泉遺跡第11次調査地点（結城他：1984）と藤田新田遺跡（後藤他：1992）から出土した4点については、B種土器群が不明であるが、II B期古新的土器と比較してみると、1（I B類）は口径が推定で12.9cmと小さく、口縁高も1.3cmと低く、II B期新に属する可能性がある。2はIV類と類似する外面ヘラケズリ調整の壺である。ともに偏平な球形を呈するが、IV類では、口縁端部もヘラケズリによる面取りが行われている点で異なっている。しかし、全体の器形や調整は共通するところがある。3（II A類）と4（II B類）は、II B期新の壺II類の特徴と一致する。口縁高も低く、器高に対する比率も3が0.23、4が0.20であり、対比資料としては、C-77（II A類）、C-78（II B類）があげられる。この2点と同じ層位からは、平底であるが、口縁部から体部上半にかけては壺III A類と類似する壺が出土している。

郡山遺跡では、A種土器群の出土は比較的多く、S I 260の5～7（木村他：1983）、S I 1206の8（結城：1989）、S I 1299の9（斎野：1991）は、B種土器群とともに出土している。S I 260で共伴する壺（B種土器群）の器形は、S I 25のC-38の大型品とも理解され、また、他の遺跡との比較では栗遺跡10号住居跡出土の壺（丁藤：1982、p.189-190）とは、体下部の径がやや大きいが、器形や調整にも類似性がみられ、II B期に位置付けられる可能性がある。壺



1・2：南小泉遺跡第11次調査 S D46  
 3・4：藤井新田遺跡 S D302、6層  
 5～7：郡山遺跡第35次調査 S I 260床面  
 8：郡山遺跡第79次調査 S I 1206、2層  
 9：郡山遺跡第87次調査 S I 1299床面  
 10：郡山遺跡第35次調査  
 11：郡山遺跡第68次調査  
 ※各報告書より転載

第73図 遺跡周辺出土のA種土器群坏（カッコ内は本稿分類）

の比較では、5（IA類）と6（IB類）は口縁高が1.5~1.7cmと高く、器高に対する比率は5が0.31、6が0.35である。II B期新でも、壺I類に口縁高の器高に対する比率が0.30を越えるものはあるが、それらは口径が小さく、口縁高も1.3~1.4cmと低いことから、この2点はII B期古に属すると考えられる。7（IIB類）とともに、口径や器高、内面の調整にも共通性がみられ、S I 260の時期を示している。S I 1206は、共伴する甕と瓢（B種土器群）が、栗遺跡I期土器群の時期に比定されており、8（IIA類）は破片資料ながら口縁高が0.9cmと低いことから、II B期新に属する可能性が高い。S I 1299出土の9は、IA類に類似するが、口縁部に最大径がある点で異なっており、共伴する壺（B種土器群）とともに名取市清水遺跡の第III群土器（丹羽他：1981）を介して住社式のなかに位置付けられ、口径の小さいことから時期的にはやや降る可能性などが指摘されていた土器である。南小泉遺跡II B期には認められない器形であり、B種土器群の器形として理解することもできる。しかし、A種土器群との胎土、調整が共通することや、口径が12.2cmと小さいことからすると、II B期新に属する可能性もある。10・11は遺構からの出土遺物ではない。10（IB類）は第24次調査（木村他：1983）の北東部から出土しており、口縁高が1.3~1.4cmで、器高に対する比率が0.25と小さく、II B期新に属する可能性がある。11（IIIB類）は第68次調査（木村：1988）で出土している。

このように、名取川下流域において分布するA種土器群の壺の多くには、南小泉遺跡II B期に併行する時期を考えることができる。そのなかで、郡山遺跡ではA種土器群とB種土器群による土器組成がみられ、南小泉遺跡のII B期古新に対応して、S I 260、S I 1206に伴う集落が存在している可能性がある。特に、図示した壺5~11は、すべて遺跡の北部地区（第24、35、61、68、79、87、88、98次調査地区）から出土している。この地区は、7世紀後葉とされるI期官衙の中核域にあたり、それに先行する郡山遺跡第2段階の竪穴住居跡などの遺構も多いところである。各遺構の出土遺物が少ないとから、時期のわかる遺構は限られるが、II B期や栗園式期の古い段階の遺構の存在、須恵器ではII型式後半からIII型式にかけての出土例（田辺：1966・1981、TK 43~TK 217）も認められ、I期官衙の成立に繋がる集落の継続性が推定される。郡山遺跡では、こうした遺構群の変遷は遺跡の南端部など他の地区でも推測されるが、ここでは、南小泉遺跡II B期遺構群の性格について、この北部地区との関係から地理的環境を含めて検討しておきたい。

#### iv) 南小泉遺跡と郡山遺跡

第1図にみるように、二つの遺跡は名取川の支流である広瀬川の南北両岸に位置している。立地からすると、北岸の南小泉遺跡でA種土器群が多く出土するところは第22次調査区とその周辺であり、微高地の南辺付近にあたる。南岸の郡山遺跡北部地区も、段丘崖の縁辺部にあた

り、両地区は広瀬川を挟んで最短距離にあり、直線距離にして2kmと、目視可能な位置にあることが知られる。これは、南小泉遺跡II B期と郡山遺跡のS I 260、S I 1206などが時期的に併行するとした場合、集落の同時性や土器の共通性だけではなく、両者の密接な関連性とともにA種土器群の背後に他地域からの人の移住を考えると、水上交通路を重視した計画性のある占地がなされた可能性がある。この二つの地区的遺構群の展開については、南小泉遺跡ではII B期新の時期にSD 3が廃絶され、それ以降の集落の営みが近接するこれまでの各調査を含めても希薄であるのに比べ、郡山遺跡ではその前後からI期官衙の時期にかけての集落の継続性が推定される違いがある。SD 3の廃絶要因については明確でないが、郡山遺跡との関係において、北岸の大溝を伴う集落の機能そのものが必要ではなくなったこともひとつの要因として考えられ、SD 3埋土2層の人為的な堆積状況とも関連しているのではないだろうか。郡山遺跡I期官衙の成立は、こうした動きの延長にあると考えられ、南小泉遺跡のII B期遺構群は、その初期の重要な役割を果たした集落と位置付けられる可能性がある。また、II B期の居住域を区画する大溝SD 3の方向は、郡山遺跡I期官衙の区画線の方向：東偏約30度とほぼ一致している。この方向は、郡山遺跡では広瀬川に沿った段丘などの崖線に影響された結果（斎野：1990）と考えられており、南小泉遺跡でも同様の可能性がある。両者の関連性については、今後その時期差を含めた検討（註5）が必要とされよう。

### ③ II C期

遺構は、竪穴住居跡4軒（S I 12、21、22、26）、土坑1基（SK 9）が検出されている。各遺構の所属時期については、最初に出土遺物の比較的多いS I 12とS I 22について検討したい。

S I 12については、床面から須恵器盤E-6が出土している。口縁端部が平坦になっている特徴は、清水遺跡の第V群土器や郡山遺跡でみられるが、小型である点ではやや降る可能性がある。土師器C-18・20の類例は、郡山遺跡のII期官衙外郭大溝（木村他：1985）からも出土しているが、藏王町塩沢北遺跡第2群土器（小川：1980）には土師器坏C-18と壺C-19の類例がともに認められている。この土器群は栗団式でも新しい時期に位置付けられており、7世紀中・後葉とされる清水遺跡第V群土器に後続することが指摘されている（丹羽他：1981）。このことから、S I 12の年代的には7世紀末葉～8世紀初頭頃と推定され、郡山遺跡II期官衙とは併行する時期と考えられる。

S I 22については、土師器坏C-23・24はいずれも弱い丸底で、C-23の外面には軽い稜はあるが、内面には肩曲はみられない。調整は、外面は体下部をヘラケズリしたのち、口縁部から底部までヘラミガキが施されており、内面はヘラミガキのち黒色処理がなされる共通性がある。この坏にみられる特徴は、国分寺下層式（氏家：1961、1967）として設定された土器群

の中に類似するものがあるが、両者を比較すると、C-24と類似する国分寺下層式の大型の壺が平底に近いことや、C-23のように口縁部が直線的に外傾するものが国分寺下層式ではないことから、S I 22のほうが古いと考えられる。C-23・24と土師器高壺C-25を含めた類例は郡山遺跡のII期官衙外郭大溝（木村他：1985）からも出土しているが、C-23のように口縁部ヨコナデのちヘラミガキの行われている壺は少ない。S I 22の出土遺物が少ないとから比較することはできないが、高壺C-25の類例は8世紀前半とされている元袋III遺跡（現在は元袋遺跡）のS I 18（渡部：1987）からも出土しており、年代としては、やや船をもたせ、7世紀末葉～8世紀前半頃としておきたい。

次に、S I 21、S I 26、S K 9については、出土遺物が少なく、すべて破片資料であることから明確な時期はわからないが、可能性について述べておきたい。S I 21から出土した土師器C-22は、器形としてはS I 12のC-18に類似しており、ほぼ同じ時期の可能性がある。S I 26については、土師器壺C-42、壺C-41の特徴からすると、S I 12と同じかあるいはそれよりは古い可能性が考えられ、類例は郡山遺跡でも出土している。また、S I 26とS K 9から出土している土師器壺C-40とC-145の2点は、胎土・焼成の特徴がII B期のA種土器群とほぼ同じであり、その系譜を引く土器と考えられる。A種土器群の壺との器形の類似性はあるが、口径が小さく、C-40の内面はヘラミガキのち黒色処理がなされている。

このほか、II C期の遺物としては、基本層I層から須恵器壺E-34・35が出土している。

以上のように、II C期は、古墳時代後期後半から奈良時代にかけて、土師器の編年では栗園式から国分寺下層式にかけての時期にあたり、遺構数にみられるように大きな集落の形成は認められない。

#### ④ 細別時期の不明なII期の遺構・遺物

出土遺物に細別時期を示すような遺物がない遺構として、S I 7がある。出土した土師器には製作にロクロを使用したものがないことから、II期の遺構と考えられる。

また、遺物としてはS I 16のP 1出土の須恵器壺E-14がある。E-14は平安時代の竪穴住居跡であるS I 16の廃絶時に伴うものと考えられるが、製作年代についてはII期に属する可能性がある。

#### ③ III期（平安時代）

この時期の遺構としては、区画施設2条、竪穴住居跡12軒、溝跡4条、土坑2基などが検出されている。III期は、東北南部の土師器編年では表杉ノ入式の時期にあたる。最初に、出土遺物の比較的多い6軒の竪穴住居跡について、土器の分類とその属性の比較から細別時期の検討などを行い、次に、そのほかの遺構を含めて集落の変遷について考えてみたい。

#### ① 細別時期の検討

奈良・平安時代の土師器・須恵器の変遷については、製作技法や器形的な属性から細分が行われてきており（岡田・桑原：1974、白鳥1980、丹羽1982他）、時期が新しくなるほど口径に対する底径の比率が低下する傾向や、底部切り離し後の調整が行われなくなる傾向などが明らかにされている。本稿においても、こうした研究成果をふまえて細別時期を検討していきたい。対象となる資料は、堅穴住居跡6軒：S I 1、S I 3、S I 15、S I 16、S I 17、S I 20から出土した土師器と須恵器の坏である。

第74図に示すように、土師器坏・須恵器坏の器形は大きく6つに分けられる。つまり、外縁と口縁端部の計状からI～III類、内面の形態によってa種、b種に細分される。

I類：体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの

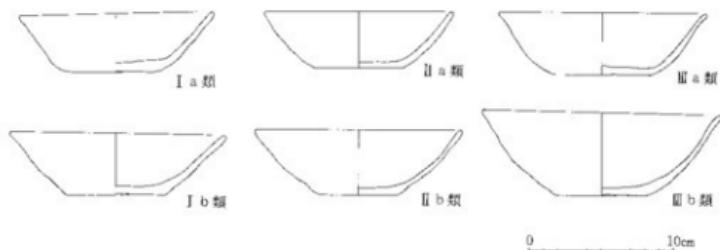
II類：体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁端部はそのまま外傾するもの

III類：体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁端部が外へ開くもの

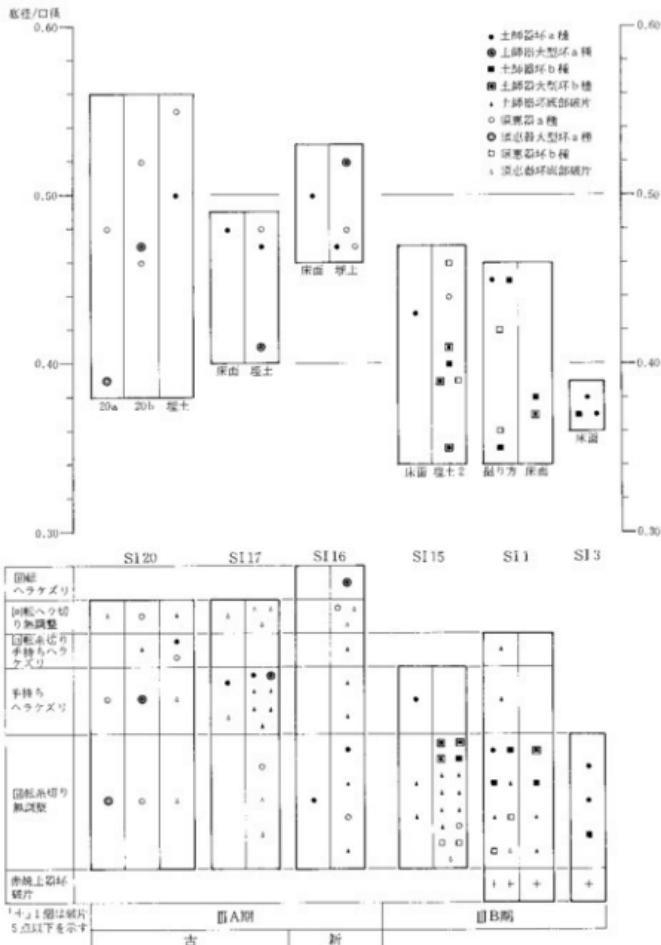
a種：内面の底部と体部の境に屈曲をもつもの

b種：内面の底部と体部の境に屈曲をもたないもの

第75図には、器形的な属性として口径に対する底径の比率（口径底径比）、a種・b種及び大きさとの関係、製作技法として底部の切り離し技法と調整の有無、種類を、堅穴住居跡ごとに示してある。口径底径比の違いと、底部の調整の有無の比率により、2時期の変遷のあることが知られることから、古いほうをIII A期、新しいほうをIII B期とする。これは、遺構間の重複関係においてS I 15(III B期)のほうがS I 16(III A期)より新しいことと矛盾しない。この変遷と器形各類と底部の切り離し技法との関係を示したのが第76図である。また、他の堅穴住居跡出土の坏を比較すると、S I 18、S I 19がIII A期、S I 3、S I 24がIII B期に属すると考えられる。これらの坏の大きさについては、口径と器高を第77図に示した。大型坏との区



第74図 III期の坏の器形分類



第75図 III A期・III B期の環 (II種底径比と底部の切り離し枝法)

別は、III A期では口径 14 cm、器高 5 cm、III B期では口径 15.5 cm、器高 5 cm を基準とした。

## ② III A期、III B期の土器群

次に、この 2 時期の土師器坏、須恵器坏を含めた土器群の内容と年代を考えてみたい。

### i) III A期

土師器坏の器形は、II a 類、III a 類を主体とし、須恵器坏の器形は、II a 類を主体としており、断面形はすべて a 種である。土師器、須恵器とも、大型坏と坏の大きさの違いは明瞭であり、坏の器高は 4.5 cm 以下である。しかし、土師器坏の口径が 13 cm 前後で、器高も 3.9~4.4 cm などに対して、須恵器坏は口径が 14 cm 前後と大きく、器高は 3.5~4.2 cm と低く、土師器と須恵器の坏の法量の違いがみられる。口径底径比では、大型坏に 0.40 前後の数値がみられるが、坏は 0.46~0.55 と 0.50 前後の数値が共通してみられる。また、器高口径比は須恵器坏：0.25~0.30、土師器坏：0.30~0.41 である。

坏の底部の切り離し技法と調整の有無、種類については、土師器、須恵器とも回転へら切りと回転糸切りがあり、切り離し後の調整のあるものとないもの両者がみられる。しかし、土師器においては、調整のあるものが主体となっている S I 17 と S I 20 に比べ、S I 16 では無調整のもののが多く、連続した変化のなかでの時期差として理解され、S I 17 と S I 20 の時期を III A期古、S I 16 の時期を III A期新とする。

III A期の他の器種には、土師器の壺、灰釉陶器の長頸瓶がある。土師器の壺には大小がみられる。S I 16 から出土している灰釉陶器の長頸瓶 I - 1 は、口縁端部を欠損するが、ほぼ器形を復元できるもので、黒窓 14 号窓式に比定される（愛知県教育委員会：1983、高島：1971）。

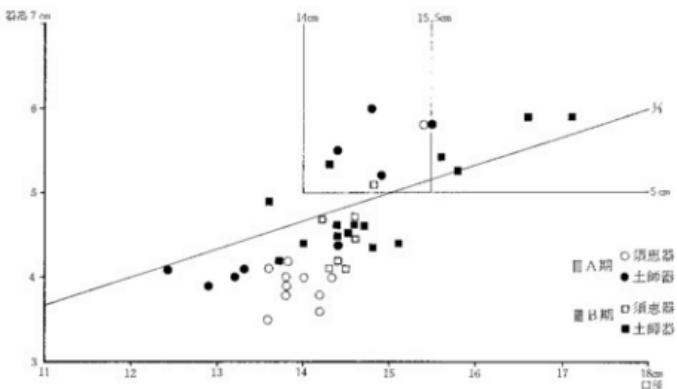
### ii) III B期

土師器、須恵器とも、坏の器形は II b 類を主体としており、法量も、坏の器高は 4.1~4.9 cm、口径は 14~15 cm と共通しているが、土師器は口径のやや異なるものもあり、個体差がみられ

	土 师 器				須 惠 器				III A	古
	II a	II a	II b	II b	I a	II a	III a	II b		
S I 20		□ ○			□	□○○	○			
S I 17	□	□ □				○				
S I 16	□ ○	○			○	□				
S I 15	□			○ ○ ○	○			○ ○		
S I 11	○		○	○○○				○ ○		
S I 3		○ ○	○							

凡例 □回転へらカケヅリ □回転へら切り無調整 ○回転糸切りのち手持ちハラカケヅリ △手持ちヘラカケヅリ ○回転糸切り無調整

第76図 坏の器形と底部の切り離し技法との関係



第77図 III A期・III B期の壺の法量分布（器高・口径）

る。大型壺と壺の大きさの違いは、土師器では比較的明瞭であるが、須恵器ではその差が小さい。口径底径比では、大型壺と壺に違いはみられず、0.35～0.46と0.40前後の数値が3軒の堅穴住居跡に共通してみられる。また、器高口径比は須恵器壺が0.28～0.34、土師器壺が0.29～0.37である。

壺の底部の切り離し技法と調整の有無、種類については、土師器、須恵器とも回転糸切り無調整がほとんどを占めている。また、須恵器の内面調整には、すべてコテナデ（小川：1987）がみられる。この調整痕は、須恵器壺II b類では底部にかけてみられるが、大型の須恵器壺I a類では体部下半にだけにみられ、断面形の相違とも関係している。

III B期の他の器種には、土師器の甕、壺、把手付の瓶、高台付壺、耳皿、灰釉陶器の椀のほか、赤焼土器の壺破片が少量伴う。土師器の甕には大小があり、内面ヘラミガキのち黒色処理された小型の甕もみられる。S I 1出土の甕D-8には赤焼土器の可能性がある。耳皿は燃し焼成されており、内外面黒色を呈する。S I 3に伴うと考えられる灰釉陶器の椀I-8は、体部上半を欠損するが、三日月高台であり、黒窓90号窯式に比定される（斎藤：1989）。

### iii) 年代と壺の形態

III A期とIII B期の土器群の様相は、多賀城跡の土器編年（白鳥：1980、1982）では、C群土器（9世紀前半）～E群土器（10世紀前半）の時期におさまるものである。III A期とIII B期をそのなかに位置付けるうえでは、多賀城跡とは遺跡の性格に違いがあることから、南小泉遺跡における土器の変化との関係もみておく必要がある。第78図は、これまでの調査で検出された主な遺構とIII A期とIII B期の土師器と須恵器の壺（大型壺を除く）の口径底径比と底部の調整

の有無を示した。土師器の出土していない遺構があるため、須恵器でみてみると、第11表のように各報告の年代から大きく4期に分けられる。

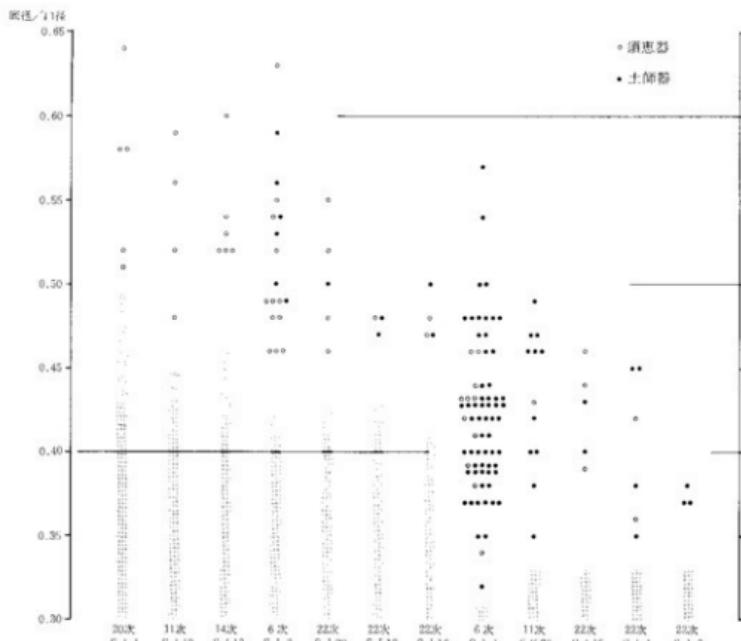
第11表 南小泉遺跡における須恵器坏の変化

遺構名	底径口径比	底部の切り離し・調整	年 代	多賀城編年
20次S I 1	0.64~0.50	回転へら切り・再調整	8 C末~9 C前	B群土器
11次S I 19・14次S I 3	0.60~0.48	回転へら切り主体	9 C前葉	
6次S I 3	0.55~0.46	再調整・糸切り無調整	9 C前葉~中葉	
6次S I 1	0.46~0.35	回転糸切り無調整主体	9 C後~10 C前	

\*遺構の年代は、(藤(1991)、結城他(1984)、佐藤洋(1987)、渡部(1983)、佐藤甲(1985))にもとづいた。

III A期の須恵器坏は、口径底径比は南小泉第6次調査S I 3とほぼ同じであるが、底部は回転へら切りと回転糸切りが主体となっている。多賀城跡では、第60次調査で「多賀城C群土器」の良好な資料が、天長八年(832年)と記された漆紙文書とともにS E 2101 B III層から出土しており(真山他:1992)、9世紀前半代におさまると考えられている。須恵器は、底径口径比が0.60~0.50を主体とし、底部は59点のうち50点が回転へら切り無調整であり、これは南小泉遺跡の11次S I 19、14次S I 3とほぼ同じ傾向がみられることから、III A期の上限を示している。下限については、9世紀後半とされる「多賀城D群土器」において、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整でほとんど占められていることから、III A期は9世紀中葉を中心とした時期と考えられる。III A期新のS I 16から出土している灰釉陶器長頸瓶I-1は、9世紀前葉~中葉とされる黒笛14号窯式(前川:1984、小森:1993)に比定され、年代的に矛盾しない。多賀城編年との関係では、III A期の土器群は、多賀城C群土器からD群土器への移行期に位置するものと考えられる。

III B期の須恵器坏は、南小泉遺跡第6次調査S I 1と底径口径比及び底部の切り離し技法はほぼ同じであるが、坏の形態では、6次S I 1が本稿のII a類とII b類を主体としているのに対し、III B期ではII b類が主体になっている違いがみられる。II b類は、多賀城IV-2期に位置付けられている仙台市五本松窯跡C群(小川:1987)において「A III類」として識別された坏の多くと同じ特徴をもっており、このC群を上限とし、10世紀第1四半世紀頃まで存続していたものと考えられている。このことから、III B期の時期は9世紀末葉~10世紀初頭頃と考えられる。これは、III B期のS I 3に伴うと考えられる灰釉陶器瓶I-8が、9世紀後葉~10世紀初頭とされる黒笛90号窯式(前川:1989、小森:1993)に比定されることと、S I 15が10世紀前半(934年以前)に降下したと考えられる灰白火山灰(白鳥:1980)より古いことと、年代的に矛盾しない。多賀城編年との関係では、III B期の土器群は、多賀城D群土器からE群土器への移行期に位置するものと考えられる。また、6次S I 1については、II a類の底径口径



底底厚/全厚		20次 S.1.1	11次 S.1.19	14次 S.1.13	6次 S.1.3	22次 S.1.20	22次 S.1.17	22次 S.1.16	6次 S.1.1	11次 SK.26	22次 S.1.15	22次 S.1.1	23次 S.1.3
回転ヘラケズリ		1		1									
回転ヘタ切り ロクロナゲ		2											
回転ヘラ切り 無頭盤		2		6		1		1					
回転系切り 手持ちヘラケズリ						1							
手持ちヘラケズリ		1	1		1	1							
回転系切り 無頭盤				2		6	1	1	1	10	1	3	2
回転系切り 手持ちヘラケズリ						1	1			3			
手持ちヘラケズリ						3		2		6	1	1	
回転系切り 無頭盤						2			2	60	10	1	3

第78図 南小泉遺跡における奈良・平安時代の坏  
(1)往底往此と底部の切り離し技法)

比が、0.41～0.46という数値を示し、III A期で主体を占めるII a類の数値よりも小さいことから、III A期とIII B期の間の9世紀後葉に位置付けられよう。

#### iv) 坯の法量の変化

III A期からIII B期にかけての土師器、須恵器の坯の法量の変化をみておきたい。第74図に示すように、土師器、須恵器ともIII A期とIII B期では口径と器高に違いがみられる。これを6次S I 1、11次SK 28の土器とともに大型坯を除いて平均値を示したのが第12表である。

第12表 坯の口径と器高

	須 恵 器		土 師 器	
	口 径	器 高	口 径	器 高
III A期	13.9 cm (13.6～14.3)	3.9 cm (3.5～4.2)	13.2 cm (12.4～14.4)	4.1 cm (3.9～4.4)
6次S I 1	14.3 cm (14.1～14.7)	4.6 cm (4.2～5.0)	14.0 cm (12.5～15.2)	4.7 cm (4.0～5.4)
III B期	14.5 cm (14.2～14.8)	4.5 cm (4.1～5.1)	14.4 cm (13.6～15.1)	4.6 cm (4.2～5.3)
11次SK 28			14.3 cm (13.4～15.3)	4.6 cm (4.0～5.1)

この表からは、土師器、須恵器ともIII A期からIII B期にかけて口径と器高の数値が増えており、坯が大型化していることが知られる。須恵器では、6次S I 1の時期にはIII B期とほぼ同じ大きさとなっている。口径の平均値はやや小さいが、これは、S I 1の10点の須恵器坯がII a類（口径平均値：14.2 cm）とII b類（口径平均値：14.4 cm）で構成されていることによる。また、9世紀末葉～10世紀初頭の年代が推定されている12次SK 28から出土した土師器坯（結城他：1984）は、II b類を主体とし、III B期の土師器坯と類似しており、ほぼ同じ法量を示している。土師器と須恵器の関係では、III A期にみられる法量分化がIII B期にはその差がほとんどなくなっていることが知られ、6次S I 1の時期はその過渡的な様相を呈している。また、数値は示していないが、大型坯も同様の変化を示す傾向がある。こうした変化については、この遺跡での現象ともいえるが、須恵器の供給地との関係などを含めて、今後検討される必要もあるろう。

#### ③ 遺構群の変遷

III A期、III B期に属する堅穴住居跡10軒の時期については前述のとおりであるが、他の遺構の所属時期を検討しながら、遺構群の変遷を考えてみたい。

SD 4は、その堆積状況において、埋土2層はシルトと砂が互層になる厚い自然堆積層であり、層中のシルト層上面で人の足跡が検出されていることから、溝の機能が停止したあと、ある程度の期間はそのままにされていたことが考えられる。埋土1層は人為的な堆積状況を示しており、出土遺物は少ないが、赤焼土器の坯破片数点と、細弁蓮花文軒丸瓦の瓦当部が出土している。この瓦は陸奥国分寺跡で細弁蓮花文鏡瓦II類と分類されているもので、多賀城IV期に

位置付けられており(多賀城跡の分類では310B)、埋没時期の上限を示している。これは、SD4と重複関係にあり、それより新しいSA1・2の構築時期の上限でもある。多賀城IV期の開始時期は貞観11(869)年直後と考えられており(宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所:1982)、D群土器の時期ではその半ば頃になる。SA1・2では、出土遺物は少ないが、掘り方埋土からは赤焼土器の壊破片が数点出土している。赤焼土器の壊破片はII期の竪穴住居跡からも出土しており、SA1・2は、それらの竪穴住居跡とは、SI24のようにすぐ近くに位置するものもあるが、重複関係ではなく、構築時期の上限からも、III期に所属すると考えられる。また、SD4埋土1層の堆積状況をふまえると、SD4の最終的に埋まった時期とSA1・2の構築時期は近接しており、それが連続して行われた可能性もある。SD4埋土2層の堆積にある程度の期間を要しているとすれば、SD4の機能していた時期はIII期に所属する可能性が高く、III期の竪穴住居跡の配置が、SD4の東側にあることは、両者の密接な関連性を示しており、SD4は区画施設としての機能をもっていたと考えられる。このほか、SD4、SA1・2と近接して平行するSD5、SD6、SD7はそれぞれの遺構とほぼ同じ時期と推定される。SD4より西側に位置するSI10、SK5・6は、III期に属する可能性がある。SI14とSB1はSD4の西側に位置しており、出土遺物も少なく、SB1がIII期古のSI17よりは新しいが、細別時期は不明である。III期、III期のいずれに属するか不明な遺構もあるが、各遺構との関係を示したのが第13表である。

第13表 III期・III期の遺構

	竪穴住居跡		区画施設・溝跡	細別時期不明遺構
III期	古	SI20 SI17	SD4 SD5	SI10 SI14
	新	SI16 SI19	SD6	SB1 SK5 SK6
	SI1 SI4 SI3 SI15 SI24		SA1 SA2 SD7	
III期				

この表からも知られるように、9世紀中葉のIII期には、真北方向のSD4を区画溝として、その東側に居住域が展開している。竪穴住居跡の方向は、真北よりやや東偏している傾向がみられ、新古の2期変遷が認められる。9世紀末葉～10世紀初頭のIII期には、居住域がほぼ全域に展開しており、そのなかをT字形に交わるSA1とSA2によって区画している。上部構造は材木列と推測される。SA1は真東西方向を示しているが、竪穴住居跡の方向は、真北よりやや東偏しているSA2に近い傾向がみられる。竪穴住居跡には2期ほどの変遷も考えられるが、遺構の残存状況が良好ではなく遺物の少ないものもあったことから、細分は行わなかった。なお、III期の居住域の広がりについては、西南方約200mに位置する若林城跡の調査(佐

藤：1986）でほぼ同時期の居住域が検出されており、その関連性も今後検討される必要がある。

#### (4) IV期（中世・近世）

この時期の遺構としては、竪穴遺構1軒、溝跡4条、土坑9基、性格不明遺構1基などが検出されている。IV期は出土遺物の年代から、A・Bの2小期に細分される。

##### ① IVA期

遺構は、調査区東部で、溝跡2条：SD 8・10などが検出されている。時期は、SD 10から源美産の陶器I-3が出土しており、12~13世紀の年代が考えられる。溝の東側にあるSD 8からは常滑産の陶器I-2が出土しており、両者の方向性がほぼ一致することから、同時期と推定される。また、SD 10の東側にはピットが集中しており、それに伴うものも少なくないと考えられる。これらのことから、IVA期には、SD 10を区画溝として、その東側に居住域が展開していた可能性がある。

##### ② IVB期

遺構は、調査区の中央部から東部にかけて、竪穴遺構1軒：SI 2、溝跡2条：SD 1・2、土坑9基：SK 1・2・3・11・12・16・19・20・21、性格不明遺構1基：SX 1などが検出されている。これらの遺構のなかで、SK 12・19・21は出土した陶器、磁器によって年代が推定され、いずれもほぼ同じ時期であることが知られ、共伴する他の遺物にも共通性が認められる。これを第14表に示した。

第14表 SK 12・19・21 出土遺物

SK 12	丹波産のすり鉢I-4 (17世紀前半) 白磁 (17世紀)	焼成丸瓦F-7・平瓦G-10 土師質土器U-1
SK 19	肥前産の磁器J-3 (17世紀)	焼成平瓦G-11
SK 21	瀬戸美濃産の陶器I-7 (17世紀前半以前)	土師質土器U-2

3基の土坑に共伴する焼成瓦は、SI 2、SD 2、SK 1・3から出土しており、土師質土器はSK 21から出土している。A-16グリットから出土したU-3・4の2点の土師質土器は、U-1・2と同じ特徴を示しており、この時期に属する可能性が高い。また、こうした遺物は出土していないが、遺構の配置関係や形態などからは、SD 2とSD 1、SK 1とSK 2、SK 12とSK 11、SK 20とSK 16はほぼ同じ時期に属すると考えられる。このほか、SP 134からも焼成瓦が出土しており、調査区東部にはこの時期のピットも分布していることが知られる。これらの遺構は、SK 12・19・21の出土遺物から、17世紀前半を中心とする近世初頭に位置づけられる。遺構群の性格については明確でないが、焼成瓦の出土が比較的多いことなどから、調査区西方に隣接する若林城跡との関連性が考えられる。

### ③ 細別時期不明の遺構

S X 1については、S D 8よりも新しいが、ピットの集中する調査区東部にあって、この遺構より新しいピットは1基だけであることから、IV B期以降の時期が考えられる。

### (5) 時期不明の遺構

I期～IV期のいずれの時期に所属するかわからない遺構は、区画施設1基：S A 3、溝跡5条：S D 9・11・12・13・14、土坑6基：S K 4・13・14・15・17・18である。このうち、他の遺構との重複関係からは、S A 1がII C期以降、S K 17、S D 13・14がII C期以前、S D 12がIII A期以前、S D 11がIV A期以前であることが知られる。また、S A 3については、若林城跡の区画方向とほぼ一致する傾向がみられ、関連する可能性もある。

## 第V章 第23次調査

この調査に関しては、始め若林城跡隣接地に於ける試掘調査として対応していたが、その結果、土師器片が出土し、住居跡と判断できる遺構の一部が確認されたため、平成4年11月から12月にかけて本調査を実施したものである。また前記したように若林城跡の関連で調査を開始したものであるが、調査内容から南小泉遺跡の内容なので、平成5年5月に南小泉遺跡の拡大の手続きをとり、その報告を第22次調査と合わせて行うこととした。

1. 調査場所 仙台市若林区南小泉三丁目 15-103
2. 申請者 東京都杉並区浜田山四丁目 20-14 阿部 武
3. 試掘調査 平成4年10月28日 約25m<sup>2</sup>
4. 本調査 平成4年11月24日～12月3日 約35m<sup>2</sup>
5. 発見遺構 (第79図)

当調査で発見された遺構は堅穴住居跡1軒、溝跡5条である。住宅建築予定箇所の南側に切り合うように発見された。以前からの住宅を解体した場所がら、所々基礎、排水管などの掘削による搅乱が及んでいたところもあった。

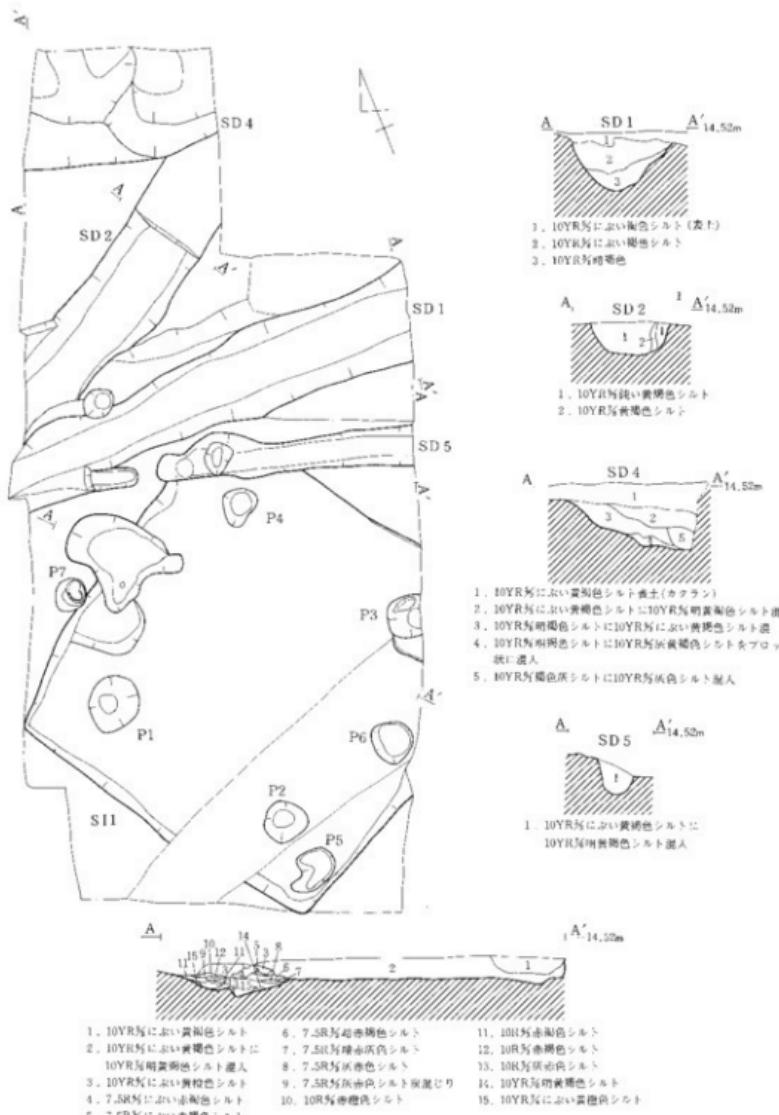
①堅穴住居跡(S I-1) 第2号溝(S D-2)と第5号溝(S D-5)に切られており、ほぼ4m四方の正方形である。カマドは北辺中央に施設されている。北辺といつてもカマドを二分する軸線はN-35°-Wである。カマドは煙道部に当たるものはないタイプのものであろう。床面からの壁の立ち上がりが約20cmあるので、削平されたとは考えにくい。

床面には6個のピットがみられる。この内、P 1とP 2、P 3と4が間隔約220cm、P 1と4、P 2とP 3が間隔約250cmで四角く組むものとおもわれる。P 6はカマドの対照的な位置にある。ピットの計測値は次のとおりである。

P 1 : 径約55cm、深さ約37cm	P 2 : 径約45cm、深さ約28cm
P 3 : 径約45cm、深さ約26cm	P 4 : 径約40cm、深さ約30cm
P 5 : 長径約55cm、短径約40cm、深さ約10cm	P 6 : 径約40cm、深さ約12cm
カマドの左脇の壁面外側にP 7があり、土師器の甕(C-6)が埋設状況で検出された。出土遺物のほとんどはカマド周辺からである。	

②第1号溝(S D-1)：東西方向の溝で、西側に若干傾斜する。最大幅が約1.2mであり、深さは最大で約50cmを計る。第3、第5号溝を切っている。住居跡関連遺物か、土師器片が多量に出土した。

③第2号溝(S D-2)：東西方向の溝である。幅が75cmで、深さ約25cmである。住居跡を切っていることもあり、第1号溝には及ばないが多量の土師器片が出土している。



第79回 第23次調査平面図：セタシニイ図



③第3号溝(S D-3)：南西～北東方向の溝である。幅約90cm、深さ約30cmで、第1号溝と第4号溝に切られている。土師器片が若干出土している。

④第4号溝(S D-4)：第3号溝を切る東西方向のものである。幅は1.2m以上、深さは調査区内で最大80cmを計るが凹凸が激しく、攪乱かもしれない。土師器片が若干出土した。

⑤第5号溝(S D-5)：第1号溝に切られ、住居跡を切っている。ほぼ東西方向で、幅約50cm、深さは状況の良好な北東側で約40cmである。土師器片が若干出土した。

#### 6. 発見遺物（第80図）

出土遺物は土師器片が殆どであるが、その他須恵器片、砥石、カマド支脚などが若干出土している。遺物は住居跡を中心として、第1号溝跡、第2号溝跡からの出土が多い。

土師器には壺、壺、高壺の器種がみられる。特に壺片が多く、ロクロ米使用・長胴系で頸部に若干の縫れが見られる。口縁部は内外面ともヨコナデされ、体部は外面が太めの縱方向のハケメ、内面が横方向のヘラナデとなっている。底部には本葉痕が見られる。

壺片は殆どが小破片であるが、口縁部と体部の境に段を持つものが多く、内面ないしは外表面が黒色処理されているものである。住居跡出土のものには関東系と見られるものもあるが、小破片のため詳細は指摘できない。

#### 7. 遺構、遺物の年代観

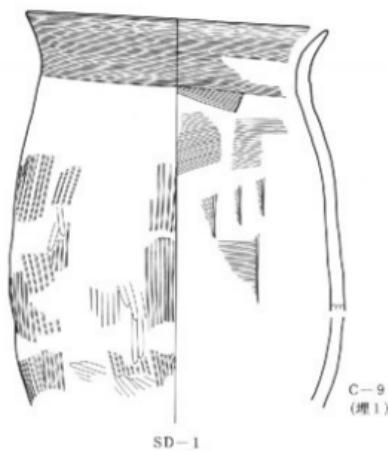
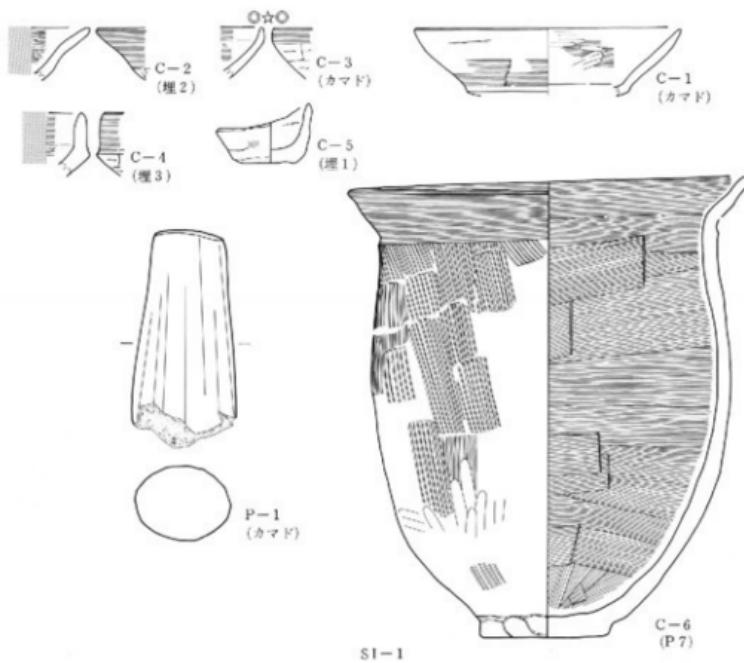
出土遺物、特に土師器の壺の観察をまとめてみると、

①胴下部の張った長胴系であること、②口縁部と体部の境に軽く段が付くこと、③体部外面にハケメが施されていることが挙げられる。

これらの特徴は仙台平野出土の土師器に照らし合わせると、住社式と栗園式の特徴に重なるものがあると判断できるが、この二型式を比較した場合、他社式壺の頸部には段の形成が見られない。また住社式の壺には前型式の南小泉式の特徴を残し、丸胴系、外面ミガキのものも若干見られるが、本来の住社式の土師器壺は「胴下部の張った長胴形であること、ハケ口擦痕がない」との特徴が指摘されているものである（志間：1981）。今回の調査区から出土した壺片にはハケ口痕の見られないものはない。

以上の特徴を総合してみると、これらの出土土師器は栗園式出現時期と把握され、6世紀末頃と考えておきたい。

遺構の年代は住居跡については土師器の年代観に連動しよう。しかしながら溝跡の年代観は把握できない。溝跡から出土した土師器は住居跡出土の土師器片と同様であるが、住居跡を切っているか近い溝跡からの出土が多い。新しい遺物も入っていないことから、住居跡以降とか捉えられない。



第80図 第23次調査出土遺物実測図

## 第VI章 ま　と　め

今回の南小泉遺跡の調査は、仙台市都市計画街路南材木町古城線建設（第22次）、共同住宅建設（第23次）に伴う緊急発掘として、1992年9月～12月に行われた。

この調査をとおして、以下のことが明らかにされている。

第22次調査では、弥生時代から近世にかけての遺構、遺物が検出された。これらは、大別4期（I期～IV期）に分けられ、II期以降は第81図に示すように細別7期にわたる遺構群の変遷が認められた。各期の調査成果を要約すると、

I期（弥生時代）：遺構は検出されなかったが、後期の天王山式土器や大型板状安山岩製石器などの遺物が検出された。

II期（古墳時代～奈良時代）：6世紀末葉を中心とするII B期には、幅7mの大溝で居住域を区画する集落の一部が検出された。この大溝の西方へ展開する居住域の広がりは不明であるが、遺構から出土した土器などをとおして、関東方面からの人の移住を伴う居住形態が知られ、広瀬川を挟んで対岸に位置する郡山遺跡との関連性が考えられた。また、その前後のII A期（古墳中期前後）とII C期（古墳後期後半～奈良時代）では、遺構の数は少ないが、堅穴住居跡などが検出されている。

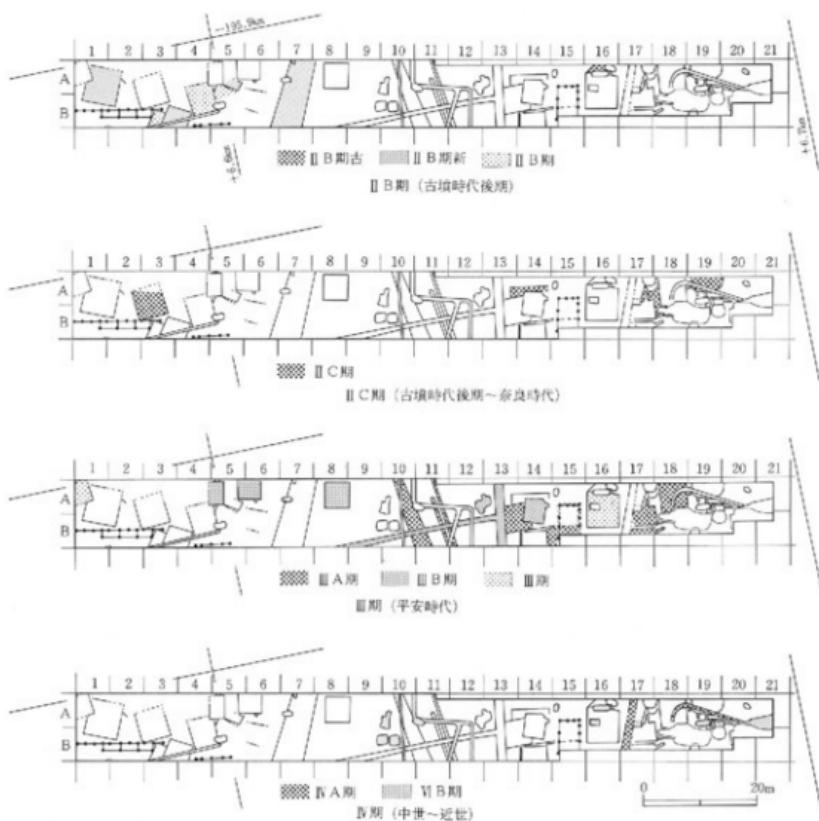
III期（平安時代）：III A期（9世紀中葉）とIII B期（9世紀末～10世紀初）に区画施設をもつ居住域が検出されている。III A期は居住域の西辺を溝で区画しており、III B期では材木列により居住域内を区画している。

IV期（中世・近世）：IVA期（12～13世紀）には溝を区画施設とする居住域の存在が推定された。また、IVB期（17世紀前半）には隣接する若林城跡との関連性が考えられる遺構群が検出されている。

第23次調査では、古墳時代後期（6世紀末葉頃）の堅穴住居跡1軒などが検出されている。

第22次調査のII B期に併行するものと考えられる。

これらのことは、今回の第22次・23次調査が、これまであまり調査の行われていなかった南小泉遺跡西端部の様相を把握するうえで貴重な成果となったことを示している。広瀬川に南面する微高地縁辺部に立地するこの地区は、近接する南小泉遺跡第6次調査や第12次調査、若林城跡の調査成果をふまえると、弥生時代から近世にかけて連續とした人類の営みが知られ、なかでも、6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳時代後期と、9世紀から10世紀前半にかけての平安時代には、大規模な集落の存在が予想され、近世初頭における若林城跡との関連性など、名取川下流域の地域史理解にとって、その重要性が再認識された。



第81図 第22次調査遺構群の変遷

註1：こうした特徴から、2枚の平瓦は一枚作りによる同じ工程で製作されており、凸面両側縁付近に叩き目の潰れがみられることから2工程を経ていると考えられる(小川：1987)。凹面側の工程では、側面のヘラケズリが行われているが、凹面の広端から直の中央部にかけてみられる指ナデ状の痕跡は意図的な布目を消すための調整としては部分的すぎる。凹面側縁のヘラケズリが時計回り方向であることから回転する凹型台の使用を考えるとすれば(小川：1987)、瓦を押さえる必要があり、凸面側の対応する位置に叩き目の潰れがあることは、凹面を押さえることもあったと推定される。

註2：A種土器群の出自をめぐる他地域の土器との比較検討は今後の課題とされるが、製作地や製作者といった要素からの変容の有無、程度をどのように識別していくのか、他の遺物などを含め、慎重なアプローチをしていく必要がある。

註3：湖西市教育委員会の後藤健一氏のご教示による。また、後藤氏には、湖西出土の須恵器について、胎土、色調など、実見しながらお教えいただきました。記して感謝します。

註4：蛭子森古墳出土の須恵器について、浜松市博物館の川江秀孝氏に実見とともに種々のご教示をいただきました。記して感謝します。また、いっしょに実見した松井一明氏からは文献の提供並びに貴重なご教示をいただきました。記して感謝します。

註5：当調査地区と郡山遺跡第2段階(I期官衙以前)との関連性については、以下の二つのことが今後の課題としてあげられる。

#### ① 小玉石の出土

郡山遺跡では「小玉石」と称される遺物の出土が過去15年間の調査で約100点報告されている。その出土は北部地区で多く、第35次調査(木村他：1984)では2軒の竪穴住居跡からまとまって出土している(S I 444:28点、S I 446:36個)。S I 444にはI期官衙に先行する時期が考えられており、S I 260あるいはS I 1206と同時期の可能性もある。この小玉石が当調査で2点出土しており、うち1点はII B期のS K 7出土である。小玉石の性格や時期、分布などについて、他の遺跡を含めた検討が必要とされる。

#### ② 東偏30度線

II B期の居住域を区画する大溝SD 3の方向は東偏30度を示している。居住域の竪穴住居跡の方向は1軒を除きN-23~38°-Eであり、SD 3の方向との関連が考えられる。郡山遺跡ではI期官衙の建物跡や材木列の方向がやや幅はあるものの東偏約30度を基準としており、類似性がみられる。しかし、この両者には時期差があり、関連性を追求するうえでは郡山遺跡第2段階における東偏約30度線の存否、SD 3の全容の解明などを前提としなければならないが、SD 3を東偏約30度で南方へ仮想延長すると、N-31°-Eの方向で郡山遺跡I期官衙の区画溝(S D 882、881、木村他：1987)とほぼ一致する。偶然とは思われるが、今後検討してみる必要もある。

## 引用文献

- 愛知県教育委員会 1983『愛知県古跡分布調査報告書（III）』
- 伊東信雄他 1961『陸奥國分寺跡』陸奥國分寺跡発掘調査委員会 河北文化事業団
- 岩見和泰他 1991「合戦原遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典 1961「土器」「陸奥國分寺跡」陸奥國分寺跡発掘調査委員会 河北文化事業団
- 氏家和典 1967「陸奥國分寺跡出土の丸底壺をめぐって」『山形県の考古と歴史』
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『研究起業』I 宮城県多賀城跡調査研究所
- 小川淳一 1980「塙沢北遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書III」宮城県文化財調査報告書第69集
- 小川淳一 1987「五本松窓跡」仙台市文化財調査報告書第99集
- 加藤道男 1990「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』II
- 金森安孝 1985「第43次発掘調査」「郡山遺跡V」仙台市文化財調査報告書第74集
- 木村浩二他 1991「郡山遺跡発掘調査の成果一変遷と性格」「第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料」古代城柵官衙遺跡検討会
- 木村浩二他 1984「第35次発掘調査」「郡山遺跡IV」仙台市文化財調査報告書第64集
- 木村浩二他 1987「第63次発掘調査」「郡山遺跡VII」仙台市文化財調査報告書第96集
- 木村浩二 1988「第68次発掘調査」「郡山遺跡VIII」仙台市文化財調査報告書第110集
- 工藤哲司 1982「柴遺跡」仙台市文化財調査報告書第43集
- 工藤哲司 1991「南小泉遺跡第20次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第153集
- 広陵町教育委員会 1987「牧野古墳」
- 後藤健一 1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」「静岡県の窯業遺跡」静岡県教育委員会
- 後藤秀一他 1992「藤田新田遺跡－仙台東道路建設関係遺跡調査概報」宮城県文化財調査報告書第148集
- 小森俊寛 1993「概要」「古代の土器2・都城の土器集成II」古代の土器研究会編
- 斎野裕彦 1988「南小泉遺跡出土の弥生時代の石器一例」『年報』9 仙台市文化財調査報告書第122集
- 斎野裕彦 1990「郡山遺跡第84次・85次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第145集
- 斎野裕彦 1991「第87次発掘調査」「郡山遺跡XI」仙台市文化財調査報告書第146集
- 斎野裕彦 1992「大型板状安山岩製石器について」「大平臺史窓」第11号
- 斎野裕彦 1994「弥生時代の大形直線刃石器（下）」「弥生文化博物館研究報告」第3集
- 斎藤裕祐他 1991「住社遺跡」「住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡」角田市文化財調査報告書第7集
- 斎藤季正 1989「灰釉陶器の研究II」「名古屋大学文学部研究論集」104
- 佐藤甲二 1985「中田畠中遺跡第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第78集
- 佐藤甲二 1986「若林城跡」仙台市文化財調査報告書第90集
- 佐藤洋 1987「南小泉遺跡第14次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第109集
- 志間泰治 1958「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第4号
- 志間泰治 1981「住社遺跡」「宮城県史」第34巻
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究起業』VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1982「VI-2土器類、VII-2(2)土器」「多賀城跡改修本文編」宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所

- 高鳥忠平 1971「平城京東三坊大路東側溝の施釉陶器」『考古学雑誌』第 57 卷第 1 号
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 辻 秀人 1990「東北古墳時代の画期について（その 2）」『考古学・古代史論致』
- 東北学院大学考古学研究部・仙台市教育委員会 1979『柴道跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 14 集
- 栃木県文化振興事業団 1987『稻荷塚・大野原』
- 中村 浩 1981『和泉陶磁窯の研究』柏書房
- 丹羽 茂他 1981『清水遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書 V』宮城県文化財調査報告書第 77 集
- 丹羽 茂 1983『宮前遺跡』『朽木橋横穴古墳群 宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 96 集
- 前川 要 1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『研究起要』III 濱戸市歴史民俗資料館
- 真山 哲他 1992「第 60 次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所
- 向坂綱二他 1964『蛭子森古墳』浜松市教育委員会
- 藤沢 敏 1992「引田式再論」「歴史」第 79 輯
- 柳沼賢治 1987『大根堀遺跡』郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 結城慎一他 1984『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 68 集
- 結城慎一 1989「第 79 次発掘調査」「郡山遺跡 IX」仙台市文化財調査報告書第 124 集
- 渡部弘美 1983『南小泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 55 集
- 渡部弘美 1987『元袋田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 103 集

第15表 墓穴住居跡・墓穴造構

No.	位置	断面	平面形	大きさ	方向	その他	時期	写真
SBI	A-8、9	第6回	正方形	4.4m×4.8m	N-12°~13°-E		III B	6
2	A-9、10	第8回	隅丸長方形	1.6m×3.4m以上	N 12°-E	墓穴造構	IV B	7
3	A-5、6	第9回	方形	4.1m×3.4m以上	N-13°-E		III B	8
4	A-4、5	第11回	長方形	4.2m×2.8m	N-12°-E		III B	9
5	A-5	第13回	長方形	1.8m×1.8m以上	N 58°-E	墓穴造構	II B 新	10
6	5	第14回	方形	1.6m以上×1.6m以上	N-25°-E	墓穴造構	II B	11
7	6	第15回	方形	2.8m×4m	N-22°-E			
8	4、5	第16回	方形	4.4m×5m以上	N-4°-W		II B	12
9	B-3、4	第17回	方形	4.4m×3.6m以上	N 38°-E		II B 新	13
10	A-1	第18回	方形	3.6m以上×3.8m以上	N-8°-W		III	14
11	1、2	第19回	方形	6.2m×6.6m	N-23°-E		II B 新	15
12	2、3	第21回	方形	5.6m×5.2m	N 7°-W		II C	16
13	A-2	第22回		2.4m以上×2m以上	N-30°-W		II A	
14	16	第23回	正方形	6.2m×6.4m	N-15°-E		III	17
15	14	第25回	正方形	4m×4m	N 20°-E	埋土1層下部に灰白色火山灰	II B	II B
16	13、14	第29回	方形	4.6m×4.6m以上	N-84°-E		III A 新	
17	B-14、15	第31回	方形	6m×3.4m以上	N-7°-E		III A 古	20
18	17、18	第33回	方形	3.2m×3.8m以上	N-8°-E		III A	21
19	B-17	第35回	方形	4.4m×0.8m以上	N-83°-W		III A	22
20	A-18、19	第36回	方形	2.4m以上×5m以上	N-6°~7°-E		III A 古	23
21	17、18	第39回	方形	2.8m以上×2.9m以上	N-23°-E		II C	
22	A-19	第40回	方形	5.6m×2.4m以上	N 75°-W		II C	25
23	B-3	第41回	方形	1.8m以上×3.6m以上	N-35°-E		II B	26
24	A-12、13	第42回	方形	2m以上×3.2m以上	N-1°-W		III B	27
25	A-16	第43回	正方形	2.6m以上×2.4m以上	N-23°-W		II B 古	28
26	14	第46回	方形	6.7m×1.6m以上	N 81°-W		II C	30

第16表 挖立柱建物跡

NO	位置	断面	向き	桁行	梁行	方向	その他	時期	写真
SBI	15	第47回	南北棟	5.7m以上	3.7m	N-15°-E	桁行3間以上、梁行3間	III	32

第17表 区画施設

NO	位置	断面	検出長	方向	その他	時期	写真
SA1	B-8~13	第49回	29.2m	N-90°-EW	柱の抜き取りあり	III B	33~36~37
2	13	第49回	11.0m	N-8°-E	柱の抜き取りあり	III B	34~35
3	B-1~3		15.4m	N 79°-W			

第18表 溝跡

	位置	回数	検出長	幅	深さ	方向	その他	時期	写真
SD1	10	第49回	12.0m	0.4m	4~30cm	N~8°~E		IVB	
2	10~12	第49回	27.6m	0.9m	26~28cm	N 12°~27° E N~73° W		IVB	38
3	7	第49回	12.9m	0.9m	124cm	N~30°~E		II B新	39
4	9~10	第49回	13.6m	2.8m	85cm	N~8°~W		III A	40
5	11	第49回	9.0m	0.6m	20cm	N~10° W	SD 4と同方向	III A	
6	11	第49回	12.5m	0.8m	8cm	N~3°~W	SD 4と同方向	III A	
7	B-3~5	第19回	12.0m	0.6m	12cm	N 85° E	S A 1と同方向	III B	
8	A 18~20	第49回	15.8m	0.5m	8cm	N~17.5° E N~63° W		IV A	
9	B-14		2.7m	0.3m	5cm	N~10°~E			
10	17	第49回	9.1m	1.5m	92cm	N 24° E		IV A	47
11	A 16	第49回	3.5m	0.4m	20cm	N~69° W			
12	B-14	第49回	3.5m	0.8m	15cm	N~83° W			
13	A-19	第49回	1.1m	0.3m	12cm	N 13° E			
14	A 19	第49回	1.2m	0.3m	14cm	N~12°~E			

第19表 土坑・性格不明遺構

	位置	回数	平面形	長軸	短軸	深さ	方向	その他	時期	写真
SK1	B-10	第67回	方形	1.8m	1.6m	8cm	N~77°~W	S K 2と並んで配置	IV B	49
2	B 10	第67回	方形	1.6m	1.5m	22cm	N~81° W		IV B	50
3	A-11	第67回	橢円形	1.9m	1.2m	79cm	N~69°~W		IV B	
4	B-5	第67回	橢円形	1.7m	1.2m	17cm	N~89°~W			51
5	A 7	第67回	橢円形	1.6m	0.7m	62cm	N~89°~W		III	52
6	B-1~2	第67回		0.8m	0.5m	30cm	—		III	
7	A-6	第67回		0.5m	0.4m	10cm	—		II B	
8	A 7	第67回		0.8m	0.6m	28cm	—			
9	A-5	第67回	橢円形	0.6m	0.5m	12cm	—			
10	A-20	第67回	橢円形	0.9m	0.6m	8cm	N~53°~W		II A	53
11	A 19	第67回	長方形	1.8m	1.0m	36cm	N~78° W	S K 12と並んで配置	IV B	54
12	A-19	第67回	長方形	2.1m	0.9m	14cm	N~76°~W		IV B	55
13	B-19	第68回	橢円形	1.4m	1.0m	18cm	—			56
14	A 17	第68回	円形	2.6m	1.1m	86cm	—			
15	A-17	第68回	円形	1.9m	1.2m	32cm	—			57
16	A-17	第68回	長方形	1.4m	1.1m	64cm	N~76°~W	S K 20と並んで配置	IV B	58
17	B 18	第68回	長方形	1.3m	0.4m	29cm	—			62
18	A-16	第68回	橢円形	1.8m	1.1m	28cm	N~58°~W			59
19	A-16	第68回	長方形	3.0m	1.1m	44cm	N~76°~W		IV B	60
20	A 16	第68回	長方形	1.5m	1.2m	68cm	N~75° W		IV B	61
21	A-15	第68回	長方形	1.2m	0.8m	28cm	N~19°~E		IV B	
SX1	21			4.2m	2.7m	—	—		IV B~	63

第20表 整穴住居跡・整穴遺構出土遺物数量表(1)

S I - 1 出土遺物数量表 (総数 363点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	95	12	
2層	1		
床面	21	1	石器2、鉄斧1
P.3	35	1	
P.5	5	1	
4層	168	17	瓦1、金属製品1

S I - 2 出土遺物数量表 (総数 10点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	9		
2層			瓦1

S I - 3 出土遺物数量表 (総数 320点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	54	1	
2層	55	3	
3層	24		
床面	31		
P.1	16		
P.2	7		
P.3	7	1	
P.5	5		
P.8	31		
船床	79	6	金属製品1

S I - 4 出土遺物数量表 (総数 143点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	134	3	土製品1、砥石1、敲石1
床面	3		

S I - 5 出土遺物数量表 (総数 29点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	26		土製品1、砥石1
床面	1		

S I - 6 出土遺物数量表 (総数 31点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	31		

S I - 7 出土遺物数量表 (総数 16点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	15	1	

S I - 8 出土遺物数量表 (総数 148点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	49	1	金属製品1、石器1
2層	11		
床面	78		
P.4	6		

S I - 9 出土遺物数量表 (総数 232点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	215		金屬製品1、石器1
P.1	12		
P.2	1		
P.3	2		

S I - 10 出土遺物数量表 (総数 137点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	124	7	
床面	2		
P.1	4		

S I - 11 出土遺物数量表 (総数 470点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	267	8	金属製品1、石器3
床面	42	2	金属製品1、土製品1
P.1	14		
P.2	8	1	
P.3	19	1	
P.4	7		
P.5	1		
P.8	3		
P.9	85	1	
貼床	5		

S I - 12 出土遺物数量表 (総数 365点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	231	8	金属製品1、磨石1
2層	11		
床面	94	1	
P.3	5		
P.4	1		
P.5	9		
P.7	3		

S I - 13 出土遺物数量表 (総数 59点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	13		
貼床	46		

S I - 14 出土遺物数量表 (総数 618点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	453	10	寄生土器2、石器1、石製品1、紙石1
床面	76		金属製品
P.2	5		
P.3	23		
P.4	29		磁石1
P.5	5		
P.6	10		

第20表 穴穴住居跡・穴穴遺構出土遺物数量表(2)

S I-15 出土遺物数量表 (総数 1396点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	337	36	瓦1、金属製品1
2層	681	38	石器4
床面	27		
カマド底面	4		
カマド埋土	39	1	石器2
P.1	3		
P.3	13		
P.5	3		
P.6	7		
P.8	61	4	
P.9	35	3	
P.10	4	1	
P.11	93	4	

S I-19 出土遺物数量表 (総数 116点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	52	2	
2~5層	50		
床面	12		

S I-20 出土遺物数量表 (総数 1994点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1a層	1351	27	金属製品2、砥石1、石器5
1b層	26	5	
床面2	71		
2層	465	6	弥生土器2
床面1	22		
3層	1		
カマドa b	1	1/2	瓦3
P.3	1		

S I-16 出土遺物数量表 (総数 947点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	474	29	
2層	338	29	
3層	12		
床面	?		
P.1	63		
P.4	2	1	
P.6	1		

S I-21 出土遺物数量表 (総数 562点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	526		
床面	5		
P.1	4		
P.2	13		
P.3	4		

S I-22 出土遺物数量表 (総数 360点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1~3層	248		金屬製品1、砥石1、石器1、土器1
床面	1		
P.1	6		
P.3	45		
P.4	8		
P.5	7		
貼床	38		石器1

S I-23 出土遺物数量表 (総数 38点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
貼床	37		磨石1

S I-24 出土遺物数量表 (総数 228点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	149	1	瓦1
2層	74		瓦1、金属製品1、石器1

S I-25 出土遺物数量表 (総数 239点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	215		金属製品2、磨石1
床面	21		

S I-26 出土遺物数量表 (総数 60点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	59		弥生土器1

S I-17 出土遺物数量表 (総数 1776点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	977	70	金属製品1、土器1
2層	494	77	金属製品1、鐵鋤3
床面	4	1	
P.1	1		
P.2	19		
P.4	9		
P.5	27		
P.6	35		
P.7	4		
P.9	51		

S I-18 出土遺物数量表 (総数 697点)

出土状況	土師器	須恵器	その他
1層	431	18	
2層	138	7	
床面	5		
カマド埋土	27	2	金属製品1
P.1	17		
貼床	48		

第21表 遺構出土遺物数量表

遺構名	房生土器	土師器	須恵器	陶器・切妻	瓦(?)	瓦(いはし)	金属機器	鉄片	白石器	骨器	その他	計
S B 1		111	6				4	1		鐵2		124
S A 1		808	89		5		2	2	6	鐵24、油化木1		928
S A 2		591	63		4		10	1	7	鐵1、土玉1		678
S A 3		54										54
S D 1		12	1									13
S D 2		182	14		3	3	1	3	1	鐵2		209
S D 3	8	5086	13				2		24	上製品15、骨片1、鐵93		5242
S D 4	1	640	60		4		1		1	鐵10		717
S D 5		41	5							鐵1		48
S D 6		36	4		1		1					42
S D 7		86	4				1			鐵2		93
S D 8		99	4									103
S D 9		18						1		鐵1		20
S D 10		125	8									133
S D 11		25	2	1			2					30
S D 12		4										4
S D 13		5										5
S D 14		4										4
S K 1	10	1				1						12
S K 2	1	2										3
S K 3	68	9	1			3			2			83
S K 4	18											18
S K 5	315	35								鐵化木1		351
S K 6	10											10
S K 7	31									小玉ね1		22
S K 8	28											28
S K 9	12											12
S K 10	35								2			37
S K 11	12	1										13
S K 12	34		2			4		1		鐵2、土師質土器1		44
S K 13	3											3
S K 14	24									鐵1		0
S K 15	14											14
S K 16	25	2					1			上製品1		29
S K 17												0
S K 18	43	1										44
S K 19	53	3	2			3	3					64
S K 20	42	3	3				2			鐵1、土師質土器1		52
S K 21	7		1			1	1	1		鐵1、土師質土器1		13
S X 1	34	4	6			4	2					50
計	9	8735	326	16	17	19	33	9	42	165		9384

第22表 ピット出土遺物数量・土層註記表(1)

No	位置	出土遺物・埋土その他	No	位置	出土遺物・埋土その他
1	B-17	10 YR3/3 粘土質シルト	66	A-7	
2	A-15		67	A-21	10 YR3/3 粘土質シルト
3	B-12	土師器 1点	68	A-21	土師器 2点、10 YR3/3 粘土質シルト
4	B-12		69	A-21	10 YR2/2 黒褐色シルト
5	B-13		70	A-21	10 YR2/2 黑褐色シルト
6	B-19		71	A-21	土師器 3点、石 1点、10 YR3/3 粘土質シルト
7	B-12		72	A-21	土師器 4点、10 YR3/3 粘土質シルト
8	B-13		73	A-21	10 YR3/3 粘土質シルト
9	A-B-13		74	A-20 + 21	土師器 1点、瓦残 1点、10 YR3/3 粘土質シルト
10	B-12	土師器 35点、須恵器 1点、石器 1点	75	A-20	土師器 2点、10 YR2/2 黑褐色シルト
11	B-12		76	A-20	10 YR4/4 棕色シルト
12	B-12	土師器 21点	77	A-20	土師器 2点、10 YR3/3 粘土質シルト
13	B-5	土師器 1点	78	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
14	A-12		79	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
15	A-12	10 YR4/3 黄い黄褐色砂質シルト	80	A-20	10 YR4/4 棕色シルト
16	B-13	10 YR2/2 黄い黄褐色砂質シルト	81	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
17	B-9	土師器 4点	82	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
18	B-9		83	A-20	土師器 7点、10 YR3/3 粘土質シルト
19	B-10	須恵器 1点	84	A-20	土師器 6点、10 YR2/2 黑褐色シルト
20	A-14	土師器 9点、須恵器 2点	85	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
21	A-14	土師器 12点	86	A-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
22	B-14	土師器 3点	87	A-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
23	B-11		88	A-20	10 YR4/4 棕色シルト
24	B-11	土師器 3点	89	A-20	土師器 2点、石 1点、10 YR4/4 黄褐色シルト
25	B-11		90	A-20	三輪器 24点、瓦残 8点、20 YR5/2 黄褐色シルト
26	B-13	土師器 1点	91	B-11	10 YR1/2 黄い黄褐色砂質シルト
27	B-13	土師器 5点、10 YR6/3 黄い黄褐色シルト	92	A-20	土師器 15点
28	A-19	10 YR2/2 黑褐色シルト	93	A-20	土師器 1点、10 YR4/4 棕色シルト
29	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト	94	A-20	土師器 11点、10 YR3/3 粘土質シルト
30	A-19	10 YR2/2 黑褐色シルト	95	A-20	土師器 2点、石 1点、10 YR2/2 黑褐色シルト
31	B-1		96	A-20	10 YR3/6 点、石 1点、10 YR3/3 粘土質シルト
32	A-19	土師器 7点、10 YR3/3 粘土質シルト	97	A-19 + 20	土師器 6点、瓦残 1点、10 YR4/2 黑褐色シルト
33	A-18	10 YR4/3 黄い黄褐色シルト	98	A-20	土師器 3点、10 YR2/2 黑褐色シルト
34	A-19	10 YR2/2 黑褐色シルト	99	B-20	土師器 2点、10 YR2/2 黑褐色シルト
35	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト	100	B-20	10 YR3/3 粘土質シルト
36	A-5	土師器 7点、須恵器 1点	101	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
37	A-5		102	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
38	A-3		103	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
39	B-20	石 1点、10 YR2/2 黑褐色シルト	104	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
40	B-3		105	B-20	土師器 3点、10 YR2/2 黑褐色シルト
41	B-3		106	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
42	B-3		107	A-19	土師器 4点、10 YR4/4 棕色シルト
43	A-3		108	A-19	土師器 3点、10 YR3/3 粘土質シルト
44	A-2		109	A-19	土師器 9点、10 YR2/2 黑褐色シルト
45	A-B-3		110	A-19	10 YR2/2 黑褐色シルト
46	B-11		111	A-19	土師器 2点、10 YR2/2 黑褐色シルト
47	B-11		112	A-19	10 YR4/4 棕色シルト
48	B-11		113	B-11	土師器 3点、10 YR4/3 黄い黄褐色砂質シルト
49	B-11		114	A-19	土師器 2点、10 YR2/2 黑褐色シルト
50	A-3		115	A-19	土師器 6点、10 YR2/2 黑褐色シルト
51	A-3	土師器 5点	116	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト
52	B-2	土師器 2点	117	A-19	10 YR3/2 粘土質シルト
53	A-2	土師器 20点	118	A-19	土師器 3点、10 YR4/4 棕色シルト
54	A-20	10 YR5/3 粘土質シルト	119	A-19	土師器 3点、瓦残 1点、10 YR2/2 黑褐色シルト
55	A-18	黑色土	120	A-19	土師器 3点、10 YR3/3 粘土質シルト
56	A-2	土師器 1点	121	B-20	10 YR2/2 黑褐色シルト
57	A-3	土師器 10点、須恵器 1点、石 1点	122	B-19	10 YR3/3 粘土質シルト
58	A-8		123	B-19	10 YR2/2 黑褐色シルト
59	B-19	10 YR5/3 粘土質シルト	124	B-11	10 YR4/4 黄褐色シルト
60	A-19	10 YR3/3 粘土質シルト	125	B-12	土師器 3点、10 YR3/2 黑褐色シルト
61	A-19	土師器 1点、10 YR2/2 黑褐色シルト	126	A-19	10 YR4/4 棕色シルト
62	B-13	土師器 2点、須恵器 1点、石器 2点、10 YR3/3 黑褐色シルト	127	A-19	土師器 3点、10 YR3/3 粘土質シルト
63	B-17	土師器 5点	128	A-19	10 YR4/4 棕色シルト
64	A-18	土師器 14点	129	A-19	土師器 1点、10 YR3/3 粘土質シルト
65	A-17	土師器 6点、10 YR4/3 黄い黄褐色シルト	130	A-19	土師器 4点、10 YR2/2 黑褐色シルト

第 22 表 ピット出土遺物数量・土層註記表(2)

No.	位置	出土遺物・埋土その他	No.	位置	出土遺物・埋土その他
131	A-19	土師器 7 点、10 YR2/2 黒褐色シルト	196	B-14	10 YR5/3 細い黄褐色シルト
132	A-19	土師器 4 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	197	B-14	10 YR4/3 細い黄褐色シルト
133	B-19	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	198	B-14	二層目 11 点、鉄道具 1 点、10 YR5/4 黄褐色シルト
134	A-19	土師器 15 点、灰土 1 点、10 YR2/3 粘土質シルト	199	B-13	10 YR5/6 黄褐色シルト
135	A-18	土師器 9 点、10 YR5/4 細い黄褐色シルト	200	A-13	10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
136	A-18	土師器 4 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	201	B-14	10 YR4/4 黄褐色シルト
137	A-18	土師器 3 点、10 YR5/4 細い黄褐色シルト	202	B-14	10 YR3/3 粘土質シルト
138	A-18	10 YR5/4 細い黄褐色シルト	203	B-13	10 YR4/4 黄褐色シルト
139	A-18	10 YR5/4 細い黄褐色シルト	204	A-13	土師器 5 点、10 YR4/4 黄褐色シルト
140	A-18	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	205	A-13	土師器 3 点、10 YR5/6 黄褐色砂質シルト
141	A-18	土師器 7 点、鉄道具 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	206	B-19	
142	B-12	10 YR3/2 黑褐色シルト	207	A-12 - 13	土師器 7 点、10 YR5/4 細い黄褐色シルト
143	A-18	土師器 10 点、鉄道具 1 点	208	A-13	10 YR4/5 黄褐色シルト
144	A-18	土師器 6 点、須恵器 1 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	209	A-14	
145	A-18	須恵器 2 点、灰土 3 点、10 YR2/2 黑褐色シルト、鉄道具あり	210	A-14	土師器 1 点、10 YR4/3 細い黄褐色シルト
146	A-18	土師器 2 点、鉄道具 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	211	A-21	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
147	A-18	10 YR3/3 粘土質シルト	212	A-20	土師器 6 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
148	A-18	土師器 6 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	213	A-20	10 YR4/4 黄褐色シルト
149	B-18	土師器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	214	A-20	土師器 8 点、須恵器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
150	B-18	10 YR3/3 粘土質シルト	215	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
151	A-18	土師器 10 点、10 YR3/3 粘土質シルト	216	A-13	10 YR4/2 黄褐色シルト
152	A-17	土師器 6 点、10 YR3/3 粘土質シルト	217	B-13	土師器 2 点、10 YR5/2 黄褐色シルト質粘土
153	A-18	土師器 4 点、10 YR3/2 粘土質シルト	218	B-13	10 YR4/2 黄褐色シルト
154	B-17	土師器 6 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	219	B-13	10 YR4/2 黄褐色シルト
155	B-18	土師器 6 点、10 YR3/3 粘土質シルト	220	B-13	土師器 1 点、10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
156	B-12	10 YR3/3 黑褐色シルト	221	A-13	土師器 2 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
157	B-17	土師器 4 点、10 YR3/3 粘土質シルト	222	A-13	10 YR4/2 黄褐色シルト
158	B-17	土師器 1 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	223	A-13	10 YR5/3 細い黄褐色砂質シルト
159	B-18	土師器 1 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	224	A-13	土師器 2 点、10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
160	B-12	10 YR4/4 黄褐色シルト	225	A-13	土師器 1 点、10 YR4/4 細い黄褐色砂質シルト
161	A-17	10 YR4/4 黄褐色シルト	226	B-15	
162	A-17	土師器 2 点、10 YR5/2 黑褐色シルト	227	A-13	10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
163	B-12	土師器 3 点、10 YR3/2 黑褐色シルト	228	A-13	10 YR4/2 黄褐色シルト
164	A-17	土師器 17 点、鉄道具 1 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	229	A-13	10 YR5/6 明黄褐色シルト
165	B-17	土師器 7 点、10 YR3/3 粘土質シルト	230	A-13	土師器 4 点、10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
166	B-17	10 YR4/4 黄褐色シルト	231	A-13	10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
167	B-17	土師器 11 点、10 YR3/3 粘土質シルト	232	A-13	10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト
168	A-12		233	A-14	10 YR3/3 黑褐色シルト
169	A-12	土師器 7 点、10 YR3/4 黑褐色シルト	234	A-17	10 YR5/2 黄褐色シルト
170	B-16	二層目 4 点、鉄道具 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	235	A-18	土師器 3 点、10 YR3/3 粘土質シルト
171	B-16	土師器 15 点、10 YR3/2 粘土質シルト	236	A-18	『』土師器 15 点、須恵器 1 点、10 YR4/2 黄褐色シルト
172	B-16	土師器 6 点、10 YR2/2 黄褐色シルト	237	A-19	土師器 1 点、須恵器 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト
173	B-16	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	238	A-19	土師器 4 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
174	B-16	土師器 1 点、10 YR2/2 粘土質シルト	239	A-19	土師器 2 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
175	B-16	土師器 8 点、10 YR3/3 粘土質シルト	240	A-19	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト
176	B-16	土師器 10 点、石 1 点、10 YR3/3 粘土質シルト	241	A-20	10 YR3/3 粘土質シルト
177	B-16	土師器 3 点、10 YR4/4 黄褐色シルト	242	B-4	
178	B-16	10 YR2/2 黑褐色シルト	243	A-14	
179	B-16	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	244	A-18	
180	B-16	土師器 8 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	245	A-19	
181	B-16	10 YR3/3 粘土質シルト	246	A-20	
182	A-15	土師器 1 点、10 YR5/3 細い黄褐色シルト	247	A-20	
183	B-12	10 YR4/4 黄褐色シルト	248	A-20	
184	B-12	10 YR3/2 黑褐色シルト	249	A-20	
185	B-17	10 YR2/2 黑褐色シルト	250	B-20	
186	B-13	土師器 7 点、10 YR4/3 細い黄褐色シルト	251	B-20	
187	B-13	10 YR3/3 黑褐色シルト	252	B-12	10 YR3/3 黑褐色シルト
188	B-13	10 YR4/3 細い黄褐色シルト	253	A-19	
189	B-13	10 YR4/3 細い黄褐色砂質シルト	254	B-19	
190	B-13	10 YR4/2 黄褐色シルト	255	A-16	
191	B-14		256	B-19	
192	B-14	10 YR2/2 黑褐色シルト	257	A-7	
193	A-18	土師器 1 点、10 YR2/2 黑褐色シルト	258	A-7	
194	B-14	10 YR4/4 黄褐色シルト	259	A-7	
195	B-13	土師器 6 点、須恵器 1 点、10 YR4/4 黄褐色シルト			

第23表 グリット遺物出土数量表

グリット	陶土器	土器	須恵器	織・織物	瓦(布)	瓦(瓦)	金銀器	鉄器	骨・角	その他	計
A-1		991	40	18		3	17			縄98、土製品1	1168
A-2		1468	39	14	1	4	16	5	2	縄112、紹化木1	1662
A-3		790	25	2		1	13	2		縄45	878
A-4		656	26	8			4	1	3	縄50	748
A-5		1312	50	14		2	2	3	1	縄60、土製品3、土製支脚1	1478
A-6		789	43	8		1	2	4	2	縄39、土製品1	889
A-7		2054	66	4		3	9	13	9	縄16、土製品2、紹化木2	2178
A-8		1369	102	26	2	10	38	7	11	縄77、紹化木1	1634
A-9		313	33	4		5	2	2		縄12、木片1	371
A-10		273	35	5		1	6			縄4	324
A-11		423	41	22			22	1		縄12	321
A-12		8	2								10
A-13		82	1	2			1				86
A-14		135	12	5			3	1		縄4、紹化木1	161
A-15		47	6	9			3	2		縄13、木片1	81
A-16		81	4			1		3		縄1、土部質土器2	92
A-17		297	12	56	1	9	13		6	縄21、木片2	327
A-18		449	9							縄10	459
A-19		317	11	6		1	1		1	縄3	340
A-20		75	1	5		1				縄3、木製品2	87
A-21		2		2						紹化木1	5
B-1		514	24	9			6			縄11、土製品2	566
B-2		508	25	4			14	1		縄5	587
B-3		425	20	4			6			縄7	462
B-4		330	13	7			2		1	縄12	365
B-5		431	26	14			7			縄20、木片1	499
B-6		405	28	16			5			縄25、紹化木1	480
B-7		1316	64	23		3	7	9	2	土製品2、紹化木2、縄17	1445
B-8		506	74	23	2	6	21	1	1	縄23	637
B-9		321	59	23	1	11	15	1		縄6、紹化木1、占銭1	451
B-10		318	44	24		2	7			縄25	425
B-11		232	36	32	1		2			縄17	320
B-12		27	4	3		1				縄1	36
B-13		95	4	1			2				102
B-14		84	9	6			1			縄1、紹化木1	102
B-15		403	43	175	1	16	26	1	3	縄15、紹化木2	685
B-16		55	3							縄1	59
B-17		125	7							縄1	133
B-18		24				1					25
B-19		50	4	2						縄1	57
B-20		16	1	3		1				縄2	23
B-21		1	1	2		1					5
計		18049	1046	581	9	89	273	57	42	807	20953

第24表 第23次調査 遺物出土数量表

遺構名	層位地	土器器	須恵器	他
S I - 1	1層	353	1	
	2層	251	1	土製品2、珪化木1
	3層	42		
	1~3	31		鍍1
	カマ1'	66		鍍1、支脚1
	P.2	7		
	P.3	10		
	P.4			石2
	P.8	4		
SD-1	1層	261	5	
	2層	63	2	
SD-2	1層	117		石4、礫石1
SD-3	1層	26		石1
SD-4	1層	30		
SD-5	1層	21		鉄津1
SR-1	1層	117		
基本層1層		289	1	鉄製品1、陶器2
基本層2層		97	2	

第 25 表 弥生土器観察表

単位: cm

NO	出土地	断面	外因	内因	残存	高さ	口径	底径	参考	可否
B-1	SI 20 墓 1 层	圓	比較的单薄	1.8	1/3				上部の地盤付近 下部は堅硬な土	可
B-2	SI 22 墓 1 层	圓	骨頭の付いた灰褐色の土	1.8	1/3				上部の地盤付近	可
B-3	SI 20 墓 2 层	圓	骨頭の付いた灰褐色の土	1.8	1/3				上部の地盤付近	可
B-4	SI 10 墓 1 层	圓	骨頭の付いた灰褐色の土	1.8	1/3				上部の地盤付近	可
B-5	SI 20 墓 2 层	圓	骨頭の付いた灰褐色の土	1.8	1/3				上部の地盤付近	可
B-6	SI 22 墓 1 层	圓	骨頭の付いた灰褐色の土	1.8	1/3				上部の地盤付近	可

第 26 表 非クロコロ土器観察表(1)

単位: cm

NO	出土地	断面	外因	内因	残存	高さ	口径	底径	備考	分類	可否
C-1	12 SI 5 底面	円	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: リニアテ 1.2. 底: リニアテ	1/8	残: 4.9	(16.00)		丸形底付近 外側は堅硬な土	I A	可
C-2	SI 5 墓 1 層	円	口: ラウンド 底: ハラウド	C. 壁: ラウンドの内へラミガキ 底: ハラウド	口縁部破片				内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-3	SI 5 墓 1 層	円	口: ラウンド 底: ハラウド	A. 口: ラウンド 底: ハラウド	口縁部破片				内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-4	SI 5 墓 1 层	円	口: ラウンド	口: ラウンド	1. 地: 一孔地 2. 壁: ラウンド				丸形底付近 外側は堅硬な土	I B	可
C-5	SI 6 墓 1 层	円	口: ラウンド 底: ハラウド	口: ラウンド	口縁部破片				内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I A	可
C-6	SI 4 墓 1 层	円	口: ラウンド 底: ハラウド	口: ラウンド	口縁部破片				内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I B	可
C-7	12 SI 8 底面	円	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1/2	残: 9.6	(11.40)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II D	可
C-8	12 SI 8 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1/6	残: 16.1	(22.00)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II D	可
C-9	SI 8 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド	口縁部一孔地 壁: ラウンド				丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I B	可
C-10	20 SI 9 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド	1/6	残: 3.9	(11.2)		内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II A	可
C-11	SI 9 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド	口縁部破片				丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II A	可
C-12	70 SI 11 墓 1 层	圓	口: ラウンド 底: ハラウド	口: ラウンド 底: ハラウドの内へラミガキ	1/6	残: 4.0			内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I A	可
C-13	20 SI 11 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1/6	残: 3.3	(14.3)		内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II A	可
C-14	20 SI 11 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1/6	4.5	(12.3)		内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-15	20 SI 11 墓 1 层	圓	1.1. ラウンドの内へラミガキ付 1.2. ハラウドの内へラミガキ付	1.1. 壁: ラウンドの内へラミガキ 1.2. 壁: ハラウドの内へラミガキ	1/4	残: 4.6	(12.0)		内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	V B	可
C-16	20 SI 11 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1/3	24.7	(23.2)	8.2	内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-17	20 SI 11 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	4/5	残: 24.5	17.2		内側は堅硬な土 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-18	26 SI 12 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	1/4	残: 3.9	(15.0)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-19	26 SI 12 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	1/4	残: 17.5	(24.0)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-20	SI 12 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	口縁部破片				丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-21	26 SI 13 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	7/3	4.8	(12.1)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-22	SI 21 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	体縁部破片				丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-23	44 SI 22 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	1/4	残: 2.5	(12.7)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-24	44 SI 22 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	3/4	6.4	15.0		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-25	44 SI 22 加工用	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	體縁部上半 底縁部				丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-26	44 SI 22 墓 1 层	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	口縁部 底縁部	1/4	残: 6.0	(11.0)	調査が困難な事で寸切	II B	可
C-27	44 SI 25 墓底	圓	口: ラウンド 底: ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	完形	4.4	13.0		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I B	可
C-28	44 SI 25 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	4/5	残: 4.9	14.2		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I A	可
C-29	44 SI 25 墓底	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	6/5	5.1	14.4		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I B	可
C-30	44 SI 25 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	1/4	残: 5.5	(16.1)		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	I A	可
C-31	44 SI 25 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	3/4	4.2	15.0		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II B	可
C-32	44 SI 25 底面	圓	1.1. ラウンド 1.2. ハラウド	1.1. 壁: ラウンド 1.2. ハラウド	4/5	5.0	15.8		丸形底付近 外側は堅硬な土付 合し、表面は滑らか	II A	可

※カット内は復元した箇所

第26表 非黒クロ土師器観察表(2)

単位:cm

NO	番号	出土状況	基盤	外観	内面	残存	高さ	口径	底	備考	分類	文例
C-33	44	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	2/3	6.2	(13.8)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II A	73	
C-34	44	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフアラヘタズボキ 体:ヘタヅラ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:6.2	11.6	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II B	74	
C-35		SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:5.4	10.4	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II C	74	
C-36	45	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ(脚2)	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:7.1	29.0	脚:土:無器で脚4cm	II D	74	
C-37	45	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:6.2	6.2	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II E	74	
C-38	45	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:6.4	11.4	(15.0) 7.5 脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II F	74	
C-39	45	SI25 陶塗	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:7.0	9.2	22.2	脚:土:無器で脚4cm	II G	74
C-40	45	SI26 陶1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ	口部分破片	底:6.0	4.0	(12.4)	脚:土:無器で脚4cm	II H	74
C-41	45	SI26 陶1層	井	口:ヨコナフ	口:ヨコナフ	破片	底:5.0	5.0	脚:土:無器	II I	74	
C-42	45	SI26 陶1層	井	口:ヨコナフ(ち)テ 体:ヘタヅラ	口:ヨコナフ(ち)テ 体:ヘタヅラ	破片	底:4.5	5.0	脚:土:無器を含む	II J	74	
C-43	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	1.8	(14.4)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I A	75	
C-44	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.5	13.7	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I B	75	
C-45	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.5	14.3	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I C	75	
C-46	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.8	13.2	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I D	75	
C-47	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	5.0	(11.2)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I E	75	
C-48	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	5.2	21.6	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I F	75	
C-49	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	破片	底:4.4	5.0	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I G	75	
C-50	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	破片	底:4.8	5.0	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I H	75	
C-51	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ	口:ヨコナフ	破片	底:4.9	5.0	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I I	75	
C-52	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	2/3	11.6	19.8	(7.9) 脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	II J	75	
C-53	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	破片	底:16.6	5.0	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I A	76	
C-54	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	3/4	22.9	(21.6)	7.0 脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I B	75	
C-55	58	SD 3埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	9.6	13.4	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I C	75	
C-56	59	SD 2埋1層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	4/5	8.0	11.9	6.3 脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I D	75	
C-57	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口部分破片 1/2	3.7	(13.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I E	75	
C-58	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.7	5.0	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I F	75	
C-59	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口部分破片 1/2	4.2	12.6	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I G	75	
C-60	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.2	(13.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I H	75	
C-61	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	2/5	4.1	(13.4)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I I	75	
C-62	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/6	5.4	(15.4)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I A	75	
C-63	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/6	3.8	(13.6)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I B	75	
C-64	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	4.2	(14.2)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I C	75	
C-65	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	3.4	(14.4)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I D	75	
C-66	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/4	4.2	(14.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I E	75	
C-67	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/3	4.8	(14.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I F	75	
C-68	59	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/6	4.1	(14.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I G	75	
C-69	60	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口部分破片 1/2	3.1	14.4	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I H	76	
C-70	60	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/2	5.0	(13.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I I	76	
C-71	60	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/4	3.7	(14.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I J	76	
C-72	60	SD 3埋2層	井	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	口:ヨコナフ 体:ヘタヅラ(盛合へタ)ガキ	1/5	3.9	(13.0)	脚:土:無器で脚4cm 底:土:無器で脚4cm	I K	76	

※カッコ内は復元した数値

第26表 非黒クロ土師器観察表(3)

単位: cm

NO	形態	出土状況	基準	外觀	内面	残存	口沿	底	備考	分類	年表
C-73	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	1/2	3.8	14.2	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-74	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	2/5	残:4.6	(14.4)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II B	76
C-75	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリ	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	1/5	残:4.1	(13.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-76	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	1/2	4.5	(13.6)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-77	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリ	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	1/4	4.1	(16.1)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-78	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	1/3	残:4.3	(17.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II B	76
C-79	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	1/4	残:5.8	(19.6)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-80	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	1/2	4.9	(14.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	VI C	76
C-81	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリ	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	1/2	残:6.1	(9.8)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-82	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギのちへらしき	1/5	残:4.8		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-83	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	1/4	残:5.2	(12.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	VI A	76
C-84	66	SD 3層2層	新	基盤剥離のちへらしき	口:ヘラモガ	口:錐部1/3	残:3.0	(16.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	VII D	76
C-85	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ		破片	残:1.4		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	V B	75
C-86	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリ	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	破片	残:4.0		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-87	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ 体:ヘラケヅリ	口:ヨコナギ 体:ヨコナギ	破片	残:3.7		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-88	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	破片	残:2.3		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV B	76
C-89	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	破片	残:3.0		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-90	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	破片	残:2.3		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV A	76
C-91	66	SD 3層2層	新	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	破片	残:1.7		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV B	76
C-92	61	SD 3層2層	新	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	7/5	5.1	12.1	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV	76
C-93	61	SD 3層2層	新	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	破片	残:3.2	(19.7)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV	76
C-94	61	SD 3層2層	新	ナ	ナ	1/5	残:2.4		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV	76
C-95	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	破片	残:3.6		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	76
C-96	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヘラモガ	破片	残:5.6		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	76
C-97	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	破片	残:4.0		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	76
C-98	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	破片	残:6.9		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	76
C-99	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリ	口:ヘラモガ	破片	残:7.5		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV	76
C-100	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヘラモガ	破片	残:8.8		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	IV	76
C-101	61	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギのちへらしき	口:ヘラモガ	口:錐部	残:3.3	(13.6)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-102	61	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:6.7	13.6	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-103	61	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギのちへらしき	口:ヘラモガ	口:錐部	残:6.3	(13.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	76
C-104	61	SD 3層2層	高杯	口:ヘラケヅリのちへらしき	口:ヘラモガ	口:錐部	残:14.6	6.4	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	III B	76
C-105	62	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:22.0	8.0	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	77
C-106	61	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:18.1	17.2	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	I A	77
C-107	62	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギのちへらしき	口:ヘラモガ	口:錐部	残:21.0	20.0	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II B	77
C-108	63	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:22.0	8.0	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II	77
C-109	62	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:13.9	(21.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II E	77
C-110	62	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:7.3	(17.0)	新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	77
C-111	64	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	破片	残:6.9		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II A	77
C-112	64	SD 3層2層	高杯	口:ヨコナギ	口:ヨコナギ	口:錐部	残:7.5		新:土師器で最初のもの 内:青色地に上り	II D	77

※各欄内は複数した箇所

第 26 表 非クロノ土器器観察表 (4)

単位: cm

NO.	形態	出土状況	断面	内面	機理	高さ	L.D.	直径	備考	分類	等級
C-115 44	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 8.4			地土: 破片多く 含む	I A	77
C-114 63	SD 3 層 2 期	漢 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	断面 1/5	残: 6.4 (24.0)			地土: 濃度で砂粒 含む	I D	77
C-115 61	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	1/7	残: 8.3 (13.6)			地土: 濃度で質かい	I D	77
C-116 64	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 9.4			地土: 濃度で砂粒 含む	I E	77
C-117 61	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 6.4			地土: 濃度で砂粒 含む	I E	77
C-118 64	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 10.9			地土: 破片多く 含む	I C	77
C-119 64	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 6.6			地土: 破片多く 含む	I B	77
C-120 63	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	1/3	16.1	16.7	(4.5)	地土: 濃度で砂粒 含む	III	77
C-121 63	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	2/3	9.6 (13.7)	8.9		地土: 濃度で砂粒 含む	II	77
C-122 63	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	1/2	残: 10.3	12.5		地土: 濃度で砂粒 含む	I B	77
C-123 63	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	1/5	残: 7.8 (13.8)			地土: 濃度で質かい 外側表面凸ぼけ	77	
C-124 63	SD 3 層 2 期	便 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	断面 1/4	残: 4.6	17.8		地土: 濃度で質かい	IV	77
C-125 63	SD 3 層 2 期	粘土層上風 土器	ヘラクナ	断面 1/4	6.0	9.3	5.4		地土: 初期多く含む 砂粒	77	
C-126 63	SD 3 層 2 期	テバ セバ	ヘラクナ	6/5	4.9	9.9	4.9		地土: 濃度多く含む	77	
C-127 65	SD 3 層 3 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	近底 先端	4.4	16.0		地土: 濃度で質かい 外側表面凸ぼけ	II B	78
C-128 65	SD 3 層 3 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 3.4			地土: 濃度で砂粒 含む	I A	78
C-129 65	SD 3 層 3 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	3/4	残: 14.0	23.6		地土: 濃度で砂粒 含む	I B	78
C-130 65	SD 3 層 3 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 3.7			地土: 濃度で砂粒 含む	I B	78
C-131 66	SD 3 層 3 期	坪 二層 二層	ヘラクナ	1/3	18.1 (6.8)				地土: 濃度で砂粒含む	78	
C-132 66	SD 3 層 3 期	坪 二層 二層	ヘラクナ	1/3	残: 9.4		5.7		地土: 濃度で砂粒含む	78	
C-133 66	SD 3 層 3 期	坪 体: ヘラクナ	ヘラクナ	破片		(6.6)			地土: 濃度多く含む	78	
C-134 66	SD 3 層 4 期	坪 体: ヘラクナ	ヘラクナ	破片	残: 2.0				地土: 濃度で砂粒 含む	V A	78
C-135 66	SD 3 层 4 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: 壁: ヘラクナ	破片	残: 5.3			地土: 濃度で砂粒 含む	V C	78
C-136 66	SD 3 层 4 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	ヘラクナ	断面 1/5	残: 6.1 (9.4)			地土: 濃度で砂粒 含む	I	78
C-137 66	SD 3 层 4 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 5.4			地土: 濃度多く含む	I A	78
C-138 66	SD 3 层 4 期	坪 体: ヘラクナ	ヘラクナ	1/4	9.0		7.8		地土: 濃度多く含む	78	
C-139 66	SD 3 层 4 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 6.0			地土: 濃度で砂粒 含む	IV	78
C-140 58	SD 3 层 1 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	破片	残: 3.5			地土: 濃度で砂粒 含む	V C	76
C-141 58	SD 3 层 1 期	坪 ナフ	ナフ	ナフ	破片	残: 9.7			地土: 濃度で砂粒 含む	76	
C-142 58	SD 4 层 1 期	坪 ナフ ナフ	ナフ ナフ	ナフ ナフ	破片				地土: 濃度で砂粒 含む	76	
C-143 69	SK 7 层 1 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	4/5	9.6	16.3	7.8	地土: 濃度で砂粒 含む	78	
C-144 69	SK 7 层 1 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	断面	16.8	18.7	6.9	地土: 濃度多く含む 外側表面凸ぼけ	I D	78
C-145 69	SK 9 层 1 期	坪 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	口: コンテナ 体: ヘラクナ	1/5	残: 2.4 (12.2)			地土: 濃度で砂粒 含む	78	
C-146 69	SK 10 层 1 期	坪 体: ナフ	ナフ	ナフ	断面 1/2	残: 7.5			地土: 濃度で砂粒含む	78	
C-147 69	SK 10 层 1 期	坪 ナフ	ナフ	ナフ	断面 1/2	残: 7.1			地土: 濃度で砂粒 含む	78	
C-148 69	A-3 G 5 层	坪 体: ナフ	口: コンテナ 体: ナフ	口: コンテナ 体: ナフ	断面	5.6			地土: 濃度で砂粒 含む	80	
C-149 70	A-3 G 5 层	坪 体: ナフ	口: コンテナ 体: ナフ	口: コンテナ 体: ナフ	1/4	5.0	(14.3)		地土: 濃度で砂粒 含む	I A	80
C-150 70	B-2 G 1 层	坪 ナフ	口: ナフ	口: ナフ	断面	4.5	(17.3)		地土: 濃度で砂粒 含む	80	

※ シャコ内は選別した数値

第27表 ロクロ土器器観察表(1)

単位:cm

NO	図版	出土試料	断面	外側	内側	残存	高さ	L/W	基性	備考	分類	年月		
D-1	7	SI 1 縦方	縦	ロクロの調査 断面切片		6/6	4.2	13.7	6.2	既往未記載無調査	III a	67		
D-2	7	SI 1 横方	横	ロクロの調査 断面切片		2/3	4.4	13.1	6.8	既往未記載無調査	I b	67		
D-3	7	SI 1 矩形	矩	ロクロの調査 断面切片		1/2	4.6	(14.0)	5.5	既往未記載無調査	III b	67		
D-4	7	SI 1 縦方	縦	ロクロの調査 断面切片		6/5	4.36	14.2	9.2	既往未記載無調査	III b	67		
D-5	7	SI 1 P-5	角	ロクロの調査 断面切片		6/5	4.9	17.2	6.4	既往未記載無調査	III b	67		
D-6	7	SI 1 素面	素	ロクロの調査 断面切片		底部1/2	既:2.6		9.0	既往化		67		
D-7	7	SI 1 素面	素	ロクロの調査 断面切片		底部1/3	既:1.9		(7.25)			67		
D-8	7	SI 1 素面	素	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調整	口縁部1/3	既:6.6	(27.0)			67		
D-9	7	SI 1 P-5	素	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片	口縁部1/3	既:4.1	(15.0)			67		
D-10	7	SI 3 P-8	縦	ロクロの調査 断面切片		1/3	4.4	(14.0)	5.2	既往未記載無調査	I b	67		
D-11	7	SI 3 P-8	縦	ロクロの調査 断面切片		1/2 (1/4) (既剥離) 既剥離	2/3	4.5	14.4	5.4	既往未記載無調査	III a	67	
D-12	7	SI 3 P-8	縦	ロクロの調査 断面切片		1/2 (1/4) 既剥離	既剥離 既剥離	4.9	13.6	5.8	既往未記載無調査	III a	67	
D-13	7	SI 3 P-8	小窓	ロクロの調査 断面切片		1/3	既:7.9		6.1			67		
D-14	7	SI 3 P-8	張	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	1/4	既:4.6	(21.0)		67		
D-15	10	SI 3 縦1層	小窓	ロクロの調査 断面切片	既:ロクロの調査 断面切片	1/4	既:10.7	(14.4)				67		
D-16	10	SI 3 縦2層	素	ロクロの調査 断面切片		1/2	既:8.4	17.6				67		
D-17	10	SI 3 縦1層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5	既:19.1	(29.4)				67		
D-18	10	SI 3 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/4	既:6.9	(26.0)				67		
D-19	10	SI 4 縦1層	小窓	ロクロの調査 断面切片		1/2	既:14	(13.8)	9.0	14既往未記載無調査		68		
D-20	10	SI 4 縦1層	素	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:7.2	(21.0)		68		
D-21	SI 4 縦1層	ヘラケズリ、ヘラナダ	ヘラナダ								既往調査	68		
D-22	20	SI 10 素面	小窓	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片		既:13.1	15.4		既往未記載	68		
D-23	26	SI 15 素面	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5	既:14.3	14.3	6.2	手ナットヘラケズリ 既剥離	III a	69		
D-24	26	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5 (既:剥離)(既: 既剥離)	既剥離 既剥離	4/5	5.2	15.8	6.4	既往未記載無調査	III b	69
D-25	26	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5	既:5.9	16.6	6.4	既往未記載無調査	III b	69		
D-26	26	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5 (既:剥離) 既剥離	既剥離 既剥離	5/5	5.4	13.6	5.4	既往未記載無調査	III b	69
D-27	26	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5 (既:剥離) 既剥離	既剥離 既剥離	4/5	5.5	15.3	6.2	既往未記載無調査	III b	69
D-28	26	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		1/5 (既:剥離) 既剥離	既剥離 既剥離	4/5	4.6	14.7	5.9	既往未記載無調査	III b	69
D-29	21	SI 15 縦2層	小窓	ロクロの調査 断面切片		1/2	既:8.1	(13.1)				69		
D-30	27	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:17.0	(37.0)		70		
D-31	27	SI 15 縦2層	素	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	既:ヘラケズリ	既:ヘラケズリ	1/1	既:17.5	(23.0)		70		
D-32	27	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	既:ヘラケズリ	既:ヘラケズリ	1/2	既:24.0	(22.0)		70		
D-33	28	SI 15 縦2層	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	体部1/2	既:9.3		既往未記載	70		
D-34	27	SI 15 縦2層	其底	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-35	28	SI 16 素面	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-36	28	SI 16 直1層	縦	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-37	28	SI 16 直2層	縦	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-38	28	SI 16 直2層	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	体部1/2	既:9.3		既往未記載	70		
D-39	27	SI 16 素面	縦	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-40	28	SI 17 素面	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	既:7.0	7.0	7.0		70		
D-41	28	SI 16 垂1層	縦	ロクロの調査 断面切片		ロクロの調査 断面切片		既:7.0	7.0	7.0		70		
D-42	29	SI 17 素面	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	既:7.0	7.0	7.0		70		
D-43	30	SI 17 素面	縦	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	ロクロの調査 断面切片	既:ヘラケズリ	1/4	4.4	(14.0)	6.8	丁目ヘラケズリ	71	

□内は復元した数値

第27表 ロクロ土師器観察表(2)

単位: cm

NO	出目	出土状況	基盤	外側	内側	操作	底名	口径	底深	断面	参考	分類	写真
D-41	39	SI 17 横1層	环	ロクロ調理	内下:ヘタケズリ	ヘタケズリ 壁:斑目状 底:無	底深 底無	5.0	15.5	6.4	須恵器手付ヘタケズリ	II a	71
D-42	32	SI 17 横1層	小袋	ロクロ調理	ナラの底盤	-	底深 底無	1/4	底:7.4	5.4	須恵器手付底盤	-	71
D-43	30	SI 17 横1層	袋	ロクロ調理	体:ヘタケズリ	ヘタケズリ	-	底:22.6	10.0	ヘタケズリ	-	71	
D-44	34	SI 18 横1層	直	ロクロ調理	底:ヘタケズリ	底:ヘタケズリ	-	底:26.5	8.0	須恵器ヘタケズリ	-	71	
D-45	39	SI 18 カマド 壁	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	底深 底無	1/5	底:13.1	(21.6)	-	-	71
D-46	34	SI 18 カマド 壁	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	底深 底無	1/5	底:27.1	(22.7)	-	-	71
D-47	34	SI 19 瓢箪	直	ロクロ調理	内:ヘタケズリ	ヘタケズリ 底:無	-	4/5	6.0	14.8	6.6 手付ヘタケズリ	II a	77
D-48	31	SI 19 菱形	直	ロクロ調理	口:ココナツ 底:ナラの底盤の内ハケニ	口:ココナツ 底:ナラの底盤の内ハケニ	-	底:20.3	(20.6)	-	-	-	72
D-49	37	SI 20 横1層	直	ロクロ調理	内下:ヘタケズリ	ヘタケズリ	-	4/5	3.9	12.9	6.4 須恵器手付ヘタケズリ	II a	72
D-50	37	SI 20 横1層	直	ロクロ調理	内下:ヘタケズリ	ヘタケズリ	-	4/5	5.5	14.4	6.6 手付ヘタケズリ	II a	72
D-51	37	SI 20 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	底深 底無	1/4	底:7.2	(19.0)	-	-	72
D-52	37	SI 20 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	内:ココナツ 底下:ヘタケズリ	-	1/3	底:21.3	21.2	-	-	72
D-53	44	SI 24 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	ナラの底盤 底合付	-	1/4	4.6	(14.4)	6.5	II b	73
D-54	44	SI 24 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	1/4	底:9.6	(23.5)	-	-	73
D-55	54	SA 2 底1層	环	ロクロ調理	ヘタケズリ 底合付	底部	-	-	-	5.5	須恵器手付底盤	-	74
D-56	50	SD 4 底1層	环	ロクロ調理	ヘタケズリ 底合付	底部	-	-	-	-	須恵器手付底盤	-	74
D-57	58	SK 5 底1層	环	ロクロ調理	ヘタケズリ 底合付	底部	-	-	-	-	須恵器手付底盤	-	74
D-58	69	SK 6 底2層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	口部	-	1/3	-	-	-	-	75
D-59	70	A 5 G I 直	直	ヘタケズリ	ナラの底盤	-	1/2	底:2.6	-	須恵器	-	80	

東カツ内は塗装した数値

第28表 須恵器観察表(1)

単位: cm

NO	出目	出土状況	基盤	外側	内側	操作	底名	口径	底深	底形	参考	分類	写真
E-1	7	SI 1 圓1方	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	1/2	4.7	14.6	6.1 須恵器手付底盤	II b	61
E-2	7	SI 1 圓1方	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	2/3	4.1	11.3	(5.2) 須恵器手付底盤	II b	67
E-3	10	SI 4 横1層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	4.45	(14.6)	4.6 須恵器手付底盤	II b	68
E-4	10	SI 4 横1層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	4.1	(14.5)	5.9 須恵器手付底盤	II b	68
E-5	26	SI 10 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	ナラの底盤、平底不可	体側破片	-	-	-	こぼれ端子した 破片で底付	-	68
E-6	26	SI 12 底床	直	ロクロ調理	ナラの底盤	直:ヘタケズリ	底部	底:2.4	(19.1)	-	-	-	68
E-7	26	SI 14 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	ロクロ調理	口部	底:1/4	底:1.3	(13.1)	-	-	68
E-8	27	SI 15 横2層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	2/3	4.3	14.4	5.6 須恵器手付底盤	II b	70
E-9	27	SI 15 横1層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	4.7	14.2	6.5 須恵器手付底盤	II b	70
E-10	27	SI 15 横1層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	5.1	11.8	6.5 須恵器手付底盤	I a	70
E-11	27	SI 15 横2層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	ナラの底盤	体側破片	-	-	-	-	-	70
E-12	28	SI 16 横2層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	1/2	3.9	13.8	6.6 須恵器手付底盤	II b	70
E-13	28	SI 16 横2層	环	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	4.1	13.6	6.4 須恵器手付底盤	I a	70
E-14	30	SI 16 横1層	直	ロクロ調理	ロクロ調理のち平行内凹 ナラの底盤のナラズリ	ナラの底盤の内凹	底深 底無	4/5	底:14.8	-	底凹	-	70
E-15	30	SI 17 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	4/5	3.8	13.8	6.6 須恵器手付底盤	II a	71
E-16	32	SI 18 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	4/5	4.0	14.3	7.0 須恵器手付底盤	II a	72
E-17	32	SI 18 カマド 壁	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	-	3.5	15.6	7.4 須恵器手付底盤	II a	72
E-18	32	SI 18 横1層	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	底深 底無	4.7	13.8	6.6 須恵器手付底盤	II a	72
E-19	37	SI 20 西面	直	ロクロ調理	ナラの底盤	-	ナラの底盤	2/3	3.8	14.2	7.4 須恵器手付底盤	II a	72

東カツ内は塗装した数値

第28表 須恵器観察表(2)

単位: cm

NO	地點	出土状況	形態	表面	内部	横径	高さ	口徑	底径	参考	分類	写真
E-28	37	S110 底面	坪	カクの頭部	ロアの頭部	3/4	3.6	14.2	6.6	丁跡もヘラグリ	Ⅲ a	72
H-21	37	S420 底面	坪	カクの頭部	ロアの頭部	1/2	4.0	(14.0)	(6.0)	手筋もヘラグリ	Ⅲ a	72
E-22	37	S120 縁1層	坪	カクの頭部	ロアの頭部	2/3	4.0	13.8	7.6	底面破片のうち 手筋もヘラグリ	Ⅲ a	72
H-23	37	S120 縁1層	坪	ロアの頭部	ロアの頭部	1/2	5.8	(15.4)	6.9	底面破片の頭部	Ⅲ a	72
E-24	37	S120 縁1層	縁	カクの頭部	ロアの頭部	1/3	残: 6.7		7.3	手筋もヘラグリ		72
E-25	S81	挖出1量	坪	ロアの頭部	ロアの頭部	1/6				内側へラギリ		74
E-26	S A 2 縁2層	坪	カクの頭部	ロアの頭部		1/6				内側へラギリ		74
E-27	S A 2 縁1層	坪	カクの頭部	ロアの頭部						手筋もヘラグリ(平底) 名古屋市千種		74
H-28	S A 2 縁1層	坪	カクの頭部	ロアの頭部						内側へラギリ		75
E-29	G1	S D 2 縁2層	縁	ロアの頭部、新時代	ロアの頭部	口縁一環の1/3	残: 5.1	(10.0)				76
H-30	S D 4 縁1層	坪	ロアの頭部	ロアの頭部						内側へラギリ		76
E-31	S D 6 縁1層	坪	ロアの頭部	ロアの頭部						内側へラギリ		79
H-32	S D 7 縁1層	坪										79
E-33	70	A-2 G 1層	面	ロアの頭部	ロアの頭部			残: 2.3				80
H-34	70	A-2 G 1層	蓋	ロアの頭部	ロアの頭部			残: 2.6				80
E-35	B-10 G 1層											80
H-36	70	A-4 G 1層	井筒	ロアの頭部	ロアの頭部 底面: 磨擦と輪廻あり			底面	残: 10.5			80

＊カッコ内は復元した数値

第29表 丸瓦・軒丸瓦觀察表

単位: cm

NO	地點	出土状況	名称	当面	下端		参考	写真
F-1	S1 1 層1号	丸瓦	圓窓口、ナデ	丸口				67
F-2	S416 墓2層	軒丸瓦					直井花文軒丸瓦、底面: 丸窓部	71
F-3	38	S120 カマド	丸瓦	圓窓口、ナデ	丸口	横: 18.5、高: 8.7.5、底深: 1.2		72
F-4	S A 1 縁1層	丸瓦	圓窓口、ナデ	丸口				74
F-5	S A 2 縁1層	丸瓦	圓窓口、ナデ	丸口				75
F-6	66	S D 4 縁1層	軒丸瓦				直井花文軒丸瓦、底面: 丸窓部	79
F-7	SK12 縁1層	丸瓦	ナデ	ナデ				79

第30表 平瓦・軒平瓦觀察表

単位: cm

NO	地點	出土状況	名称	凸面	凹面	門面	参考	写真
G-1	S1 2 縁2層	平瓦	ナデ	ナデ	ナデ	純瓦		67
G-2	S115 縁1層	平瓦	底面印記+ナデ	布紋+ナデ				70
G-3	36	S120 カマド	平瓦	底面凹口	布紋、部分的ナデ	底深: 27.5、横幅: 28.5、高さ: 8.5、底深: 36.0		72
G-4	38	S130 カマド	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、部分的ナデ	底深: 残深3.0、横幅: 24.5、高さ: 8.5、底深: 41.0		73
G-5	S124 縁1層	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、ナデ		底深: 27.5、横幅: 25.5、高さ: 8.0、底深: 33.5		73
G-6	S124 縁2層	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、ナデ		底深: 27.5、横幅: 23.0		73
G-7	S A 2 縁1層	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、ナデ				75
G-8	S D 1 縁1層	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、ナデ				75
G-9	S D 6 縁1層	平瓦	底面凹口、ナデ	布紋、ナデ				79
G-10	SK12 縁1層	平瓦	ナデ	ナデ		底正、純片		79
G-11	SK19 縁1層	平瓦	ナデ	ナデ		底正、純片		80
G-12	S D 134	平瓦	ナデ	ナデ		底正、純片		80

第31表 その他の瓦観察表

NO	調査	出土状況	名前	内面	外側	備考	寸法
H-1	SD 2 連1層	通瓦瓦	ナゲ	トデ	縦・瓦		78
H-2	SD 2 連1層	瓦斗瓦	ナゲ	ナゲ	横し瓦、高さ12.5		75
H-3	SK 1 連1層	板瓦瓦	ナゲ	ナゲ	横し瓦、高さ13.5		79
H-4	SK 2 連2層	瓦斗瓦	ナゲ	ナゲ	横し瓦、高さ12.5		78

第32表 陶器観察表

寸法: cm

NO	調査	出土状況	種類	外側	内面	断面	高さ	口径	底径	備考	寸法
I-1	28	SH16 2 連2層	陶器	ロクロ調査	ロクロ調査	3/5	段: 24.2	8.6	底輪輪郭、K-14		21
I-2		SD 2 連1層				破片				背後 (中層)	79
I-3		SD 10 連1層				破片				腹巻 (12~13C)	78
I-4		SK 12 連1層	瓦斗			破片				円弧 (17C 植生)	79
I-5		SK 16 連1層				破片				近似	40
I-6		SK 20 連1層	瓦		鉛込押摩	破片				腹巻 (17C 植生)	69
I-7		SK 21 連1層	瓦			破片				窓口裏面 (17C 前半以降)	40
I-8	70	A-6 G 1 層	陶	ロクロ調査	ロクロ調査	底部	段: 22.1	8.2	底輪輪郭、K-96		89
I-9		B-15 G カラクリ	内折			破片					80
I-10		A-5 G 1 層	陶			破片					80

第33表 磁器観察表

NO	調査	出土状況	名前	外側	内面	断面	高さ	口径	底径	備考	寸法
J-1		SD11 2 連1層				破片				中国南宋	79
J-2		SK12 連1層	陶			破片				内面 (17C 植生)	79
J-3		SK19 連1層	陶			破片				近似 (17C)	80

第34表 金属製品他観察表

寸法: cm

NO	調査	出土状況	名前	最大長	最大幅	最大厚	断面	備考	寸法
N-1	26	SK12 連1層	鉄錐	3.3	1.6	0.3			69
N-2	32	SK17 連2層	鉄錐	6.4	3.8	1.8			71
N-3	32	SK17 連1層	錐?	11.7	2.6	0.6			71
N-4	35	SK17 連1層	刀子	10.7	1.5	0.7	底段: 0.6		71
N-5	45	SI25 連1層	錐	9.8	3.1		錐部分: 0.3~0.1		71
N-6	45	SI25 連1層	鉄錐			0.3	5.6 (直径)、0.4 (孔直径)		74
N-7		SA1 連1層	鋼針						74

第35表 石器・石製品観察表(I)

寸法: cm・g

NO	調査	出土状況	名前	鉄火炎	根火炎	根火炎	蓋	石材	備考	寸法
K-1	12	SI 4 連1層	船石	13.7	7.8	32.0	314	砂質粘土岩		68
K-2	12	SI 4 連1層	船石	9.7	3.9	3.0	26	石英安山岩質粘土岩	花崗岩名	68
K-3	19	SK 27 連1層	船石	7.5	5.6	1.7	119	石英安山岩質粘土岩		68
K-4	26	SI 14 連1層	船石	5.0	5.5	1.6		石英安山岩質粘土岩		69
K-5	28	SI 15 連1層	船石	6.9	4.3	3.6	105	石英安山岩質粘土岩	花崗岩四角形	70
K-6	30	SI 16 連2層	船石	3.9	3.9	2.5	79	石英安山岩質粘土岩	断面四角形	71
K-7	30	SI 16 連1層	船石	8.1	2.8	5.1	773	石英安山岩質粘土岩		71
K-8	30	SI 16 連2層	石質船底	5.2	2.1	0.5	6.7	豆岩		71

第35表 石器・石製品観察表(2)

単位: cm・g

NO.	団體	出土状況	名称	絶大員	絶大幅	絶大厚	重さ	石材	備考	年月
K-9	37	SI 10層1層	磨石	12.9	3.8	2.1	145	石英岩の麻縞斑		73
K-10	44	SI 22層1層	土玉	直径	0.45	0.25	0.1	圓錐?	穿孔の直径0.15	73
K-11	59	SD 3層1層	石點器	7.6	1.6	0.7	12.8	灰岩		76
K-12	69	SD 3層1層	磨石	9.2	10.5	2.1		白雲石		76
K-13	64	SD 3層2層	磨石	12.35	8.4	4.3	626	安山岩		78
K-14	64	SD 3層2層	磨石	15.9	5.8	3.8	333	石英安山岩質斑		78
K-15	65	SD 3層2層	凹み石	15.4	10.7	5.7		石英安山岩質斑		78
K-16	65	SD 3層2層	磨石	11.4	6.2	3.2	400	石英安山岩		78
K-17	65	SD 3層2層	石板	4.3	2.8	1.2	14.0	黑曜石		78
K-18	65	SD 3層2層	石製模造品(有孔)	3.35	2.9	7.5	11.0	白雲石		78
K-19		SD 3層2層	石製模造品(無孔)	3.8	7.6	1.4	80	青石	(有孔), 石製模造品の未製品?	78
K-20		SD 3層3層	磨石	6.1	3.2	1.6	40	砂質頁岩		78
K-21		SD 3層3層	石製模造品(無孔)	5.8	5.2	1.3	41	黄岩	(有孔), 石製模造品の未製品?	78
K-22	69	SK 3層2層	石製模造品	1.9	4.7	1.3	31.4	紅柱岩	穿孔直径0.8, 表面ヘアミガキ, 漆剤あり	79
K-23	69	SK 10層1層	鉄片	2.2	1.9	0.7	3.5	黑曜石		79
K-24	69	SK 10層1層	一次加工の小石片	2.1	1.2	0.8	1.5	黑曜石		79
K-25	70	SI 22層1層	大型板(淡紫安山岩)	12.7	12.9	1.3	202	安山岩	板式鉋用, 角度68~74°, 斜度傾斜角10~11°	80
K-26		SI 20層1層	石鐵	2.6	0.9	0.7	1.3	青石	鉄品	80
K-27		SI 20層1層	鐵製鍛錠のある鉄片	5.9	5.0	1.8	32.2	鐵		80
K-28		SI 20層1層	鉄片	5.5	5.0	1.4	35.0	青石		80
K-29		SI 20層1層	鉄片	6.6	4.3	1.5	36.2	石英安山岩		80
K-30		SI 20層1層	石板	6.7	5.2	2.5	40.6	石英安山岩質斑	鉄片鉄材	80
K-31		SI 22層1層	石板	5.4	4.9	3.2	55.5	鐵紋岩		80
K-32	70	A-2 G 1層	石製模造品(無孔)	2.7	6.9	0.3	1.2	褐色片岩	丸礫だけ側面鉄製	80
K-33	70	SI 14層1層	鉄片	直径	0.35	0.3	0.1以下	鉄片外観	穿孔の直径0.2	80
K-34		SD 3層1層	磨石	34.8	22.8	13.3	13 kg	安山岩		80

第36表 土製品観察表(1)

NO.	団體	出土状況	名称	絶大員	絶大幅	絶大厚		備考		年月
P-1	12	SI 4層1層	土玉	直径	1.0	1.0		穿孔の直径0.3		68
P-2	12	SI 5層1層	土玉	直径	3.1	2.9		穿孔の直径0.3		68
P-3	20	SI 11層1層	土玉	直径	0.45	0.4		穿孔の直径0.1		69
P-4	30	SI 16層1層	土玉	直径	4.1	2.9		穿孔の直径0.6		71
P-5	32	SI 17層1層	土玉	直径	1.1	1.0		穿孔の直径0.3		71
P-6	59	SD 3層1層	土玉	直径	2.1	1.4		穿孔の直径0.3		76
P-7	64	SD 3層2層	土製粘土器	直径	5.2	2.5		ヘラミガキの黄色仕上げ部, 貫通孔の直径0.6		76
P-8	64	SD 3層2層	土製粘土器	直径	5.7	2.4		ヘラミガキ, 貫通孔の直径0.6		76
P-9	64	SD 3層2層	土玉	直径	3.1	2.3		穿孔の直径0.3~0.6		76
P-10	64	SD 3層2層	土玉	直径	1.2	1.1		穿孔の直径0.15		76
P-11		SD 3層1層	瓦	直径	9.2	6.1				76
P-12	70	B-7 G 1層	土製粘土器	直径	5.1	2.5		ヘラミガキ, 丸の直径0.7		80

第36表 土製品観察表(2)

単位:cm

NO	回数	出土状況	名前	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
P-13	70	NAZ	土壺	直径	3.1	3.8	貫通孔の直径0.7~1.0。ナメの部位不明瞭	81
P-14	70	A-3 G 1層	L型	直径	3.4	3.4	孔は貫通していない	81
P-15	70	B-7 G 1層	土壺	直径	2.6	2.0	貫通孔の直径0.6	81
P-16	70	B-1 G 1層	土壺	直径	1.2	0.8	貫通孔の直径0.2	81
P-17	70	A-7 G 1層	土壺	直径	0.95	0.9	孔は貫通していない	81
P-18	70	A-7 G 1層	土製品	1.6	0.9	0.9	上下からの孔は貫通していない	81
P-19	70	A-1 G 1層	土製品	3.55	3.75			81
P-20	70	B-1 G 1層	土製品	2.35	1.5	1.5	表面に絆目用のスリット	81
P-21	70	A-6 G 1層	土壺	5.0	1.7	1.5	孔の直径(0.5)。中央のふくらみは断続的にケズリによる整形	81
P-22	70	A-5 G 1層	土製品	残2.7	1.0	0.7	多孔式部の底部の角削除か?	81
P-23	70	A-5 G 1層	土製品	残2.7	0.95	0.65	土製模造窓口?	81

第37表 土師質土器観察表

単位:cm

NO	回数	出土状況	形種	外面	内面	側面	高さ	口径	底径	備考	写真
U-1	69	SK 22	环	ロクロ調整	ロクロ調整	3/4	2.4	9.4	6.0	西端丸切りのちナメ	79
U-2	69	SK 21	环	ロクロ調整	ロクロ調整	底面	残:1.6	5.6	5.6	西端丸切りのちナメ	80
U-3	70	A-16G1層	环	ロクロ調整、体下端:ケズリ	ロクロ調整	底面丸形	2.6	9.4	5.4	内側丸切りのちナメ	80
U-4	70	A-16G1層	环	ロクロ調整、体下端:ケズリ	ロクロ調整	底面	2.9	9.4	5.6	四隅丸切りのちナメ	80

第38表 第23次調査非ロクロ土器観察表

単位:cm

NO	回数	出土状況	形種	外面	内面	肩厚	高さ	口径	底径	備考	写真
C-1	80	SI-1タマド	环	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	ヒラナメのちミガキ	1/4	残:3.6	14.2			81
C-2	80	SI-1層2層	环	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	ヒラタナメ 黄色均色		残:2.8				81
C-3	80	SI-1タマド	环	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ		残:2.7			内側麻糸巻上げ	81
C-4	80	SI-1層3層	环	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	口:ヨコナメ 黄色均色 体:ヒラタナメ		残:3.4				81
C-5	80	SI-1層1層 上半	指ナメ		完形	3.2	4.9	2.9			81
C-6	80	SI-1タマド	環	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	3/5	24.6	21.3	6.9		81
C-7	80	SI-1層2層	環	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	1/5					81
C-8	80	SI-1層3層	環	ハラノリもね:ヒナゲ	ヒナゲ	1/3				断面近縁白帯	
C-9	80	SD-1層1層	環	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	口:ヨコナメ 体:ヒラタナメ	4/5	29.9	16.1			81

第39表 第23次調査土製品観察表

単位:cm

NO	回数	出土状況	名前	最大長	最大幅	最大厚	備考	写真
P-1	80	SI-1タマド	土製瓦脚	11.5	5.5	1.6	ケズリによる彫取り	81

写 真 図 版



写真1 調査区遠景（西から）

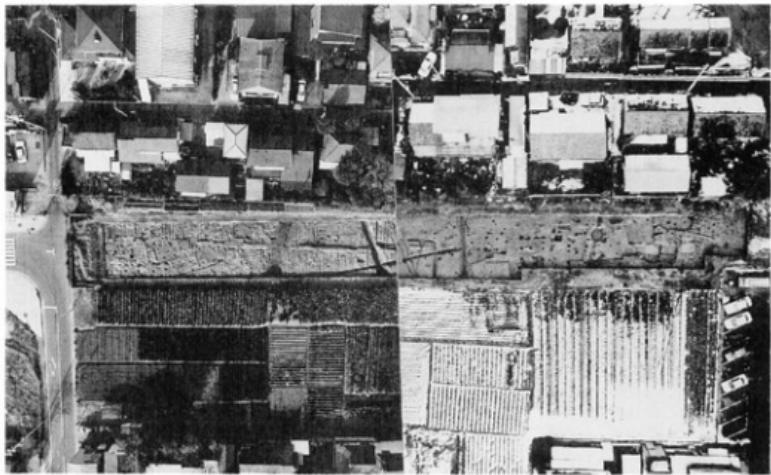


写真2 調査区全景

写真3 B-14G  
南壁深掘りセクション  
(北から)



写真4  
調査風景 A・B-11G以西  
(南から)



写真5  
調査風景 A・B-11G以東  
(東から)



写真6 A-8・9 G  
S I-1 完掘全景  
(北から)



写真7 A-7 G  
S I-2 全景  
(南から)



写真8 A-5・6 G  
S I-3 全景  
(西から)



写真9 A-4・5 G  
S I-4 全景  
(南から)



写真10 A-5 G  
S I-5 全景  
(南から)



写真11 A・B-5 G  
S I-6 全景  
(南から)

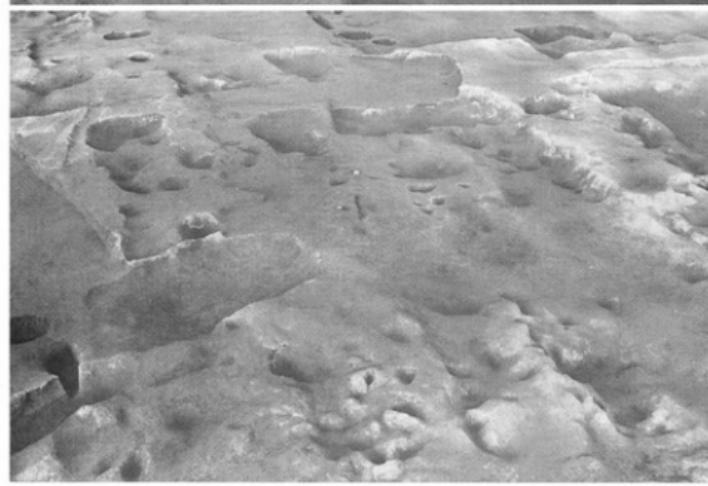


写真12 A・B-4・5 G  
S I -8 全景  
(南から)



写真13 B-3・4 G  
S I -9 全景  
(南から)



写真14 A-1 G  
S I -10 全景  
(南から)

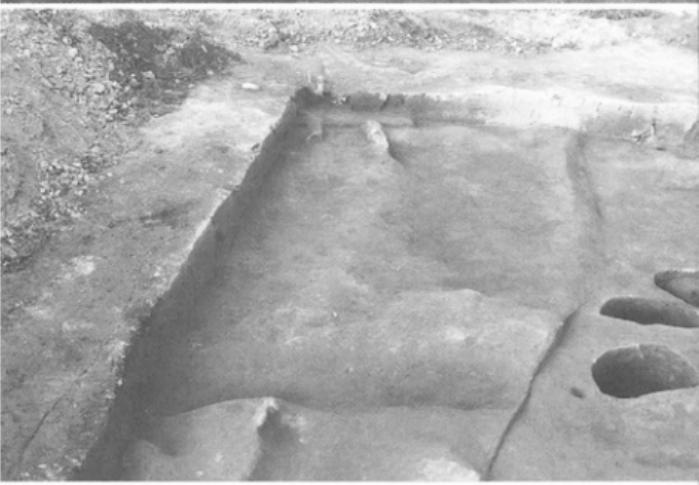


写真15 A・B-1・2G  
S I-11全景  
(南から)



写真16 A・B-2・3G  
S I-12全景  
(南から)



写真17 A・B-16G  
S I-14全景  
(北から)



写真18 A・B-14G

S I -15全景

(北から)

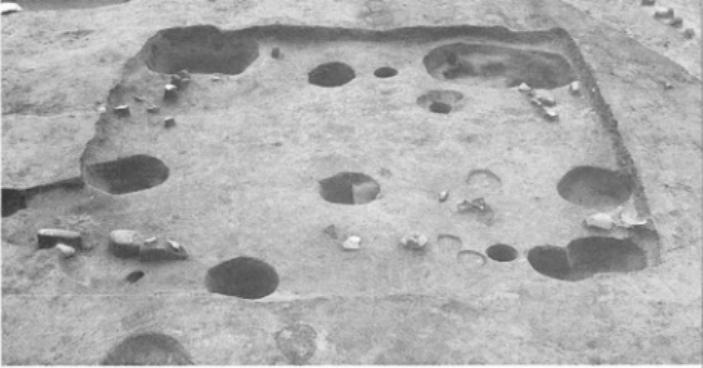


写真19 A・B-14G

S I -15ベルトセクション

(南から)



写真20 B-14・15G

S I -17全景

(北から)



写真21 A・B-17G

S I -18全景

(南から)

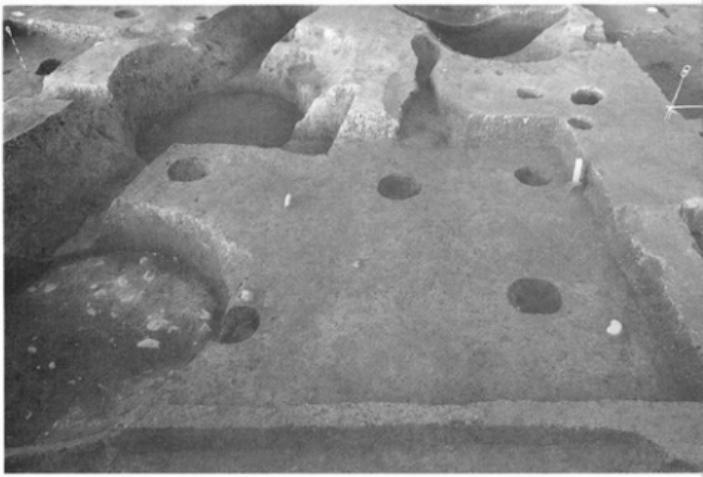




写真22 B-17G S I -19全景（東から）



写真23 A + B-18 + 19G S I -20南側かまど（西から）

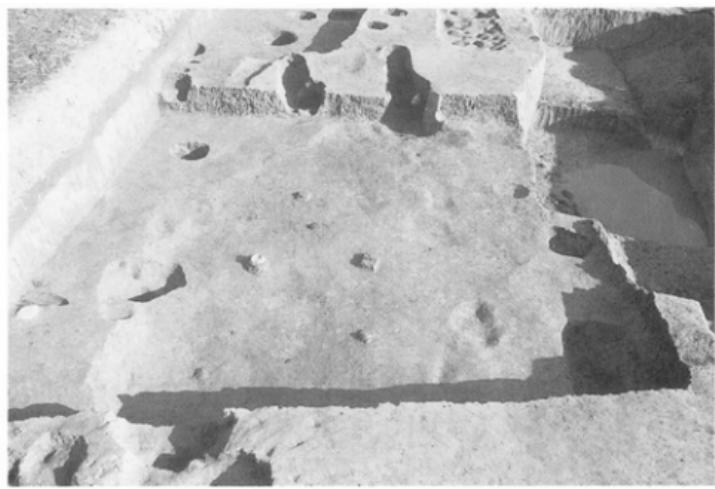


写真24 A + B-18 + 19G S I -20全景（西から）

写真25 A-19・20G  
S I -22全景  
(西から)



写真26 B-3 G  
S I -23全景  
(南から)



写真27 A・B-12G  
S I -24全景  
(北から)

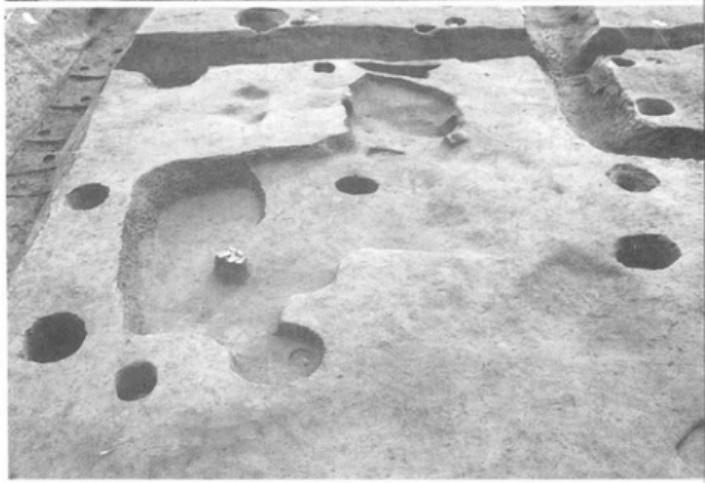


写真28 A-16G  
S I -25全景  
(西から)



写真29 A-16G  
S I -25遺物出土状況  
(南から)



写真30 A-14G  
S I -26全景  
(南から)



写真31 A・B-12・13G  
SA1・SA2全景



写真32 B-14・15G  
SB1・SI17全景

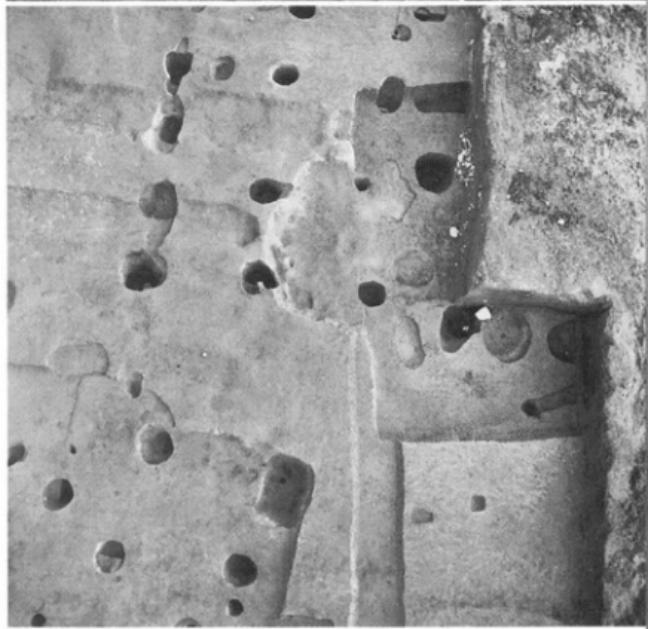




写真33 A-17G SA-1 全景（西から）

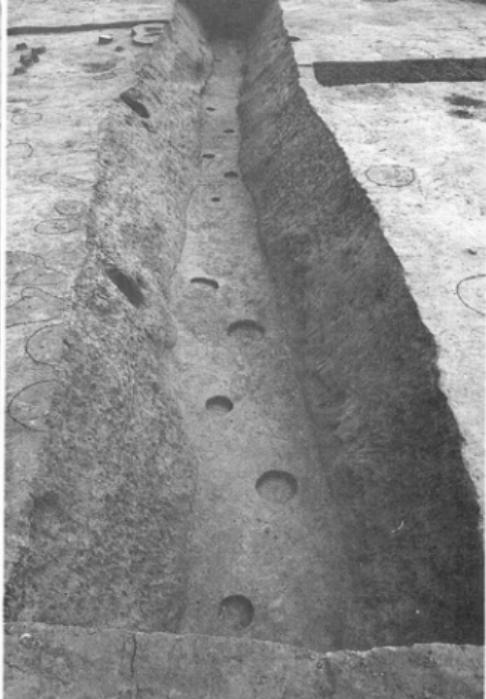


写真34 A・B-13G SA-2 全景（北から）

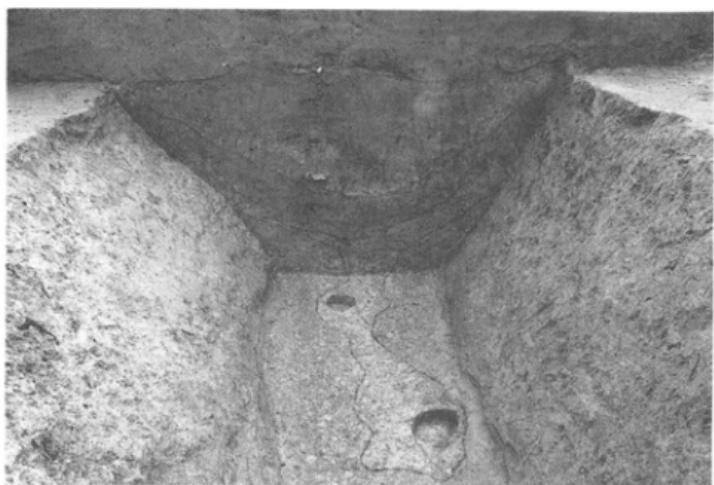


写真35 A・B-13G SA-2 セクション（北から）

写真36 A・B-7 G  
S A-1 東側ベルトセクション  
(西から)



写真37 B-10G  
S A-1・P-2・3 ブラン  
(南から)



写真38 A-11G  
S D-2 全景  
(北西から)

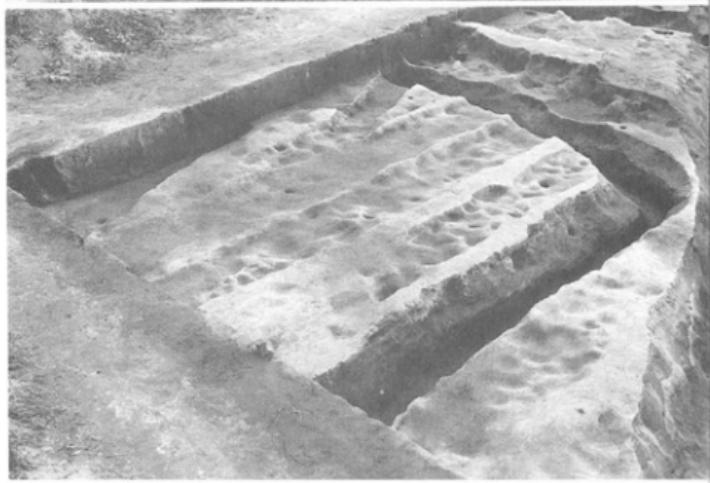


写真39 A・B-7 G  
SD-3全景  
(南から)



写真40 A・B-7 G  
SD-3 SP全景  
(東から)

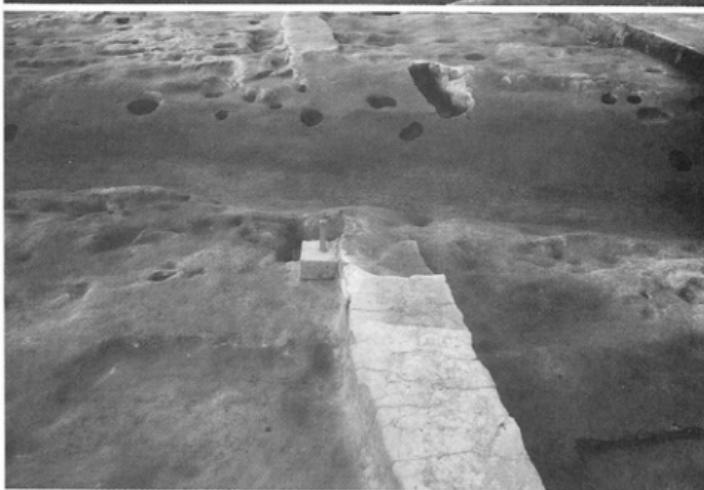


写真41 A・B-7 G  
SD-3作業風景  
(北東から)



写真42 A・B-7 G  
SD-3 全景  
(北から)



写真43 A・B-7 G  
SD-3 南壁セクション  
(北から)



写真44 A・B-7 G  
SD-3 中央ベルトセクション  
(南から)



写真45 A・B-7 G  
SD-3 北壁セクション  
(南から)





写真46 A・B-9・10G SD-4 全景（北から）



写真47 A・B-17G SD-10全景（南から）



写真48 B-10G SD-4 セクション（南から）

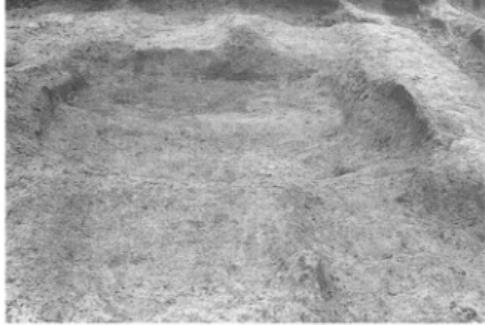


写真49 B-10G SK-1全景（南から）



写真50 B-10G SK-2全景（南から）



写真51 B-5G SK-4全景（南から）



写真52 A-7G SK-5全景（南から）

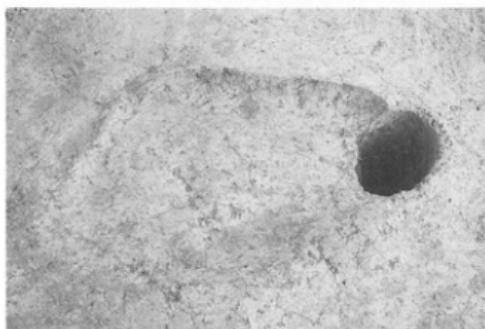


写真53 A-20G SK-10全景（南から）



写真54 A-19G SK-11全景（北から）



写真55 A-19G SK-12全景（北から）



写真56 B-19G SK-13全景（南から）

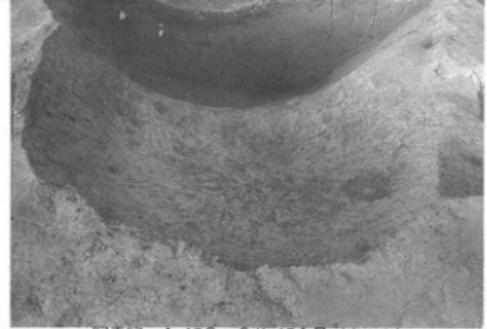


写真57 A-17G SK-15全景（南から）



写真58 A-17G SK-16全景（西から）

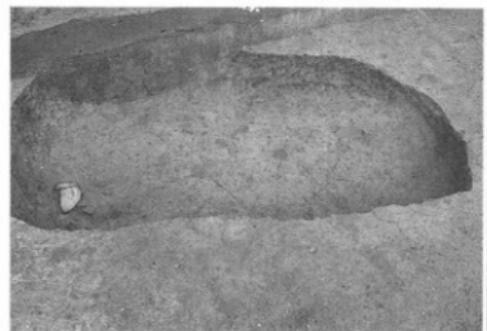


写真59 A-16G SK-18全景（南から）

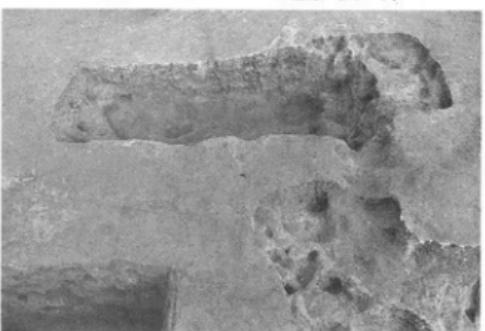


写真60 A-16G SK-19全景（南から）



写真61 A-16G SK-20全景（南から）



写真62 B-18G SK-17全景（北から）



写真63 A+B-21G SX-1セクション（西から）

写真64 第22次調査  
記念写真



写真65 第23次調査  
S I 1全景



写真66 第23次調査  
S I 1 カマド全景



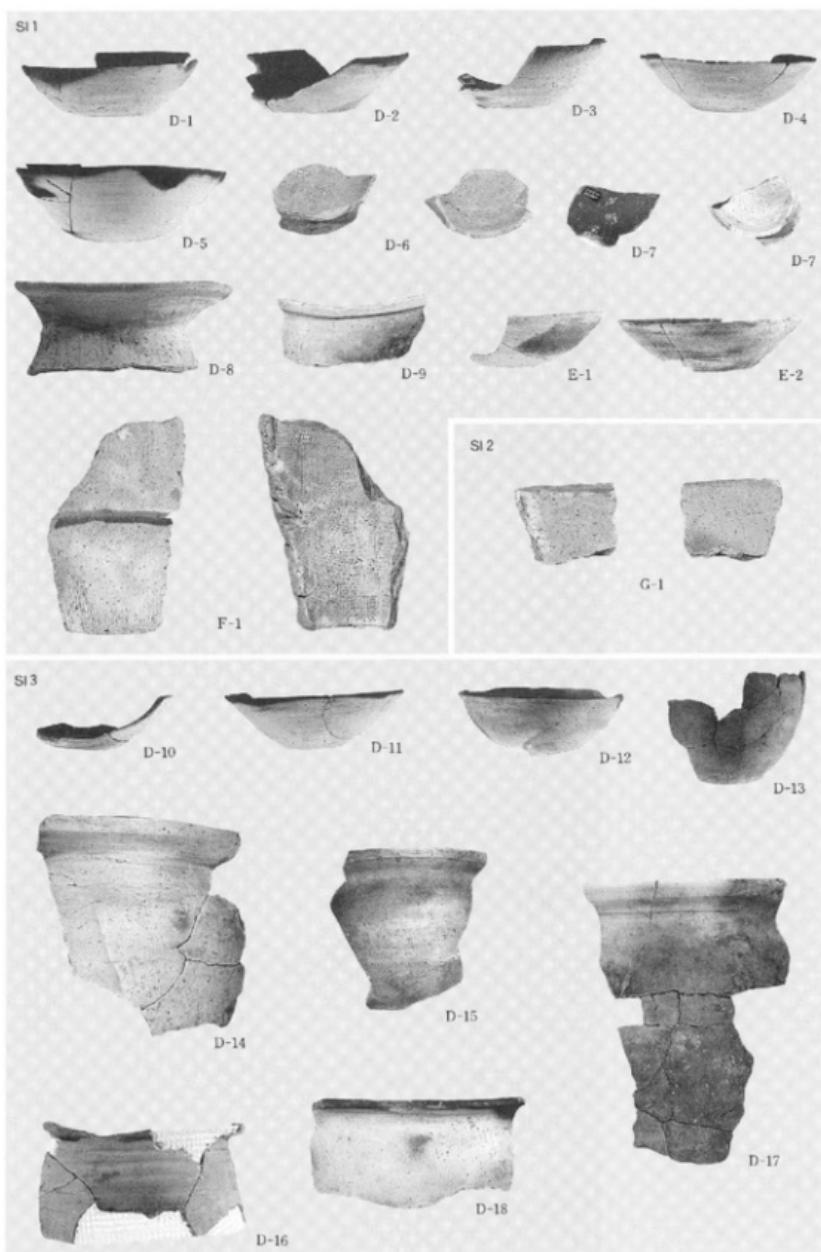


写真67 出土遺物（1）

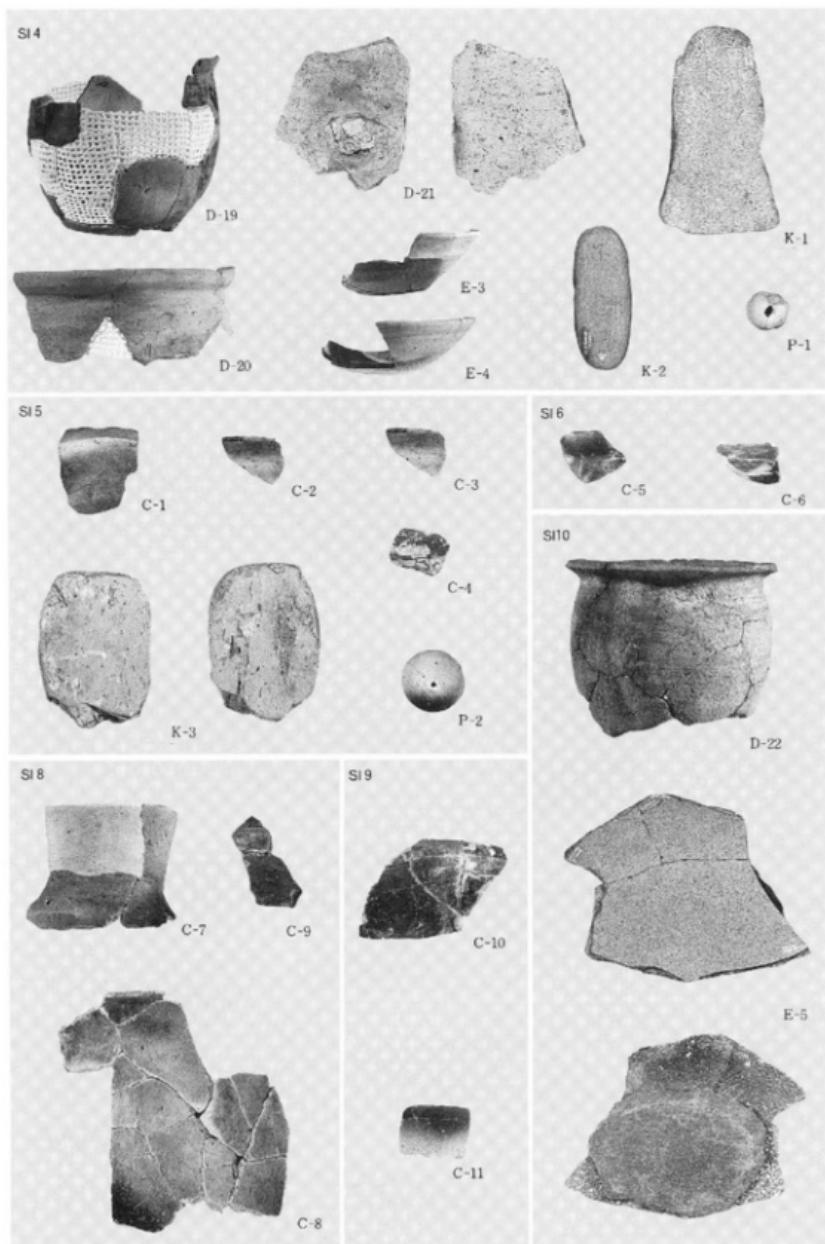


写真68 出土遺物（2）

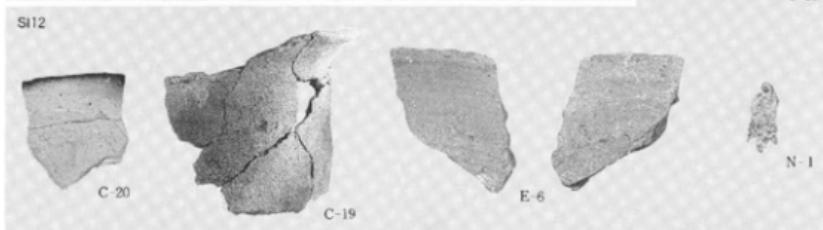
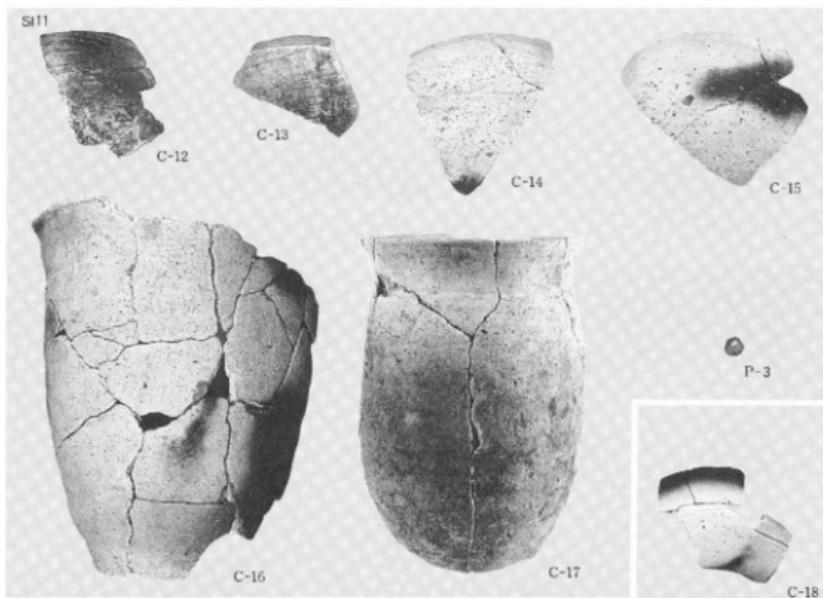


写真69 出土遺物（3）

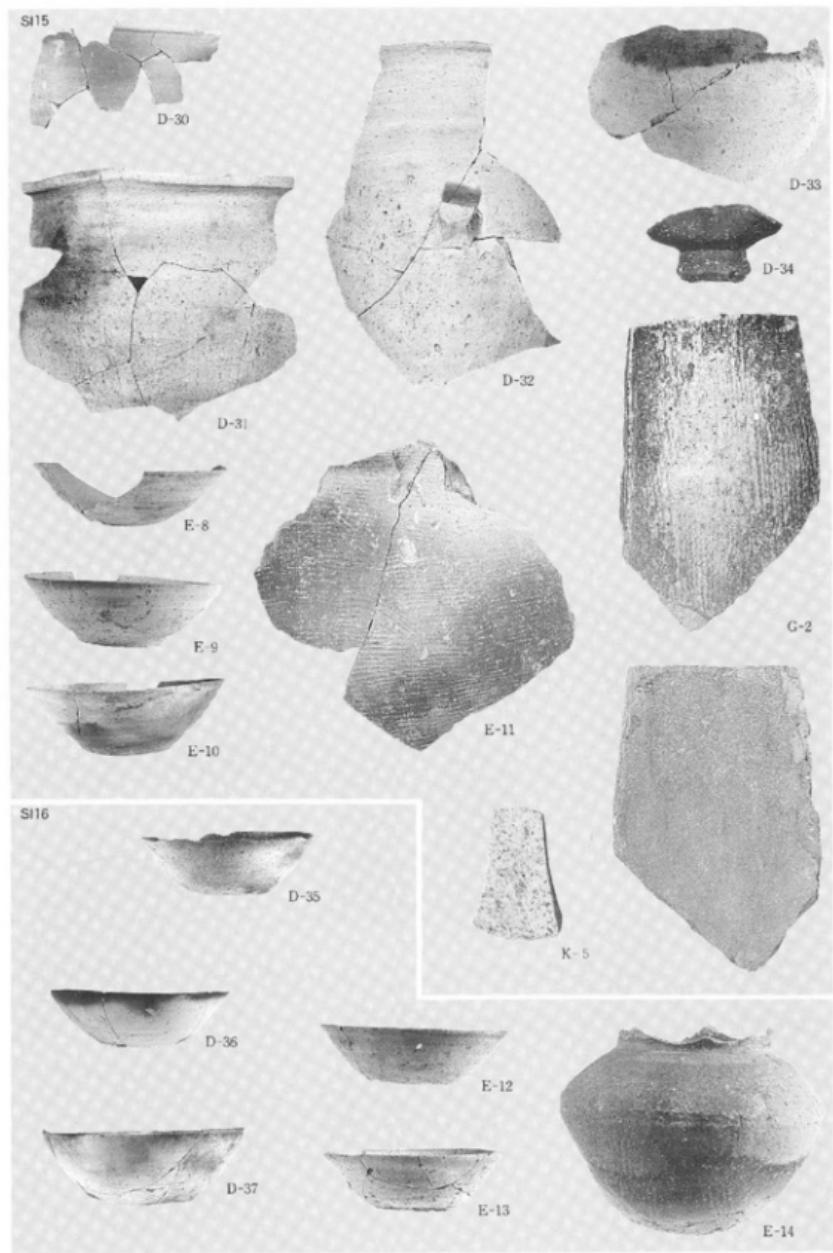


写真70 出土遺物（4）

SI16



SI17



SI18



写真71 出土遺物（5）

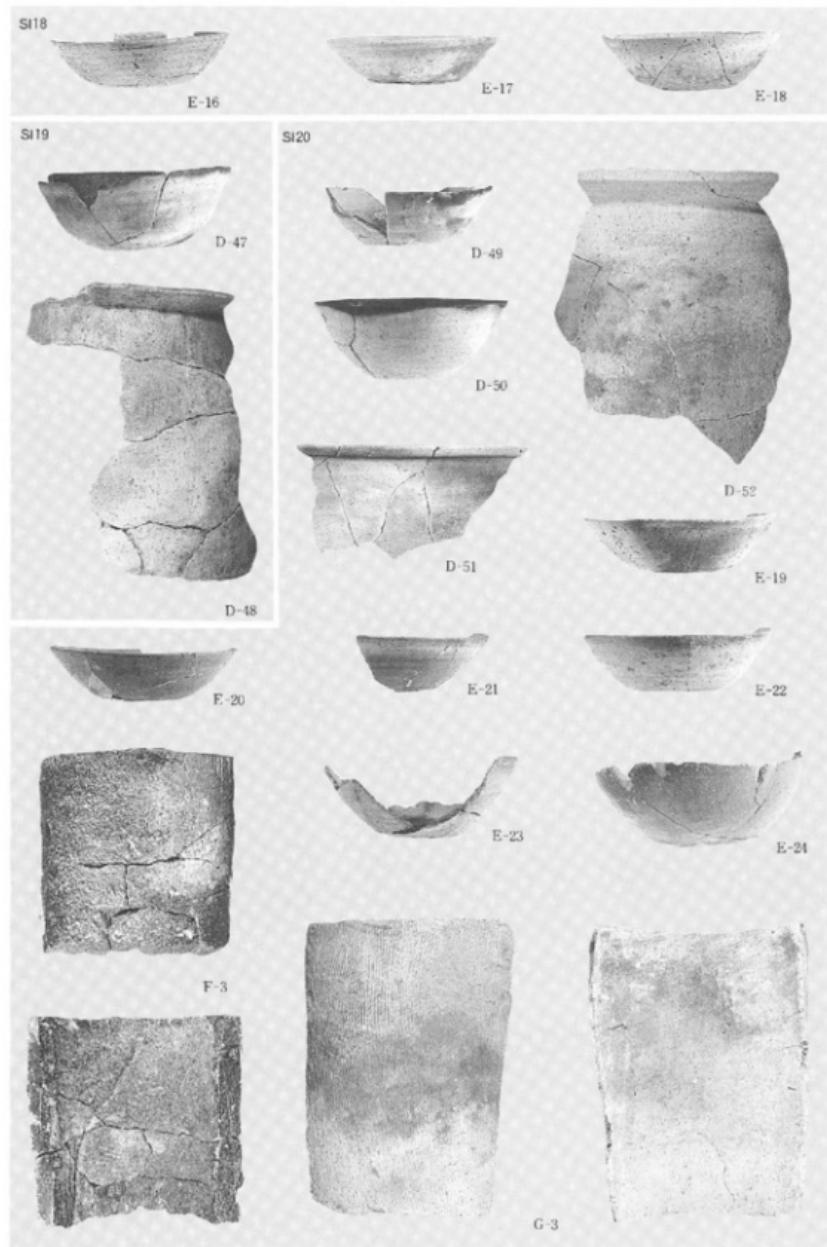


写真72 出土遺物（6）

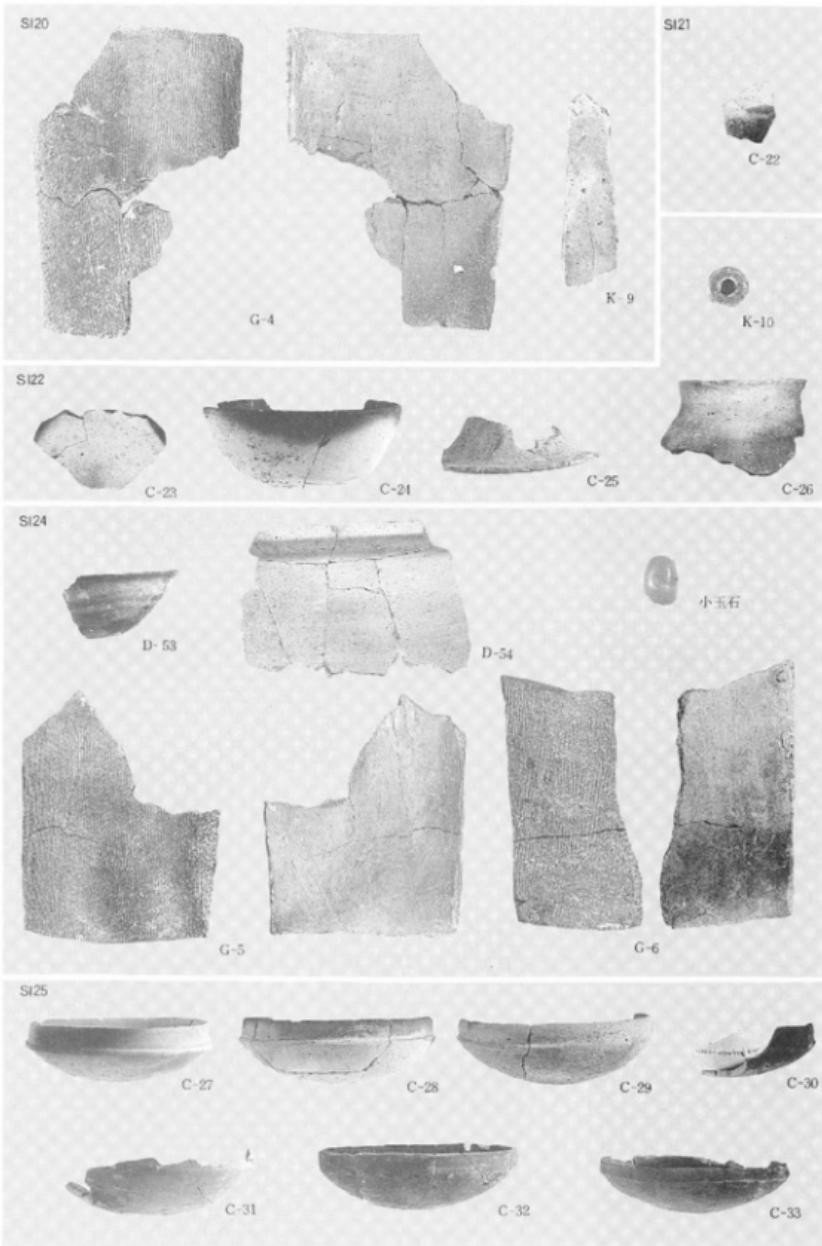


写真73 出土遺物 (7)

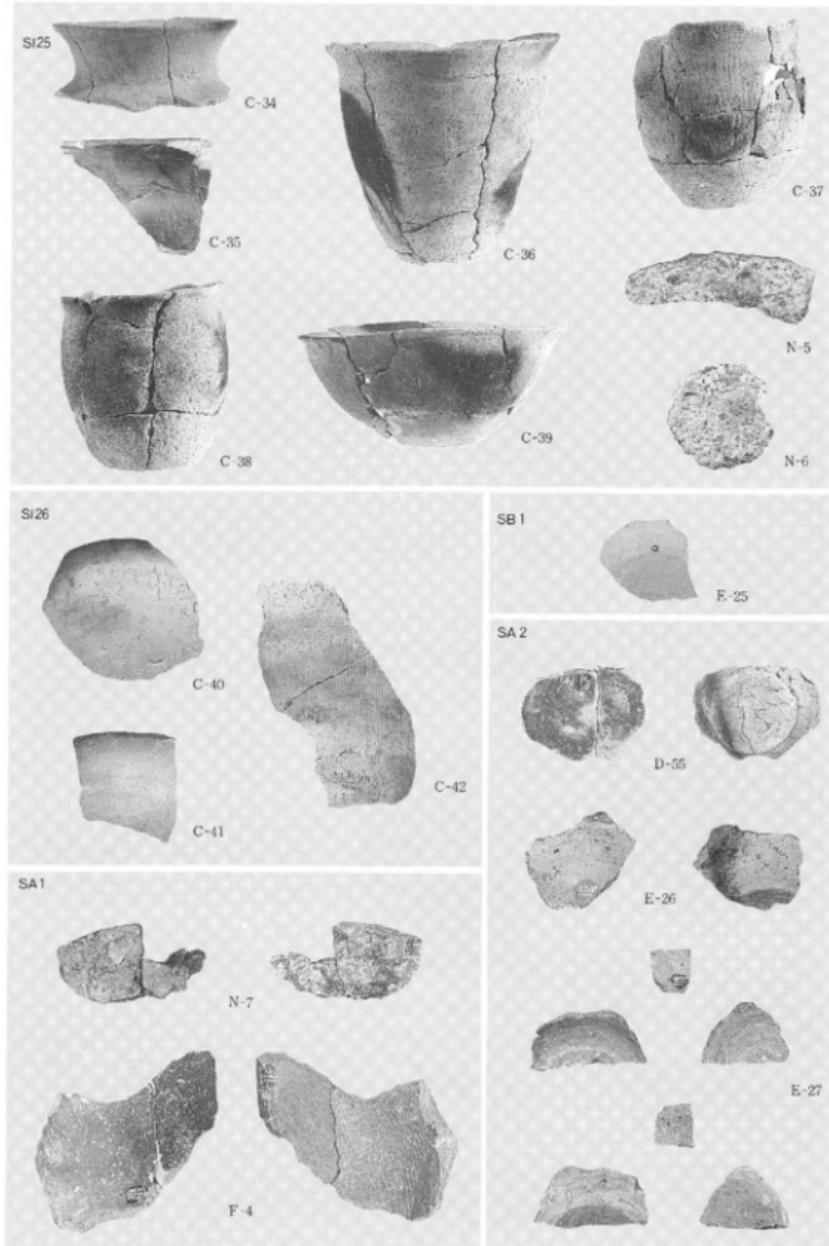


写真74 出土遺物 (8)



写真75 出土遺物 (9)

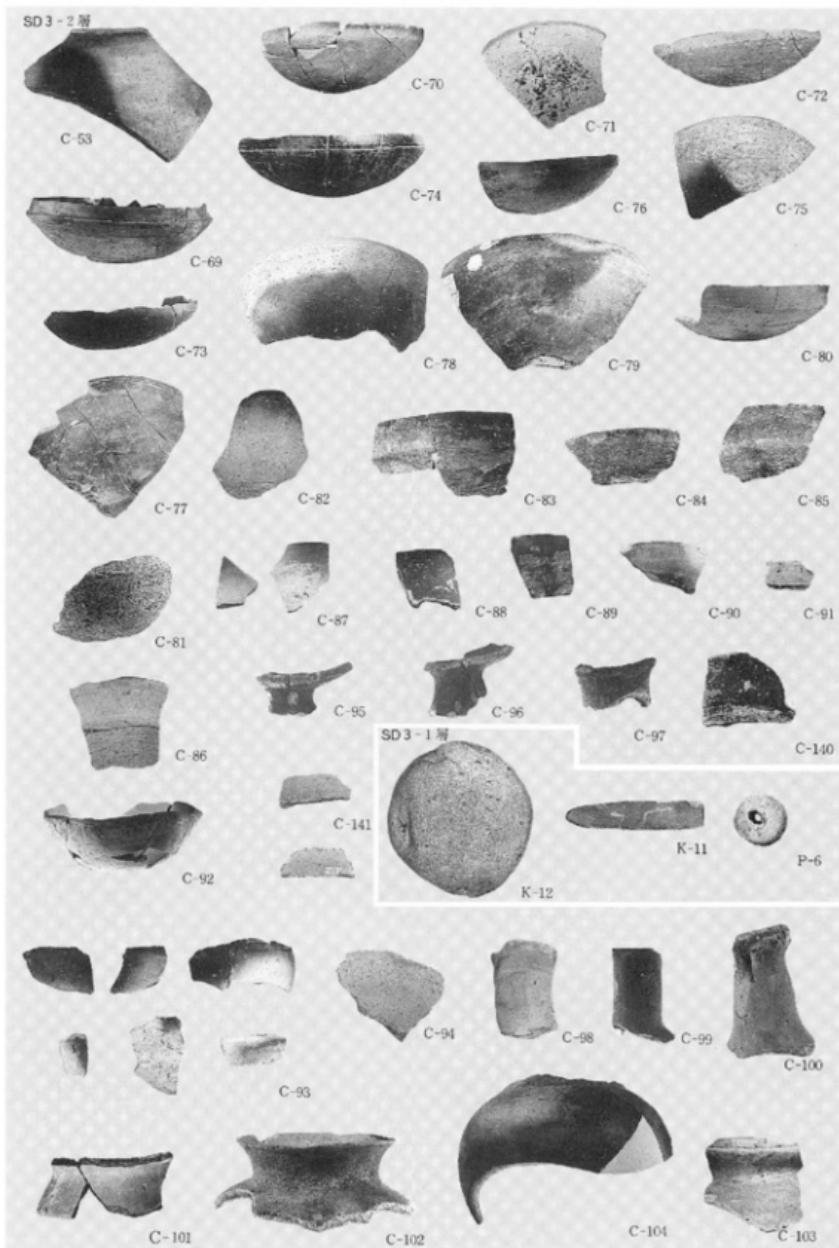


写真76 出土遺物 (10)

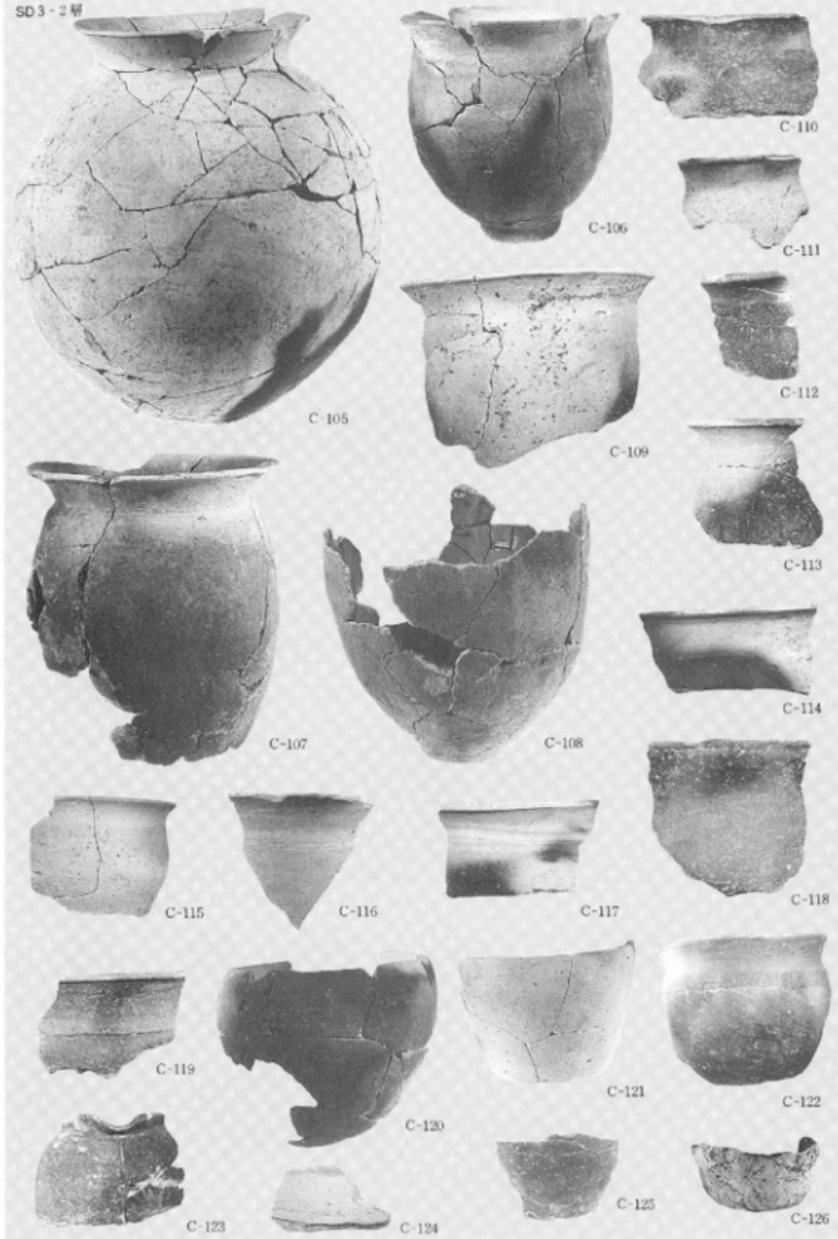


写真77 出土遺物 (11)

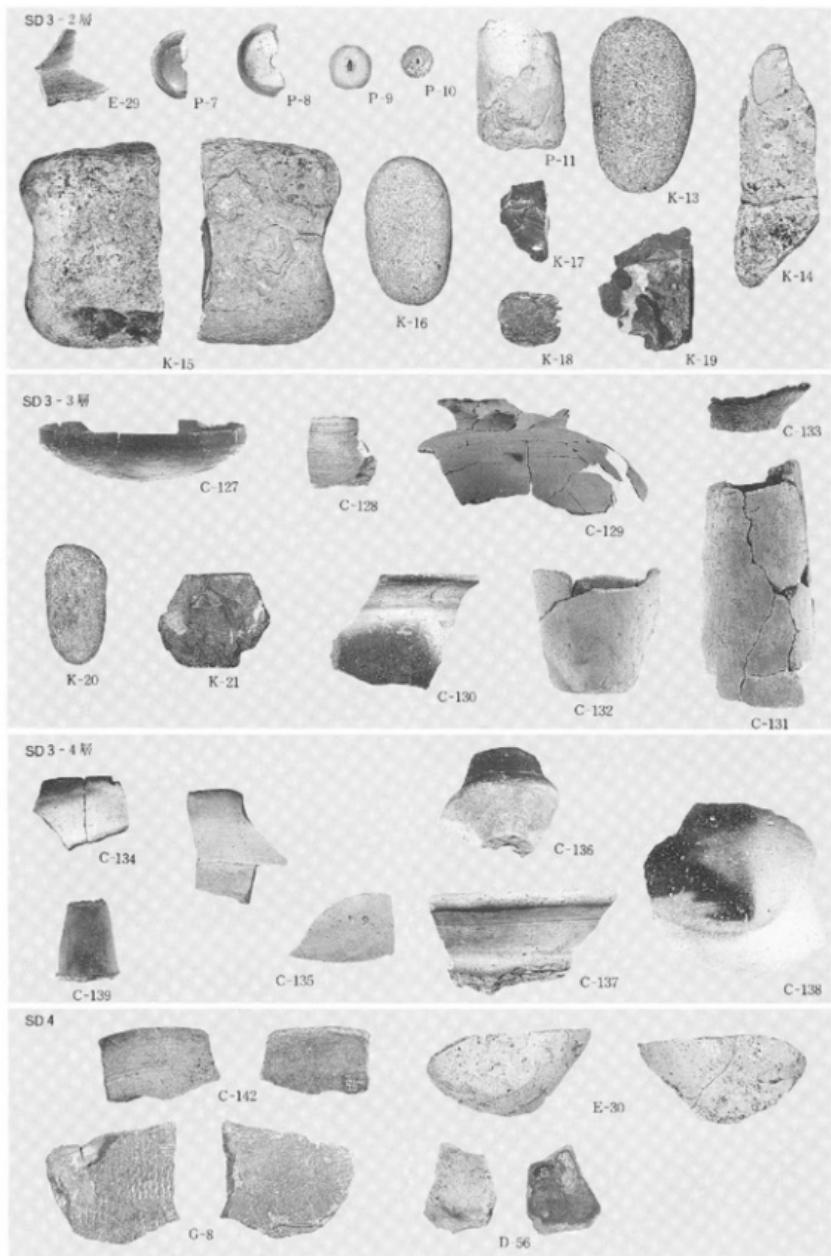


写真78 出土遺物 (12)

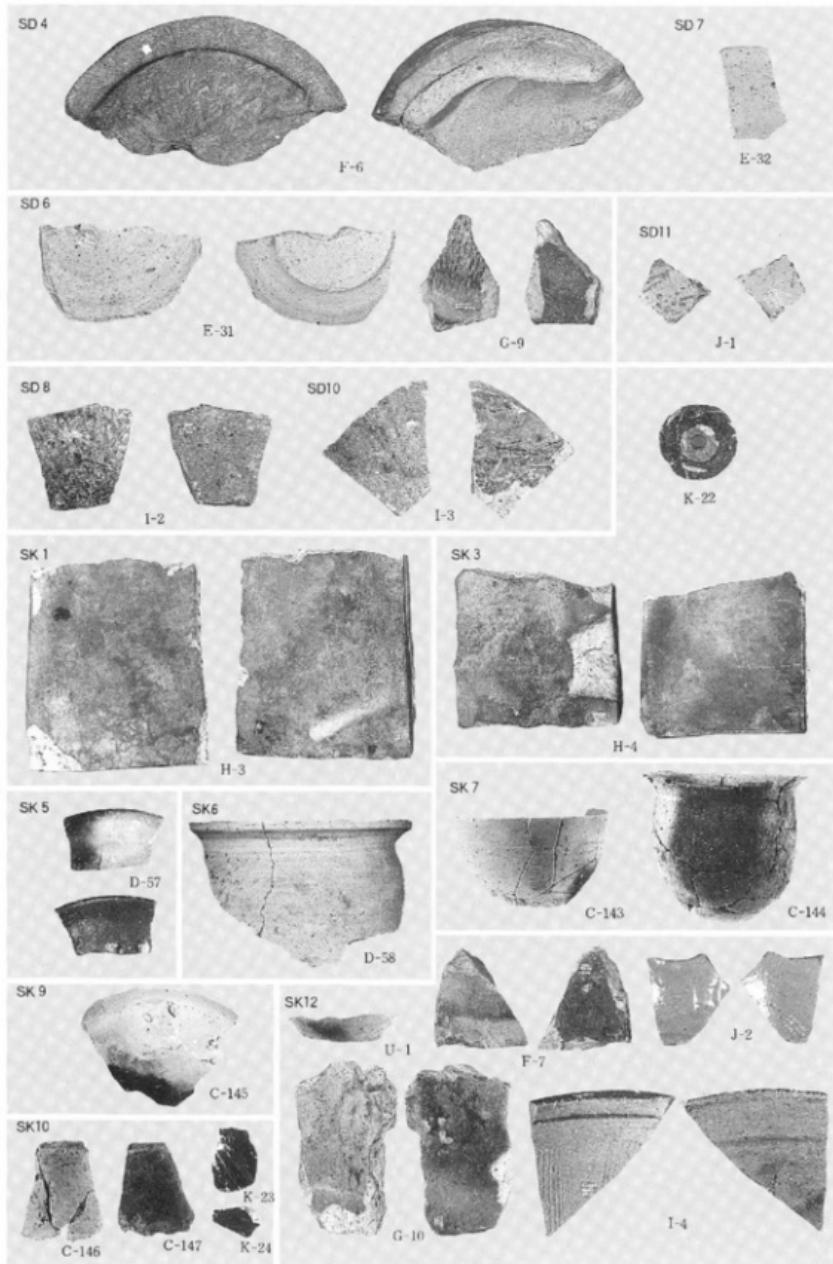


写真79 出土遺物 (13)

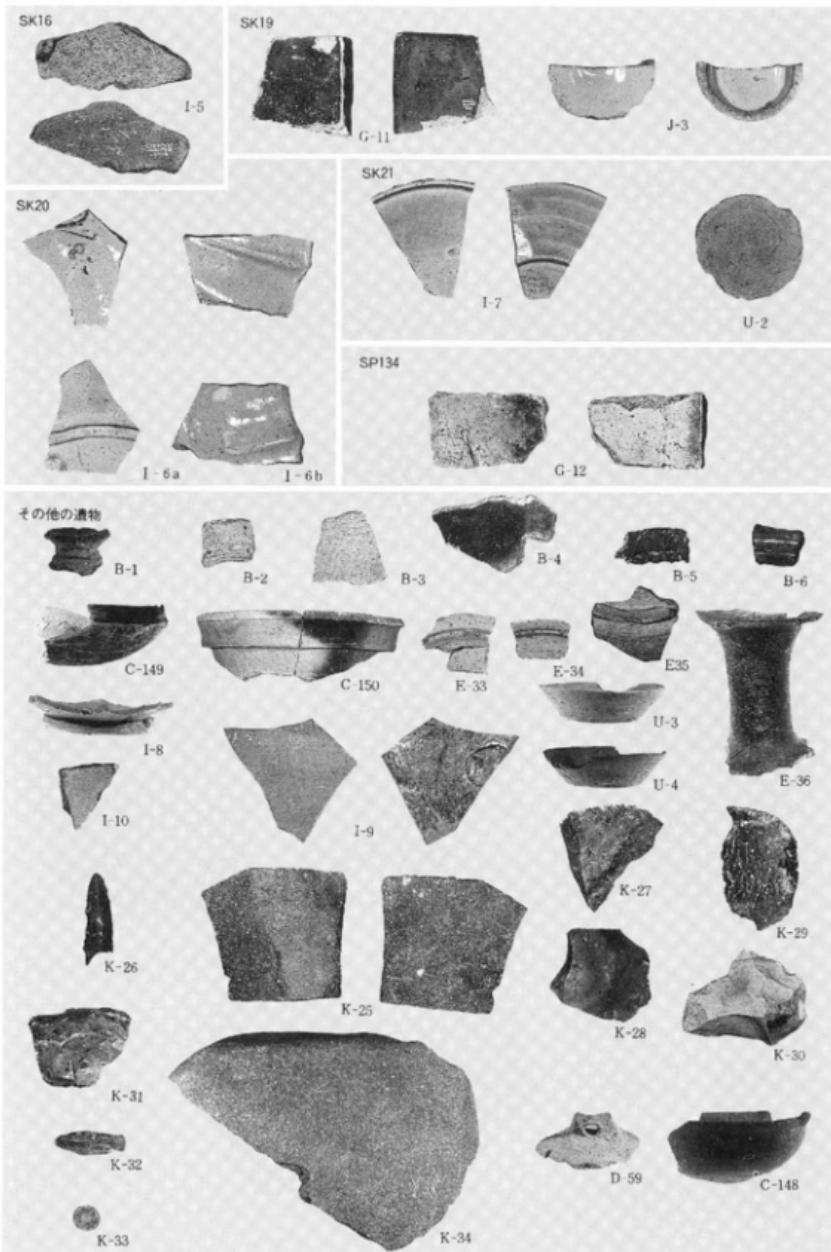


写真80 出土遺物 (14)

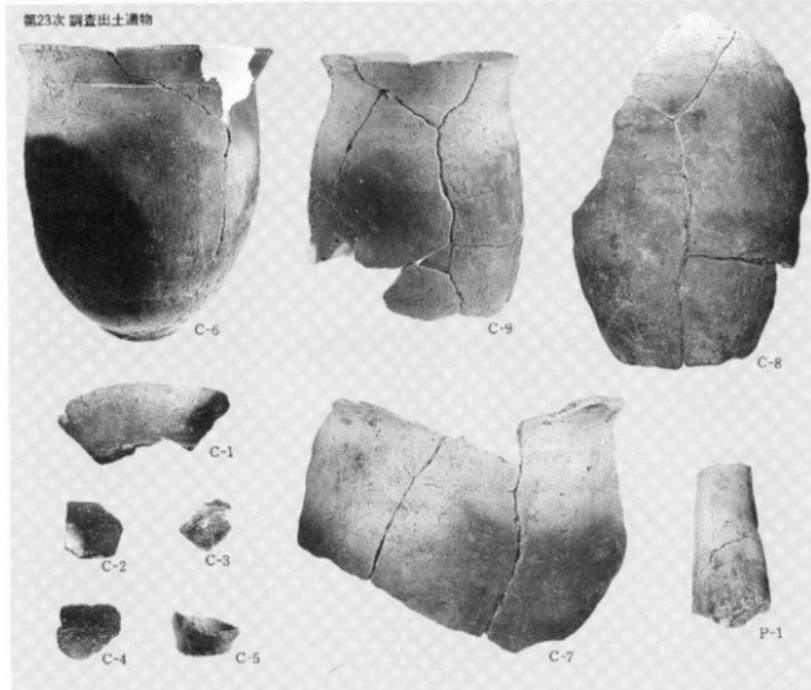
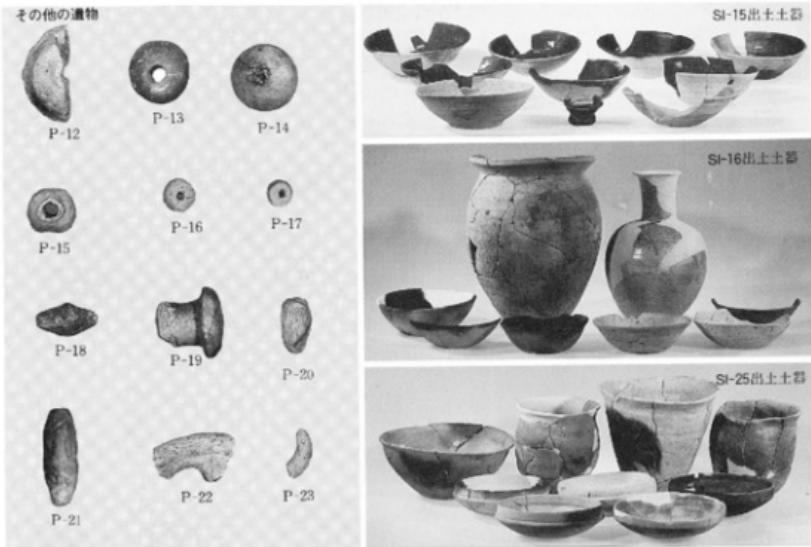


写真81 出土遺物 (15)

---

仙台市文化財調査報告書第192集

南小泉遺跡  
第22次・23次発掘調査報告書

平成6年10月

発行 仙台市教育委員会  
仙台市青葉区国分町3-7-1  
仙台市教育委員会文化財課  
印刷 (株) 東北プリント  
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

---

